

青べか物語

山本周五郎

青空文庫

はじめに

浦^{うらかす}粕町は根戸川のもっとも下流にある漁師町で、貝と海苔^{のり}と釣場^{つりば}とで知られていた。町はさして大きくはないが、貝の缶詰^{かんづめ}工場と、貝殻^{かいがら}を焼いて石灰を作る工場と、冬から春にかけて無数にできる海苔干し場と、そして、魚釣りに来る客のための釣舟屋と、ごつたくやといわれる小料理屋の多いのが、他の町とは違った性格をみせていた。

町は孤立していた。北は田畑、東は海、西は根戸川、そして南には「沖の百万坪」と呼ばれる広大な荒地がひろがり、その先も

また海になっていた。交通は乗合バスと蒸気船とあるが、多くは蒸気船を利用し、「通船」と呼ばれる二つの船会社が運航している、片方の船は船^{せんたい}舳を白く塗り、片方は青く塗ってあった。これらの発着するところを「蒸気河岸^{がし}」と呼び、隣りあっている両^{さんばし}棧橋の前にそれぞれの切符売り場があった。

西の根戸川と東の海を通じる掘割が、この町を貫流していた。蒸気河岸とこの堀^{ほり}に沿って、釣舟屋が並び、洋食屋、ごったくや、地方銀行の出張所、三等郵便局、巡査駐在所、消防署——と云^いつても旧式な手押しポンプのはいつている車庫だけであつたが、——そして町役場などがあり、その裏には貧しい漁夫や、貝を採るための長い柄^えの付いた竹籠^{たけかご}を作る者や、その日によつて雇われ

先の変る、つまり舟を漕ぐことも知らず、力仕事のほかには能のない人たちの長屋、土地の言葉で云うと「ぶつくれ小屋」なるものが、ごちやごちやと詰めあっていた。

町の中心部は「堀南」と呼ばれ、「四丁目」といわれる洋食屋や、「浦粕亭」という寄席や、諸雜貨洋品店、理髪店、錢湯、

「山口屋」という本当の意味の料理屋——これはもっぱら町の旦那方用であるが、そのほか他の田舎町によくみられる旅籠宿や小商いの店などが軒を列ねていた。その南側の裏に、やはり「ごったくや」の一画があり、たった一軒の芝居小屋と、ときたま仮設劇場のかかる空地がある、というぐあいであつた。

これらのことをどんなに詳しく記したところで、浦粕町の全ぜんぽ

貌^うを尽すわけにはいかない。私も決してそんなつもりはないので、ただこの小さな物語の篇中^{へん}に出てくる人たちや、出来事の背景になつてゐるものだけを、いちおう予備知識として紹介したにすぎないのである。

はじめに「沖の百万坪」と呼ばれる空地が、この町の南側にひろがつてゐると書いた。私は目測する能力がないので、正確にはなんともいえないが、そこは慥^{たし}かにその名にふさわしい広さをもつてゐた。畑といくらかの田もあるが、大部分は芦^{あし}や雑草の繁^{しげ}つた荒地と、沼や池や湿地などで占められ、そのあいだを根戸川から引いた用水堀が、「一つ^{いり}」から「四つ」まで、荒地に縦横の水路を通じていた。——この水路や沼や池には、鮒^{ふな}、鯉^{こい}、鰻^{はや}、

鯰なまずなどがよく繁殖するため、陸釣おかづりを好む人たちの取つて置きの場所のようであつた。また、沼や池や芦の茂みの中には、獺かわうそとか鼬いたちなどが棲すんでいて、よく人をおどろかしたり、なにごとでもすぐに信ずるような、昔ふうの住民を「隙すきさえあれば化かそうと思つている」ということであつた。

この町ではときたま、太陽が二つ、東と西の地平線上にあらわれることがある。そういうときはすぐにそつぽを向かなければ危ない。おかしなことがあるものだ、などと云つて二つの太陽を見ると「うみどんぼ野郎」になつてしまふ。そうしてそのときにはすぐ脇わきのほうで、獺か鼬の笑っている声が聞えるということである。特に鼬はたちの悪いいたずら好きで、人が道を歩いていると、

ひよいと向うへとびだして来て、立ちあがって、交通整理でもするように、右手をあげて右をさし示したり、左手で左のほうをさしたりする。そうしたら必ず反対のほうにゆかなければならない。うつかりしてそちらへゆけば、きまつて池か堀か、わるくすると根戸川へ落ちこんでしまふ、といわれていた。

百万坪から眺めると、浦粕町がどんなに小さく心ぼそげであるか、ということがよくわかる。それは荒れた平野の一部にひらべったく密集した、一とかたまりの、廃滅しかかっている部落といった感じで、貝の缶詰工場の煙突からたち昇る煙と、石灰工場の建物ぜんたいを包んで、絶えず舞いあがっている雪白の煙のほかには、動くものも見えず物音も聞えず、そこに人が生活している

とは信じがたいように思えるくらいであった。

私はその町の人たちから「蒸気河岸の先生」と呼ばれ、あしかけ三年あまり独りで住んでいた。

「青べか」を買った話

芳爺よしじいさんに初めて会ったのは「東」の海水小屋であつた。冬のことで、海水小屋は取り払われ、半分朽ちた葭簾よしずの屋根と、板を打ちつけた腰掛が一部だけ残っていた。町を西から東へ貫流する掘割が、東の海へ出る川口のところで、土地の人たちはそのあたり一帯を漠然ぼくぜんと「東」と呼んでいた。

私は海を眺ながめていた。腰掛は釘くぎがゆるんでいるので、足をつ張つつてうまく支えていないと、すぐさま潰つぶれてしまいそうであつ

た。干潮で、遠浅の海は醜い底肌そこはだを曝さらし、堀の水は細く、土色に濁っていた。急に腰掛がぐらつと揺れたので、私は吃驚びっくりして、突っ張っている足に力を入れながら振り返った。すると一人の老人が、すぐうしろに腰を掛けて、私などは眼めにもはいらないといったような顔つきで、古風な莨たばこ入いれを腰から抜くところであった。私は支える足に気をくばりながら、また海のほうへ眼を戻もどした。

「ずっとめえに、ここへなにかぶつ建てようと思ったっけだが」と老人が大きな声で云いった、百メートルも先にいる人に話しかけるような声であった、「なんかぶつ建ててくれべえと思ったっけだがねえよ」

私は黙っていた。私は老人しか見なかったが、それではもう一人伴れでもいるのか、と思つたのである。しかし答える声はなく、老人はやかましい音をさせて煙管^{きせる}をはたき、次のタバコを吸いつけた。煙管はつまつていて、喘息^{ぜんそく}患者の喉^{のど}のように、ぐずぐずとやにの鳴る音が聞えた。

「ずっとめえのこつた、おつゆのおつかあがまだ綿屋へ嫁にいかねえころのこつた」と老人は大きな声で云つた、そしてやや暫^{しばら}く黙つていてから、また煙管をはたき、三服めを吸いつけて、喚^{わめ}きたてた、「なんにもおつ建たなかつただよ」

私はやはり黙っていた。

二度めには百万坪で会つた。季節は春で、強い風が吹いていた。

私は「二つ^{いり}」の堀に沿った道を、沖の^{べんてんやしろ}弁天社のほうへ歩いていた。なんのふぜいもない、だだっ広いだけのその荒地のほぼ中ほどに、無人の、小さな、^{こわ}毀れかかったような古い社が、ひねこびた六七本の松に囲まれて建っている。いつのころかたいへん流行^{はや}った弁天で、特に各地の花柳界の女性たちが^{さんけい}参詣に列を作ったそうである。どういう^{おびただ}靈驗があつたのか土地の者は知らない、ただひところばかけて流行り、^{にぎ}夥しい参詣者の絶えなかつたことと、当時その境内が別世界のように賑^{にぎ}わつたということだけは、子供たちでさえよく知っていた。

潮の匂い^{にお}のする強い風に吹かれながら、沖の弁天のほうへ歩いていたとき、うしろからいきなり大きな声で呼びかけられ、私は

とびあがりそうに驚いて振り返った。あの老人がすぐうしろにいた。継ぎはぎだらけの、洗い晒さらしためくら縞しまの半纏はんてんに、綿入ももひきの股引ももひきをはき、鼠色ねずみいろになった手拭てぬぐいで頬ほおかぶりをしている。それはこの土地の漁師たちに共通の常着つねぎであるが、もう綿入の股引をはく季節ではなかった。

「おめえ舟買わねえか」と老人は私と並んで歩きながら喚いた、「タバコを忘れて来ちまったが、おめえさん持ってねえだかい」私はタバコを渡し、マツチを渡した。老人はタバコを一本抜いて口に咥くわえ、風をよけながら巧みに火をつけると、タバコとマツチの箱をふところへしまった。

「いい舟があんだが」と老人は二百メートルも向うにあるひねこ

びた松ノ木にでも話しかけるような、大きな声でとなりたてた、

「いい舟で値段も安いもんだが、買わねえかね」

私が答えると、老人は初めからその答えを予期していたように、なんの反応もあらわさず、吸っていたタバコを地面でもみ消し、残りを耳に挟はさんでから、手漉てばなをかんだ。

「おめえ」暫く歩いたのち、老人がひとなみな声で云った、「この浦うらかす粕へなにようしに來ただい」

私は考えてから答えた。

「ふうん」と老人は首を振り、ついで例の高ごえで喚いた、「おんだらにやあよくわかんねえだが、職はあるだかい」

私が答えると、老人はちよつと考えた。

「つまり失業者だな」と老人は喚いた、「嫁を貰う気はねえだかい」

私は黙っていた。別れるときマツチだけ返してもらったが、急に耳の遠くなつた老人は、二度も三度も私の云うことを訊き返し、そのため私は自分がひどい吝嗇漢りんしょくかんになつたような、恥ずかしさを感じた。

三度めは根戸川亭ていで会つた。それは蒸気河岸がしにある洋食屋で、土間が食堂、奥に座敷があつて、夜になると蒸気船（通船といわれていた）の船員や漁師たちが、しばしば盛大に酔つて騒いだ。或る日の午ごろひる、私が食堂のがたがたする椅子いすに掛け、一本のビールでカツ・ライスを喰たべていると、老人が私の卓子テーブルへ来て差

向いの椅子に掛けた。

いまでもそうであるが、外で食事をするときには、私はなにか読みながらでないとおちつけない癖がある。そのときも私は青巻という本を読んでいて、老人がそこへ腰掛けたものだから、いつそう熱心に読むふりをし、そうして本から少しも眼を放さないままで、トンカツを嚙^かんだりビールを啜^{すす}ったりしていた。

女が座敷のところへ来て、「芳さんなんにするだえ」と呼びかけた。

「うう」と老人が答えた、「おつかあがいねえからめし食うべえと思つて来ただが、うう、なんにすべえか考げえてるだ」

「うちじやあ考げえるほどごたいそうなもの出来ねえよ」

すると老人が私を見ながら、——そこへ腰掛けたときからずつと、老人が私をみつめ続けていることを私は知っていた、——で、老人は私の顔を見ながら、例のずばぬけた高ごえで喚きたてた。

「ビールをコップに一杯くんねえかね」

「ビールを一杯だつて」と女が云つた、「おらそんなこと聞いたこともねえ、^{ちゅう}酎のまちげえじゃねえのかえ」

東京へゆけばビールの一杯売りをやっている、と老人が云つた。それはビヤホールというものだ、と女が云つた。いや、トンカツやカレーライスが出来るから洋食屋と違いはない、と老人が云つた。一杯売りをするのは生ビールといつて、^{たる}樽で来るから一杯ずつでも売れるが、^{びんづめ}壺はあけてしまえばあとがかんのんさまだ

から一杯だけ売るわけにはいかないのだ、と女が云った。あとがかんのんさまになつてもしようばいは損して得取れということがある、と老人が喚きたてた。

私は縛りあげられ、毘わなにはまったことを知った。まだ三分の一ほど残っているビール壺を、老人のほうへ置き直しながら、私は云わなければならぬことを云った。

「そうかね」と云うより早く老人は女に向つて喚きたてた、「コップ」

それから私を見て「タバコの手合せはねえかね」

私が答えると、老人は「なに、いま欲しかねえだよ」と云った。
釣りつりぶねやど舟宿の「千本」の三男の長ちようから、私は老人のことを聞いた。

その土地の出来事について、籠屋かごやのおたまと「千本」の長とが、つねにぬかりなく情報を呉くれるのである。おたまも長も小学校の三年生であつた。——老人の名は芳、夫婦つきりで、三本松の裏に住み、「大だい蝶ちよう」の倉庫番をしている、ということであつた。「大蝶」はその町でいちばん大きく貝の缶かんづめ詰工場を経営している、漁師たちの採る貝を沖で買い取るために、大蝶丸という船を持っていた。

私の問いに答えて、長はつよく首を振つた。

「ううん、そんなこたねえだよ」と長は云つた、「工場はやかましかんべ、だからみんなえつけえ声になつちまうだ」

えつけえとはもちろん大きなという意味である。長はなお「芳

爺さまはそら耳を使う」と云ったが、それはもう私の知っていることであつた。

それからのちもときどき道で会つたが、老人は挨拶もしないし、私を見ても棒^{ぼう}杭^{ぐい}か石ころでも見るような眼つきしかなかった。頬かぶりをとつた老人の顔は、瘦^やせていて小さく、太陽と潮風にやけた頭は禿^はげていて、灰色の髪の毛がほんの少し後頭部にあり、頬や顎^{あご}にはまばらな無^ぶ精^{しょう}髭^{ひげ}が、古くなつたブラシのように、一本ずつ数えられるほどまばらに、きらきらと銀色に光っていた。眼には非人間的な鈍い冷たい光があり、殆^{ほと}んど唇^{くちびる}が無いようにみえる薄い唇には、いつも人を小ばかにしたような、狡^{こう}な微笑が刻みつけられていた。

もつと

尤もこれは芳爺さんに限らず、その土地の一部の人たちに共通した顔だちであつた。かれらは季節ごとに来る遊覧客、——魚釣り、汐干狩り^{しおひが}、海水浴など、遊びに来る都会の客たちから「うまくせしめる」習慣がついてるので、その冷たく鈍い眼や、狡猾そうな口つきの裏には、いつでも朴訥^{ぼくとつ}な表情をつくり、あいそ笑いをする用意ができていたのであつた。——四月の末か五月のはじめころ、たぶん五月のはじめころであつたろう、私は三本松のところ^{つか}で老人に捉まつた。

三本松といつても、樹齡の古い松ノ木が一本しかない。ずっと昔は三本あつたそうであるが、私の聞いた限りでは、それを自分の眼で見たという者はなかつた。——堀の岸に横這い^{よこば}のかたちで

枝を伸ばしている。その松ノ木の脇わきに、水から揚げて久しいべか舟が伏せてあつた。ずいぶんまえからそこにあり、私は通りかかるときにそれを見た。べか舟というのは一人乗りの平底舟で、多く貝や海苔のり採りに使われ、笹ささの葉はのような軽快なかたちをしていて、小さいながら中央に帆桁ほげたもあつて、小さな三角帆を張ることができた。しかし、そこに伏せてあつたのは胴がふくれていてかたがたが悪く、外側が青いペンキで塗つてあり、見るからに鈍重ぶかつで不恰好こしょうだつた。

「あのぶつくれ舟か」と長が或るとき鼻柱しわへ皺しわをよらせ、さも軽け蔑いべつに耐えないというように云つた、「青ベかつてえだよ」

この誇り高い小学三年生は、見る気にもなれないという顔つき

でそつぽを向いた。

それは慥たしかにぶつくれ舟であつた。伏せてある平底の板は乾いてはしやぎ、一とところあいている穴から、去年の枯れ草がひよろひよろと伸びていた。水から揚げられた古い舟ほど、衰れに頼りなげなものはない。それは老衰して役に立たなくなった馬が、飼主にも忘れられ、厩うまやの裏でひとりしよんぼり首を垂れているような感じにみえる。——その日も私は道みち傍ばたに佇たたずんで、人間も同じようなものだ、などというのは俗すぎるな、というようなことを思いながら、暫くタバコをふかしていた。

そこへ老人が来て話しかけた。私は気づかなかつたが、老人は私のようなすを見ていたらしい。おそらく、私がその舟にすっかり

惚^ほれこんだものと思つたのであろう、にこやかな、とりいりような笑顔をつくり、「この舟を買わねえかね」とあいそ^{あいそ}のいい声で喚いた。

私は答えることができなかった。

「先生はこの土地のことを詳しく見てえつて云つてたんべが」と老人が喚いた、「そんなら岡の上べえ歩きまわつてもしよあんめえじや、根戸川のまわりだの百万坪の　だの、堀もそうだし、沖へも出てみるがいいだ、それにはこの舟さえあれば用が足りるだよ」

まあ見てくれと云つて、老人は伏せてある青べかをひき起こした。それは極めてすばやく、声をかける隙^{すき}もない動作だった。

「ほれ見せえま」と老人は云った、「まつさらとは云えねえが、造つてからまだ七年にしかなんねえ、大事にしろばまだ十五年や二十年はたつぷり使えるだ」

私は自分の考えを述べようとした。

「値段もまけるだよ」と、老人は喚きたてた、「蒸気河岸の先生のこつたからよ、思いきつて五までまけるだ、たつた五だ」

私が答えると、老人は片手を出した。

「タバコ」と老人は云った。

私はタバコとマッチを渡した。

「じゃあ、なんだ」と老人はタバコを一本抜いて火をつけ、タバコの箱はふところへ入れ、マッチだけを返しながら喚いた、「先

生のこつたから思いきつて四にすべえ、四だ」

私が答えると、老人はタバコを地面でもみ消し、残りを耳にはさみながら喚きたてた。私は長の顔や、軽蔑しきつた口ぶりを思いだしたが、同時に、自分が老人に縛りあげられ、ぬけ出すことのできない罫にかかったことを悟った。「見せえま」と老人は喚き続けた、「揚げつ放しにしといたからちつとばかはしやいであるが、まだこんなにすっかりしてゐるだ」

老人は舟べりや舳先を、大事そうに撫でたり叩いたりした。私はそれを眺めながら、老人が舟をひき起こすときのすばやい動作には二つの意図があつた、ということに気づいた。一つは私を捉えること、他の一つは去年の枯れ草が覗いていた舟底の穴を私か

ら隠そうとしたのだ、ということである。——もう一つ、これを書いては人が信じなくなるだろうと思つて、書かないことにするつもりであるが、老人が舐先を掴つかんでゆすぶったとき、舐先の尖とがったところが折れてしまった。すると老人は自分の手にある折れた舐先の、折れたところへ唾つばをつけて、元の部分と合わせ、そこを片手で押えたまま、いつそう高たかごえになつて喚きたてるのであつた。事實はこのとおりだつたのだが、これを文字にすると、おそらく人は筆者が調子づいてふざけていると思うにちがいない。「事實を書く」ということがいかに困難なしごとであるかは、こんな些細ささいな点でも思い知らされるのである。

「よし、そんなら三と五十にすべえ」と老人は云つた、「これ以

上は鑢びた一文負からねえだ、三と五十、これで話はきまつただ」

私はちよつと質問した。

「そんなこたあ屁へでもねえさ」と老人は云つた、「いかずちの船大工に頼めばすぐ繕つくろつてくれるだ、いいとも、おらが持つてつて頼んでやるだよ」

「それから」と老人はいそいで付け加えた、「こういう売り買いには、買い手のほうでなにか物を付けるのがしきたりになつてゐるだ、豚肉の百匁めでもいいし、夏なら西瓜すいかの三つくれえかな、うう、おめえよく舶来のタバコを吸つてゐるようだが」

私は豚肉を届けると答えた。

こうして私は「青べか」の持ち主になつた。どんなに小さく、

そしてぶつくれ舟であるにもせよ、一ぱいの舟の所有者になつたのだが、私はうれしくもなかつたし、誇りがましい気持ちにもなれなかつた。長をはじめとする少年たちの軽侮の眼や、ちようしやう嘲笑の声を考えるだけで、むしろ急に肩身のせまくなつたような鬱陶うつとうしい、沈んだ気分にとらわれたのであつた。

「いいさ、あんな舟」と私は帰る道で自分に云つた、「乗らなければいいんだ」

私は明るる日、老人のところへ舟の代金と、豚肉を百匁だけ届け、なお青べかについて、二三のことを頼んだ。老人はこころよく受け合い、そのとおりにすると約束した。

蜜柑みかんの木

助なあこ（あにいいというほどの意味）はお兼に恋をした。助なあこはだいちようまる大蝶丸の水夫であり、お兼は「大蝶」のかんづめ缶詰工場へ貝を剥むきにかよう雇い女で、亭主ていしゆがあつた。

この土地で恋といえは、沖の百万坪にある海苔のり漉すき小屋へいつて寝ることであつた。そんなてまをかける暇がなければ、裏の空地の枯れ芦あしの中でもいいし、夏なら根戸川の堤でも、妙見堂の境内でも、消防のポンプ小屋でも用は足りた。実際のところ、海苔

漉き小屋まで寝にゆくのは、よほど二人がのぼせあがっているか、ゆきすぎた声を抑えることのできない女との場合、——土地の人たちのあいだで、そういう癖のある五人の女性の名が公然と話題になっていたが、——などで、かれらの意見によれば、「そんなにてま暇をかけるほど珍しいことでもあんめえじゃあ」というのが常識であつた。

助なあこはそうではなかつた。彼は中学生が女学生を恋するように、純粹に、初^{しよしん}心に恋していた。大蝶丸で沖へ貝を積みにつけているあいだ、彼の胸はつねにお兼を想^{おも}うことで痛み、その眼^めにはお兼の姿、——工場の古びた建物の前で、大勢の女や老婆^{ろうば}たちと並んで、巧みに貝を剥いている姿が、絶えずあらわれたり消

えたりするのであった。

大蝶丸の水夫は三人で、船長の荒木さんはべつに家庭を持っていたが、エンジさんの正山さんと水夫たちは、工場の中にある小屋に住んでいた。助なあこは自分の恋を秘し隠しにし、誰にも気づられないように、最高の抑制を保ち続けていたが、或る夜半、ねごとにお兼の名を呼んだのを、隣りに寝ていた二人の水夫に聞かれて、せっかくの努力がむだになってしまった。

「ゆんべが初めてじゃねえぞ」と水夫の一人が云った、
「おんだらあ何遍も聞いているだ、なあ」

「おうよ」と他の水夫が云った、「名めえをはつきり云ったなあ、ゆんべが初めてだっけ。ずっとめえから何遍も好きだあ好きだっ

てねごとう云つてたっけだ」

「お、か、ね、さん」と先の水夫が両手で自分の肩を抱きしめ、身もだえしながら作り声で云つた、「おら、おめえが、好きだ、死ぬほど好きだ、よう」

助なあこは硬^{こわ}ばつた顔でそつぽを向き、手の甲で眼を拭^ふいた。彼は死んでしまいたいと思つた。もしできることなら、その場で二人を半殺しのめにあわせてやりたかつた。しかし彼は瘦^やせているし、背丈も五尺とちよつとしかない。他の二人はどちらも彼より肉付きがよく、はるかに力も強かつた。それは沖で貝を積むときや、工場へ戻^{もど}つて積みおろしをするときなどでよくわかつていた。

彼は死んでしまいたいと思った。

助なあこは固い決心をし、お兼のほうへは眼も向けず、貝を剥いている彼女の前を通るときには、まっすぐに向うを見たままいそぎ足で、殆んど走るように通りぬけた。彼はやがて機関士になるつもりで、仕事が終わったあとは、エンジンに関する本にしがみついて、熱心に独学を続けていた。それらの本の大部分は荒木船長に借りたものであるが、中の幾冊かは、——ディーゼル・エンジンに関する本は、自分で東京の神田へ行って買ったものであった。

彼は夜の十二時まえに寝たことはなかった。他の水夫やエンジンさんは、毎晩のように飲みでかけ、帰ってくると「一厘りんばな」

か賽さいころ博奕ばくちで夜更よふかしをした。ごつたくやの女たちを伴つれこんで、
わるふざけをしたり、博奕や女のこととつ組みあいの喧嘩けんかをし
たりした。そういう騒ぎの中で、助なあこは小屋の隅すみのほうに机
を移し、両手で耳を塞ふさいで本を読んだり、ノートを取ったりする
のであった。その十坪ほどの、細長い、箱のような小屋には、燭し
光よつこうの弱い裸の電球が、天てん床じょうから一つぶらさがっているだ
けである。隅のほうへ届く光は極めて微弱だったが、それでも助
なあこは本にしがみつき、帳面に眼を押しつけるようにしてノー
トを取った。

周囲の人たちにとって、この独学はばかげたことであつた。そ
のくらのエンジニアになるには、五六年も船に乗って、実地に

エンジさんのすることを見ていれば、それだけで立派にエンジンになれるし、現に二つの通船会社のエンジンさんたちでさえ、多くはそうにして機関士になったのである。

お兼のことだからかわれてから、助なあこはすっかり人嫌ぎらいいになり、ますます独学に熱中した。ねごとの話はたちまちひろまつたが、そのまますぐに忘れられた。この土地では、どこのかみさんが誰と寝た、などという話は家常茶飯かじょうさはんのことで、たとえばおめえのおつかあが誰それと寝たぞと云われたような場合でも、その亭主はべつに驚きもしない、おつかあだつてたまにやあ味の変ったのが欲しかんべえじゃあ、とか、おらのお古でよかつたら使うが いいベさ、と云うくらいのものであつた。——もちろんこれ

ら亭主たち自身も「変った味」をせしめているのであるし、また、全部の人たちがそんなに脱俗しているというのでもない。「浦^{うらか}粕^すでは娘も女^{にようぼう}房^{ぼう}も野放しだ」と、はつきり土地の人たちは云っているが、それでも嫉妬^{しつと}ぶかい人間もたまにはいて、ときに凄^{すご}いような騒ぎの起こることも幾たびかあった。

助なあこの場合には、ねごとで恋の告白をしたというだけだったから、ほんのお笑いぐさとして忘れられてしまったが、傷ついた助なあことお兼とは、それぞれの立場で忘れることができなかったようだ。

初夏の或る午後、二人は根戸川の土堤^{どて}で初めて話をした。その日は工場が休みで、助なあは午めし^{ひる}のあと、本を二冊持つて土

堤へゆき、若草の伸びた斜面に腰をおろして、本をひらいた。読んでゆき、^{ページ}頁を繰るが、なんにも頭にはいらない。活字の列はただ素通りするだけで、一行読むごとにきれいに消えてしまう。彼は音読もしてみた、一句ずつ指で押えながらやってみたが、やっぱり同じことで、いくら繰返し読んでみても、なに一つ頭に残らないのであった。

そこへお兼が来た。彼女は助なあのあとを跟^つけて来たのだ、まえから彼のようにすを見ていて、自分のほうからきっかけをつけないければならないと悟り、その日ようやく機会をつかんだのである。

「あら、助さんじゃないの」とお兼はいかにも意外そうに呼びか

けた、「こんなところでなにしてるの、あら、勉強ね」

助なあこは本を閉じ、振り向きもせず、じつと固くなつていた。彼は全身が火のように熱く、心臓が喉^{のど}までとびだして来るように感じた。お兼は斜面へおりて来て、彼と並んで草の上に腰をおろした。すると、あま酸^すっぱいような女の躰^{たい}臭^{いしゅう}と、白粉^{おしろい}の匂^{にお}いが入り混つた、なまあたたかい空気が彼を包み、彼は頭がくらくらするように思った。

「もう春もおしまいだねえ」お兼はその言葉の品のよさに自分でうっとりとなりながら云つた、「水の流れと人の身はつて、はかないもんだわねえ」

陽^ひの傾いた空にはうすい靄^{もや}があつて、根戸川の広い水面は波も

なく、まるで眠っているように静かだった。あたためられた土の香や、若草の匂いがあたりに漂っていて、対岸の若い芦の茂みでは、ときどきけたたましく小鳥の騒ぐ声が聞えた。

「けけちかしら」とお兼が云った、「まだけけちにしては早いかしら」

見ると助なあこはふるえていた。蒼く硬ばった顔を俯向け、膝を抱えた両手の指を揉みしだき、下唇を噛みしめながら、軀ぜんたいでふるえていた。お兼はふしぎなよろこびを感じた。これまで一度も感じたことのない、ぞつと総毛立つような、快樂の戦慄が突きぬけるように思った。

「あたしあんたが好きよ」とお兼は彼の耳に囁いた、「あんた、

芳野の海苔漉き小屋、知ってるでしよ、知ってるわね」

助なあこは黙^{うなず}って頷いた。

「あたしあんたに話したいことがあるの」とお兼は続けた、「今夜ね、七時ごろあそこへ来てちょうだい、来てくれる、ねえ」

お兼はそつと助なあこの手に触れた。彼はぴくつとなり、軀をいつそう固くし、そしてお兼の手に伝わるほど激しくふるえた。お兼はまた、あのふしぎなよろこびの感覚におそわれ、助なあこの手首をぎゅつと握ってから、それを放した。

「もうみんなが沖から帰ってくるじぶんだわ」とお兼は云つて溜^ためいき息をついた、「みつかると口がうるさいからあたし帰るわ、世の中つてままならないもんね」

お兼はもういちど夜の約束をし、鼻唄^{はなうた}をうたいながら去っていった。

助なあこは時間を計っていて、やがてそつと振り向いてみた。あまり長いこと同じ姿勢でいたため、首の骨がきくんと鳴り、頸^{くび}の筋がつつた。お兼はもうずっと遠く、白い煙に包まれている石灰工場の近くまでいつていた。

「あんたが好きよ」助なあこは頸の筋を揉みながら、お兼の云つた言葉をまねてみた、「あたしあんたが好きよ」

彼の顔が歪^{ゆが}み、眼から涙がこぼれ落ちた。

もう春も終りだ、世の中はままならない、あたしあんたが好きよ、水の流れと人の身は、はかないもんね。それらの言葉が彼の

頭の中で、一つ一つはつきりと、この世のものとは思えないほど美しく聞えた。それは殆んど純金の価値を持ち、純金の光を放つように思えた。

「おら一生、忘れねえ」助なあこはそつと呟いた、^{つぶや}「どんなに年をとつても、死ぬまでも、きつと忘れねえ、きつとだ」

美しいものは毀れやすい、^{こわ}毀れやすいからこそ美しい、などと云うつもりはない。ここには美しいものはないのだ、逆に、美しい感情がもてあそばれ、汚されるのであるが、助なあこの受けた感動だけは美しく、清らかに純粹であつた。

彼はその夜、約束の時間に約束の場所へいった。芳野は堀南の釣舟屋であるが、季節には海苔もやるので、^{つりぶねや}弁天社^{べんてんやしろ}のうし

ろに漉き小屋と干し場を持っていた。そこは沖の百万坪のとぼ口にあり、畑と荒地に囲まれ、隣りの漉き小屋とは二百メートルもはなれていた。——日の永くなる季節ではあったが、もうすっかり昏くれてしまい、あたたかい宵よいやみ闇のどこから、みみずの鳴く声が聞えて来た。お兼はもうそこにいて、暗い小屋の前から彼を呼んだ。助なあこは膝ががくがくするので、転ばないように用心しながらそつちへいった。

「待たせるのね、あんた」お兼はじれったそうに云った、「女を待たせるなんて罪よ、にくらしい」

お兼は衝動的に助なあこの手を握った。彼は狼ろうばい狽ばいして、ぶきようにしりごみをし、握られた手を放そうとしながら、云った、

「なにか話すことがあるって」

その声は喉でかすれ、言葉ははつきりしなかった。お兼は含み笑いをしながら、握った手をもっと引きよせた。土堤のときよりも強く、白粉と女の匂いが彼を包み、彼は眼がくらみそうになった。

「そうよ、大事な話があるの」とお兼は囁いた、「中でゆっくり聞いてもらうわ、ね、ここへはいりましょう」

「おら、——」と云って彼は足を踏ん張った。

「世話をやかせないで」

「それでも、おら」と彼は口ごもった。

「いいから」とお兼は荒い息をしながら、おどろくほどの力で彼

を引きよせた、「なにもおつかないことするわけじゃないじゃないの、たまには男らしくするもんよ」

助なあこの齒ががちがちと鳴った。

お兼は彼を小屋の中へ伴れこみ、入口の戸を閉めた。この種の瀧き小屋は、入口の三尺の引戸に南京錠^{なんきんじょう}が掛けてある。しかしその多くはぐらぐらで、鍵^{かぎ}の必要はなく、ちよつと引張れば錠前ごと抜けてしまい、出てゆくときには元のように挿^さし込んでおけばいいのであった。

「あんた、まだふるえているの」小屋の中からお兼の声が聞えた、「さあ、そんなにしてちや窮屈じゃないの、この手をこうしなつてば」

ついで彼女の含み笑いが聞えた。

「助さん」とあまえた鼻声でお兼が云った、「あんた幾つ、——
そう、十九なの、若いのね、うれしい」

お兼はそのとき三十五歳であつた。亭主のしつつあんは呑のんだくれの怠け者で、ときたま思ひだしたように、なにかの雇われ仕事にでかけるが、「まる一日働いたことがねえ」といわれていた。博奕を打つでもなく、女にちよつかいを出すわけでもない。ただ酒を飲んで寝ころがるか、ぶらぶら歩きまわつてむだ話をするだけである。云うまでもないだろうが、家計は稼かせぎ手のお兼がにぎつていて、しつつあんは与はずえられる小遣いでやっているのだが、そんなものが長くある筈はずはなく、彼はもつぱら奢おごつてくれそうな

相手を求めてぶらつき、またしばしばお兼の男のところへいつてねだった。

お兼は子を産まないためか、肌はだの艶つやもよく、浮気性の女に共通の嬌なまめかしさ、誘惑的な声と身ぶり、言葉よりずっと明確に意志を伝える眼つき、などをもっていた。それは洗練されたものではなく、生れつき身についたものであるし、実際にはこの土地ではそんな武器を使う必要は少しもなかった。

—— お兼あまにどれだけ男がいるか、本当に知っているのは亭主のしっつあんだだけだ。

土地の人たちはそう云っていた。真偽のほどはわからないが、お兼と寝た男は、きまつてしっつあんの訪問を受ける。べつに文

句をつけに来るのではない、相手の男を呼び出すと、ぐあい悪そうにもじもじして、「一杯飲ましてくれねえかね」と云う。相手が幾らか出せば貰^{もら}うし、ないよと云えば温和^{おとな}しく帰るだけであつた。

助なあの恋は、一と月ばかり続いただけで、無慚^{むざん}にうち砕かれた。或る夜、芳野の漉き小屋の中で、彼は怒りのためにふるえながらお兼をなじった。彼はお兼がほかの男たちとも寝る、ということを聞いたのである。

「そんなこといいじゃないの」と云つてお兼は助なあこを抱きよせようとした、「あたしが本当に好きなのはあんた一人だもの、浮世はままならないもんなのよ」

助なあこはお兼の手をふり放した。

「そうじゃねえ、そうじゃねえ」彼はふるえながら云った、「男と女の仲は蜜柑の木を育てるようなもんだ、二人でいっしん同どうた駄いになつて育てるから蜜柑が生なるんだ、お兼さんのようにあつちの男と寝たりこつちの男と寝たりすれば、せつかくの木になすびが生つたりかぼちやが生つたり、さつまいもが生つたりするようになつちまう、おらそんなこたあいやだ」

「ばかなこと云わないで」そう云つてからお兼は急に怒りだした、「えらそうなこと云うんじゃねえよ、おめえだつておらのこと、おらの亭主から横どりしてるんじゃねえか、なにがなすびだえ、かぼちやがどうしたつてのさ、ふざけちやいけないよ」

そして****とひどい悪態をついた。

美しく純粋な、黄金の光を放つものが毀れた。助なあこは自分を反省し、また独学に熱中し始めた。いちどならず「死んでしまおう」と思い、どこか遠い土地へいつてしまおうと決心した。北海道かどこかの広い広い、はだら雪の人けもない曠野こうやを、頭を垂れ、うちひしがれた心をいだいた自分が、独りとぼとぼと歩いてゆく。こう想像するたびに、彼は一種の快感にさえ浸されるのであったが、現実になさる勇氣は起こらなかった。

「むだなことを考げえるんじゃねえ」彼は机にしがみついて頭を振る、「そんなことに氣をとられると出世のさまたげだぞ」そして他の水夫やエンジさんの騒まもぎから身を護るように、両手で耳を

塞ぎ、口の中で低く、本を音読するのであった、「——その構造のAは、原則として、スチイタアと、ロオタアの二部分に分れ、スチイタアの主軸は汽筒であつて……」

お兼はもう助なあこには眼もくれなかった。工場の建物の前に^{むしろ}蓆を敷き、他の女房や^{ばあ}婆さまたちと並んで貝を剥^むきながら、陽気な声でお饒^{しゃべ}舌りをし、みんなを笑わせている。助なあこが通つても知らぬ顔だし、彼を見たにしても、その眼にはなんの表情もあらわれない、犬か猫^{ねこ}でも見るような、まったく無縁な眼つきであつた。

しつつかんも助なあこのところへは訪ねて来なかった。けれどもそれから、お兼の相手の男にねだるときは、次のようなこ

とをぶつぶつと云った。

「夫婦てえものはおめえ、二人で蜜柑の木を育てるようなもんだ、その他人の育てた蜜柑をよ、只で取って食うって法はねえもんだ」
そこでしっつあんはぐあい悪げに眼をそらすのである、「——他人のおめえ、夫婦の育てた蜜柑の木に生った蜜柑を食ったら、その駄賃^{だちん}くれえ払わなきやあしよあんめえじゃあ、蜜柑はなすびやかぼちやたあちがうからな」

こうして、「しっつあんはすっかり役者（賢いというほどの意味）になった」という評^{うわさ}が弘^{ひろ}まった。

水汲みばか

私は根戸川の堤で釣^つりをしていて、初めてその男に会った。

その男が来るまえ、倉なあこが通りかかつて、私のうしろに立^たちどまり、暫^{しばら}く黙^{もく}つてようすを見ていた。倉なあこは船宿「千本」

の若い船頭で、背丈が高く、男ぶりがよく、いつも頬^ほつぺたが赤く、また、この土地の青年にしては珍しく無口で、理屈も云^いわず、そしてみんなに好かれていた。

「なにを釣^つてるだ」倉なあこが訊^きいた。

私は困った。なにを釣るなどという思いあがつた考えは私にはない。なにかが釣れてくれればいいので、なにが釣れるかは先方しだいだからである。

「鯉こいかね」倉なあこがまた訊いた。

私はタバコを出して彼にすすめた。

「いいだよ」と倉なあこは云った、「おらめしのあとで一本吸うだけだ」

私はタバコに火をつけた。すると水面の浮子うきが動いて、強く水の中へ引きこまれ、私はタバコの煙にむせながら竿さおをあげた。釣れたのは大きな鯊はぜであった。

「二歳だな」と倉なあこが云った。

私は鯊を鉤はりから外してバケツに入れ、新しい餌えさを付けて、また糸を投げた。

「ふん」と倉なあこが云った、「二歳の鯊がこんなところまでのぼつて来るんだな」

彼の声には皮肉やからかいの調子はなかった。むしろ控えめな親しみの情さえ感じられたが、それは却かえって私を圧迫し、窮屈な気分にした。倉なあこは専門家である。釣りの穴場を知っている点では、浦うらかす粕じゅうでも指折りの船頭といわれ、どんな場合にも、黒鯛くろだいを釣りたいという客を鯊の寄り場へ案内する、などということとはしなかった。そのために、吝りんしよく吝な客ほど彼をひいきにする、といわれていた。この、客と船頭との微妙な因果関

係については、こういう例がある。——釣舟宿では客を送り出すとき、飯と佃煮つくだにと香こうの物を持ってゆかせる。通常の客は沖で釣った魚を料理させ、それと香の物くらいでめしを喰たべるから、船頭は佃煮で自分の食事ができる。ところが吝嗇な客になると、釣った魚は持って帰り、佃煮と香の物でめしを詰め込んでしまう。しかたがない、船頭は塩のきいた海水をぶっかけて、ざくざく流し込むということになる。しかも吝嗇な客ほど釣果ちようかにも執着が強いから、腕のいい船頭をもっぱら覘ねらう、という迷惑な関係が生れるのだそうであつた。——そういう良心的な専門家の評うわさを聞いて、圧迫を少しも感じない者があるだろうか。私は川口から約四キロも上流のそんなところで、大きな二歳の鯊を釣ったことが、

なにか常識外れなあやまちを犯したように思えて、恥ずかしくな
った。

「先生は青べかを買っただつて」暫くして倉なあこが訊いた。

私が答えると、倉なあこは跣^{かが}んで、草の穂を^{むし}り、その細い茎
を噛^かんだ。

「まづかつたな」倉なあこは云つた、「あのぶつくれ舟を馴^ならす
にやあ肝煎^{きもい}るだよ」

私は答えなかつた。

ちよつとまえから、洗い場で一人の男が水を汲んでいた。土堤^{どて}
に踏段があつて、根戸川から水を汲んだり、洗い物をしたりする
足場が設けてある。その男はきれいな手桶^{ておけ}を二つ、天秤棒^{てんびんぼう}で担^{かつ}

いでやって来た。天秤棒は細手の、飴色あめいろに磨きこんだ、特別製のようであり、手桶すぎは杉まさめの杙目で、銅あかの箍たががかかっていた。どうしてそんなこまかいことに気がついたかという、男のみなりや動作が変っていたからである。

その男の年は十六七ともみえ、三十過ぎともみえた。痩やせて、小柄こがらで、背丈は五尺そこそこだろうか。紬つむぎ縞しまらしいさっぱりした着物に、角帯をしめ、秩父物ちちぶの焦茶色こげちやに荒い縞のはいった、袖そでなしの半纏はんてんをひっかけていた。そして足袋せったに雪駄せったばきという、およそ水汲みなどとは縁の遠い、どこかの若隠居が散歩にでも出た、といったような姿であつて、そのうえ、水の水汲みかたが信じがたいほど用心ぶかいのである。

彼はじつと川の水面を睨にらんでいる。無関心に見ると考えごとでもしているようだが、全神経を集注して睨にらんでいるので、その証拠には、水面にごみがなくなつたとみた刹那せつな、さつと手桶で水を汲むのである。——そこまでの慎重さもたぐい稀まれなものだが、それで終つたわけではない。こんどは手桶の脇わきに跣はきんで、いま汲んだ水を睨にらむ。時間などはてんで頭あたまにないようで、ゆつくりと、おちつきはらつて睨にらんでおり、まったくごみがなければよし、ほんの僅わずかなごみでもあれば、その水は惜おししげもなく川へあけてしまひ、また流れの面を辛抱しんぱうづよく睨にらむのであつた。

初めて私がその男を觀察したときは、そうとは知らなかったし、自分は釣つりりをしていたので、時間の経過には気づかなかつたが、

二つの手桶に汲み終るまで、二時間ちかくはかかったであろう。その男が満足して、天秤棒で二つの手桶を担ぎ、ゆうゆうと歩き去ったときには、もう倉なあこもそこにはいなかったのである。

水を汲むのに二時間ちかくもかかったというと、たぶん信用しない人のほうが多いだろう、私も初めてのときはそれほどは感じなかった。けれども二度めに見、三度めに見、そののちしばらく観察するに及んで、二時間くらいはざらであり、ときには半日ちかくもかかるのを実際に見た。

或^あるとき私は写生帳を持って、町の中央部にある、中堀橋を渡っていた。すると、向うからその男が来るのを認めた。彼はやはり袖なしの半纏をひっかけ、雪駄ばきで、口に飴を^{くわ}え、飴に付

いている杉箸すぎばしのような物を、両手で挟はさんでくるくる廻まわしながら、
 いかにも暢氣のんきそうな、この世に心配なことはなにもない、と云い
 たげな顔つきで、ふらふらと歩いて来た。そうして、私が片方へ
 よけている狭い橋の上を通りすぎるとき、彼はなにかのオペラの
 中のアリアを、鼻で、かなり正確にうなっていた。

私の問いに対して、「千本」の長ちようは軽蔑けいべつしたように、鼻柱しわへ
 皺しわをよらせた。

「うちは堀ほりで魚屋をやつてゐるだ」と長が説明した、「水汲みばか
 っというだよ」

私はまた訊いた。

「そうじゃねえ、ずっとあとだ」とこの小学三年生は云った、

「蓄音器のよ、レコードを買い始めたべえ、いくらでも買うだ、二階がみしみしいうほど買つて買つてよ、朝つから晩までそれを聞いてるだよ、そのうちにな、レコードの数が殖ふえるのといつしよに、だんだん頭がおかしくなつてきたんべえ、それでよ、嫁を貰もらつたら治るべえかつて、葛かつしか飾のほうから嫁を貰つたつけだ、そしたら頭あちつとも治らねえで、水汲みい始めただ」

耳も眼めも口もすばしっこく、学校の勉強のほかはなにごとによらず、なかまにひけを取つたことのない長は、唇くちびるすみの隅に唾つばを溜ため、さかしげな眼をくりくりさせながら語つた。

その男はなにもしない。父親が死んだあと、魚屋の店は母親と男の妻とで、三人の若者を使つて立派にやっている。——男は朝

起きるとすぐ、蒸氣河岸^{がし}まで水汲みにゆき、帰つて来るとその水で洗面にかかる。第一の手桶の水で齒を磨き、第二の手桶の水で顔を洗うのだが、どちらの手桶の水もむだにせず、ゆつくりと、丁寧に、飽きることなく磨いたり洗ったりする。これだけで半日つぶれてしまい、それから朝めしを喰べるので、たいてい午後になるのが普通である。——それから二階へあがつて蓄音器をかけるか、飴をしやぶりながら町を歩く、というのが変らない日課である。

「おつかしいのよ」と長は嘲^{ちやうしやう}笑した、「晩になるとな、おつかあに風呂^{ふろ}へ入れてもらつて、軀^{からだ}あすつかり洗つてもらつて、寝るときにも抱いてねかしてもらうだつてよ、それでよ、おつかあ

に抱かれて寝てもよ、ただ眠るだけでなんにも」

私はいそいで話題を変えた。この並みはずれてすばしこい少年は、私などのまだよく知らない、もの凄^{すご}いようなことを平気で云う癖があつた。尤^{もっと}も、これまた長だけには限らない、この土地では少年と少女の差別なしに、男女間の機微に触れた言葉をじつによく知っており、そういう表現におどろいて、私がへどもどしたりすると、「へ、へ、蒸気河岸の先生もそらつ使^{つけ}えだ」くらいは云われるのであつた。

或る日、私はその堀の魚屋の前を通つた。間口は三間くらい、二階造りのがっしりした建物で、広い店の奥に大きな冷蔵庫があり、看板には「仕出し料理、魚^{うおたつ}辰」と書いてあつた。若者が一

人、せつせと魚を作つてい、店の前のほうに、若い女がいさましく盤台を洗つていた。頭はあねさまかぶり、端折つた裾から白く^{はしよ}、^{すそ}遅しい脛と、鮮やかに赤い腰巻が見え、^{たすき}襷をきつく掛けているので、肉付きのいい、白く張り切つた肌^{はだ}が二の腕まであらわになり、私が通りぬけようとしたとき、彼女は片方の手をあげて額のあたりを撫^なでたが、その白いゆたかな腕の付根に、ふさふさとした腋^わ毛^{きげ}が見えたので、私は慌^{あわ}てて眼をそらした。

紺^{こん} 紺^{がすり}の着物、きつく絞つた襷、端折つた裾から覗^{のぞ}いている赤い腰巻、遅しく肉付いた足や、まるく張り切つた腕や、ふさふさとした腋毛。——そうして男よりもいさましく、すつかり馴れた手つきで、しやしやつと盤台を洗っている姿。そこには「水

汲みばか」などと云われる亭主^{ていしゅ}を持った、不運な女のかげとか、
悲しみを胸に秘めているといったふうなものは微塵^{みじん}も感じられな
かった。夜半^{よわ}の眼ざめにどんなことを思うかは知らないが――。

青べか馴^ならし

いかずちの船大工から、青べかの修理が終つたという知らせが来た。そのとき修理賃を四つ取られたので、芳^{よしじい}爺さんに払つた三つ半と豚肉代を加えると、それがかなり高価な買物であつたことがわかり、私はもういちど、自分がうまうまひつかつたという事実を確認して、不愉快な気分を味わつた。

修理賃は払つたが、なかなか舟を受取りにゆく気にはなれなかつた。まえにも断わつたように、その「青べか」は浦^{うらかす}粕じゅう

で知らない者のない、まぬけなぶつくれ舟であり、なかんずく子供たちには軽侮と嘲ちやうしやう笑の的であつた。そんなものに乗つているところを見られたら、私自身どうなるか想像がつかかつたのである。

「いいさ」と私は自分に云いつた、「そのうちに忘れてしまふだろう」

誰だれがどう忘れるのか。船大工が私を忘れるのか、私が舟を受取うけとることを忘れるのか、貧窮の中でなけなしの金を九つ近くも取られた青べかそのものを忘れるというのか。いずれともはつきりした根拠があつたのではない、漠然ばくぜんとした自己保護本能、その潜在意識のはたらき、といったような感じの眩つぶやきだと思ふのである

が、——しかしすぐに、私はそれを買ったとき、芳爺さんに頼んだことがあるのを思いだした。つまり修理ができて、当分のあいだ、船大工の岸へつないでお願いしてもらおう、ということ、それは青べかへ乗るまえに長をちようはじめとする少年たちと、感情の融和期間を持ちたいと考えたからであつて、ああそうだったと思いだし、ほつとしたとたん、まるで私がその約束を思いだすのを待ちかねていたように、芳爺さんが青べかを届けに來た。

私が云うと、爺さんは戸口で喚わめいた。

「いかずちでも邪魔つけだつて云うだ」声いっぱいに喚きながら、老人は私の手を仔細しさいありげに見、そしてまた喚きたてた、「預かり賃を出せばつだつてえがね、日ぎめで駄賃だちんをやつて預けてお

つか」

私は答えて、爺さんといっしよに土堤^{どて}へいつてみた。

青べかは洗い場の杭^{くい}につながれて、ゆらゆらとねむたそうに揺れていた。私の注文にもかかわらず、剥^はげていた青いペンキが、もつと毒どくしく、なにかをあざ笑いでもするように塗り直してあつた。それを買ったとき私は爺さんに、ペンキを剥^はがすようにと頼んだのだ。

「おらそう云つただよ」と老人は私の手を眺^{なが}めながら喚き返した、
「そう云つただが塗つちまつただよ、まあしようなかんべや、剥がしても塗つても青べかは青べかだでな」

爺さんは私の手と袂^{たもと}を、意味ありげな眼^めでちらちらと見た。

「棹^{さお}や櫂^{かい}はどうするだ」と老人は訊^きいた、「なんならおらが世話すべえか」

私が答えると、爺さんは耳に挟^{はさ}んでいたタバコの吸いさしを取り、いまいましそうな眼つきで「マツチ」と云った。私は答えて礼を云い、振り返って家へ戻^{もど}った。

私の借りた家は、蒸気河岸^{がし}から百メートルほど北にある一軒家で、東は広い田圃^{たんぼ}、左右は草のまばらに生えた空地、西が根戸川の土堤になっていた。土堤の上はずっと上流の徳^{とくぎ}行^{ぎょう}町まで続く道があり、人の往来はあまりないが、話しながら通る者があると、四帖半^{じようはん}で机に向つていても、その話し声はよく聞えた。――その日の午後おそく、私の予期していた騒ぎが起こった。それは

避けることのできない関門なのだ。東京から大阪まで汽車でゆくのに、丹那たんなトンネルは避けることができるが、大井川や天竜てんりゅう川の鉄橋わを避けることはできない。トンネルと鉄橋とは対象が違うなどというような、論理にこだわる人は浦粕へゆかれるがよい。この町の住民たちは独特の論理をもつてい、（それは多く権威を嘲ちやうろう弄するという觀念が基本になっているのだが）トンネルと鉄橋どころか、小学校の或ある先生の話をするのに、「二ついり」の毀れた水門こわを引合に出す、くらいはごくあたりまえなことであった。何十年かまえ、——この話はちよつと眉唾まゆつばものだが、おそろしく学問のある、氣位の高い村長（当時は「村」だったのである）がいた。実際おそろしいほど学問があるために、村の住民

たちのことなどおけらほども思つていなかった。すると或るとき、消防の組頭だった徳さんが、なかまの者にこう囁ささやいた。

——あの村長はちんばだぞ。

なかまは「へえ」と眼をみはった。

——おらにやあそうは見えねえがね。

すると徳さんが云った。

——世の中にや見えるちんばもあれば見えねえちんばもあるさ。

浦粕の風習として、こういう評うわさひろが弘まるのに日時はかからない。

たちまちこれが全村民に伝わった結果、その気位の高い村長は、ついにちんばをひいて歩くようになった、ということであつた。

芳爺さんが青べかを届けて来た日の、午後おそく、机に向つて

いた私の耳に、子供たちの喚声が聞えて来た。それは根戸川堤のほうからであり、洗い場でわきあがっていることがよくわかった。かれらは罵り叫び、笑いあい、そのあいだに石を投げつけるような音がし、囃したて、どなりあっていた。——私はペンを持ったまま、じつとそれを聞いていた。関門なのだ、と私は思った。天^て然痘^{んねんとう}にかからないためには種痘をしなければならぬ、あばた面^{づら}になる代りとして、腕の一部分にメスを入れられるのだ。メスを入れられる痛さは瞬間的なものであり、瘡^{そうこん}痕のかさぶたが取れるまでもさして時日はかからない。さしずめこれは種痘のようなものだ、と私は自分に云い含めた。

そのうちに堤のほうからこつちへ走って来る者があり、窓の外

へ来て「先生いつか」と長が呼びかけた。

「いつてみせえま」と長が昂こうふん奮した声でどなった、「やつら青
べかをぶつくらわしてるだ、あれが聞えねえだかい」

私は答えた。

「そんなこと云わねえで来せえま」と長はじれた、「おんだらが
止めてもやつらききやあしねえだ、ひつくら返すつて云ってるだ
よ」

私はまた答えた。

「じゃあ知らねえぞ」と長は怒つてどなった、「おら知らねえか
ら、いいか」

私が答えると、長は走り去っていった。

洗い場の騒ぎはなお続いてい、長の叫び声が、その騒ぎを縫うように聞えた。よせ、やめろ、と長は叫んでいた。先生が怒るぞ、——よさねえか、先生が来るぞ、——私は事の意外さにとまどつた。青べかをもつとも軽侮していたのは長であつた。それがまだ三本松の脇わきの道みち傍ばたで、舟底を上干されていたとき、長は鼻柱に皺しわをよらせて「あのぶつくれ舟」と云い、見るのもいやだというふうにそつぽを向いた。その日の騒ぎも、おそらく長が音頭取りだろうと思つていたのである。——しかしそうではなかつた。長はかれらの暴力から青べかを護まもろうとしているのだ。私はとまどい、そうして少しばかり感動した。

「まあおちつけ、用心しろ」と私は自分に云つた、「そうやすや

すと感傷的になるな、長はしたたか者だぞ」

騒ぎがしずまり、悪童どもは去った。そろそろ暗くなりはじめたころ、もういいだろうと思つて、私はようすを見るために土堤へ出ていった。ずいぶん石を投げつけたようだし、「ひつくら返す」と云つていたそうで、どんなことになっているか、その場へいつて見るまではちよつと不安な氣持だった。

堤へ登つてみると、舟はなかった。

洗い場の杭につないであつた青べかは、もうそこには見えないのである。私は踏段をおりながら、さてはひつくら返したかと思ひ、洗い場にかが跳んで水中をすかして見た。黄昏たそがれの、片明りに光る、水面の下をすかして見ると、青黒く藻草もぐさがゆらめいてい、な

にかの稚魚が群れをなして、さつと片方へはしり、すぐにまた片方へさつと走るのが見えた。けれども舟はみつからなかった。単にひっくり返されたのなら、杭にともづなで縛りつけられている筈だが、そのともづなまでなくなっていた。

「ふん」と私は呟いた、「やりやあがつたな」

私はやつらが青べかを流したと思った。

そのとき私がさばさばしたというのは嘘だ。なにしろ当時の私としてはたいまいな代価を払っている。豚肉やタバコや精神的な損失をべつにしても、それは決してさばさばするような金額ではない。ちよいどいい機会だからうちあけておくが、浦粕時代の私の収入は、中・商という商業新聞の家庭欄に、週一回ずつ載る童

話をときたま書かせてもらい、また少・世という少女雑誌に、少女小説を買ってもらっていた。前者は高品さんという浦粕の名家の息子で、中・商紙に勤めていた人の世話であり、後者は少・世の編集長で、のちに高名な小説作者になった井内蝶二の好意によるものであった。稿料は前者が一回「五」であり、後者が一編

「四〇」または「五〇」くらいであった。もちろんその差は原稿

の枚数によるのであるが、——そして、それで足りないところは、

京橋木挽町こびきちょうに店を持っていた恩人、山本洒落齋しやらくさいおう翁のところ

へ借りにゆく、それも極めてしばしば借りにいったものであった。

それなら青べかを失ったことが、非常に惜しかったかといえ、

それをはつきりとは答えられない。一種の厄やっかい介かいばらいをしたよ

うな、肩の荷をおろしたような気持ちもしたからである。とにかく、明日になったら川筋や堀ほりを捜してみよう、そう思つて私は家へ帰つた。

明くる日、朝めしのあとで私はでかけた。悪童どもは学校であるが、私は自尊心のために舟を捜すようなそぶりは示さず、眼の隅すみで注意しながら歩いていった。蒸気河岸では三十六号船の留さんが声をかけ、景気はどうかと訊いた。船宿「千本」の店の前では、おきぬという女が縄なわ舟ぶねの餌付けえづをしながら、たまには遊びに来い、と呼びかけた。堀へ曲ると海苔屋のりのおばあさまが挨拶あいさつをし、町役場の増山さんと会い、ごつたく屋の「栄家」の前では、泊り客を送り出した実永（むろん仇名あだなで****と読むのだが、

本名は知らない」が、ちよつと寄つてゆく気はないか、ときそいかけた。こうして十幾人もの人と、言葉を交わしたり、目礼したりしたが、ついに青べかを発見することはできなかつた。

「まつすぐに川をくだつたんだ」と私は呟いた、「海へいつちまつたんだな」

その日の昏^くれがたに、窓の外で倉なあこの声がした。窓をあけてみると、倉なあこは沖着^{おきぎ}のぼつた姿で、頬^ほつぺたの赤い、いい男ぶりの顔で笑っていた。

「青べかを曳^ひいて来ただよ」と倉なあこはゆつくりと云つた、
「沖の三番のみおでふらふらしてただ、どうしただね」

私が答えると、倉なあこはまた笑つた。

「しようがねえがきどもだ」と彼は、あんまりしようのないような口ぶりでなしに、やさしく云った、「こんど来たらどなってるがいいだ、やつらもそれほどわる気はねえだから、一つどなつてやればいいだよ」

私が答えると、倉なあこはうなず頷いて、棹と櫂はすぐに持つて来ると云つてたち去つた。そのあとで、私は堤へいつてみた。青べかは杭につながれて、私に見られたくないとしてもいうように、ひっそりと洗い場により添っていた。もう川の水面も暗いので、近よつてみても細部はわからないが、青いペンキはあばたのように剥げ、ふなばたがところどころ欠けていた。

「おい」と私は彼女に云つた、「ひどいめにあつたな、これで終

つてくれればいいがね」

私の心にあたたかな愛情がわきあがつた。そんなにもぶざまな
恰好かつこうの、愚かしげなべか舟はほかにはない。そのために嘲笑さ
れ、憎まれているのだが、それはそんなふうに造った者が悪いの
で、彼女自身には責任のないことである。彼女はなんの罪もない
のに造った者の誤り、または臍へそ曲まがりの代償を払わされているの
だ。しかも彼女はその冤むじつを訴えることさえできず、黙って住民た
ちに嘲笑され、悪童どもの投げつける石に耐えなければなら
ないのである。

「ひとつ考えてみよう」私は彼女の修理された舳先へさきを撫なでながら
云った、「問題は（青べか）という概念だ」

青いペンキを剥がしても、「塗つても青べかは青べかだ」と芳爺さんは云つた。それは要するに、その舟に関する住民たちの認識の根底をなす普遍的概念であろう。とすれば、それを青べかでない他のもの、つまり属性の転換をすればいいのではないか、と私は思つた。

「待てよ」と私は呟いた、「まあ待て、考えてみよう」

私は夕めしを喰^たべに堀南の「天鉄」へゆき、そのあとちよつと買物をして歸つた。

明くる日の午後おそく、土堤のほうで子供たちの騒ぎだす声を、私は聞いた。もとより予期していたことで、私は机に向つたまま、その騒ぎを聞きながら、いまになにか反応があるだろう、誰かが

やつて来るだろう、とひそかにほくそ笑んでいた。子供たちの騒ぎは第一回るときよりも盛大であり、石を投げつける音も数多く、かつ活気に満ちたものであった。私は待ったが、誰もやつては来なかった。長さえも来ないまま騒ぎが続き、やがて、ずいぶんときが経^たつてから、子供たちは去つていった。

「おかしいな」と私は呟いた、「気がつかなかったのかな」

もはや悪童どもがいらないということを慥^{たし}かめてから、私は用心ぶかく家を出ていった。

青べかは洗い場の杭につながれていた。私は踏段をおりてゆき、蹠^{ふみ}んで、まず彼女のふなばたをしらべた。昨夜、私が書いた「口ジナンテ」という字は、傷だらけではあるが残っていた。投石は

思つたより華やかだつたらしく、ペンキはさらに剥げ、ふなべりは幾力所も欠けていた。

「この字をなんとも思わないのかな」と私は白いペンキの文字を見ながら呟いた、「かれらには好奇心も懷疑心もないんだな」

私の期待は外れた。私は彼女を「青べか」から「ロジナンテ」に変えようとしたのだ。悪童どもが好奇心をおこして訊きに來たら、私はその名の由来を語つてやるつもりだつた。そうすればかれらの頭には、愚かしく愛すべき老馬の姿が印象づけられるに相違ない、——おつかしな、可哀かわいそうな老いぼれ馬。こういう觀念がかれらに起これば、もはやその「可哀かわいそうな老いぼれ馬」を迫害するようなことはないだろう、およそ少年というものは自分を

英雄化し、事をロマンティックに考えたがるものだからだ。

「まあ待ってみよう」と私は家へペンキを取りに戻りながら云った、「ものごとは辛抱がかんじんだ」

だが私の期待は外れた。

この土地の悪童どもは、私のいだいている「少年」という概念の外にあるらしい。青ペンキを塗ろうが塗るまいが、白いペンキで妙な名を書こうが書くまいが、かれらにとって「青べか」はしよせん「青べか」にすぎないのであった。

「即物的なやつらだ」と私は云った、「好きなようにしろ」

私はさらにこう云ったことを覚えている、「どうでもいいようにしろ、勝手にしやあがれ」

悪童どもは飽きもせず、毎日やって来て青べかの^{ぎやくたい}虐待に興じた。雨の日にさえ、学校のゆき帰りに石を投げ、泥を^{どろ}投げ、悪罵と嘲弄を^{くば}あびせかけた。私はそのとき「画師弘高の悲劇」という、二部十幕の大作にかかつてい、それはまったく金になるあてのないものだったが、その原稿に没頭することによつて、青べかのことを忘れることにつとめた。

お願いしたいのは、私がこれを人間的^{かつとう}葛藤の^{ひゆ}比喻に使つてい
ると思つていただきたくないことである。これは事実そのままを
語つていたのであり、現実「あつた」ことなのである。聖書に
よれば、人間の原罪の片棒を^{かつ}担いだために蛇は^{へび}いまでも憎まれ、
塵の中を^{ちり}這^はいまわらなければならないのだという。私は青べかの

うえにも、その原罪の不当な迫害という共通点を感じて、嘆息した。

子供たちはやがて飽きた。熱烈に恋しあつたうえに結婚した男が（或いは女が）^{ある}やがてその相手に飽きるようにはなく、老醜の彼、または彼女を憎みさげすむことに飽きるように、——その期間がどのくらいであつたか、ということは問題ではない。とにかく子供たちは飽き、青べかには眼もくれなくなった。時がすべてを解決するという、怠けた金言も、ここではいちおう実現したわけである。

「しかしゆだんはならない」私はこう私自身を戒めた、「まだ関門が控えているぞ」

そして私は青べかを出航させた。

べか舟は小さい平底舟だから櫓はかけられない、水の浅いところは棹さおでやり、深いところでは櫂かいを櫓のように使うのである。私は少年時代に、江ノ島の片瀬川で棹と櫓の使いかたを覚えた。そんなちっぽけなべか舟などは手の内のものだと思ったのであるが、——そして、多くのべか舟はそうであつたろうと思うのだが、彼女は他のべか舟ではなく「青べか」であつた。彼女には個性があり、強烈な自意識があつた。私がならい覚えた技術をフルに動員しても、彼女は頑がんとして服従しない。こちらへやろうとすればあちらへゆき、あちらへ向けようとするところへ向いてしまう。ではあちらでもなくこちらでもなく、好きなほうへ進ませようと

すると、ただぐるぐると同じ水面を廻^{まわ}るだけで、どっちへも進まないのであつた。

「よしよし」私は櫂を置いて、片手で汗を拭^ふき片手でふなべりを撫でながら云^いつた、「時間はたつぷりあるさ、いそぐ旅ではないからな、まあゆつくりやろう」

こうして私の苦闘が始まつた。

私は忍耐づよいほうでは自信があつた。

私はむやみに怒つたり、ふくれっ面をするようなことはない。

仮に感情の激^{げつ}昂^{こう}を抑えることができないような場合には、どんな代りに丁寧な言葉を使い、喚^{わめ}く代りにあいそ笑いをするようにつとめる。むろん青べかに対してもそういう態度でのぞんだ。私

は彼女がどんなに侮蔑ぶべつされ迫害されたかを思い、自分だけは憐れあわれみと愛情とで、彼女を劬いたわらなければならぬと思った。

或る日、私が根戸川の中流で、棹を振りまわし気持ちがよいように櫂を使いながら、青べかの頑強な自意識とたたかっている、ふと気がつく、蒸気河岸に大勢の人が集まって、こつちを指さしながら、げらげら笑っているのに気づいた。学校のある時間だから、悪童どもはみえなかったが、十四五人の老若男女ろうにやくなんによと、私を「蒸気河岸の先生」と知っているちびどもが、こつちを指さしたり、腹を押えたりしながら、有頂天になって笑っていた。

或る風の強い日に、——私は根戸川の中流で苦闘していた。干潮だったと思うが、青べかは私を乗せたまま、棹や櫂にはいっこ

う頓とんちやく着せず、

強い風と流れに身を託して、ぐんぐん下流へとくだっていた。このままでは海へ持つてゆかれてしまう、私はけんめいに櫂を使い、どうかして彼女を岸のほうへ向けようと、汗だくになって奮闘していた。そのうちに、堤のほうから叫び声が聞え、見ると、「千本」の長が走りながらどなっていた。

「岸へ着けろま」と走りながら長は私に呼びかけた、「岸に着けるだよ先生、そんなことしていると海いっちまうだぞ」

私もそうしたいのだ。そうするために汗みずくになっているのだが、青べかは頑としてきかないのである。

——この、このろくでなしの……。

そう云いかけて私は口をつぐんだ。

子供たちのほうが正しかったのだ、このぶつくれ舟は手ごちに負えないあばずれの、まぬけで能なしで、恥知らずな物ぶつた駄つたのだ。まさに「青べか」だったのだ、と私は思ったが、それでもまだ、そういう気持を彼女にぶちまけるのは控えることにした。「はあ——流されてるだ」と堤の上を走りながら長が叫んでいた、「先生のばかやつら、いいきびだ、流されてるだ、ええばかやつら」

私は鼻の奥が熱くなるのを感じた。

「いいきびだ、わあい」堤の上を、こちらの舟といっしょに、走りながら、泣き声で長が叫んでいた、「先生のばかやつら、ええ流されてるだ、海まで流されるだ、ばかやつら、いいきびだ、わ

あい」

それは小学三年生の愛情の表現だった、などと私は云いたくはない。それは学校のある時間ではあるが、土曜日だった、などということも云う必要はないだろう。——私は海まで流されはしなかった。一つ^{いり}のところで房^ひなあこの舟に^{つか}捉まり、無事に蒸気河岸まで曳^ひき戻されたのであった。

或る日、——いや、これ以上は退屈な繰返しになる。私が彼女に対する憐れみや、愛情や舐^なりをかなぐり捨て、悪童どもと同じように、それが正^{まさ}しく青^{あお}べかにすぎないと認めたとき、初めて彼女は私に身を任せた。つまり私の棹と櫂の命ずるままになった、ということを書いておけばいいであろう。

砂と柘榴ざくろ

堀ほりの洋品雜貨店「みその」の息子が嫁を貰もらった。息子の名は五郎、年は二十四、町の人たちはごろさんと呼んでいた。嫁はゆい子といい、年は二十一歳。この町から四キロほど川上にある篠しのざ咲きの者で、実家はかなりな地主だといわれていた。

五郎さんは温和おとなしい性分であつた。背丈は五尺一寸くらい、瘦やせていて顔は蒼白あおしろく、いつも手指の爪つめをかじる癖があつた。家族は父と彼と、十二になる妹の三人で、姉が一人いたが、何年も

まえによそへ嫁^かし、その婚家の人たちといっしよに、北海道へ移住してしまった。母親は長く腎^{じん}臓^{ぞう}を病んだのち、その年の夏に亡^なくなり、そこで急に五郎さんの結婚が繰^{くり}りあげられたのであつた。

結婚式はかなり派手におこなわれた。披露^{ひろう}の宴会は「山口屋」の大広間を使い、招待された客は町長はじめ二十余人、みな旦^{だんな}那^{しゅう}衆^{しゅう}と呼ばれる人ばかりで、お引き物の折詰^めには眼^めの下尺二寸の鯛^{たい}が入っていたという。招待されなかった消防組長のわに久は、はらだちまぎれに酔っぱらったあげく、火^ひの見櫓^{みぐら}へつかまって暴れた。

「あの宴会をぶちこわしてくれるだ」とわに久はどなったそうで

ある、「これからだんだんに登って行って、てっぺんまで登って
行ってな、すりばんを鳴らしてくれるからな、見ていろ」

「誰^{だれ}も止めるな、おつぽつといてくれ」ともどなったそうである、
「いまおれがすりばんを叩^{たた}き鳴らして、宴会をぶっこわして、町
じゆうをひつくらけえしてくれるだから」

誰も止める者はなかった。こういう興味深いみものを途中で止
めるような、お節介な人間は浦^{うら}粕^{かす}には絶対^{ぜったい}にいないのである。
かれらはわに久を遠巻きにして、げらげら笑ったり、けしかける
ようなことを云^いったりした。わに久はけんめいに梯子^{はしご}をよじ登ろ
うとするが、二三段登るとずるずる落ち、また二三段登ると落ち
てしまうので、倍増しはらをたてた。

「悪いいたずらだ」と彼はどなった、「いいかげんにふざけろ」
 彼はなお飽きずに努力したが、どうしても二三段より上へは登れなかった。

「よせ」と彼は片手でなにかを払いのけるような動作をした、
 「よせつたらな、このやろう、ばちばらすぞ」

それから力尽きて、梯子の桁^{けた}へ腕を掛け、全身で凭^{もた}れかかつて眠^つつてしまい、知らせを聞いて駆けつけた妻女によつて、家へ伴れ去られたのであつた。

こうして山口屋の披露宴は事なく終り、五郎さんと花嫁とは、客たちより先に家へ歸つた。——ここまでは、五郎さんの運命は^{ほほえ}頬笑んでいた。彼自身は高等小学校しか出ていないのに、花嫁は

東京の女学校を卒業していた。彼が貧相でみばえのしない男ぶりなのに反して、花嫁はかなりきりよう縹緞よしであり、東京の女学校を卒業したという、一種の誇らしげな匂いにおを身につけていた。おそらく、五郎さんは自分の幸運をよろこんだであろう。揚幕で初舞台の出を待つ役者のように、よろこばしい不安のために胸をおどらせていたことだろうと思うが、——運命はそこで頬笑みを消し、まるで五郎さんに向って舌を出すようなことをやってのけた。

新婚の寢間へはいると、花嫁は自分の夜具のまわりへ、ぐるつと砂まを撒いた。砂は用意して来たものらしい、目のこまかい麻の袋にはいつてい、花嫁のゆい子はその袋の口をすばめて、枕まくらも許とから左廻ひだりまわりに、ぐるりつと、砂のバリケードを作ったの

であつた。五郎さんは腑^ふにおちない顔で見えていたが、すっかり砂の線が出来あがり、その線に囲まれた夜具の中へ、わが新婚の花嫁が寝てしまつてからも、やはり腑におちないことに変りはなかつた。

「それはなんですか」と五郎さんは訊^きいてみた、「なにかの呪^{まじな}い禁ですか」

「呪禁なんかではありません」と花嫁は答えた、「お母さまの喪があけるまでは、こうして寝るようにと云われて来たんです」

五郎さんはちよつと考えてから、穏やかに訊いた、「いつ亡くなられたのですか」

「誰が」と花嫁のほうで訊き返した。

「お母さんですよ、あなたがいまお母さんの喪があけるまでって」「ううん」と花嫁は東京の女学校を卒業した匂いのする発音で五郎さんの言葉を遮り、^{さえぎ}きまじめに五郎さんをみつめながら云った、
「あたしの母はお式にもいたし披露宴にもいたし、あたしたちといっしょにここまで来たじやありませんか」

「ああそうか」と五郎さんは云った。

「あたしの母はあのとおり丈夫ですよ」

「失礼しました」と五郎さんは云った、「ではあなたの云うのはぼくの母のことですね」

「おやすみなさい」と花嫁が云った。

「おやすみ」と五郎さんが云った、「どうも有^{ありがと}難う」

自分の亡き母のことを思ってくれたので、いちおう感謝の気持ちをあらわしたのだが、喪に服するなどということは、昔ばなしのほかには聞いたこともないし、夜具のまわりに砂のマジノ線を作るということ自体に、一種の鬼気といったふうなものが感じられて、五郎さんとしては多少ならず興ざめであつた。

——本当にそんなことがあるんだろうか。

五郎さんは不審に思った。けれども男女間の機微に触れることなので、父親にはもちろん、親しい友人たちにも訊いてみるわけにはいかない。それでゆい子が里帰りをした日、彼は寺の住職のところへ訪ねていった。大松寺は浦粕町から東北東へ、三キロばかりいった田圃たんぼの中にあり、住職は某宗教大学を出た「インテリ」

だといわれていた。

「そういう話は聞いたことがないな」と住職は笑いをうかべながら答えた、「ぼく寡聞^{かぶん}にして知らずといったところかな、しかしまあ、いいじゃないか」

「寢床のまわりへ砂を撒くことですが、そんな習慣もあるんでしょうか」

「知らないねえ、ぞつとするねえ」と住職は答えた、「そんなふうに寢床のまわりへ、ぐるつと砂の線を引くなんていうのは、聞いただけでぞつとするねえ、しかしまあ、いいじゃないか」

五郎さんはいくらかむつとして、なにがいいのかと反問した。

すると住職は、指を折って日を数え、あと二十日ばかりできみの

お母さんの喪はあける、二十日ばかり待つだけだから「まあいいじゃないか」と答えた。

「ああそうですか」五郎さんは納得した、「すると喪は七十五日なんですネ」

「いろいろあるがね、亡くなった人の魂は七十五日その家の軒先をはなれない、ということがあるから、まず一般の例では七十五日だろうね」

五郎さんは礼を云つて家へ歸つた。

正確に数えてみると、喪のあけるまで十九日あつた。そのくらい待てないわけではない、五郎さんは気をまぎらわせるために、精を出して働いた。ゆい子は家事に慣れないようすで、めしの炊^た

きかたもうまくないし、拭き掃除や洗濯なども、時間ばかりかかってとんと片づかなかつた。五郎さんの妹は十二歳になるので、もう男よりもそんなことに眼がつくらしく、父や兄に向つて、しきりにあによめの非難をした。

「うちのことができないんならお店へ出ればいいじゃないの」と妹は云つた、「どうしてお店へ出さないの、兄ちゃん」

「うるさいぞ、よけなことを云うな」と五郎さんは叱つた、
「嫁に来たばかりで、すぐにそうなにもかもうまくやれつか、おまえだつてよそへ嫁にゆけば当座はへまなことをするんだ、みんなそうやって慣れてゆくんだ、へっこんでろあま」

ゆい子は毎晩、夜具のまわりに砂の垣を作つた。だんだん口数

が少なくなり、顔色も冴えず、いつもひどく疲れはてたように、動作がぐったりと重たげにみえ、また、夜も熟睡ができないようであつた。

——自分でも喪が重荷になつてきたんだな。

五郎さんはそう推察し、心の中で、カレンダーがあと三枚になつたことを慥^{たし}かめた。そうして、その三枚めも剥^はがれて、つまり七十六日めの夜になつたとき、ゆい子がやはり夜具のまわりに砂垣を作るのを見て、五郎さんは瞞^{まん}着^{ちやく}されたような気持におそわれた。

——もう昨日で喪はあけたよ。

そう云おうと思つた。口まで出かかったのであるが、五郎さん

はそれをのみこんでしまった。急に「男の意地」といったような、かたくなな気分がこみあげて来、勝手にしやがれ、と肚はらの中でのなつた。そっちがそうするならこつちもこつちだ、知るもんか、と彼は肚の中で続けてどなつた。

七十七日めの夜も同じ、次の夜も同じというぐあい、砂垣は夜ごとに作られ、五郎さんはビールを飲み始めた。「みその」から四軒おいて「四丁目」という洋食屋がある、店先に掛ける暖簾のれんには、ただ御洋食としか書いてないが、土地の者は「四丁目」と呼んでい、蒸気河岸がしの「根戸川亭てい」とは格の違う、本式の洋食を食わせるといわれていた。主人はいかにもコックらしく、白い上っ張りに前掛、頭にも白い茸きのこ形がたのコック帽をかぶっているし、

二人の若い女給もきちんとエプロンをはおっているというふうで、客が酔つて騒いだりすると、主人のコックが出て来てつまみだすといわれ、そのためかどうか、若い衆といわれる人たちは殆んどよりつかなかった。五郎さんはその「四丁目」へ飲みにゆき、それから毎晩、店を閉めるとすぐ飲みに行った。

こういう状態が長く続くものではない。喪があけてから六十幾日めかに、ゆい子は篠咲の実家へ帰った。ちよつといつて来ると云つてでかけたが、そのまま戻らず、三日ほどまをもどおいて仲人なこうどが来た。家風に合わないから離婚したいというので、五郎さんも五郎さんの父親もあつけにとられた。誰がそう云うのかと訊いたら、嫁のゆい子がそう云つてきかないのだ、と仲人が答えた。

「そんなあべこべな話は請合えねえだな」と五郎さんの父親は云った、「家風に合わないとはこっちの云うことだが、嫁のほうから家風に合わないなんぞと云われては筋が立たねえべ、そんな話はまっぴらごめん蒙るだよ」

仲人は尤もだもつと合点して帰り、それから数回、両家のあいだを往復したのち、五郎さんのほうで「家風に合わないから離縁した」という名目を立て、正式に離婚がきまると、ゆい子の荷物もきれいに篠咲へ戻された。

町の人たち、ことに五郎さんの友人たちは、この離婚に不審を持った。友人たちはこの結婚に嫉妬しつとと羨望せんぼうを感じ、五郎さんとのつきあいも疎遠そえんになっていた。云うまでもなく、花嫁が縹緞よ

しで、東京の女学校出身者であることが、かれらの庶民的な生活感情を刺戟しげきしたのであつて、それが半年と経たたないうちに離婚したとなると、かつての羨望や嫉妬が、こんどは激しい疑惑と詮せん索さく欲よくとに變つた。

「いったいどうしたつていうだ」と友人たちは五郎さんに訊いた、「女学校を出たし、あんなきれいな嫁さんだったによ、なにがあらつただかい」

五郎さんは答えに困つた、「これつてことはなかつただ、あの人もまたこれから嫁にゆくだろうしな、本当にこれつていうほどのことはなかつただよ」

友人たちは代る代る訊いたし、いろいろと近所の評をさぐつて

みたが、それほど骨を折る暇もなく、第一級の情報をつかむことができた。それは、篠咲へ貝を売りにゆく女が聞いて来たもので、——ゆい子は五郎さんが男でなかったから帰った、ということであつた。百幾十日もいっしょにいて、夫婦らしいことが一度もなかった。男として役に立たないから離縁して帰つたと、ゆい子自身が語つたというのである。

この種のゴシップはどここの土地でも広まりやすいものだが、ことに浦粕ではもっとも歓迎される特報で、たちまち少年少女のあいだにまで伝わってしまった。このこまっちゃくれた少年少女たちは、五郎さんの店の前を通るとき、声をそろえて喚わめいた。

「みそのではのぼり幟もおつ立たない」

この町筋の商店は、店の脇わきにみな幟を立てているが、「みその」は店名を染めたがたん（軒ひよへ陽除けのようにおろす幕で、夕方になると巻きあげ、朝になると紐ひもを解いておろすのだが、そのときがたんと音がするので、子供たちはそう呼んでいた）があるだけで幟は立てなかった。かれらはそれにひっかけて五郎さんをからかい、わつと囃はやしたてるのであった。

五郎さんはなかなか気がつかなかった。父親のほうが先にその噂うわさを聞き、怒って五郎さんを問い詰めた。五郎さんはあまりのことに口がきけなかった。こんなひどいペてんがあるだろうか、彼は怒りのために涙をこぼし、恥ずかしさのために吃どもりながら「砂のバリケード」のことを父に話した。

「おめえにも肝煎きもいるだな」と温厚な父親は云った、「そんな砂ぐれえ、一丈も積んだわけじゃあるめえし、なぜ蹴けつぱらつてへえつていかなかっただ」

「お父つあんは見ないからわからないが」と五郎さんは答えた、「寢床のまわりへぐるつと、砂を撒くところを見てみな、呪禁でもされてるみたいでそりやあ凄すごいもんだから」

父親は想像してみたが、少しも凄すごいような感じはしなかった。

「砂ぐれえがなんだ、砂が恐ろしくつて海へいけつか」と父親は云った、「喪があけても砂を撒いたのは、おめえが蹴けつぱらつてへえつて来るのを待っていたということだ、そのくれえの察しはつくべえじゃねえかええ」

五郎さんは黙った。

事情を聞いた父親は、すぐに嫁を捜し始めた。早くあとを貰つて、篠咲をみかえしてやらなければ、五郎さんばかりでなく「みその」の看板にもかかわる、と思つたからだ。

だが特報は第一級であり、根深く、広範圍に^{ひろ}拡まつていた。

「幟もおつ立たない」ような息子に、嫁を遣^やろうという親はなかつた。このあいだに、五郎さんは五郎さんで友人たちとやりあひ、ごろさんの話が事実なら、男として役立つかどうかためしてみよう、ということになり、かれらは五郎さんを^つ伴れだして、東京のさる華やかな一画へ押しあがつた。もちろん勘定はごろさん持ちで、事の終つたあと、友人たちはその相手の華やかな女性に、首

尾のいかんを問ただい糺ただした。

浦粕へ帰つてから、友人たちは却かえつて否定的な気分になった。

「二時間でよ、おめえ」と一人が云つた、「それも初めてだつていうだに、三度も幟がおつ立つたなんて考かんげえられつか」

「買収しただな」と他の一人が云つた、「女に金かなぐつわ轡わを噛かましただ」

筆者である私が、この会話を現実に聞いたのである。場所は蒸気河岸の浦粕亭で、私は三十六号船の留さんとビールを飲んでい、その若者たち三人は隣りのテーブルで、焼しょうちゆう酎すずを啜りながら話していたのだ。

こんどはこの噂が弘まるな。私はそう思つて、五郎さんのため

に心が痛んだ。

浦粕第一の旦那衆だんなしゅうである高品さんから、私はそれまでの事情

を聞いていた。というのが、ゆい子のあとを早く貰うために、五

郎さんの父親が高品さんの本家を訪ねて、詳しい仔細しさいを語ったか

らである。——予想どおり、「買収した」という評判はすぐさま

町じゅうに伝わり、父親はますます嫁捜しに熱中した。こういう

重複した誹謗ひぼうに取り巻かれて、五郎さんがどんな日々を送ったか

ということとはわからない。けれどもこの世では、真偽の計量が正

しく行われることもある、という稀まれな例をわれわれは見るこ

うができた。

救いの主は五郎さんの姉であつた。父親から手紙を受取つた姉

が、一人の娘を伴れて北海道からはるばるやって来たのである。娘は小柄な軀こがらからだではあるが、健康そうで、縹緞もゆい子より一段とたちまさっていた。実科女学校中退、年もゆい子より二つ若かった。

五郎さんは彼女と結婚した。式も披露宴もまえに劣らず盛大にやった。こんどは消防組長のわに久も招待され、彼は酒宴なかばに酔っぱらって、先般の失態を詫わびたという。五郎さんもこんどは用心ぶかく行動した。式に行われた二日後に、友人たちを自宅に招き、新妻の手料理でかれらをもてなしたが、それだけではなく、一週間ほどのちには、その中の三人を「四丁目」へさそってビールを奢おごり、テキとかチキン・サラダとか奢り、しきりにビー

ルをすすめてから、声をひそめてかれらに囁いた。ささや

「おら初めて見ただよ」と五郎さんは意味ありげな一種の眼くばせを三人にした、「——まるでいま笑んだ柘榴ざくろみてえだっただ」

三人はちよつと考えてから、急に奇声をあげて笑いだし、安なあこという一人は、テーブルを力まかせに叩いて奇声をあげた。たた

五郎さんが結婚してまもなく、篠咲でもゆい子が東京へ嫁にいった。一年経って、五郎さんの新しい妻が女の児こを産んだとき、ゆい子は実家へ帰っていた。それが一時的なものか、またも離婚したのであるかは不明だったし、その後の噂も聞かなかった。

人はなんによつて生くるか

私は石灰工場の川^{かわ}下^{しも}で釣^つりをしていた。

一つ^{いり}のちよつと上^{かみ}で、うしろには百万坪の荒地がひろがつて

おり、早春のやわらかな風が、その荒地をわたつて吹いて来た。

陽^ひはあたたかく、根戸川の水は薄濁りがして、ときどきこまかな
さざ波をたたんでいた。

私はひね鯊^{はぜ}を一尾あげた。すると一人の男が土堤^{どて}の上をやつて

来て、私のすぐ脇^{わき}で釣^つり始めた。私は場所を変えようと思った。

私の釣りはおよそでたらめなもので、子供の使うような安い駄竿^{だざお}に、浮子^{うき}下もよく計らず、もっぱら岸^{きし}際^{ぎわ}の杭^{くい}のあいだや、水草の蔭^{かげ}などを覘^{ねら}つて糸をおろす。それで結構その日のおかずぐらいは釣れるのだが、脇にその道のベテランらしい人が来るとたいそう困る。というのは、そういう人は高価な継ぎ竿を幾本も持つてゐるし、魚籠^{びく}、餌箱^{えばこ}、帽子から服から靴^{くつ}まで、すべてその道の装具をきちんと揃^{そろ}えている。にもかかわらず、駄竿で浮子下も計らないような私のほうが釣れて、そのベテランふうの人にさっぱり魚がかからないとなると、その人に対してというより、自分自身で一種の良心の咎^{とが}めを感じるのである。

そういう例は稀^{まれ}ではなかったので、脇に人が来ると場所を変え

るのが、私の習慣になっていた。ところがそのときはそうはいかなかった。私が竿をあげようとするまえに、脇で釣りだした人が私に呼びかけた。

「人はなんによって生くるか」

私はそちらへ振り向いた。

「人は」とその男はまた云った、^い「なんによって生くるか」

その男は五十年配で、綿入の布子に綿入の半纏^{はんでん}を重ね、垢^{あか}じみた毛糸の衿^{えり}巻^{まき}を頭から頸^{くび}へぐるぐる巻きつけていた。顔はよくわからないが、固太りの頬^ほに胡麻塩^{ごましお}の髭^{ひげ}が伸び、厚い大きな唇^{くちびる}や、ぎよろつとした眼^めつきに、どこことなく土建会社の現場監督といったような、威厳が感じられた。

「なんですか」と私は反問した。

私はなにか釣りに関することで話しかけられたのだと思った。

場合が場合だから、そんな深遠な人生問題、むしろ哲学的な命題について一いっさつ撝ひをくらおうとは、夢にも思わなかったのである。

その男は現場監督が怠けている労働者を見るような眼で私のことを見、そうして、こんどは一と言ずつ句切つて、同じことをはつきりと云った。——このあとを書くとは人は信じなくなるだろうが、事実を云うと、男は右手の拳こぶしを私のほうへぐいと突き出したのである。私は危険を感じて身を反らし、男は突き出した拳を上下に揺すつた。これを見ろ、といったような手つきなので、その拳を注意して見ると、握つた中指と人さし指とのあいだから、拇お

やゆび
指の頭が覗のぞいているのであった。——これが真相なのだが、よしそうでなくとも、私がどんなにへどもどし、かつぶきみに思つたかは想像がつくだろう。これは冗談なのか、それともこの男の頭がおかしいのか、私には見当もつかなかった。

どうしようがあるか、男は拳を突き出したまま、ぎよろつとした眼だまで私を睨にらんでいる。ふざけているのでないことは慥たしからしい、どうしようがありますか。私はしごくあいまいに微笑してから「やあ」というような不得要領な声をもらし、それから大きく頷うなずいてみせた。

それで納得したのか、または話にならないと思つたのか、男は無表情のまま拳をおろし、黙って自分の釣り作業もどに戻つた。

或る夜、私は蒸氣河岸がしの高品さんの炉端で、その男のことを話した。高品さんの本家は十台島という小字こあざにある深い樹立こたちに囲まれた、一町四方もあるような邸宅で、なんでも先祖は浦粕町うらかすの開拓者だそうであるが、——高品家の長男であり、私の知人である榎三氏まぎぞうは、夫人のきんさんと二人で蒸氣河岸に住み、東湾汽船の発着所を経営していた。これは船舳せんたいを白く塗ったほうの通船で、高品家は主要な出資者であつた。——榎三氏はW大学出身で、東京日本橋の中・商という商業新聞社へ通勤してい、発着所の方はきん夫人と、女中のおりきさんでやっているのだが、夜になると通船の船員や、若い漁師たちがよく集まつて来た。

その家は小さかったが、広い切炉にはいつも火があり、きん夫

人は浅草生れの浅草育ちで、気性はさっぱりしているし、人に差別をつけず、世話好きで物惜しみをしない。榎三氏もおつとりとした大人たいじんの風格があり、子供がないためだろうか、人の集まるのをよろこび、しばしば酒を出してもてなした。私が榎三氏の好意で、中・商紙に童話を書き、稿料を貰もらっていたことはまえに記したとおりである。

その夜、私の話を聞くと、炉端にいた船員たちの中で、秋葉エンジンが顔をあげた。

「兵曹長へいそうちようだな」と秋葉エンジナーは云った、「病院からまた帰っただな」

私が訊きくと榎三氏が答えた。

「氣違いではないらしいが、頭がおかしいんですよ、細君と四人の子供に死なれましてね、それから頭がおかしくなつたんでしよう、町役場の兵事係へ日参して、恩給と年金をくれと云いだしたんですよ」

私はまた質問した。

「海軍なんかいきやあしねえだ」と大伍船長が云つた、「陸軍で輸卒をしたつけどが、あとは土方をやつたり缶詰かんづめ工場に雇われたり、海苔のりのひび運びをしたりしていただ、それが何年めえになるのかな」

「七年めえだ」と秋葉エンジニアが云つた、「幸山船長が船を貰つてやめた年だつたべえ、暴風雨で高汐たかしおが来て、大蝶丸だいちょうまるが

大三角へ乗りあげたあとのことさ」

そのとき「兵曹長」は出稼でかせぎにいつていた。本当の名はささやん、左三郎とでも書くのだろうか、出稼ぎがどこへなにしにいったものか、いまではもう思いだすことができない。その留守ちゅうに、妻と四人の子が急死した。たしか赤痢だと聞いたように覚えてるが、ささやんには連絡がつかず、出稼ぎから帰るのを待つよりしかたがなかった。

「彼はたいへんな子煩悩こぼんのうでしてね」と高品さんが云った、「帰つて来てそれを聞くと、いっぺんに気がぬけたようになって、半月ばかりぼんやりしていました」

それから町役場へでかけていつて、兵事係にこう云った。

——自分は海軍兵曹長で、年金と恩給が来ることになっているが、まだその通達は来ておらんか。

兵事係は冗談を云っているのだと思つて、まだ来ていないと答えた。するとささやんは小首をかしげ、それではまた来よう、と云つて役場を出ていった。彼には根小屋という小字に叔母がいて、彼の面倒をみてやっているのだが、毎月五日になると、年金と恩給を貰つて来ると叔母に云つて、町役場へでかけるのであつた。

叔母という人が町役場を訪ねて、こういうわけだからと話し、兵事係も心得て、ささやんがあらわれると、まだ通達は来ないと答えることにした。ささやんはそのたびに、いかにも納得しかねるという顔つきで、仔細しさいらしく小首をかしげたりするが、べつに文

句をつけるとか乱暴するようなことはなく、ではまた来よう、と云つて帰るのが常であつた。ただ一度だけ、彼は海軍軍部の怠慢を非難し、妻子を五人も戦死させておいて、年金や恩給の支払いをきちんとしなひのは褒めたことではない、こんなありさまでは「また三・一五事件が起こるぞ」と警告したそうであつた。

「人はなんによつて生くるか、つて云い始めたのはそれからあのことですよ」と高品さんは云つた、「ぼくもいちどやられました、道を歩いていたらいきなり立塞たちふさがつて、あの拳骨げんこつを突き出してみせながら云うんです、頭がおかしいとは知つてましたがね、驚きましたよ」

私は話を聞きながらも、またそのあと、自分の家へ帰ってから

も、ささやんの悲しみの深さに心が痛んだ。

「人はなんによつて生くるか」

私は^{つぶや}呟いてみた。それはまなんで覚えた言葉ではない、文法もでたらめである。けれどもそれは、妻と四人の子を一度に失つた男の言葉なのだ。

ささやんは三度病院へ入れられた。昂^{こうふん}奮して人に乱暴したためであるが、病院にいと温和^{おとな}しいし、常人と少しも変らないため、二三カ月いると退院させられるのだという。町にいても、かかったり悪口を云つたりしない限り、乱暴はしないということであつた。

彼がどうして急に「兵曹長だ」などと思ひこんだか、誰^{だれ}にもわ

からない。ほかにもう一人、「赤馬」と呼ばれる頭のおかしい男がいて、これは本当に退役した兵曹長であるが、その男はささやんがおかしくなったあとでこの浦粕へ帰って来たのであるし、それ以前にも二人は知合いではなかった。だが、そんな因果関係の有無にかかわりなく、頭のおかしい兵曹長が二人もいるということは、町の人たちにとってひどく暗示的にみえたようだ。

私はささやんとは一度しか会わなかった。彼の悲しみの深さを思うと、いまでも私は心に痛みを感じるが、あの妙な握りかたの拳を出してみせた意味は、どうしても理解がつかないのである。

繁^{しげ}あね

私は青べかを二つ^{いり}へ漕ぎ入れ、細い水路を二百メートルほど
いった、川柳の茂みのところに繋^{つな}いで、釣竿^{つりざお}をおろした。三月
はじめの曇った日で、風はなく、浅い水路の水は淀^{よど}んだように澄
んでおり、実際には流れているのだが、殆^{ほと}んど静止したままのよ
うに見えた。

私は竿をおろしてから、青べかの中にゆっくり坐^{すわ}り直し、タバ
コを出して火をつけた。

そこは百万坪のほぼ中央に当っていた。北のほうに遠く、町の家並みが平らに密集してい、貝の缶詰工場や石灰工場から吐き出される煙が、雲に掩おおわれた空へと、ゆるやかに、まっすぐ立ち昇っていた、（私のノートには「煙は上へゆくほど薄くなる棒のように」というつまらない形容が使つてある）町の東北のはずれから東にかけて、荒地の中に一筋の道があり、ひねくれた枝ぶりの、小さな松並木が沖の弁べん天社てんやしろまで続いている。この土地では松が育たないそうで、それは「堀の三本松が一本だけにされた報い」だともいわれているが、慥たしかに、芳爺よしじいさんの家に近い、堀端にある老松のほかには松らしい松は一本もみあたらなかった。

——そのひねこびた松並木を挟はさんで、枯れた芦あしの茂みがところど

ころに見える、それらはみな沼か湿地で、川^{かわ}獺^{うそ}や鼬^{いたち}が棲^すんでいるといわれ、私も川獺は幾たびか見かけたし、それを捕獲して毛皮屋へ売って儲^{もう}けようと計ったこともあるが、それはここでは省略する。——私はタバコをふかしながら、その芦の茂みから鵲^{ぼん}の飛び立つのを認めた。鵲という鳥は、私の家でもよく見ることができた。机に向っていると、窓のすぐ向うを飛んでゆくのである、黒地に星点のある羽根や、赤い足などですぐ、それとわかる。野鳥の中でこれほど美味な肉はない、ということを知っていたので、川獺の場合とは別個の欲望から、その鳥もなんとか捕獲しようところろみたが、ついに一度も成功しなかったので、一種の怨^{うら}みからだろうか、かなり遠くからでも、鵲だけはみわけがつくように

なつた。

「蒸氣河岸^{がし}の先生よ」と云^いう声がした、「釣れつかえ」

私はおどろいて振り返つた。見わたす限り人影もなかったのに、突然そう呼びかけられたので、振り返る拍子にタバコを落し、それがあぐらをかいている膝^{ひざ}のあいだに落ちたので、取つて捨てるまでに、腿^{もも}と脛^{すね}を慌^{あわ}てて叩^{たた}いたりこすつたりしなければならなかつた。——そこにいるのは繁あねであつた。年は十二か三、たぶん十三歳だつたと思うが、私が振り返ると、岸の上からにと笑いかけて、もういちど同じ質問をした。

私はそれには答えないで、こつちから問いかけた。

「ええびだよ」と繁あねは答えた、「ただええびに來ただよ」

私はまた訊^きいた。

「おんだらいつも一人だつてこと知つてんべがね」

「妹はどうしたんだ」

「あまか」と少女は鼻に皺^{しわ}をよせた、「墓^{しわ}ん場に寝かしてあんよ」

「鼯^しにかじられるぞ」

「つまんねえ」

お繁は肩をすくめ、それからそこへしやがんだ。すると垢^{あか}じみた継ぎだらけの裾^{すそ}が割れて、白い内^{うち}股^{また}が臀^{しり}のほうまであらわに見え、私はうろたえて眼^めをそらした。私は信じがたいほど美しいものを見たのだ。

繁あねは町じゆうでもつとも汚ない少女だといわれていた。乞^こ

食^{じき}あま。親なしで家なし。墓場に供えられる飯や団子を食う餓鬼、それがお繁であつた。軀^{からだ}はできものだらけで、胸のところは腫^{はれも}物の膿^{うみ}のため、着物がはりついて取れなくなっている。いつもどこかの海苔^{のり}漉^すき小屋か、納屋^{なや}か、ひび置き場に寝る。風呂^{ふろ}へはいることはないし、顔も洗わない。蝨^{しらみ}だらけ蚤^{のみ}だらけである。もちろん親類もなく遊ぶ者もない、というのがお繁であつた。

それは決して誇張ではなかつた。私もかなりまえからお繁を知っていたし、道で会えばたいてい呼びかけたものである。彼女はいつも垢だらけで、近くへ寄るとひどく臭かつた。それにもかかわらず、彼女の軀の一部は信じられないほど美しかったのだ。両の内股は少女期をぬけようとするふくらみをみせていた。両股の

なめらかな肌^{はだ}が合つて、臀部^{でんぶ}へと続く小さな谷間は、極めて新鮮に色づいていたし、膝がしらから踵^{くびす}へとながれる脛の内側も、そんなに白くまるみをもっていた。それは、成長しつつあるものだけがもつ神聖な美しさ、と云うべきもので、たとえどのような感じは与えなかつたであろう。ほんの一瞬間ではあつたが、私はその美しさに深く感動した。

そのまえの年、お繁は妹と二人で両親に捨てられた。妹は生れてから百日くらいしか経^たつていなかった。

お繁の父は源太といい、釣舟の船頭であつた。源太は鱸^{すずき}釣りの名人で、どんな漁師も鱸釣りでは彼にかなわなかつた。或^ある年の

こと某県の知事が来て、源太の舟で鱸釣りをした。知事はもと某省の大臣であり、魚釣りとは俳句がうまいので知られていたが、一度で源太が好きになり、機械船——発動機を備えた釣舟——を買って与えた。源太がいかに鱸釣りの名人だったかということを、適切にあらわす言葉があつた。

「さあて」と彼は釣りにでかけるときに云う、「鱸を拾いにいくべえか」

機械船を持てば自分でしょうばいができる。それまで彼は「松島」という船宿に属していたが、初めて独立し、客もかなり付いた。裏長屋に住んでいるので、まだ船宿の経営はできなかったが、どうやら二年も経てばその望みが実現しそうに思われた。そのと

き、災難が起こった。——或る朝、彼は五番の湊木みおぎの沖で釣っていた。霧の深い日で、十メートル先も見えないくらいだったが、その中を一艘そうの大型機械船がやって来た。それは濃い霧の中を、まっすぐにこちらへ近づいて来る、エキゾスの音が明らかにそれを示していた。

「おーい」と源太は叫んだ、「ここに舟があるぞ、たのむよう」
エキゾスの音で、大蝶丸だいちょうまるだとわかった。大蝶丸なら安心であった。この辺が釣りの穴場で、いつも釣舟がいるということ、大蝶丸の者なら知っている筈はずだったから。源太はじつと船の交かわるのを待った。けれども先方はまっすぐに近よつて来、突然、霧を押しわけるようにして、源太の眼の前にあらわれ、その大きな

舳先^{へやき}を源太の機械船の横腹へ突っかけた。

「おい」と源太は叫んだ、「待ってくれ」

だが彼の機械船は二つに割れ、彼は海の上へはねとばされた。そして、源太がようやく浮きあがってみると、割れた船の舳先のほうだけ、ゆらゆらと波の上にゆれていた。発動機のある艫^{とも}のほうは沈んでしまったのだろう、大蝶丸も霧の中に隠れ、エキゾスの音もはるかに遠ざかっていた。

源太は船宿「千本」の忠なあこに見えられ、その舟に助けられて帰った。

「あの穴場は深^{ふけ}えからな」と忠なあこは話を聞いて云った、「とても機械を揚げるこたあ無理だな」

そして大蝶丸のことには触れなかった。大蝶丸は町でいちばん大きな缶詰工場の持ち船であり、「大蝶」の旦那だんなは町で指折りの顔役であつた。

「よし」と源太は自分に誓つた、「うんとふんだくつてくれるぞ」彼はすぐ掛合かけあひいにいった。しかし「大蝶」では相手にしなかつた。大蝶の扶原ふはら支配人は穏やかに首を振つて、そんなことはないと云つた。

「大蝶丸は缶詰を東京まで積んでいって、三時間ばかりめえ帰けえつて来ただ」と扶原支配人はゆつくりと云つた、「あの船長は腕っこきで、そんな事故を起こしたことは一度もねえし、起こしたとすればちゃんと報告するだよ、海事裁判法(?)でそう規定され

てるだからな、いしの云うようなことはありっこねえよ」

いしとは汝^{なんじ}とかおまえとかいうほどの意味であるが、源太は怒

って巡査駐在所へゆき、次に市の本署から、県の警察本部まで訴えにいった。しかしどこでも彼のために動いてはくれなかった。

「証拠があるのか」とかれらは云った、「大蝶丸だというはつきりした証拠があるなら取り調べてやるが、証拠のないものはだめだ」

源太は船を調べればわかると云った。大蝶丸の舳先には衝突したときの傷がある筈だからと彼は主張した。

「機械船の舳先なんてものは」とかれらは一樣に云うのであつた、「どこかへぶつつけてたいてい傷のあるものだ、それでもおまえ

の船へぶつつけたという証拠の傷があるなら取り調べてやろう」

こういう経過を辿たどつて、本署から浦うらかす粕町へ連絡があり、駐在

所の巡査がいちおう大蝶丸を調べた。その船はもう古いので、舳

先の水切には無数の傷があつたけれども、これが源太の船と衝突

した跡だ、などと立証できる箇所かしよはなかつた。船長もいちおう訊し

問もんされたが、あたまから否定した。

「おらあ五番の澤木なんぞに近よつたこたあねえ」と船長は答え

た、「あのときは東京へ缶詰を送り出した歸りで、まっすぐ根戸

川の川口へはいっただ、船の者に訊けばわかるだよ」

それからまたこうも云つたそうである、「源太が諄くどくそんなこ

とを云うんなら、出るところへ出てしろくろをつけべえ」

源太は頭を垂れた。

彼は出るところへ出たのだ。県の警察本部までゆき、金も地位もない者がどんな扱いを受けるかということ、自分ではつきりと経験した。そうして「大蝶」という顔役を背景にした船長が、出るところへ出るとすれば、その結果もまたわかりきったものであつた。

源太の酒浸りが始まつた。彼は堀東の助二郎の漁船へ乗ることになつたが、漁から戻るとその足で酒屋へはいつた。堀の山城屋という店で、塩か福神漬ふくじんづけを摘みながら濁酒どぶろくとか焼酎しょうちゆうなどを飲み、ぐでぐでに酔つてから家へ帰るのであつた。――裏長屋の柱も傾きかかった家には、妻と娘が二人いた。上がお繁であり、

下はまだ生れたばかりであつた。歸つて來た源太はむやみに喚き
ちらし、少しでもさからうと猛りたつて、妻と娘を死ぬようなめ
にあわせた。

「うぬらもかたきだ」と彼はどなる、「寄つてたかつておらを踏
みつけにしやあがる、さあ、くやしかったらおんだらの機械船を
返してみろ」

「なんでも持つてけ」と彼はまたどなる、「こんな貧乏人の物が
欲しけりやあなんでも呉れてやる、さあ、手でも足でも頭でも持
つてけつかれ、なんでも呉れてやるぞ」

家へ歸れないときは、というのはあまり泥酔したということ
であるが、源太は消防ポンプ小屋へもぐり込んで寝た。一日じゆ

う、主人の帰りを待っていた家族は、夜が更^ふけてからこつそり家を出てゆく、そうしてごつたくやと呼ばれる小料理屋や、「四丁目」または蒸気河岸の「根戸川亭^{てい}」という洋食店の裏口をまわつて残り物を貰^{もら}い、僅^{わず}かにその日を凌^{しの}いでいた。

こうしているうちに、源太の妻が若い男と出奔した。相手は缶詰工場の若い雑役夫で、源太の妻より六つも年下だったというが、これは町の人たちのいい話題になった。源太の妻は年でいうと三十ちよつと出たくらいだから、二十五六の男とできたというだけなら、浦粕町としては決して稀有^{けう}な出来事ではないが、源太の妻というのは枯木のように瘦^やせてい、女には珍^はしく頭が禿^はげて、口は消防組長のわに久のように大きく、眼のふちは赤く爛^{ただ}れて、齒

も半分は欠けたり抜けたりしていた。

——あんなおつかあのだこがよかつたのか。

女にすたりはないと云うが、それにしてもよくあんな女と駆落をする氣になったものだ、よつぽどの世間知らずだつたんだな。こう云つて、町の人たちは飽きることなく笑いあつた。

源太は氣がぬけたようになった。漁にも出ず、酒を飲むでもなかつた。部屋の隅にすみころがされて、泣き叫ぶ赤児の声も耳にはいらないのか、一日じゅう寝そべつたまま、てんじよう天床か壁をぼんやりと眺めながていた。

或る日、源太は山城屋へ飲みに来た。彼は助二郎の帳面のつけで焼酎あおを呷り、いくらでも呷つた。「逃げてみろ」と酔つた源太

は蒼い顔で笑いながら云った、「逃げられるものなら逃げてみるへ、いまに二人とも捉めえて、二人とも火祭りにしてくれるぞ」

そして、源太も出奔した。

お繁と乳呑み児の妹とは、こうして親たちに捨てられたのであった。

町では姉妹を引取ろうと云う者はなかった。お繁はその生立ちのため、人に対して好戦的であり、親から受けた病気で腫物が絶えず、それが汗と垢の匂いと入り混って、側へも寄れないほど臭かった。

町役場で二人の面倒をみることになったが、現実的にはなにもしなかった、あるいはできなかった、と云うのが正しいようであ

る。お繁は役場へ近よらず、ごったくやとか洋食屋の裏をまわったり、墓場の供え物をあさったりして喰^たべ、夜になると、海苔漉き小屋であれ、消防のポンプ小屋であれ、どこかの納屋であれ、好きな場所で寝た。乳呑み児の妹をどうやしなったかは誰^{だれ}も知らないが、赤児は丈夫そうに育っていた。——お繁はどこにいるかわからない。まだ暗いうち、ときには午前三時ころ、流れ海苔を拾いに南の浜へいそいでいる漁師が、百万坪の荒地のまん中で、妹を背負ったお繁に会う。

「ええっ」と漁師はとびあがる、「たまげたええ、繁あねじやねえか、いまじぶんこんなところでなにしてるだ」

漁師の持っている提^{ちようちん}灯の光の中で、お繁はじろつと白い眼

を向ける。

「いけ、ま」と少女は云う、「おんだらのことより、早くいつて海苔を拾うがいいだよ」

或る日、お繁は消防のポンプ小屋の脇わきで、垢だらけの妹に小用をさせている。また町の家並みの裏をひっそりと歩いているし、或る夜は若い漁師が、ひび置き場の蔭かげでお繁を見つけ、慌あわてて、伴つれの娘とほかの場所を捜しにゆく。繁あねはどこにもいないし、同時に、どこにでもいるのであった。

「わあい」と子供たちが囃はやしたてる、「お繁がまた墓ん場の物を喰べてるだ、げーんが、げーんが」

げんがとは東京付近というえんが、またはえんがちよ、つまり

けがれたというほどの意味であるが、するとお繁は妹を墓場に置いたまま、子供たちのほうへとびだして来る。

「ぬかすな、吉」とお繁はやり返す、「墓場の物を食うぐれえがなんだ、おめえのおつかあなんかもつとげんがだぞ、中堀の巳之なあことくつついて、夜中になると海苔漉き小屋へいつて寝るだ、おんだら見てちゃんと知ってるだ、嘘うそだと思ったら、田島の漉き小屋へ夜中にいつてみろ、二人でいっしよに寝て、尻尾しっぽを踏んづけられた犬みてえな声だしてるだから、げんがたおめえらのことを云うだ」

そして、さも軽侮に耐えない、といったふうに唾つばを吐くのだ。もしそれ以上なにかからかえば、お繁は手と爪つめと歯とで向ってゆ

き、じつに思いきった行動で相手をやつつける。頬^{ほっ}ぺたや腕などに、お繁の歯形や爪跡のある子供は、二人や三人ではないようであつた。

これが繁あねなのだ。しかもその軀はいま、内部から新しい彼女を創^{つく}り出しつつある。私の眼に映つた美しい部分には、成長するいのちというものが脈^{みやくう}搏^くつているように感じられた。——そうだ、まだ子供っぽい腰つきにもどこやらまるみがあらわれ、平たい胸にもいくらかふくらみがうかがわれる。野性まるだしの好戦的な眼はうるみを帯び、薄^{くちびる}い唇^いは活^いき活^いきと赤く湿りをもってきた。——或るときは妹を背負^{すわ}つていさましく歩きまわっているが、或るときはぐったりと草地に坐^{すわ}り、脇で泣いている妹の声も

聞えないように、手足を投げだしたままもの憂げにどこかをみつめてゐる。いま、極めて深いところから、かすかに、いのちの囁きささやが彼女の眠りを呼びさまそうとしているのだ。

「ああつまんね」と繁あねが云いった、「いくら見てえても釣れやしねえに、おらいくべ」

私はまたタバコに火をつけた。

「へたくそだな、先生は」とお繁は立ちあがりながら云った、「こんなへたくそな釣り、おんだらまだ見たこともねえ」

私は黙って沼のほうを眺めた。お繁の歩き去るのが聞え、まもなく、彼女のうたうわらべ唄うたが聞えてきた。

「——向う山で鳴く鳥は、ちいちい鳥かみい鳥か、源三郎のみや

げ、
なにようかによう貰って、
金ざしかんざし釵かんざしもらって……」

土堤^{どて}の春

初^{はつ}午^{うま}の宵^{よい}の七時ころ、「蒸^が氣^き河^が岸^しの先生」は窓^{まど}際^{ぎわ}の机に向
 って原稿を書いていた。田^{たん}圃^ぼを隔^へてた町のほうから、太鼓や笛の
 音が、高くなり低くなり、跡^と切^ぎれたかと思うと急に拍子を早めた
 りして、聞えて来た。先生はにやにやしながら独り言を呟^{つぶ}く、書
 いている史劇の中のせりふが氣にいったらしい。

安倍晴明（胸を反らせて）「私は博士安倍晴明だ」

弘高（片手をあげて）「神慮^{なんじ}汝の上に安かれ」（大^{おお}股^{また}に去る）

声に出して読んでみてから、火鉢ひばちにかけてある鍋なべのほうを見た。
 鍋の中では鮎ふなの味噌煮みそにがことこと音を立ててい、味噌と川魚との
 入り混ったうまそうな匂においが、蓋ふたの隙間すきまから漂いながれていた。
 蒸気河岸のほうから、土堤の上をこちらへ近づいて来る、賑にぎや
 かな人声が聞えた。先生はまたペンを取った。人声はもつと近づ
 いて来、それが子供たちだとわかったとき、かれらはうたいだし
 た。

「おーかんけ（大勧化）おーかんけ おいなりさんのおーかんけ」
 かれらは先生の家を見おろすところまで来て、土堤の上からう
 たい続ける。

「おぞーに（雑煮）とおーあげ おあげのだからおっこつて

あーかい***ーすりむいた　こーやくだい（膏藥代）にくれせーま　くれせーま」

先生は机の前で軀からだを固くしている。土堤の上では子供たちの相談する声が聞える。

「いんだよいんだよ」と云いう声がする、「見せえま、電氣がついてんべえがね」

かれらはまたなにか相談をし、声をそろえて、まえよりも勇ましく誘惑的にうたいます。もちろん文句は同じもので、先生は殆ほとんど息をころしている。するとかれらの中から、船宿「千本」の長ちようの呼びかける声がする。

「先生、百でも二百でもいいだよ」

先生は可笑しくなつて、というのは、そのとき先生のふところは極めてさみしく、そういう喜捨に応ずることができなかつたからで、つまりそれが可笑しかったのであるが、先生は辛抱よく沈黙を守つていた。すると「千本」の長が譲歩してどなつた、

「先生、錢でなくつてもいいだよ、蜜柑みかんでも餅もちでもいいだよ」

そしてしんとなつた。電燈でんとうの光で明るい窓をみつめながら、じつと反応を待つてゐる子供たちの、一人ひとりの顔が、先生には眼めに見えるように思えた。

「いくべいくべ」と他の少年が云つた、「先生はきつとまた根戸川亭ていで飲んでるだ」

「押すな」と長の声がした、「押すなつてえにえーばちばらすぞ」

かれらはがやがや騒ぎながら、蒸気河岸のほうへ戻^{もど}つていった。先生は難をのがれてほつとし、机に両^{りょうひじ}肱^{もた}で凭^{もた}れ、手で額を支えながら眼をつむった。

「おーかんけ おーかんけ」川下のほうへ遠のいていく唄^{うた}声^{こえ}が聞えて来た、「おいなりさんのおーかんけ おぞーにとおーあげ おあげのだんからおっこつて……」

土堤どての夏

私は大きな写生帳と鉛筆箱を抱え、きようぎ経木の海岸帽子をかぶつて、土堤の上を家のほうへと歩いていた。沖の百万坪へスケッチにいった帰りで、洗い晒さらしの単衣ひとえは汗のため肌はだへねばりつき、尻しりっぽしよ端折りをしなければやすらかには歩けなかった。あまり優雅な臀でんぶではないが、女性の臀部と猫ねこの鼻も土用の三日だけはあたたかい（失礼）、という通言があるそうで、その日はおそらくその「三日」のうちの一日だったろうと思う。私はうだりきつて疲れ

て空腹で、そうして傾いた西陽にしびに灼やかれながら歩いていた。

土堤の右側の下には、例の「ごったくや」といわれる小料理屋が並んでいて、そこを出外れると空地になり、いぶせき独立家屋であるわが家が見える。そこまで来たとき、私に呼びかける女の声がが聞えた。

「蒸気河岸がしの先生よう」とその声は云いった、「なにようそんなにすましてるだえ」

私は声のほうへ振り向いた。

声は土堤の左側の下、つまり根戸川のほうから聞えて来たもので、そちらを見ると、川の中に三人の女がいて私に笑いかけた。それはごったくやの女たちで、三人とも全然まるはだかであった。

私の眼の焦点は自動的に拡大し、対象物とのあいだに一種の保護膜を張ったのであるが、それでもなお彼女たちの逞たくましい肉躰にくたい、特に第二次性徴と呼ばれる部分のよく発達した、魅惑的な、というよりもむしろ流とくしん神しん的なまるみやふくらみが、私の視覚をとらえて放さなかった。

——ここで眼はそらしてはいけない。

私はそのことをよく知っていた。眼をそらすことは、みつめること以上にすけべえなのだ。かつてよそから来た客が通りかかって同じようなけしきを見、仰天して脇わきへ向いたとき、彼女たちが歓声をあげて嘲ちやうろう弄ろうするのを、見たことがあった。

彼女たちは不景気が続くと、「湯銭もなくなる」そうで、厳冬

でない限りは川へはいつて軀からだを洗い、また髪までも洗う。土堤の上は人が往来し、川にも通船やべか舟がのぼり下りしている。しかし彼女たちは少しもたじろがないばかりか、逆に軀の屈伸や捻ね転ん動作を誇張し、まばゆいばかりに野性の誘いを放散してみせる。人たちも土地の者である限りは、決して驚いたり顔を赤くしたりするようなことはない。若い漁師や通船の水夫たちは、ごくあたりまえに立停たちどまつて、彼女たちと率直に会話をとり交わすのであつた。

—— おうれ、てんで縹きりよう緞あげたじゃねえか、お花。

—— いいくらかげんのことを云つて、むりすんなえ**なあこ。

—— 嘘うそじゃあねえまったく縹緞あげただぞ。

——顔ばっか見るふりいして、ほんととはここが見てえだべ、ここがよ。

そして彼女たちは、腰部^{ようぶ}前面の或^ある部分をひたひたと手で叩^{たた}く、という場面は極めて尋常に見ることができた。これについていつか、三十六号船の船長のブルさんは、殆^{ほと}んど失明しかかっている眼^{しさい}を仔細^{しさい}ありげにまたたきながら、次のように穿^{うが}つた注を加えたことがあつた。

——あれは湯銭がねえだけじゃあねえ、半分は客を呼ぶためもあるだよ。

そのときブルさんの殆^{ほと}んど見えない眼が、遠くにあるなにかをさぐるように細められ、肥えて肉のたるんだ皺^{しわ}だらけの顔に、あ

るいはその顔の一と皮下に、あるかなきかの微笑がゆらぐようにみえた。

川の中から私に呼びかけたのは「若松」という小料理屋の女たちであつた。いちばん若いおたつは満州帰りだといい、私が堀でスケッチをしているときに話しかけてから、顔を見れば挨拶をするようになっていた。

「また画え描きか」とおたつが云つた、「そんなものどこがいいだえ、そんなことばっかししてえて頭が病めんべえがね」

「どこが病めつかさ」と脇の女が腹部へ水を掛けながら云つた、「そんなすました顔うして、ねえ、先生だつてやつぱり男は男でしよ、たまには遊ばねえとからだがうんじまうだよ」

私には意味がわからなかったが、もううんじまっていると答えた。すると三人はすさまじい嬌^{きようせい}声をあげ、おたつは側^{そば}にいた女に抱きついたし、残った一人は私のほうへ水をはねとばしながら、先生の****とどなった。

「晩にいつてやつからな」私が歩きだすと、うしろでおたつの叫ぶのが聞えた、「戸に鍵^{かぎ}をかけねえで待つてなえ」

もちろん誰^{だれ}も来はしなかったが、数日のあいだ私は、自身の軀がうんでいるように感じられて、ときどき快活な気分をさまたげられるのであった。

土堤^{どて}の秋

十月下旬の昏^くれがた。土堤の斜面の下に、一人の若者が腰をおろして、泣いていた。

斜面は草が茂っているので、土堤の上を通る人には見えない。かなり強い西風が、その茂ったくさむらを絶えまなしにそよがせ、茶色にほおけた草の穂が、風の渡るたびに、若者の着物をせわしく撫^なでた。空には、金色にふちどられた棚^{たなぐも}雲がひろがり、土堤の上へ片明りの強い光をなげているが、斜面のこちらはもう黄^{たそが}

昏^れの冷たそうな、青ずんだ灰色のなかに沈んでいた。

若者は立てた膝^{ひざ}の上に両手を置き、手先をだらつと垂らしたり、片手で眼^めをぬぐったりした。ふと大きく溜^{ため}息をつくかと思うと、首の折れるほど頭を垂れ、その頭を左右に振り、そしてまた眼をぬぐった。

棚雲のふちを染めていた眩^{まぶ}しいほどの金色は、華やかな紅炎から牡丹色^{ぼたんいろ}に変わり、やがて紫色になると、中天に一つはなれた雲が、残照を一点に集めるかのように、いつとき明るい橙^{だいだいいろ}色に輝いたが、それも見るまに褪^あせて、鼠^{ねずみいろ}色にかすみながらはがね色に澄みあがった空へ溶けこんでいった。土堤の上も暗くなり、ときたま往^いき来^きする人たちも、影絵のようにぼんやりと黒く、こ

ころもとなげに見えた。

斜面のこちらは東の空の反映で、却^{かえ}って明るくなったようだ。しかし、本当はまえより暗さを増しているのだろう、風に揺れ動くくさむらも、すっかり色や陰影を失って、ただ非現実的な青銅色ひといろに塗りつぶされてしまい、そこに若者がいるということも、いまは殆^{ほと}んど判別がつかなくなった。

土堤^{どて}の冬

外は雨、私は机に向っていた。机の上には書きかけの原稿があり、私は小さな火鉢^{ひばち}にかじりついたまま、不自然な姿勢で、原稿の文字をぼんやりと眺^{なが}めていた。

寒さのきびしい夜で、火鉢を抱えているのに、膝や足の指先は痛いほどこごえ、不自然な姿勢を動かすこともできず、背中は氷の板のように冷たく硬^{こわ}ばっていた。——私は浦島物語のパロディをこころみていたのだ。共産主義のドグマに挑^{いど}んだ主題で、最小

限度にでも頭脳と胃袋と生殖器の能力が均一でなければ、公平な分配と所得はあり得ない、ということ、五幕の喜劇に組立てたものであった。私はその主題の大きさと真理をするどく把握はあくしていることに昂こうふん奮し、精神の力づよい高揚をたのしんでいた。

だがその反面、ふところが極度にさみしいこと、いそいで少女小説か童話を書いて、どこかの編集所に駆け込まなければならぬ、というさし迫った問題で、気分は苦が苦がしくふさがれていた。

——書きかけの原稿は第四幕のクライマックスで、一人の逞たくましい美青年が台の上に半裸で立ち、下にいる青年や乙女たちに、いさましく叫びかけているところだった。

青年 A （胸を叩たたき両手を高くあげて絶叫する）おれのこの肉に

くたい
軀

を見ろ、おれはきさまたちより美しく健康だ、おれはきさまたちの三人まえ喰^たべ、十人まえ働く、この広大な土地の整理や灌漑^{かんがい}法の計画をたてたのはおれだし、収穫物の管理や貯蔵を立案したのもおれだ、いつたいこの竜宮国を運営し、繁栄にみちびくのは誰^{だれ}か、AグループにいるかBグループか、（中略）おれこそはその者だ、たつたいまからおれがこの国の支配者だ（彼はさらに両手を高くあげて叫ぶ）、よく聞かがいい、おれはいま乙^{おとひめ}姫がおれの妻だということを宣言する、反対する者があつたら出て来ておれとたたかえ、乙姫はおれのものだ。

老人（隅^{すみ}のほうで低く独白する）私はなにをしたのだ、あれ

だけの情熱と努力をそそいで築きあげたものがこれか、これが待ち望んでいたその果実か（彼は泣く）。

青年A おれはこの国の王だ。

私は火鉢に炭を足そうか、それとも寝てしまおうかと迷う。その戯曲の中では、青年Aが「おれが王である」と叫んでいるけれども、彼を創り出したところの私自身はこごえて、空腹で、蒸気河岸^{がし}まで一杯の酒を飲みにゆく金もなく、一片の炭もむだには使えないことを思つて、肩をちぢめたまま、茫然^{ぼうぜん}と雨の音を聞いている。

私は時計を持っていなかったが、およそ十一時をまわったころであろう、蒸気河岸のほうからこつちへ、土堤の上を近づいて来

る人ごえを聞いた。

「十台島の連中だな」と私は^{つぶや}呟いた、「ごつたくやで遊んだ帰ら
だろう」

さして強い降りではなかった。^{ひさし}庇と窓の雨戸をひっそりと打つ
くらいで、近づいて来る人の話し声はかなりよく聞え、まもなく
それが十台島の若者たちではなく、よそから来た人びとだとい
うことが、会話の調子でわかった。

「——を持って来たか」としやがれた男の声がどなった、「源、
おめえ持つてるか」

「^げ下駄がぬげちやった」と幼い女の子が泣き声で叫んだ、「あた
い下駄がぬげちやったよ、かあちゃん」

「おぶつてやれ」とべつの男の声がした。

はだしの者もいるらしく、ぴしゃぴしゃと雨水を踏む音がした。かれらはひどくいそいでいるようで、ふつと声が跡切れ、すぐにまた女の声が聞えた。

「どっちへゆくよ、親方」

「黙つて歩け」としやがれ声の男が云つた、「助十郎はこを濡らしちやいねえか、はこは大丈夫か」

問いかけられた相手がなにか答えた。

「寒いよ」と女の子が泣き声で（かれらはこのときちょうど私の家の前にさしかかつていた）云つた、「かあちゃん寒いよ、耳へ雨がはいるよ」

「井前橋から新川堀へいったらどうか」と云う声がした、「とくぎようは危ねえと思うが」

「黙って歩けねえのか」しやがれ声の男がどなった、「みんな持ち物を落すな、早くしねえと、……」

そのあとは聞きとれなかった。

庇と雨戸を打つ雨の音がはつきりし、かれらの話し声は、川上のほうへと遠ざかっていった。どういう人たちだろう、男女と子供で七八人はいたようだ。宿でもとれなかったのだろうか、私は漠然とそんなふうにしたが、それだけのことで、考えはまた元に戻り、少女小説を書くか童話にするか、それとも東京の洒落斎翁のそこへねだりにゆくかなどと、怠けた思案に耽るの

であつた。

明くる日、私は午ちかくに起き、高品さんを訪ねて童話原稿の前借をした。高品さんはもちろん新聞社へ出勤したあとで、きん夫人がそれだけのものを貸してくれた。

「ゆうべ浦粕座うらかすが焼けたのよ」ときん夫人は茶を淹いれながら云つた、「知らないでしょ」

浦粕座はこの町でただ一軒の芝居小屋であつた。堀南の表通りからちよつとはいったころにあり、古いけれども鼠木戸ねずみきどなどを備え、畳敷きの平土間に、片花道があつて、いかにも芝居小屋という感じのする建物であつた。

「柏権十郎座がかかつてたでしよう、かかつてたのよう」と夫人

は云った、「入りが無いんでみんな小屋へ泊つてたんですって、ところが樂屋が狭いから舞台へも寝たんでしょ、古い引幕かなんかにくるまって、からだ軀を寄せあつて、お互いの軀の温かみで寝るんだそうね、ちよつと乙なけしきじゃないの」

「乙なようですね」と私は答えた。

「その舞台へ寝た人たちが」と夫人は続けた、「夜なかにろうそく蠟燭をつけて用を足しにいつて、それをまくらもと枕元に立てたまま寝ちやったらしいの、それが引幕に移ったからたまらないわ、ぼうつといっぺんに天てんじよう床へ燃えあがつちやうでしょう、襖とか障子ふすまならどうにかできたでしょうけれど、幕だからいっぺんに天床まで燃えあがつちまうわ、どうしようもないわよ」

私が訊^きき返すと、夫人はかぶりを振った。

「いいえ逃げちやったんですつて」ときん夫人は云った、「もうどうしようもないし、自分たちの責任が怖くなったんでしょ、荷物を纏^{まと}めて逃げちやったそうよ」

私は茶を啜^{すす}つてから、質問した。

「そうでもないわ」ときん夫人は云った、「小屋主の森さんはいきり立ってるそうだけれど、保険もたくさんかけてあるし、本家（というのは十台島の高品さんであるが）の話によると、森さんは毀^{こわ}して建て直すつもりだって云ってたそうですもの、お菓子があ

るけど出しましょうか」

私は礼を云って立ちあがった。

「可^{かわ}哀^{あい}そうなのはあの役者たちよ」ときん夫人は炉端から云った、
「あの夜^よ更^ふけの雨の中を、どんな気持で逃げていったかしらねえ」

白い人たち

遠くから見ると、その工場はいつも白い霧に包まれている。工場から立ちのぼる湯気のような、湯気よりも濃密な白い煙が、風の吹く日は風の吹く方向へなびき、風のない日は立ちのぼったところから下へ、ゆっくりと舞いおりて来て、工場や付属の建物や、その周囲一帯の地面やくさむらや、道を隔てた根戸川の揚げ場までを、まっ白に塗りつぶすのであった。

そこは東に百万坪の荒地へ続く芦原^{あしはら}、西は根戸川に接してい

て、工場のほかに事務所と、工員たちの小さな住宅があり、貝かいが殻まき置場と薪小屋が並んでいた。事務所には工場主と、幾人かの事務員が詰めている。かれらが出勤すると、正面の扉とびらは開かれるが、夏でも窓は閉めたままだし、かれらが帰ると扉はまたぴたりと閉められてしまう。——そうしなければ、いや、そうしていてさえも、焼かれた貝殻の微粒粉は、どこからともなく舞い込んで来て、事務所の中のあらゆる家具や備品や、床板の上にまで白く積り、拭ふけば拭くあとから積るのであった。——掃除をすることにはばかげたことなのだ。室内に溜たまった石灰を掃き出そうとすれば、あけた扉や窓から新たに石灰粉が舞い込んで来る。したがって年に二度か三度、工場の釜場かまばの火を消すとき以外には、決して

掃除などはしなかった。工場主も事務員たちも、帳簿とか机の上とか、そのとき必要な物や場所を、できるだけ静かにぬぐい、歩きまわるときはもとより、ペンを動かすにさえできるだけ注意ぶかく、静かにすることが習慣になっていたし、用事以外には話したり笑ったりすることもなかった。

事務所はいつも静かだった。貝殻が缶詰工場から運ばれて来ると、二人の事務員があらわれる。一人はその数量を計り、一人は記帳をして、運んで来た者に伝票を渡す。貝殻を運んで来た者も、もう馴なれているので、あまり口はきかないし、事務員も殆ほとんど無言のままだ。伝票を貰もらった缶詰工場の雇人は箱車を曳ひいて帰り、こちらの二人は事務所へはいつて扉を閉める。ほかに石灰を

買いつけに、月に一度ずつ仲買人が来るが、これもなが話はして
いない。オート・バイがやかましい音をふり撒きながらやって来、
用談を済ませるとすぐに、またオート・バイのやかましい音と、
青白い排気ガスをふり撒きながら去ってゆく。こうして退社時間
になると、かれらは次つぎと黙って帰り、最後に工場主が、表の
扉の鍵^{かぎ}を掛けて去るのであった。

工場は木造のトタン屋根で、建坪は十五メートルに三十メート
ルくらい。高さは屋根の上の換気窓まで、約十メートルほどあつ
た。内部は二重の板張りで、貝を焼く窯^{かまど}が三基並んでい、おのお
の貝殻を投げ入れる口と、焼きあげて出来た石灰を掻^かき出す口と、
それらの下に、薪を燃やす大きな焚^{たきぐち}口が付いていた。

工場の外部もそうであるが、内部はもつと粉塵ふんじんがひどく、柱も板壁も、踏段も床板も、まっ白に石灰がこびり着いているし、あたりには焼ける貝殻の微粒粉が、濃霧のようにたちこもつていて、二フィートはなれた人影もおぼろげにしか見えなかった。

工員は十五人いた。男が九人、女が六人、五つ組が夫婦で、あの男たちは独身だし、女一人は雑役の老婆ろうばだった。

かれらの姿を初めて見た者は、おそらく一種のぶきみさにおそわれるだろう。かれらは男も女も裸で、細い下帯ぼうずのほかにはなにも身につけていない。また、頭はみなまる坊主そに剃り、眉毛まゆげもないし、腋わきやその他の躰毛たいもうもすべて剃りおとしているといわれる。それは石灰粉が毛根に付くと、毛が固まるからだそうで、胸とか

腰部ようぶを見なければ、男女の差は殆んどわからなかった。

男も女も、たくま逞しいからだ軀つきであつた。髪かみの毛を剃りおとした頭部

が小さくみえるためか、その裸の肉軀にくくの逞しさは不均衡であり、

眉毛まゆのないとろつとした眼めや、いつもむすんだまま動くことことのな

い唇くちびるなど、見る者に異常な、非人間的な印象を強く与えた。女の

ほうはその感じが特にひどい。頭蓋ずがいのあらわな不ぶ恰好かつこうさ、軀を

動かすたびに揺れる重たげな乳房、厚く肉付いて、圧倒するよう

な量感のある広い腰、そうしてきけい畸型かと思われる曲つた短い足。

茶色にやけた肌はだいちめん、石灰粉まじりの斑まだらにこびりついたまま、前ま

跣えかみの姿勢えかでのろのろと鈍重に歩いてゆくようすは、人間とい

うよりも、なにかえたいの知れないけものというようにさえみえ

た。

仕事は二十四時間、一年に二度か多くて三度、窯の掃除をするとき以外に、焚口の火を消すことはない。働くのは十人で、五人ずつ交代に寝たり食事をしたりするほか、月に一回、これも交代で休みがある。けれどもかれらは町へは出ないし、町の住民たちとも決してつきあおうとはしない。工場と、狭い小さな棟割^{むねわ}り住宅だけがかれらの世界であり、そこへは誰^{だれ}をも寄せつけなかった。事務所の人たちが無口である以上に、かれらは無口であり無表情であつた。動作はひどく緩慢で鈍く、いつも背中に重い荷物でも負っているように感じられた。しばしば、かれらの幾人かは工場を出て、根戸川の土堤^{どて}に並んで腰をおろし、弁当を喰^たべたりタ

バコをふかしたりする。夫婦ならば夫婦で並んでいるのだろうが、どの一と組がそれであるかは見分けがつかない。みんな川波をみつめたり、濁った眼を細めて対岸のいかずちにある船大工の小屋を眺めたりしながら、黙って（私のノートには「苔のついた日蔭^{ひかげ}を眺めたりしながら、黙って（私のノートには「苔のついた日蔭^{ひかげ}の石仏たちのように」と記してあるが）弁当を喰べ、タバコをふかすのであった。お互いに顔を見ようともしせず、話しあうこともない。同じ場所に軀をよせあっていないながら、一人ひとりがお互いにまったく孤立しているようであった。

「あいつらはな」と町の少年たちは囁きあつた、^{ささや}「みんな懲役人だぞ」

「人殺しもいるだってよ」

「んだ」と昂こうふん奮のあまり一人が息をはずませて囁いた、「こんどへえったあの赤あかあざ痣のあるやつは、二人も殺したつていうだ、ほんとだぞ」

その男は三十五から四十五歳のあいだくらいにみえ、左のこめかみから頬ほおにかけて、赤黒い色の大きな痣があつた。

彼はどういう径路で雇われて来たかわからない。他の十五人もたぶんそうだろうが、ここでは過去の履歴や身分関係などは問題ではなかつた。頭髮も眉毛も剃り、まる裸で、石灰粉まみれになれば、それだけでもう誰彼の差別はなくなつてしまう。貝殻を投げ込み、薪を焚き、石灰が出来あがると、吠かますに詰めて河岸かしへ運び出す。単純で少しの変化もない仕事。口をきけば石灰粉がはい

ため、^{あしや}唾者のように黙っているし、町の住民たちと交わることもない。——その男がどんな過去をもっているか、どこの生れで本名はなんというのか、そんなことを気にかける者は誰もなかった。一人の男がなかまに加わった、初めのうちは肌の色が違うのと、仕事に馴れないのとで、なかまの誰かがときどき彼を見た。^{まつげ}睫毛に白い粉がたまり、^{まぶた}瞼の赤くただれた、とろつとした眼で、^{いぶか}訝しげに彼を眺め、それが新しく来た彼であることを認めると、無感動に眼をそらす、というようなことがあったが、彼がようやく仕事を覚え、肌も茶色にやけてくると、まったくなかまに溶け込んでしまい、もはや彼に注意するような者は一人もいなくなつた。

赤痣がある以外に、彼は他のなかまと特に違つたところはなか

った。ものやわからかで、腰が低く、よく働いた。眼立つようにではなく、人の気づかないこと、人のいやがるような仕事をすすんでやった。初めは誰でもそんなふうにするものだ、精勤を見せかけるために、あるいは新しい仕事に対する興味に駆られて、——しかし彼はそのどちらでもなく、もつと素朴な、^{そぼく}それが自分の仕事であるという、ごくあたりまえな態度であり、半年経ち、一年ちかく経つても、その仕事ぶりに変りはなかった。少なくとも、他の十五人のなかまと同様に、その表面だけはそうであった。

心ない人の眼にどう見えようとも、かれらも人間であり、男であり女であった。まる坊主で、下帯だけの裸躰が石灰粉にまみれ、口もきかず、仮面のように無表情で、誰が誰ともたやすくは区別

しがたいながら、その内部にはやはり怒りがありよろこびがあり、悲しみや嘆きや、いろいろな欲望があつたにちがいない。むしろ、必要に強^しいられた沈黙と、石灰粉との殻に閉じこめられているだけ、よけいに、かれらの内部にある人間感情は激しく、あらあらしく、衝動的であつたかもしれない。

その工場に雇われてから約一年ほど経つたとき、彼のようにすに変化があらわれた。なかまは誰も気がつかなかつたし、彼も注意ぶかく自制していたが、その自己抑制には、しだいに強い努力を加えなければならなくなつた。彼を悩ますのは女たちであつた。

勤めだしたはじめのころ、彼女たちは醜悪な軟軀動物のようで、ただ嫌^{けんおかん}悪感しか与えられなかつた。けれども月日が経ち、自分

がかれらのなかまに溶け込んでゆくと、彼女たちが「女」である
ということを意識するようになり、それが彼の神経の中に深く
いいって来た。彼の眼や耳は、絶えず彼女たちの動静にひきつけ
られ、彼の嗅^{きゆうかく} 覚^{おぼ}は彼女たちの軀から発散する匂いにひきつけ
られた。たぶたぶと揺れる乳房、男のように緊縛している下帯の
ために、却^{かえ}つて際立^{きわだ}つて見える下腹や、広い腰や、肉のもりあが
った豊かな臀部^{でんぶ}など。すべてが原始的にあからさまで、なんのつ
くろいもない強烈な刺戟^{しげき}と誘惑をふり撒いていた。

五人いる女たちの中で、彼をもっともひきつけたのは彼女であ
った。もちろん良人^{おとこ}があり、年はいちばん若かったが、肥えてい
て背丈が低く、軀に比べて頭や手足が不自然なほど小さかった。

はじめのうち彼は、五人の中で彼女がいちばん醜く、畸型児のようだと思った。にもかかわらず時が経つにしたがつて、その醜さと、畸型児のような軀つきが、彼の眼をひきつけ、神経をたぐりこんだ。その小さく肥えた肉軀は、乳房と腰部ようぶだけが発達し、そこだけが生きて動いているようにみえた。脂肪で贅ひだのできたまゐるい腹。骨盤の極端なひろがり。薦椎せんついの左右にはつきりと二つ窪みくぼのある臀部は、柔軟で豊満に重たげで、その中に飽くことのない欲望を秘めているようにみえた。

彼女にはかなり強い体臭があり、ときにそれが弱まったり強く匂かつたりすることに、彼は気がついた。ことに強くなったときの体臭を嗅ぐと、彼は全身が燃えるようになり、頭に血が充満して、

くらくらとめまいにおそわれることもある。彼は欲求の烈しさを抑えきれないと知ると、工場の裏へとびだして、芦の茂みの中へ跼みにゆくのであつた。町の悪童どもはしばしばそれを見た。芦の茂みは浅い沼に続いてい、そこでは鮒ふなややなぎ鮠ばやがよくとれるからだ。

「おつたねえのよ、なあ」と少年たちはあとで話しあう、「おんだらが見てえても平気なのよ、な、ちえつ、おつたねえの」

晩秋のその一日は、他の一日と少しも変りがなく、静かにゆつくりと時を刻んでいった。午後になつて、石灰を受取りに來た船が着き、工員たちの大部分が、吠の積込みに當つた。——彼は釜の係りで残り、焚口を覗のぞいて火を見たり、薪を投げ入れたりして

いた。季節とは関係なしに工場の中は暑く、石灰粉の微粒は渦をうず巻いたり、条しまを描いたりしながら、白くて厚い幕のように漂あふ溢れていった。

片隅かたすみに積んである薪を、焚口の側へ移そうとしたとき、彼は強い女の匂いに気づいた。錆さびびた鉄となにかの動物の乳を混ぜ合せたような、強い刺戟性の匂い、それが彼女の体臭だということ、その姿を慥たしかめるまでもなく、はつきりと彼にはわかった。

彼は首だけでそろそろと振り返った。頸くびがねじれると、こびりついたまま乾いた石灰粉が、かすかな音を立てて剥はげ、頸の横に幾筋か、茶色の肌が条のようにあらわれた。彼女はすぐそこにいた。戸口からはいって来て立停たちどまり、ぐあいが悪そうに下帯を直

し、ひどく疲れたような足どりで、薪を置いてある隅のほうへいった。そのうしろ姿を見まもっていた彼の眼が、急に細くすばまり、下唇が垂れて歯が覗いた。彼は床板の上を凝視した。石灰粉が積って、白^{しろつち}堊の板のようになったそこに、点々と赤いしみが落ちているのだ。一つだけあいたままになつてゐる焚口の火を映して、建物の中に充満した濃霧は橙^{だいだいいろ}色にぼうと染まり、その幻想的な明るさの下で、床の上の染^{しみ}は鮮やかに赤く、点々と彼女の足跡を追つていた。

彼は意識が昏^{くら}んだ。彼は抱えている薪の束を投げだして、大^{おおま}股^たに彼女のほうへ歩いていった。彼女は板壁に背中^{もた}で凭れ、跼んでなにか布切のような物をたたんでいた。彼はまっすぐに歩み

寄ると、いきなり彼女の顔を殴った。三つ、四つ、力まかせに殴り、そのたびに、彼女の頭は左へ右へとかしいだ。彼女は失神したような眼で、ぼんやりと彼を見あげた。痛みも感じず、殴られたことも感じないようだ。彼は両手で彼女を掴み、そこへ押し倒すと、片手でさぐつて、彼女の下帯を引き千切った。

そのとき、雑役の老婆の叫び声が聞え、押し伏せられた彼女が叫びだした。舞いあがる石灰粉の中で、彼は女を全身で押しつぶし、片手で口を塞いだ。彼女はその手に噛みつき、小さな手と足で狂気のように抵抗した。彼は意味のないことを喚きながら、女の胸へ顔を近づけた。すると、うしろに人の足音がし、彼は背中を激しく打たれた。背中と、次に頭を。それは刃物のように感じ

られ、背中も頭も断ち割られたように思えた。彼が振り返ると、彼女の良人がすぐうしろで、石灰の掻き出しに使う大きなシヨベルを振り上げていた。

彼の動作はおどろくほどすばやかだった。打ちおろすシヨベルの下で、彼は敏^{びんしょう}捷に女の上から転げ落ち、相手の片足を抱えて立ちあがった。相手は仰^{あおの}反けに倒れ、シヨベルは彼の手にあつた。このときは他の工員たちもそこへ来ていた。雑役の老婆の知らせを聞き、みんな積み荷を放^{ほう}りだして駆けつけたのだ。しかし、かれらが止めにはいる隙^{すき}もなく、彼は奪い取ったシヨベルで、仰反けに倒れている相手を殴りつけていた。相手の口からけものような悲鳴があがり、顔を押えた両手が血に染まった。みんながと

びかかるまえに、彼は相手を幾たびか殴り、殴られた相手の胸と腹が切れて、白い石灰粉の上に血がとび散った。彼ははげしい咳^{せき}におそわれ、シヨベルを持ったまま、工場の裏へ走り出ていった。工員たちは裏の戸口まで追っていったが、振り返った彼の顔と、右手に持ったシヨベルを見て、立停ったまま動けなくなった。

彼は芦の茂みへ分けいり、咳^せきこみながら、浅い沼を渡った。石灰粉を深く吸いこんだために、咳はいつまでも止まらなかった。彼は草原を横切り、湿地を駆けぬけ、芦の茂みにとびこみ、また腰までもある沼を渡って、百万坪をまつすぐに、海のほうへ走り続けた。しだいにかすれてゆく乾いた咳の音が、かなり遠くなるまで、いかにも苦しそうに聞えて来た。

事務所から駐在所に使いがゆき、町の人たちが集まった。かれらはみんなそれぞれ得物を持っていたし、貝の缶詰工場のあるじである「大蝶」の旦那は、だいちよう 獵服に身を固め、獵犬を曳き、獵銃を肩に掛けていた。そして、巡査部長と二人の巡査を先頭に、このものものしい一団は、百万坪に向っていさましくでかけた。彼女はなにごともしなかった。その良人は額と胸と腹に負傷し、腹の傷がいちばん深くて、応急の手当をしたのち、十キロほど北にある市の病院へ、入院することにきまり、その夕方おそく、彼女が付き添って、つりだい 吊台で運ばれていった。

彼はその翌日、百万坪の端にある篠竹の茂みで捕えられた。しのだけ 「大蝶」の旦那の射った獵銃の霰弾が彼のふくら脛に当たったの

だという。旦那の射撃の腕前は高く評価された。

ごつたくや

夕方、私が散歩から帰って来ると、小料理屋「澄川」の娘のおせいちちゃんが肩を振りながら小走りに来て、私を呼び止めた。おせいちちゃんは二十歳くらいで、^{からだ}軀も痩せているし、ほそおもての、かなり^{きりよう}縹織よしであり、私たちは近所づきあいの仲であった。

「先生まだ晩ごはん^た喰べてないでしょ」とおせいちちゃんが云った。

私はあいまいな声をだした。

「なんにもしないでよ」とおせいちちゃんが云った、「今夜うんと

ご馳走^{ちそう}するからね、ごはんも炊^たいちゃだめよ」

そして彼女は狡^{ずる}そうに笑つて、あとで面白^{おもしろ}い話をしてあげるわと云い、くるつと身をひるがえすと、小さな肩を振りながら、蒸気河岸^{がし}のほうへ去つた。私はそのうしろ姿を見送りながら、

「かもが捉^{つか}まつたな」と独りごとを呟^{つぶや}いた。

それよりまえ、私が初めて浦^{うら}粕^{かす}町へスケッチにやつて来たと
き、——ここでちよつと断わつておきたいのだが、そのころ私は、
どこかへでかけるとき、しばしば写生帳とコンテを持っていって、
その土地の風景を描いたものであつた。これは絵の勉強のためで
はなく、スケッチをすると、その土地の風景の特徴をとらえるこ
とができるからで、人物のクロッキイなどもかなり残っているが、

——そういうわけで、Y新聞の演芸部の記者だった友人をさそつて浦粕へやって来、沖の百万坪や町筋や、舟の並んでいる堀ほりなどをスケッチしたあと、ひるめしを喰べるために、一軒の店へはいつた。

看板には「御休息とお中食、天井てんどん、トンカツ」などと書いてあつたが、座敷へとおされてみて、こいつはいけない、と私は思つた。というのが、それより二週間ばかりまえに、画家の池部いけべとし釣さんから聞いた話を思いだしたのである。池部さんがまだ美校に在学ちゆうだつたころ、写生旅行かなにかの帰りに、宇都宮かどこかで、汽車を待つあいだに食事をした。見かけはありふれた田舎食堂のような店だったが、すすめられて座敷へあがると、

白粉臭い女たちがあらわれて、なにも注文しないのに酒だのビールだのを持って来、おのおの景気よく飲んだり喰べたりした。学生である池部さんには、それらが自分と無関係なのか、それとも関係があるのか判断がつかなかった。——なにしろ美校の学生とくると、できるだけ汚ない風態をするのが自慢だったから、どう見そこなつてもふところを覗ねわれる心配はない、と池部さんは思った。ところが勘定の段になると、白粉臭い彼女たちの飲み食いした物が、残らず池部さんのふところに噛かみついたものであり、その取立てには些いささかの容赦もなかった、ということであつた。

——田舎はおつかねえからな、とそのとき池部さんは明るく面白そうに笑つて、私に注意してくれた。君もよく氣をつけたほう

がいいぜ。

それを思いだしたので私は、顔にも声にも屹きつとした感じをあらわし、ビール一本と二人の食事を注文したうえ、「それだけである」ことを繰返した。あとで考えると、それは蒸気河岸から堀について曲った左側の「栄家」という店であり、半年ほどのち、私が町へ住みついてからは彼女たちとも親しく口をきくようになつた。そうなつてみると、ごつたくやの女と呼ばれる彼女たちが、みな神の如くごと無知であり単純であり、絶えず誰かだれに騙だまされて苦勞していながら、その苦勞からぬけだすとすぐにまた騙されるといふ、朴訥ぼくとつそのもののような女性たちであることがわかつた。――けれども、そのときは、まだその間の事情が不明だったので、

おさおさ警戒を怠らなかつたのである。はたせるかな、と云つてもいいだろうが、私と友人が坐すわるとまもなく、潮やけのした逞たくましい軀たいくの女性が三人、手に手にビールを二本ずつ持つてあらわれた。

——ちよつと待った、と私は片手をあげて云つた。そこでちよつと待つてくれ。

彼女たちは廊下で立停たちどまつた。

——よし、と私は云つた。そこでビールを下に置いてくれ、みんなだ、いや、みんな持つているのを下に置くんだ。

彼女たちはげらげら笑い、私がなにか珍しい芸当を演じてみせるとでも思つたらしく、左右の手に持つているビール壺びんを、いさ

み立ったような身ぶりで下に置いた。私はむろん芸当などしてみせるつもりはない、右側にいる小柄な女中こがらに向つて、君がビールを一本だけ持つてこつちへはいつて来い、「君だけ」であり、ビールは「一本だけ」であり、ほかのお嬢さんもビールも絶対に不要である、と極めて明確に宣言した。

——まあこの人は、と選まれた小柄な一人が云つた。そんな憎つたらしいこと云つて承知しねえだぞ。

そうしてこつちへ踏み込んで来ると、私を押し倒して馬乗りになつた。両手で私の手を押え、両の腿ももで私の胴を、そしてその腰部うぶで私の腰部をというぐあいには、字義どおりの馬乗りであつて、若い女性からそんな挑ちようせん戦を受けたことのない私は、その屈辱

的な姿態の恥ずかしさに狼狽^{ろうばい}し、はね返そうとしてできるだけのことをやってみた。あとで聞いたところ、彼女は十六歳だそうで、しかも五尺そこそこの短軀であるのに、信じられぬほど逞しい固太りの腕や、火のように熱い太腿の力は無類なもので、私のあらゆる反抗に対してびくともしなかった。

右のように周到な手順と力闘の労によつて、私たちはようやく一本のビールと食事だけで難^{のが}を^のれることができた。つまり「かも」にはならなかったのであるが、——話を元へ戻^{もど}すと、「澄川」のおせいちゃんのうしろ姿を見送りながら、私はこのときのことを思いだしたのであつた。

やがて根戸川亭^{てい}の出前持が、三皿^{さんら}の料理とホワイト・ライスを

届けて来た。私は良心に咎め^{とが}られたろうか、どう致しまして、常にさみしいふところを抱えて飢えていた私は、ご^{ごと}つたくや如きのかもになるような男には、拍手こそしなかったが、同情するほどの気持もなかった。——三皿の料理がなんであつたか記憶はないけれども、私は籠屋^{かごや}のおたまにその一と皿を持っていつてやり、あとはきれいに独りでたいらげて、いいころもちで眠つたように覺えている。

おせいちゃんは「あとで面白い話をしてやる」と云つたが、詳しいことを聞いたのは翌日の夜、十一時ころのことであつた。私が原稿を書きあぐんで、机に凭^{もた}れたままぼんやりと、この世の生きがたいことや、将来の不安などについて無益なものおもいに浸

つていると、土堤どてのかなたから自動車の音や、女たちの賑にぎやかな声がかすかに聞えて来た。べつに気にもとめなかったが、まもなく戸口でおせいちゃんと呼ぶ声がした。

彼女はよそゆきの支度をし、白足袋をはき、赤い顔に幸福そうな笑いをうかべながら、土産物の包みを私に渡して、机わきの脇へ坐った。彼女の息は酒臭かったが、そんなことは、初めてであつた。「まだ勉強してるの、えらいわね」と彼女はまず子供騙しのようなことを、少しの実感もない調子で云つた、「そのお土産あけなさいよ、先生は東京だから知ってるでしょ、ねえ、あけてみなさいよ」

私は云われるとおりにした。包紙の中からは、しゃれたレッテ

ルを貼^はった朱色の壇があらわれた。それは五種類に加工した豆とあられの混った菓子で、レツテルには俳優の紋や、顔の隈^{くま}取り^どなどがちらし模様になっていた。

「品物は五色豆よ」と彼女が云った、「でもほかになんとか云う名があるでしょ」

私が答えると、彼女はまた幸福そうに喉^{のど}で笑った。

「うまいじゃないの、おのろけ豆だなんて、かつちゃんのお土産」と彼女は云った、「ああくたびれちやつたわ」

こうしておせいちゃんは話し始めた。

昨日のかもは三人伴^づれで来た。外交員か集金人のようにみえ、午^{ひる}さがりにあらわれて大いに景氣をあげた。三時すぎたころ帰る

ことになったが、中の一人が残ると云いだした。

その男が三人の中でもはばききらしく、おかっちゃんは初めから派手に「モーション」をかけていた。それが功を奏したのだろう、他の二人は帰ったが、そのかもは残った。

「それだけならいいんだけど」とおせいちゃんが云った、「一人になるとすぐにさ、その男つたらがま口から百円さつを出してみせびらかすじやないの、おかっちゃんの、気をひこうとしたんだろうけれど、ばかばかしい、まるで車くるまっぴ曳ひきがこんにやく屋へとびこんだようなもんよ」

べつの章でも書いたように、この土地の人たちは好んで俚諺りげんや譬たとえ話を引用する。それもしばしば独り合点や、記憶ちがいや、

自分勝手に作り替えられるので、よその者には理解できないことが少なくない。この場合も私にはその意味がわからなかったが、おせいちゃんの説明によると、車曳きは足が達者であつて、それがこんにやく屋へとびこめば、「すぐにその達者な足を使われる」つまりおあしを使われる、というしやれだそうであつた。

「ここんとこずつとしけてたでしよ」とおせいちゃんは続けた、「だから、さあやってやれつてことになったのよ」

私のところへ晚めしを届けるころから、そのいさましい略奪は始まつた。

現代のキャバレーとか、暴力酒場などの経験者にとっては、たぶん、まだなまぬるい話としか思われなだらうが、とにかく

「澄川」からはすぐに指令がとび、他のごったくやから女たちや器物が動員された。女たちは呼ばれた芸妓げいぎというかたちであり、器物とは爛徳利かんどくりとか盃さかずきとか、椀わんや皿小鉢こぼちの類たぐである。——念のために注を入れると、小料理屋となつてゐるにもかかわらず、これらの店ではそういう器物があまり揃そろつてはいない。客の多くは酒かビールの一本くらいに、あとは井どんぶり物ものでも取ればいいほうだからだ。——で、こうして召集された女たちがかもを取り巻き、夜の明けるまで盛大に騒いだ。もちろん騒いだのは女たちで、それは一年に一度あるかなしというチャンスだったからだ、後半すぎになると客はくたびれはててしまい、坐つてゐることもできなくなつた。

「それでもいさましいの」とおせいちゃんはまた喉で笑った、

「まっすぐ坐つてもいられないのに、おかっちゃんを捉まえてあつちへゆこう、あつちへゆこうつてせがむのよ」

おかっちゃんは、ふざけちやいけないよ、と云つたそうである。

ふざけるとはなんだ、とかもが云つた。しつかりしなよ、このしと、とおかっちゃんはかもの背中を殴打おうだした。もう二度もあつち

へいったじやないか、忘れたのかいこのしと。二度もだつて、と

かもは考えこんだ。軀をぐらぐらさせながら、どうかしてその記

憶をたぐりだそうとするようだったが、やがてそれにもくたびれ

たとみえ、唸うなり声をあげながらぶつ倒れてしまった。女たちは箸はし

が倒れたほどにも思わなかった。うたう者、踊る者、悪口のやり

とり、つかみあい、和解のコツ酒。そしてまた踊る者、うたう者、悪口のむし返しから髪むしの毛のりあい、という底抜けかっぱに活つな騒わらわぎが続いた。

かもはなにも知らずに熟睡していたが、揺り起こされてみると、夜が明けてい、自分が座蒲団ざぶとんを枕まくらにごろ寝をしていることに気づいた。揺り起こしたのはおかちやんで、その脇には女主人が、勘定書を持って坐っていた。女主人はいうまでもなくおせいちゃんはずの母親であるが、年はそれほどでもない筈なのに、あたまはすしらかり白髪しらだったし、痩せていて皺しわだらけで、これに総入れ歯を外して睨にらまれると、どんなにあらくれた蒸気乗りでもちぢみあがる、といわれていた。

かもは勘定書を見て青くなった。それからの問答は書くまでもない、やがてかもは駐在所へいつて払おう、と云いだした。女主人は総入れ歯を鳴らして笑った。

——それは話が早くつていい、と女主人は云った。そういうつもりなら駐在所までゆく必要はない、呼びにやればすぐに巡査が来てくれるから、あたしの方で使いをやることにしよう。だが念のために断わっておくよ、と女主人は座敷の中をぐるつと指さした。そこには爛徳利が八十幾本、ビール壺が四十幾本、しょうちゅう焼酎の二リットル壺が二本、井や皿小鉢がずらつと並んでいた。

——勘定書と照らし合せてごらん、と女主人は云った。もうよしなさいってのに、おまえさんがむりやり注文したんだ、一本一

本みてごらん、酒もビールも残っているし、それはおまえさんの
もんだからおまえさん持つてつていいよ、ただ但しお銚子ちようしや壘はこ
っちの物だからね、持つてゆくなら中の酒やビールだけ持つとい
でなさい、呼んだ芸妓が六人、ぎよくだい玉代は時間外の分だけお負け
になってるから、それをよく調べたうえで、巡査を呼ぶなら呼
びますよ、どうせ恥をかくのはそっちなんだから。

かもがどんな顔をしたかわからない。けれどもおよその想像は
つく。酒、ビール、現物はちゃんとそこにある、ゆうべあらわれ
たとんでもない女性たちが、芸妓衆であるかどうか非常に疑わし
いが、警察署などの監督関係ではそういうことになっているのか
もしれない。おびただ夥しい数の井や皿小鉢にどんな料理が盛られ、誰の

胃袋へおさまったか覚えはないが、勘定書の品数とそこにある器物とは数があっている、——であろう。それはいちいちあたってみるまでもなく、まるで火事にあつた瀬戸物屋の店先のような、その場のありさまを眺めただけで充分だ。とすれば、なんのために巡査を呼ぶか、恥をかいとうえに勘定を払うためにか。

かもは勘定を払った。すると、そのときを待っていたおかっちゃんが出て来て、あたしの分をくれと云った。かもはもういちど青くなった。

——なんて顔をするのさ、とおかつちゃんは攻撃に出た。二度も三度もしとを玩具おもちゃにしといて只で済ませるつもりかい、しょつてるよこのしと、ふざけるんじゃないよ。

かもはおかつちゃんに払った。

「人をばかにして、百円札なんかみせびらかすから悪いのよ」とおせいちゃんは云った、「それでもおかつちゃんには驚いたわ、その客が靴くつをはいてるまに勝手へいって、お小皿へ波の花を盛って来てさ、朝っぱらからいやなことを云う縁起くその悪いしとだって、うしろから塩花を撒まいたわよ」

点てんせい睛せいも忘れなかったわけである。こうして、ゆうべの女たちに再び召集をかけ、二台のタクシーに分乗して、東京へ芝居見物にゆき、かもから搾しぼりあげたものをきれいに使いはたして来た、ということであつた。

「きれえさっぱり、いい気持よ」とおせいちゃんは云った、「で

もこれでまた当分びいびいだわ」

私はなんと答えようもなかった。

対話（砂について）

「砂なんて、おつかしなもんだなあ」と富なあこが云った。

「うう」と倉なあこが云った。

五月十七日の晩で、二人は沖へ魚を「踏み」に来たのであつた。
汐^{しお}が大きく退^ひく満月の前後には、浦^{うらかす}粕^{はく}の海は磯^{いそ}から一里近い遠くまで干潟^{ひがた}になる。水のあるところでも、足のくるぶしの上三寸か五寸くらいしかない。そこで、馴^なれた漁師や船頭たちは魚を踏みにゆくのであるが、その方法は、——月の明るい光をあびなが

ら、水の中を歩いていて、「これは」と思うところで立停たちどまり、

やおら踵かかとをあげて爪つまさき先立ちになる。すると足の下に影ができる

ので、魚がはいって来る。筆者もころみたことがあるが、魚の

はいってくることは慥たしかで、——はいって来たあと、呼吸を計つ

て、それまで爪先立ちになっていた踵をおろしざまその魚を「踏

み」つけ、かねて用意の女串めぐしで突き刺す、というぐあいにするの

であつた。捕れるのは鰈かれいが多く、あいなめとか、夏になるとわた

り蟹かになども捕れるが、蟹の場合はべつに心得があつた。

「この砂だよ」と、富なあこは、踏んだ魚を女串で刺し、魚とい

つしよに砂を掴つかみあげて、魚を魚網へ入れ、砂を掌てのひらでもてあそび

ながら云つた、「——こうやってみると、なんでもねえ、ただの

砂だ、ただ砂だっただけだ、ほれ、これだけのもんだ、なあ」

「うう」と云つて倉なあこはあたりを眺めまわした。^{なが}

空はきれいに晴れ、十七夜の月が、殆んど頭上にあつた。海面には極めて薄く靄が^{もや}かかっているようで、それが月光を吸い、どちらを見ても青白い、夢幻的な光が遍満していた。こんな晩は同じように、魚を踏みに来ている者が幾組かあるのだろう。どこか遠くで、ときたまかすかに人の声がするが、姿は見えないし、どつちから聞えて来るかも、はつきりはわからなかった。

「ところがおめえ」富なあこは水の中を静かに歩きながら、まだ掌にのせている砂を見て云つた、「これはこんなふう^{ほう}に砂つ粒だけみてえに見えるけれど、これでそうじゃあねえ、これでちゃん

と生きてるんだぜ」

倉なあこは訝いぶかしそうに友達いぶかの顔を見た。男ぶりがよくて、口の重い、いつも頬ほおの赤い彼は、決して人にさからうようなことはないが、富なあこの言葉には少なからず不審をいだいたようであった。

「まさか」と倉なあこが呟つぶやいた。

「そう思うだろう、誰だれでもそう思うんだ」と富なあこが云って立寄り、水の中で踵をあげた、「——砂はただ砂っ粒、これだけのもんだと思ってる、だがそうじゃねえ、これはこれで生きてるし、生きてる証拠にはおめえ、絶えまなしに育ってるんだぜ」

倉なあこはなにか反問しかけたが、ちょうど魚を踏んだので、

巧みに女串を刺し、六寸ばかりの鰈をあげた。

「砂が」と倉なあこは鰈を魚網へ入れながら訊きいた、「育つつかい」

「おうよ」と富なあこが云った、「それもただ育つだけじゃねえ、育つて大きくなりながら、だんだん川をのぼるんだ、だんだんなな、おらもこれにはびつくりした」

倉なあこは右手の中指で、頭のうしろを搔かいた。

「こんな根戸川なんかじゃよくわからねえが、ほかの川へいつてみればはつきりすらあ」と富なあこは続けた、「——海ちけに近ちけえところじやりはこまつけえ砂さ、それが上へのぼるにつれて、砂利じやりになり石ころになり、その石ころがもつと大きくなつてるもんだ」

「うう」と倉なあこは考えこみ、やや暫くして呟くように云った、

「その勘定だな」

「誰もそこに気がつかねえのさ」

「その勘定らしいが」と倉なあこが訊いた、「しかしまた、どうやって川をのぼるだろう」

「おら、この眼めで見た、この眼めでよ」と富なあこは科学者の冷静さと情熱とをこめて云った、「——川のずっと上かみへゆくとな、このつくれえの岩が川の中にころがってるんだ、それがおめえ、或あるときここいらへんにあるとするだろう」

「うう」と倉なあこは友達の指先を見た。

「するとあるとき、そうさな、——」富なあこは水面を指さした

手を、ちよつと考えてから、向うのほうへずらした、「あのへんまでのぼっちゃってるんだ、ここんところから、あのへんまでよ、幾日もたたねえうちに、ときには三間も五間も上へいつちやうんだ」

「どうやってだ」

「わかんめえ」富なあこはすばらしい手札を持った賭博者とばくしやのようにはくそ笑んだ、「おらもわかんなかった、どうやって上へのぼるんだか、手も足もねえし、魚のように鰭ひれや尾つぽがあるわけでもねえによ、——それでおら、よくしらべてみたっけだ」

倉なあこは踵をあげることも忘れ、期待のこもった眼で友達を見まもった。

「するとようやくわかった、こうだ」と富なあこが云った、「つまりこうだ、——ここに大きな岩があるとすべえ、いいか」

倉なあこは黙うなずつて頷うなずいた。

「川だから水が流れてる、これにふしぎはねえさ、なあ」と富なあこは手まねをした、「こう、ここに岩があらあ、そこへ水が流れて来るだろう、そうするとおめえ、岩の前どろのところの砂や泥は、流れに洗われて低くならあ、そいつは海ん中でやっても同じこつた、波の来るときに立っていると、退くときに踵かかとの下どろの砂がへずられるだろう」

「うう」と倉なあこが頷うなずいた、「うしろにひつくりけえりそうにならあ」

「そいつがそのまんま当て嵌^はまるわけよ、な」と富なあこが云つた、「な、水がこう流れる、岩の前の砂がへずられる、へずられるのが大きくなると、その岩はごろつと転がる、上のほうへよ、——水は絶えず流れてるから、岩の下はいつも流れでへずられてら、それが順繰りにずっと繰返されるから、岩はしぜんしぜんとのほうへ、転がり転がりのぼつてくわけだ」

倉なあこは唸^{うな}つた。うーんと、声に出して唸り、それから友達の顔を見て云つた。

「知恵のあるもんだな」

「なみたいでいじやあねえさ」

「こんな砂がな」倉なあこは跣^{かか}んで、水の中から砂を掬^{すく}いあげ、

掌の上へひろげてみながら云った、「おどろいたもんだな」

「だろうつて」と富なあこが考えぶかそうに云った、「おらも初めはびつくりしたもんだ、こんな砂つ粒が生きているなんてよ、な」

「そうは思えねえもんな」

「知らねえ者は極楽よ」と富なあこは溜息ためいきをついた、「おらも

そうとわかるまではなんとも思わなかつたつけど、けれどもわかつてみると粗略にやできねえと思つた、ほんとだぜ、そんなに見えていて」と彼は倉なあこの掌上にある砂へと顎あごをしゃくつた、

「それでおめえ、ちゃんと生きてるんだからな」

「うう」と倉なあこが云つた。

「生きているばかりじゃねえ」と富なあこが云った、「だんだんと大きくなりながら、川上のほうへのぼってゆくんだから、だんだんとな、どこからそんな知恵を絞り出したもんか、考^{かん}げえてみるとびっくりするばかりだぜ」

「うう」と云つて、倉なあこは、掌の上の砂を指で撫^なでた。

さざ波もたたない静かな海面のどこかで、魚のはねる水の音がし、二人は話しながら、磯のほうへ戻^{もど}つていった。

もくしよう

元井エンジは葛西^{かさい}汽船の七号船の水夫であつた。十四の年から通船に乗り、二十三の年にエンジナーの免状を取つて、二十八号船のエンジンになった。兵隊の経験はない。背丈が足らなかつたのだ。五尺そこそこのずんぐりした^{からだ}軀つきで、毛深くて、角張つた、しかんだような顔をしていた。滅法しやがれ声だから、話をするのに苦しうだし、そのためというよりも性分だろうが、話しべたで、めつたに人と話したがらなかつた。仇名^{あだな}は「もくし

よう」という。もくしうは冬期によく捕れる蟹かにで、握りめしの
 ようなむつくりした形をしてい、茶色で、全体が毛だらけであり、
 毛蟹とも呼ばれていたが、それは殆んど冒流ぼうとく的にまで元井エン
 ジに似ていた。

彼にはまだ水夫のころから好きな娘があつた。新川堀の「臼田うす
 屋だや」という、雑貨と洋食屋を兼業している家の二女で、名をおさ
 い、年は彼より二つ下だった。彼女には兄と妹があり、洋食屋の
 ほうは兄がやっていた。必要のないことは省略しよう。おさいは
 昼のうち雑貨店のほうで働き、夕方からは洋食屋のほうを手伝っ
 た。色が黒く、小柄こがらで、縹きりよう緻もかなりいいし、勝ち気ですばし
 こくて、手も口も達者だった。——臼田屋は通船の発着所のほぼ

前にあるから、船員たちとはもとより馴染なじみだつたし、洋食部のほうには、土地の漁師や若者たちもよく集まるので、おさいのほか二人の女給がいた。その二人は厚く白粉おしろいを塗り、鼻がばかになるほど安香水を匂におわせ、すぐに客の膝ひざへ腰掛けたり、客の吸っているタバコをひったくって吸つたりするのが、現代的サービスだと信じきっているような女性であつた。

おさいは白粉もつけず、ふだん着のまままで店にあらわれ、てきぱきと料理の皿さらやビールや酒を、運んだりさげたりしながら、客たちがもつとメートルをあげるようにと、絶えず、巧みに女給あおを煽あおるのであつた。しかし、自分は決して客の相手にならず、話しかけられても簡単に受けながすだけだし、諄しつこく冗談いを云われたり、

軀へ触^{さわ}られでもしたりすると、客のほうで消えてしまいたくなるほど辛辣^{しんらつ}な言葉で、てきびしく容赦なくやりこめた。

——おらんとこの五号船のぶつくれエンジンみてえだ。

東湾汽船の三十六号船に乗っている留さんがそう云った。その五号船はごく古いもので、エンジンを発動させると凄^{すこ}いような排気音を放ち、船ぜんたいをばらばらにするかと思うほど揺りたてる。五号船に乗っているあいだは、「うつかり口もきけない」といわれるくらいであつた。

そのおさいが元井エンジを好きになつた。きつかけを作つたのは、云うまでもないがおさいのほうだ。彼は船で使う草履や、塵^ち紙^{りがみ}、鉛筆、雑記帳などを買うとか、また、ときたま食事をしに

寄る程度だし、そんな場合にもおさいに話しかけるのはおろか、
眼^めをあげて顔を見ることさえなかった。——どんなふうにして二
人が将来の約束をするようになったか、知っている者はない。或^あ
るとき、洋食部で彼がなかまにからかわれていた。小学校も満足
に出ていないにもかかわらず、エンジンになる勉強をしていると
いうのは、禿^{はげ}頭^{あたま}で鬘^{まげ}を結うようなものだ、などというわけ
である。彼は相手にならなかった。怒りと恥ずかしさのために、――
――というのは、そういう勉強をしていることは内緒にしていたか
らで。しかし彼は、赤黒く充血した顔を伏せ、黙ってライスカレ
ーの匙^{さじ}を使っていた。するとおさいが出て来て、からかっている
なかまをやっつけた。五号船のエンジンどころではなかったらし

い、日にやけた彼女の顔が蒼あおざめて細くなり、眼から涙をこぼしていたそうであつた。

二人がいい仲になっている、という噂うわさはそれから弘ひろまつた。いろいろな評が取り交わされ、いつとき「もくしよう」の存在が大きく、蒸氣乗りたちを圧迫した。白田屋のおさいをものにしたということ、しかも相手がもくしようだとあつてみれば、影響の大きさと強さは尋常ではなかつたのである。彼は周囲の眼をそらし、噂に耳を塞ふさぎ、非凡な精力で勉強を続けた。そうして、どのくらいの期間が経たつたかはつきりしないが、ついに機関士の免状を取つた。

ここまでの経過はこまかい部分がわかっていない。婚約期間が

仮に二年だったとして、そのあいだ二人だけで逢^あったことがあるのか、また、恋人同士らしい交渉があつたか、ひそかに逢^あつたとすればどこでどんなふうだったか、愛の言葉を囁^{ささや}くとか、口喧^{くちげん}嘩^かなどが交わされたか。などという点については、なんの噂もなく、かげぐちも聞くことはできなかった。

彼は二十八号のエンジニアになり、「元井エンジ」と、多少の皮肉をこめて呼ばれるようになった。そこで、彼は故郷へ帰省した。祖先の展墓^{てんぼ}を兼ねて、自分の出世を報告するために、——故郷は岩手県のどこかで、汽車をおりてからバスで半日ほどゆき、それから歩いて何里とかの山を越す、といったような寒村であった。もちろん結婚することも話したであろう、ほぼ半月ほど経つ

てから、彼は土産物を持って帰り、「白田屋」へおさいを訪ねていった。——おさいはいたが、彼を見るととびだして来て、いきなり激しく怒りだした。怒って罵りながら、両手の指を鉤かぎのように曲げ、全身を音のするほどふるわせていた。

——おめえは徳とくぎよう行にふじという女がいる、その女はおめえの子を産んだ、とおさいは叫んだ。この恥知らず、よくもおんだらを騙だましたな。

彼にはわけがわからなかった。

——しらばつくれるな、とおさいはかなきり声をあげた。おら自分でその女に会って、その女の口からじかに聞いただ、よくもあんなすべたあまに見替えやがった、もう騙されやしねえぞ。

彼は抗弁した。自分の並み外れたしやがれ声と訥弁とつべんのろを呪いながら、身に覚えのないことだと証言したが、おさいは聞こうとしなかった。

——聞かね聞かね聞かね、と彼女は指が鉤のように曲った手を振りあげた。おめえの嘘うそつばちなんか聞くもんか、さつさと帰れ、もう二度とふたたび来るんじゃないよ。

そしておさいは店の奥へ去った。

これははつきりわかっていることだ。彼は暫しばらく、気のぬけたように立っていた。それから、持って来た土産の包みを、店先へそ——と置いて、そこをたち去った。

彼にそんな女があつたかどうか、誰だれも知らなかった。東灣汽船

も、葛西汽船も、徳行町が終点であつた。どちらの通船も、浦^{うらか}
 粕^す泊りのときと徳行泊りのときがあり、蒸気乗りたちの多くは、
 遊ぶ場所の揃^{そろ}つてゐる浦粕泊りを好んだが、中には徳行に馴染の
 女のゐる者もないことはなかつた。元井エンジンにも徳行泊りの番
 はあつたから、そこに馴染の女がいたということも無根拠ではな
 い。もしも彼にそんな覚えがないとすれば、ふじという女に会つ
 て、その実か否^{いな}かを慥^{たし}かめることができる筈^{はず}だ。——当然、彼は
 そうすべきであつた。それは極めてたやすいことだつたから、—
 —けれども、彼はそうはしなかつた。犬儒^{けんじゆ}派的にいえば、彼は
 賢者の知恵を持っていたとも考えられる。おさいの怒りと罵倒^{ばとう}を
 聞いて帰ると、彼は自分の中にとじこもつて、ぴつたりと蓋^{ふた}を閉

めたようにみえた。彼は蒸氣河岸がしの裏長屋の一軒を借りて住み、自炊生活を始めた。船に乗っているときも、必要なこと以外には誰とも口をきかないし、長屋へ帰つても近所づきあいはしなかった。人を訪ねることもなく、訪ねて来る者もなく、暇があると、独りで将棋を指してたのしんだ。

彼の内部で、なにかが変りつつあつた。水槽すいそうに小さな穴があいて、そこから水が漏るように、彼の中から、なにかが少しずつ漏れ、漏れただけべつのなにかが加わってゆく、というやうなぐあいだった。他人とは口をきかないが、彼はいつかしら、絶えず自分と話をするやうになつた。

仕事がつつて家へ帰ると、彼は雨戸の前に立停たちどまり、ちよつと

雨戸を見まもっていて、それからゆつくりという、——この戸をあけよう。そして雨戸をあけ、格子戸こうしどをあけてはいると、そこでまた、——この格子を閉めよう、と云つて格子戸を閉める。上りがまちしょうじの障子のあけたてから、洗面、着替え、晚めしの支度、あと片づけ、風呂ふろのゆき帰り、寝るときも起きるときにも、すべての問いかけと確認を忘れることはなかった。また、独りで将棋を指すときは、盤の向うに相手がいるかのように、一手一手について感心したり、へこたれたり、大いに自慢の鼻をうごめかすかと思つと、相手の立場になつて嘆いたりした。——それはちやうど、似合いの腕を持った仲の良い友人が二人きりで、邪魔をされる心配もなく、ゆつくりと将棋をたのしんでいるようにみえた。

このあいだにおさいは嫁にいった。利根川とねがわの河畔かはんにある布佐ふさと

いう町の、かなり大きな料理屋であつたが、一年ちよつとで良人おとと

に死なれ、生れてまのない女の子があるため、百日ほど辛抱した

あと、姑しゅうとめとうまくゆかないので、子供を引取つて実家へ歸つた。

——気性の勝つた彼女にとって、子持ちの出戻りでもどというなりゆき

は辛いことだつたろう。そう考えるのが人情だと思ふが、彼女は

少しもそんなようすをみせなかつた。嫁にゆくまえと同じように、

雑貨店のほうでも洋食部のほうでも、活潑かつぱつに動きまわつたし、

まえよりもあいそよく、客あしらいもやわらかになつた。冗談を

云われたり、軀に触られたりしても怒らないばかりでなく、すす

められると酒でもビールでもかなり飲み、少し酔うといい声で唄うた

もうたつた。

或る日、葛西汽船の二十八号が発着所へ着いたとき、おさいは岸へいつて機関室を覗きこみ、元井エンジを認めて声をかけた。「エンジンさん、暫くだね」とおさいは云った、「たまにはうちへも遊びに来せえま」

彼は微笑し、ちよつと片手をあげてみせたが、口はきかなかつた。

次のとき、彼女は自分の子を抱いていて、洗い場の石段を二十
八号船の側^{そば}までおりてゆき、元井エンジを呼んで、これが布佐で
生んだ子である、と揺りあげてみせた。

「名前のはるみって付けたの」と彼女は云った、「可愛^{かわい}いでしょ」

彼は微笑しながらうなずいた。なんの意味も含まない微笑で、やはり口はきかなかった。

こういうことが幾たびかあった。おさいはそのたびに「遊びに来い」とさそつた。彼は微笑をうかべて、頷いたり、手をあげてみせたりしたが、それは機械的で、少しも感情のこもらないものであつた。そして或る夜、——元井エンジが晩めしを済ませ、し燭よつこうの弱い電燈でんとうの下へ将棋盤を据すえて、例のとおり自分に話しかけながら駒こまを並べた。盤は古道具屋から買ったものだが、ちやんと脚がついているし、駒もいちおう黄楊材つげざいで、肉が薄く、盤へ置くときには冷たそうないい音がした。

「ゆんべはいしが先手だつたつけ」と彼は安息のためいきをつき

ながら云った、「じゃあひとつ、今夜はおらが先手といくか」

そして、二手か三手指したとき、戸口に人のおとずれる声がした。人が訪ねて来ることなどはごく稀まれなので、初めは隣りの秋葉エンジの家かと思っていたが、自分の名を呼ばれたので、彼は返辞をし、いま指した七八銀の手をよく確認してから、立ちあがった。格子をあけて、狭い土間に立っていたのは、白田屋のおさいであつた。彼女はよそゆきの着物に、厚化粧をしてい、洋食部の女給たちのように、安香水を強く匂わせていた。

「あたしあやまりに來たのよ」おさいは媚こびた笑いをみせながら云った、「ちよつとあがつてもよくつて」

彼は微笑したまま立っていた。あがれとも云わないし、あがつ

てもいいような顔つきではなかった。おさいは片手で髪を撫なでた。「でもあたし、いそぐから」と彼女はすぐに云い直した、「今夜はここでお詫わびだけ云つとくことにするわ、いいでしょ」

彼の表情は変らなかった。

「ごめんなさい、あたし悪かったわ」おさいは眼を伏せた、「徳行のおふじさんのこと、嘘だったのね、あたし人から聞いて、かつとのぼせちやったの、あのときはじかに会って、当人の口から聞いたように云ったけれど、ほんとうはゆきもしないし会いもしなかったの、もしか嘘なら、あんたが嘘だって云う証拠をみせてくれると思ったのよ」

元井エンジの眼が、ねむたそうに細められた。あるとき彼はそ

のことを云った、そんな覚えはない、みんな嘘だと云ったが、おさいは聞こうともしなかったのだ。そのことを思いだしたかどうか、彼は細めた眼でおさいを眺めたまま、黙って立っていた。

「あんたはなんにも云ってくれなかったわ」とおさいは続けた、
「だからあたし、——あたし、どうにでもなれって思っちゃったのよ、ほんとうはあんたが悪いのよ、あんたがいけなかったのよ」とおさいは声を激しくした、「嘘なら嘘だって、はつきり云ってくればいいじゃないの、どうして黙ってたの、どうして」

彼はまた微笑した。

「でもいいわ、みんな過ぎちやったことだもの、それに、——」
おさいは熱っぽい眼に媚こびをあらわして云った、「あんたはじつを

みせてくれたわ、あたしが布佐へお嫁にいつちやってからも、ずっと独りで、ほかの人をお嫁に貰もらわずにいてくれたわね、うれしいわ、あたしこっちへ帰って来てからそのことを聞いて、うれしくって、泣いちやったのよ」

おさいはすばやく眼をぬぐった。彼はなお表情を変えなかった。彼は謙虚な自尊心をもっていた。それは決して他人に気づかれることのないところで、ひそかに、しかし誇り高く保たれて来たのだ。——おさいが彼にあいそづかしを宣告してから、周囲の者のあてつけやかげぐち、ちようしよう嘲笑やおひやらかしの集中攻撃を受けた。見たこともないおふじという女についても、あくどいほめかしや皮肉をずいぶん云われたものである。——けれども、それ

らのすべてを謙虚な自尊心で受けながしたように、いまおさいの訴えに対しても、彼は漠然^{ばくぜん}と微笑するだけで、おさいを責めたり、自分の立場のつらかったことを並べたりしようとはしなかった。

「あたし、いつでもいいのよ」とおさいは低い声で云った、「あとは云わなくつてもわかるわね、あたしたちうまくいくと思うわ」
彼はやはり黙っていた。

「きつとうまくいくわ」おさいの声には確信がこもっていた、
「あなたの都合でいつでもいいのよ、あたしの気持、わかるでしょ、わかってくれるわね」

彼は一割がた微笑をひろげ、片手をゆつくりとあげて、その指

先をひらひらさせた。どういう意味を表明したのかわからないし、なんの意味もないようにも受取れた。

「べつにいいそがなくてもいいのよ」とおさいは探りを入れるように云った、「あたしがいいそいでるなんて思わないでね、あたしいそぐ気持なんかちつともないんだから、わかつてるわね」

彼はなにも云わなかった。

「うちへ来てちようだい」と別れを告げてからおさいが云った、「あたしうまいライスが出来るのよ、玉葱たまねぎとヘットこしらだけで搾こえるんだけど、とても玉葱とヘットだけだなんて思えないほどおいしいのよ、これからちよいちよい来てよ、いいでしょ、待ってるわね」

彼はこんどは二割がた大きく微笑したが、なんの動作もしなかった。

「へっ、うみどんぼ野郎」とおさいは外へ出てから、口の中で罵った、「うすつ汚ねえもくしようめ、覚えてやがれ」

彼は将棋盤の前にあぐらをかいて坐り、深い溜息ためいきをついてから、頭をさげて盤面をみつめた。

「七八銀上りか」と彼は云った、「——つまり、棒銀をやらさねえってわけだな、すると、中飛なかびといく手か、へっへっ、おあいにくだが、その手はくわねえ、というこう」

彼は駒を取って打った。安物の盤の上で、その駒は冷たそうな、いい音をたてた。

經濟原理

私が沖の百万坪を歩いていると、三つ^{いり}の水路で少年たちが魚をしゃくつていた。近よつて覗^{のぞ}いてみたところ、バケツの中に鮒^{ふな}が十二三尾もいた。ひらたという川^{かわ}蝦^{えび}や、やなぎ鮠^{ばや}もいたが、鮒のほうが多く、それも三寸くらいの手ごろな、——というのは私が喰^たべるのに、という意味であるが、——形のものであつた。私はちよつとふところを考えてから、おもむろに少年の一人に話しかけた。するとかれらは号令でもかけられたように、水の中で

しやくつていた者も、バケツの番をしていた者も、魚を追ひ出すために杭くいや藻もの蔭かげを突ついていた者も、いちどきに私のほうへ振り返った。

「蒸気がし河岸の先生だ」と一人が他の者に囁ささやき、それから洩はなを横撫よこなでにして私を見あげた、「——なんてつただえ」

その鮎あなを売つてもらえないか、という意味のことを私は繰返した。かれらの顔になにか共通のものがはしり、さつと緊張にとらえられるのが認められた。そのとき私は「しまった」と思った。なにがどう「しまった」のか不明のまま、ひじょうな失策をした、ということ直感したのであつた。

少年たちは顔を見交わした。

「売んか」と一人が他の者に云った、「蒸気河岸の先生だぞ、な、売んか」

少年たちは唾をのみ、水漬を啜り、バケツの側にいた一人は片足の拇指で片足のふくら脛を掻いた。「いやじゃねえけどよ」と一人はバケツへ手を入れて一尾の鮒をつかみあげ、金色に鱗の光るその獲物をさも惜しそうに、また自慢そうに、そして私の購買欲を唆るように、惚れ惚れと眺めながら云った、「こんなえっけえ金鮒はめったに捕れねえからな」

「ンだんだ、みせえま」次の一人も一尾つかまえ、私のほうへ差ししながら云った、「鯉っこくれえあんべえがえ」

さらに一人、さらにまた一人と、六人いる少年たちが全部、暗

黙のうちに共同戦線を張って、私を懐柔^{かいじゆう}し、征服しようとした。かれらの眼は狡猾^{こうかつ}な光を放ち、その表情には鬪争的な貪欲^{どんよく}さがあらわれた。

私は決して誇張しているのではない、これは浦泊^{うらかす}という土地の気風なのだ。いつだったか、——むろんそのときより以前のことであるが、私は蒸気河岸^{わき}の脇のところ、これと似たような経験をした。もう夕方のことだったろう、河岸の道傍^{みちばた}で漁師たちが四五人、蓆^{むしろ}や桶^{おけ}を並べて、鯉^ぎや雑魚^{ざこ}や貝類などを売っていた。それは「日銭^{ひぜに}」を稼^{かせ}ぐためのものであった。規定としては、漁獲物はすべて組合へ納め、組合で一括してそれぞれの問屋へ卸す仕組になっていたが、ちよつと「日銭」が欲しいような場合には、

納入する責任量を超過した分だけ、立売りすることが黙認されていた。そして、他の土地から魚釣りに来て、不漁をかこちながら帰る客や、単純な遊覧帰りの客たちがあると、それはかなりうまい儲けになるのであった。——私は通りかかって、蛤はまぐりを売っているのをみつけた。大きな、粒の揃そろったみごとな蛤で、バターいためにしたらさぞ美味うまかろうと思い、近よっていつて、それを○《まる》五だけ売ってもらいたいと云った。私はもう一年ちかくも住んでおり、かれらともおおよそ顔見知り程度になつていたので、心の片隅かたすみではひとかどの土地者であるような誇りを持っていた。そのうえ私のまえに、どこかのかみさんがやはり○五だけ買ったところ、一斗いっとます掬くくらいの桶一杯分を渡したのを見ていたから、

もし私にもそんなに呉^くれるようなら、三分の一程度だけ受取ることにしよう、などと、おうようなことさえ考えていたのであるが、それらの予想や期待はあつさりとかつがえされてしまった。

「蒸気河岸の先生だね」とその中年の漁師は私を見あげた眼をすぼめた、「——この蛤を欲しいだかえ」

彼は自分の眼にあらわれる狡猾さと、顔つきが貪欲になるのをごまかすために、自分がいかにも無力な、悲しい男であるかのような表情を作った。

「そうさな」彼は蛤の一つを取って、それをじつと凝視した、

「——売ってもいいだよ、売るためにこうやって並べてるだから、売ってもいいだが」

私は辛抱よく待った。彼はその一つの蛤を丹念にしらべてから、やおら、すぼめた眼で私を見あげた。

「幾ら欲しいだね」と彼は云った。

私は必要な額を答えた。

彼は梅干を舐めた^なような顔つきで、蛤を六個だけ選び分けた。数は正確にいつて六個、しかもその一つ一つを、まるで真珠でもはいつていはしないかと疑うように、精密に、入念にしらべたうえ、選び分けたのであった。

「蒸気河岸の先生だからな」と彼は自分の情の脆^{もろ}さに自分ではらを立てたように云った、「——しよあんめえ、まけとくだよ」

私は少年たちの顔つきの変化を見て、そのときのことを思いだ

したのであつた。

「売んか、な」と少年の一人がなかまに云つた、「売んべや、な、かんぷり」

かんぷりと呼ばれた少年は涙を噉り、上を睨つかいに私を見、またバケツの中の鮎たちを見た。その少年は船宿「千本」の長ちようの同級生で、背丈が小さく、からだ軀も瘦せているが、頭だけが大きく、しかも鉢はちがひらいていた。かんぷりとはその木さいづち槌あたまに付けられた仇名あだなで、つまり「かぶり」というのが訛なまつたのだと思う。これは私の想像にすぎない、本当の意味はべつにあるのかもしれないが、とにかく、かんぷりはなかまの興望よぼうをになつて戦線の右翼にたつた、というふうにみえた。

「鮎は十五いんだ」とかんぷりは云った、「幾らで買ってくれつかえ、先生」

私はふところを考えてから答えた。

「えっ」とかんぷりは眼をみはり、きおいこんでバケツの中から鮎をつかみあげ、——それはもつとも大きな一尾であつた、——私のほうへと突き出しながら云つた、「しよつからへいつてみせえま、このくれえの鮎は一つで五ひやくもすんだぞ、先生」

このちび助のユダヤ人め、と私は心の中で罵^{ののし}つた。「しよつか

ら」とは堀南にある佃煮^{つくだにや}屋で、彼はその店で売っている鮎の甘

露煮を引合いに出したのだ。慥^{たし}かに、そのくらい大きな鮎の甘露

煮なら五ひやく程度は取られるかもしれない。私は頭が熱くなる

のを感じた。古^{ふる}箆^{ざる}でしゃくったばかりの鮎と、いろいろ手数を

かけ、調味料や燃料を使い、売り物としてきれいに注意ぶかく仕上げられた鮎とを、同一に比べるという法はないだろう。しかしまた、甘露煮にすれば一尾それだけの値になる物を、十五尾まとめて○三十で買うという根性も、相手を子供とみくびっているようにでもしいとも云える。前者の怒りと後者の恥とで、私は頭がほてってくるのを感じ、その複合したやりきれない感じに耐えられなくなつて、値段を○五十とつりあげた。少年たちはいっぽし商売人のようにねばつた。六人いるから○五十では分配がしにくい、もう一かん出してくれ。たった一かんくれえ惜しんでも倉が建つわけではあんめえし、と云つた。——それはこの土地の通言

で、なにかというときよく使われた。ビールをもう一本飲むとか、浦粕亭^{ていよせ}（寄席）へなにわぶしを聞きにゆこうとか、煎餅^{せんべい}でも買わないかなどという場合、相手が渋った顔でもみせるとすぐに、その言葉を投げつけるのであった。だが私は閉口しなかった。それで不足ならやめにしよう、と云った。みずからおのれをけがすような、やりきれない自己嫌悪^{けんお}とたたかいながら。少年たちは相談をし、私の決心が変らないことを認めて、ようやくその取引は成立した。

私はその鮎^{みそに}を味噌煮にした。骨まで柔らかにするためには、二日か三日くらい煮なければならぬ。もちろんガスなどはないので、火鉢に粉炭を入れ、味噌煮の鍋^{なべ}を掛けたりおろしたり、また

煮つまると水を加えたりしながら、煮あがるのをたのしみに待つのであつた。

中二日おいて、三日めの午^{ひる}ごろ、私は寝ているところを呼び起こされた。窓の雨戸を叩^{たた}きながら、先生起きせえま、と少年たちが呼んでいるのである。私は起きあがつて窓をあけた。外には五人の少年たちが、洗面器やバケツや空^{あき}缶^{かん}などを持って立っている。私を見ると一列縦隊に並んだ。先頭にいるのは「千本」の長で、かんぷりの顔も見え、みんな泥^{どろ}まみれのはだしであつた。

「鮒^ふとつてきただよ」と長が云つた、「買^かつてくれせえな、先生」私はかれらの期待に満ちた注目をあびて、自分に拒絶する勇氣のないことを悟り、かれらを勝手口へ廻^{まわ}らせた。そこでもかれら

は一列に並び、ひとりひとりが私に向つて自分の鮎に値を付けさせた。そのときになつて初めて、寝起きのぼんやりした私の頭が、かれらの奸悪かんあくな計略を理解した。つまり、まとめて売れば安くなるが、一尾ずつなら安い値踏みはできない、という狙いねらなのだ。「ほれ、みせえま」とかれらはそれぞれの鮎を私に誇示した、「こんなにあつけえだ、五寸くれえあるだえ、先生」

そして「しよつから」へゆけばこれ一尾で一かんは取られる、と云つて互いに頷うなずき、肯定しあうのであつた。私はそこでもまた自分が罨わなに落ち、縛りあげられたことを知つた。私はかれらの誘導にしたがつて、値段を付け、それらを買ひ取つた。

「いいさ」と私はかれらの去つたあとで自分に云ひ聞かせた、

「味噌煮にしておけば保つ^もからな、当分おかずに困らないで済むわけだ」

私はまへの味噌煮を井^{どんぶり}へ移して、それらの鮎を新しく味噌煮にしかけた。

人は信用しないかもしれない。私自身もこれを書きながら、たぶん人は事実だとは信じないのだろうと思うのであるが、少年たちはその儲け仕事があまりにたやすく、かつ確実であることに昂^こ奮^{うふん}と情熱を感じたらしい。二三日するとまたやって来て、さもうれしそうにはしやぎながら、窓の戸を叩いた。

「並べつてばな」と長の云うのが聞えた、「おんだらが先だぞ、押すな」

拒絶されようなどとは寸毫すんごうも疑わず、確信そのもののような少年たちの顔を見て、それだけで私は自分の敗北を認めた。——ここまで読まれた方は、もはや小悪魔どもが私を放さないだろう、と想像されるにちがいない。私にしても、仮にふところがもつとあたたかであつたら、容易にかれらの手からのがれがたかつたろうと思う。人は黄白こうはくの前には、しばしば恥を忍んで屈しなければならぬものだ。少年たちが四度めに襲撃をかけて来たとき、ふところの窮乏という現実に助けられて、私はきつぱりと鮎の買取りを拒絶した。するとそこに、まったく予想しない事が起こつて、私をおどろかせた。

私に拒絶されて、少年たちは明らかに失望し、途方にくれた。

かれらは顔を見交わし、先生が駆引しているのではないかと疑い、そうでないことを認めるともつと失望し、どうしたものかというふうに、それぞれの手にした器物の中の鮎を見まもった。

「みんな」と長が急に云った、「それじゃあこれ先生にくんか」
 くんかとは、贈呈しようか、というほどの意味である。途方に
 くれ、落胆していた少年たちの顔に突然、生気がよみがえった。
 それは囚われの縄なわを解かれたような、妄もうしゆう執しゆうがおちたような、
 その他もろもろの羈絆きはんを脱したような、すがすがしく濁りのない
 顔に返った。

「うん、くんべ」と少年の一人が云った、「なせ、これ先生にく
 ンベや」

「くんべ、くんべ」

「先生、これ先生にくんよ」とかんぷりが云った、「みんな、勝手へいつてあけんべや」

私は自分の大きな過誤を恥じた。

少年たちに狡猾と貪欲な氣持を起こさせたのは私の責任である。初めに私は「その鰯をくれ」と云えばよかったのだ。売ってくれと云ったために、かれらは狡猾と貪欲にとりつかれた。私のさみしいふところを搾^{さくしゆ}取しながら、かれらも幸福ではなかった。その期間、かれらは貪^{どんらん}婪な漁夫でありわる賢い商人だったからだ。私は深く自分を恥じた。

「先生にくんよ、か」と私は口まねをしてみた、「これ先生にく

んよ」

そう云ったときの、すがすがしく、よみがえったような顔つきや動作を思いうかべながら、私は深く自分を恥じた。

朝日屋騒動

朝日屋は堀一橋の近くで、河岸^{かし}通りに面している。間口六尺、奥行十二尺。五色揚を揚げて売る店^{みせ}台と狭い三尺の土間、部屋は六帖^{じょう}が一と間だけしかない。もともと古材木を叩^{たた}きつけて造った建物で、そのうえ年代が経^たっているから、「ぶつくれ小屋」とさえ云^いえないような、危なっかしい家であつた。——但^{ただ}し一つ、五色揚を揚げたり売ったりする店台だけは、まだかなり新しかった。それは障^{しょうじ}子一枚くらいの大きさで、揚げ鍋^{なべ}や金網つきの油

切りや、幾つかの壺つぼや皿さら、または経きよう木ぎの束などを置くだけの余地しかなく、しかもその小建造物は、古い家の外部へ、ごく簡単に釘くぎで打ち付けられたもののようであつた。

朝日屋の夫婦は五日に一度くらいの割合で大喧嘩おおげんかをした。亭てい主いしゅの名は勘六、細君はあさ子、どちらも寅とらだか午うまだかの三十二歳であつた。寅どしか午どしか判然としないのは、かれらが喧嘩をするときに、相手を痛めつける表現がときによつて違うからであつた。

「寅の八白だなんてぬかしやあがつて」と勘六が云う、「てめえなんぞ本当はひのえんまの元締じゃあねえか」

「干支えとしらべならてめえのを先にしろ」とあさ子はやり返す、

「笑わしやあがつて、てめえなんぞ午どしなら竹んま、寅どしなら張子はりこの虎とらがいいところだ、すつこんでやがれ」

勘六は博奕ばくちうち打だといつていた。東京深川のなにがし組で、かつてはあにい分だったという。酒を飲むときまって、そのころの派手なでいり話を口演するが、それもときと場合でいろいろと趣向を変えるだけの努力を払うのだが、身をいれて聞く者は誰だれもなかった。それについて、若い船頭の倉なあこが、いつも赤い頬ほっぺたに穏やかな微笑をうかべながら、次のように語ったことがあった。

何年かまえ、堀東の理髪店すきに杉さんという渡り職人がいた。五十年配の独り者で、半年ほどしかいなかったが、勘六のでいり話

を幾たびか聞いたのち、そういう語り物はしょうばい人に任せとくがいい、と云った。しょうばい人たあなんのこった、と勘六はひらき直つて左の腕を捲まくつた。左の二の腕にはんにやの面の刺いれず青みがあつて、勘六がどすをきかせようとする場合の薬味になつた。杉さんはそんなものには眼めもくれずに答えた。なにやぶしき。なにがなにやぶしだ。おめえのでいり話のときさ、あれはみんなにやぶしから取つたもんじやねえか。それがどうした、と勘六が云い返した。なにやぶしつてもものは博奕打のでいりを元にして語るもんだらう、してみればおれのでいり話をなにやぶしが取つたとも云えるじやあねえか、ええ。そして彼は自分のあたまのよさに酔い、例の浦うら粕かす的アフロリズムでしめ括くくりをつけた。

——大石ゆらの助は芝居を見てつから忠臣蔵をやらかしたんじやねえだろう。

杉さんはあいそ笑いをし、お見それ申しましたと云つて降参したが、あとで勘六の細君をさそい出し、三日のあいだ伴^つれ歩いてから、船橋という町で細君を放^{ほう}りだしたまま、姿をくらましたということであつた。

——勘六は口で勝つて手で負けた。

そういう評^{うわさ}が立ったが、夫婦喧嘩のときにもときたまそのことが引合いに出た。

勘六もあさ子も博奕が好きであつた。浦粕は小さな漁師町だから、博奕場などという大掛りなものは立たないが、慰み半分の寄

合はよくあつたらしい。そういうときには朝日屋へ知らせがある。
 相手は夫婦をかもにするつもりだが、夫婦はいっぱししようばい
 人のつもりで、——なぜなら、亭主はもとなにがし組のあにい分
 だったから、——義理を欠かすわけにはいかない、などと気取つ
 てでかけてゆく。亭主が元あにい分だとすれば、伴れ添うあさ子
 もずぶの素人^{しろうと}ではない。尤も彼女^{もつと}はごつたくやで稼^{かせ}いでいたの
 だから、ずぶの素人でないことは慥^{たし}かであるが、ここではもう一
 つの意味。つまり博奕打の女^{にようぼう}房^ふという鉄火^{てつか}な自意識をさすの
 であり、そのためには、亭主の負けがこんでくると、片^{かた}膝^{ひざ}立ち
 になつて赤いものをちらちらさせるといふ、特技を演ずることも
 辞さなかつた。

この特技は人によるそうである。若くて、小股こまたの切れあがった美人で、それが片膝立ちに構えると、下の肌着はだぎと肉躰にくたいの一部がちらちらし、そのため博奕を打つ手許てもとが狂うというのであるが、あさ子の場合は成功しなかったばかりか、「氣分を害しちゃう」という非難さえ起こった。それは彼女が若くもなく、小股の切れあがった美人でもないからではなく、なすびがさがっているから、という理由であつた。筆者はそれがどういう意味であるか、いまでもとんと理解できないのであるが、片膝立ちになつて赤いものがちらちらするとき、同時に、さがっているなすびが見え隠れしたのでは、——なすびがいかなる物であるか不明にしても、なんとなく「氣分を害する」という氣持がわかるように思えるではな

いか。

夫婦は博奕で勝つときもあつた。勝ったときは家へ歸つて、二人で酔っぱらつて、適当に口喧嘩をして寝てしまう。しかししたいいは負けるのがきまりで、するとあさ子がことば巧みに何人かを客として家へ伴れ歸り、しょうばい物の五色揚を肴に酒を飲ませ、博奕場で負けた分の幾割かを取り戻す、ということになるのであつた。

或るとき、駐在の巡查が来て、これを営業法違反であると指摘した。あさ子はべらんめえ調で猛然とはむかった。問答の細部はわかつていないが、あさ子は知っている限りの毒舌をふるい、若い巡查は昂奮のあまり口がきけなくなつた。

「わかりましたよ、ええ」とあさ子は云った、「そんなら五色揚げを店で売ればいいんでしょ、そうでしょう」

それから朝日屋ではそれを実行した。客を伴れて来て酒の支度をする、勘六が外へ出て店台の前に立ち、おい、てんぷらを呉くれ、とどなる。

するとあさ子が出て行って、おやいらつしやい、幾らあげますかと云う。幾ら幾ら呉れ。はい幾ら幾らですね。あさ子は五色揚げを經木に幾つか包んで亭主に渡す、お待ち遠さま、一つお負けですよ。おいよ。亭主は錢を渡し、經木包みを持って家へはいり、公明正大なような気分で飲みだす、というぐあいであつた。

或る日また若い巡査がやって来て、あさ子と激しくやりあつた。

五色揚屋は五色揚を店で売ることだけ許可されている、と若い巡查は云う。おまえのところでは、客に酒食を提供して勘定を取る、それは許可された営業とはべつの営業許可を取らなければ違反行為になる。ねえ、若い旦那だんな、とあさ子あさぎが遮る。おまえさんもわけのわからない人だね、このまえおまえさんがそう云ったから、あたしはちゃんと五色揚を売ってますよ、そりや買うのは亭主かもしれないが、誰であろうと店台の前へ立って五色揚を呉れと云えば客だよ、亭主だから売らないなんて云えた義理じゃないし、また、そんなことをすればそれこそ営業違反でしょう。待ちなさい、まあ待ちなさい、と若い巡查が遮った。待ちなさいってなにを待つのか、とあさ子が云った。おまえさん取調べに来たんでしょ、

取調べに来たんならこっちの申立てを聞くほうが先じゃないか、喧嘩の仲裁をするんだって喧嘩になったわけを聞かなきゃ仲裁はできない道理でしょ。いやまあ、と若い巡査が云った。これは喧嘩の仲裁ではないし。喧嘩っていうのはものの譬えたとですよ。まあ譬えはどっちでもいい、この件は取調べと云つても事実の証拠はあがっているんだから。なにが証拠ですよ、あたしは営業だから亭主にだって五色揚げを売りました、営業上売ったんだからあのことまでは知らないよ、あたしはその店台で売った、あとは買った人がどこで喰たべようとあたしの責任じゃないでしょ、買ったのがうちの亭主で、それだからこのうちへはいつて来て喰べたにしろ、それは買ったものの自由じゃないか。それはわかった、五

色揚げの営業はそれでいい、と若い巡査は云った。肝^{かんじん}心なのは五色揚げを誰に売るとかどこで喰べるとかいうことじゃなく、このうちで客を集めて酒食を提供し、その勘定を取るといふことだ、このうちで客を集めて、酒や肴を提供したことはないか。ありますよ、あたしが酒を買って来て、五色揚げを肴に飲んだり食ったりしますよ。それが営業法違反になるんだ。どうしてですか。どうしてって、つまりそれは五色揚げ屋の営業とは営業種目が違うからだ、つまり客を集めて酒食を提供し、それによって利益を得るを目的とするのは飲食業の。ちよいとちよいと、サーベルをぶらさげてるからってえらそうな口をきくんじやないよ、あさ子は片膝立ちになつて啖^{たんか}呵を切った。若い巡査は眼を剥^むいて、それから慌^{あわ}てて

そつぽを向き、あさ子はまくし立てた。若い旦那に訊^きくがね、おまえさん自分のうちで友達を集めて飲んだり食ったりするようなことはないかい、あるだろう、あるのが当りまえさ、そのときだね、失礼だけれど旦那方の給料はそんなにあるもんじゃない、番たび友達を呼んで飲み食いをして、それをいつもおまえさん一人で奢^{おご}るか。それはいつもそんなに集まって飲んだり食ったりしやしないよ。いいえさ、仮にするとすればいつも一人で奢るかっというんだよ、おまえさんどこを見てるのさ、人を取り調べるんならちゃんとかつちを見て饒舌^{しゃべ}つたらいいじゃないか、そつぽを向いたまんまでどうしようってんだい。いや、そつぽを向いてるわけじゃない、若い巡査はあさ子のほうを見たが、片膝立ちの部

分が眼にはいらないうように、視線を相手の胸から上へ固定させるためひきつけでも起こしたような眼つきになった。

「それは」と若い巡査は答えた、「そういうときには僕^{ぼく}たちは会費を出しあうことにしているよ」

「それが巡査の営業違反になるかい」

「僕はなにも営業なんかしていないよ」

「うちだってそうさ」とあき子が云った、「うちだって客と云えば云うものの集まるのはみんなお友達だよ、朝日屋で飲むのがいちばん気がおけなくっていいって集まって来るんだ、うちだって貧乏世帯だから番たび奢ってばかりいられやしない、お友達にしたらって番たびごちじゃあ気がひけらあね。それでお互いの飲み食

いした分を出しあう、いいかい、つまりおまえさん方の云う会費だよ、早く云えば、そうだろう」

「そこが違うんだが」若い巡査は帽子をぬいで、ハンケチで額と帽子の中を拭いた、ふ「会費というのは頭割りで幾ら幾らと」

「そこは違いますよ、違いますとも」あさ子は立てた片膝を左右に揺すった。若い巡査はいそいで眼をつりあげ、あさ子は云った、
「おまえさん方は行儀がいいからそんなことはないだろうが、こちとらの客は幾ら幾らなんておきまりどおりで済むような手合じやあないんだ、五色揚げを四五十も喰べて一升酒くらってけろつとしているやつもあるし、二合も飲めばへどをついてぶっ倒れるよ
うなろくでなしもいるんだ、それを頭割りで片づけるなんてあこ

ぎなまねは、営業でもしていればべつだろうが、こっちは営業じやあないからできやしないさ、それぞれ飲んだり食ったりした分を出しあつてもらう、これが当然じやあないか」

「僕は転勤したくなつちやうな」若い巡査は^{つぶや}呟いた、「僕はこの土地には性が合わないんだ」

「あたしやあ理の当然を云つてるんだよ」とあさ子は追い打ちをかけた、「友達を集めて飲み食いをして、お互いに銭を出しあつてそれで営業違反になるんなら、分署の旦那方が会費を出しあつて宿直で飲み食いをするんだって営業違反つて勘定だろう、うちには五色揚げをしているから違反で、ほかのうちはほかの営業をしているから違反じやないなんて、そんな理屈がとおるか」

「おばさんの云うように云えばそうなるけどね」と若い巡査はまた帽子をぬいで汗を拭いた、「いいよ、僕にはこの浦粕つて土地は向かないんだ、僕は転勤させてもらうことにするよ」

この結末をあさ子が自慢にしたことは云うまでもない。実際にはあとから分署の部長が来て、始末書を取られたか、なにがしかの料料処分になったようだが、「大学出の若いちやきちやきの巡査を理詰めで降参させた」というので、あさ子はすっかり女をあげたものであった。その巡査が大学出であったかどうか、転勤の請願がとおったかどうかとも不明ではあるが、――

夏のさかりの或る午後、朝日屋の夫婦が本式の大喧嘩をした。

夫婦でひるねをしていたところ、あさ子が足で勘六の頭を蹴^けった、

というのが事の起こりであつた。

「大げさなこと云うんじゃないよ」とあさ子が云つた、「眼がさめたら汗ぐつしよりで喉^{のど}が渴^{かわ}いてたから、氷でも取ろうじゃないのつて、ちよつと突いてみただけじゃないか」

「ちよいと突くにしても場所があらあ」と勘六はどなつた、「女のかせえして寝そべつたまんま、飯にも亭主の頭を足で小突くつて法があるか、飯に戸口の敷居を踏んづけたつて足が曲るつてえくれえのもんだぞ」

「敷居を踏んづければどうして足が曲るんだい」

「べらぼうめ、敷居は親の頭も同様だつていうんだ」

「へええ、おまえあたしの親かい」

「親なら半殺しのめにあわせるところだ、仮にも女房だからがまんしてりやあいい気になりやあがつて、やい起きろ」と勘六は絶叫した、「亭主が起きて文句を云つてるのに、ぞべりけえつたまんま聞いてるやつがあるか、こら、起きろつたら起きねえか」

「うるさいね子供じやあるまいし、起きて聞こうと寝て聞こうとあたしの勝手だよ」とあさ子は云い返した、「それとも起きて聞くほどごたいそうな文句でもあるつてえのかい」

「このあま、もうがまんがならねえ」

「なにをすんだいこのもくぞう」

平手打ちの音と共に、取っ組みあいが始まり、器物が倒れたり毀^{こわ}れたりする音が、例によつて賑^{にぎ}やかに聞えた。

それから「出ていけ」になるのだが、そのときそれを云いだしたのは、あさ子のほうであつた。

「仮にも亭主に向つて出ていけたあなんだ」と勘六は息を切らしてどなつた、「おらあな、三十円という大金を出して、てめえを
ごつたくやから身受けしてやつたんだぞ」

「身受けをしたのはてめえの勝手だ、こつちで頼んだわけじゃあ
ねえや」とあさ子は喚^{わめ}き返した、「三十円三十円つて、てめえは
三十円出しただけじゃねえか、この家はいったい誰のおかげだよ、
おれが日の出屋のじいさまに頼んで金のくめんをして、家賃をか
けあつたり造作を入れたりして、そのおかげで寝起きができるよ
うになつたんじゃねえか、そうじゃねえのかい唐^{とうへん}変^{ぼく}木」

「おらあ血の涙も出ねえ」勘六は呻^{うめ}いた、「てめえはな、そいつだきやあ云つちやあなんなかつた、てめえが朝日屋つて屋号にきめたときおらあ勘づいてたんだ、てめえの名と日の出屋の名をくつつけたんだなつてよ、だが仮にもおらあ男だ、じつと肚^{はら}あ押えてがまんして来たが、もうこうなつたら男としてがまんできねえ、てめえとはたつたいま縁切りだ、出てうせろ」

「縁切りだなんて恰^{かつこう}好つけたこと云うんじゃないよ」あさ子は平然と云い返した、「別れたけりやあ別れてやるからさつきと出ていきな、ここはあたしの家なんだから、断わつておくが出てゆくのはおまえさんのほうだよ」

「出てつてやらあ、なんでえこんなぶつくれの乞食^{こじき}小屋あ」と勘

六が云った、「その代りな、表の店台はおれの錢で拵こしらえたもんだから、おれが持つてくからそう思え」

勘六ははだしで外へとび出した。顔には幾筋もみみず腫はれができていたし、髪の毛の薄い頭には瘤こぶがふくれていた。彼は船宿「吉井」へいつて道具を借りて来ると、店台をべりべり引き剥はがしにかかった。

「なにをするんだよこの山犬あ」あさ子がとび出して来て、なきり声をあげた、

「なんのまねだい、それをどうしよってんだよこのひよつとこは」
「おれの物をおれが持つてくんだ」と勘六は喚いた、「ざまあみやがれ」

「誰か来て下さいよう」とあさ子は泣き声で叫びたてた、「どなたか来て下さいよう、この泥棒^{どろぼう}があたしの家を毀しますよう、どなたか駐在さんへ知らせにいつて下さいよう」

あさ子は腰巻一枚で、いかんせん往来で亭主につかみかかるわけにはいかなかった。もちろん、彼女のために、助力しようというような、お節介な人間はその近辺にはいない。勘六はたちまち店台を剥ぎ取ると、それを担^{かつ}いで「吉井」のほうへ走りだし、吉井のべか舟を借りてその財産を乗せると、根戸川のほうへ漕^こぎ去ってしまった。

「骨つ腐り——」と根戸川べりまで追つていったあさ子は、べか舟が見えなくなるまで叫んでいた、「かつてえぼうのうみどんぼ

野郎、
くたばっ
ちめえ
――」

貝盜人
ぬすつと

私は私の青べかで海へ出た。茶の入った大きな湯沸しと、魚煎餅んべいとあんこだまと、二三冊の本を持つて。夏でなくとも、晴れて風のない日に海へ出ると、水面からの輻射熱ふくしゃねつで暑い。私はパンツにポロシャツを着ただけで、大きな麦藁帽むぎわらぼうをかぶつていた。海へ出ると權かゐをあげ、舟を流し放しにして本を読む。汐時しおどきさえ計っておけば、舟は殆んど同じところを動くことはない。読み飽きれば帽子を顔にかぶせ、舟底へ横になつて眠つてもいい。

或るとき眠り忘れて退き汐になり、そうなる櫓で漕ぎ戻るのは困難だから、少なからず狼狽したけれども、沖の漁から帰つて来る知りあいの機械船をみつけて、浦粕まで曳き戻つてもらうことも覚えた。

春から初夏にかけて、浦粕の浜では「活け場」の看視人がいそがしくなる。

大汐のときには水際から四五キロも沖まで水が退き、ところどころ汐の溜りを残すほかは、見渡す限りの干潟になるため、汐干狩の客の多いことは云うまでもない。これらの中には狡い者があつて、看視を怠ると貝の代金を払わずに帰つてしまう。つまりっかりして忘れる客もあるが、計画的に貝を盗みに来る者もある

ので、客の混むもの日など、番に当った看視人は精根を使いはたすのが常であつた。

このほか、嚴重に禁じられている「ころがし」も見張らなければならぬ。それは三みつまた又になつた棒の先に、釘くぎを曲げたのを植えつけた輪があり、それをさりげないようすで転がして歩く。すると、水の底にいる小魚が、みんなその輪に植えた曲げ釘にひつかかつて来るので、底の小魚はきれいに掠さらわれてしまう。それでは魚が育たないので、保護するためにころがしは禁じてあるのだが、看視人の眼めがゆるむと、かれらはどこからともなくあらわれて、すばやく魚を掠めつてゆくのであつた。

暢のんき気なほうでは、月夜の「踏み」と、「鱸すずき拾ひろい」がある。

魚を踏む話はすでに紹介したが、鱸拾いもほかでは聞いたことのないものである。これはその日の稼かせぎにあぶれた人たちが、東京あたりからはるばるやって来るのだというが、——土地の漁師の説によると、鱸という魚は相当ぬけたところがあるそうで、汐の退くときに汐が退くことを忘れして、気がついてみると干潟の中の汐溜りに残されてしまい、そこからのがれ出ようとしていたずらにあばけるのだという。それをみつけて捕るのだから、字義どおり「拾う」のであって、私もしばしば、鮭さけくらいの大きさの鱸を、肩にひっかけて帰る労務者を見かけたことがあった。

そのころでも、鮭くらい大きい鱸は、東京の料亭りやうていなどへ持つてゆくと、六か七、うまいときには一〇くらいになるとのこと

で、いつもふところの寒い私も、そういう幸運にめぐりあいたいものと思い、何回となく干潟を歩きまわったものであるが、ついに一度もまぬけな鱸に出会うことはなかった。

さてその日、——私は私の青べかを流し放しにして、汐の中で横になり、「青巻」という本を読んでいたが、読み飽きて、ふと気がついてみると、いつか汐が干てしまい、青べかは砂上に坐^{すわ}っていた。私は本を置いて起き直り、あんこだまと魚煎餅を喰^たべ、なまぬるくなつた茶を飲み、暫^{しばら}くぼんやりしてしてから、ひとつ貝でも採つてやろうか、と独り言を呟^{つぶや}いた。——断わつておくが、そのとき私は浜の制度についてなにも知らなかった。その沖が貝の活け場であることも、「ころがし」のことなども知らなかった。

そうして青べかからおりて、なんの目算もなく干潟の砂を掘ってみると、なんと、拳こぶしくらい大きな赤貝が幾らでも出て来た。

「すげえや」私は胸をおどらせながら叫び声をあげた、「こりやあすげえや」

私は昂こうふん奮し、軀からだじゆうに幸福感が満ち溢あふれるのを感じた。赤

貝はそれほど大きく、また、信じがたいほど数多く、掘れば掘る

だけ出て来た。私はそれらをいちど青べかの中へ運び入れ、戻つて来てまた掘った。するとこんどは蛤はまぐりにぶつつかった。蛤もそれ

までに見たことのないみごとなやつで、しかも粒そろが揃そろっていたし、掘る手を待ちかねていたかのように、ぞくぞくと転げ出て来た。

そのとき私は、満ち溢れる幸福感の中に一種の不安、不安とい

うほどはつきりしたのではなく、人間が幸福すぎるときに感じる「これは現実のものだろうか」といったような、おちつかない気分が小指を動かすのを感じた。そうして、その気分を立証するかのように、一人の男が近よつて来た。——それは逞たくましい男であつた。ぼつたと呼ばれる腰つきりの冲着の下から、古びた下帯を覗のぞかせ、裸の太腿ふとももから脛すねへかけてびっしり毛が生えているうえに、筋肉がこりこりと瘤こぶをなしていた。陽ひにやけた顔もぶしう髭ひげが伸び、濃い眉毛まゆげの下の大きな眼は、いまにも私を覗ねらつて弾た丸まを発射する二つの銃口のようにみえた。

「なにをしてるだね」と男は云つた。

私は答えて、砂上に掘り出してある蛤を指さした。男は蛤を見、

私の顔を吟味するように見、それから蛤を見て、また吟味するよう
に私を見た。

「どこから来ただね」と男が云った。

私が答えると、男は振り返って私の青べかを眺め、齒をむきだ
して冷笑した。

「青べかを買ったのはおめえか」と男は云った、「すると蒸氣河
岸の先生だね」

私は肯定した。

「じゃあ信用すべえが」と男は権力の代行者のように云った、

「ここは貝の活け場だ、こんなところで貝を採ったりするとただ
じゃ済まねえだよ」

彼は私の掘った蛤を取ると、水のあるほうへばらばらと放り投げた。やっぱりそういうことか、と私は思った。こんなことがあるわけではない、こんなに大きな赤貝や蛤がぞくぞく出て来るなんて、それだけで訝しいと気がつくべきじゃないか。私はそう思いながら、青べかのほうへ歩いて行って、さっきの赤貝どもを男のするように、取っては投げ取っては投げした。蛤の解放を終った男は、たぶん私の正直さを認め、いくらか気の毒にもなったのだろう、砂の中から大きな灰色の二枚貝を掘り出すと、それを持って私のほうへ歩みよって来た。

「こいつはおーの貝つてえだ」と男はその貝を私の手に渡して云った、「これならいくら採っても構わねえだよ、そううめえって

わけにやあいかねえが、まずくつて食えねえつてこともねえだ、
そうさ、するめに似てんべえかな、おおあじ大味だがするめつくれえに
は食えるだよ」

その貝は私の拳を横に二つ合わせたほどの大きさで、べらぼう
に重たかった。私は生れつきするめが嫌きらいであり、いまなお嫌い
で、酒を飲みについている店でするめを焼き始めでもすれば、待
ったなしに退散するくらいである。したがって、そんな味のする
貝などを採る気はなかったが、ゆきがかり上そんな顔もできず、
大いに乗り気になったふうをよそおつて、そのいまいましい貝を
五つばかり掘った。

そのとき男は、沖のほうへ歩いてゆきながら、よく響くしおか

ら声で「そのしとー」となった。

私が見てみると、二百メートルほど沖を一人の男が西に向つて

歩いていた。印半纏しるしばんてんに足は裸で、頬ほおかぶりをし、両手をうしろ

腰に組んだまま、ひどく暢びりと歩いているのである。そこは

脛の半ばぐらいまで水があり、男はその水の中で立停たちどまつて振り

返つた。

「おめえそこでなにしてるだ」とこちらの看視人がどなった。

「なんか用かね」と男はどなり返した。

「そこでなにしてるかつて訊きいてるだよ」

「このとおり」男はうしろ腰で組んでいた手を解き、なにも持つていないことを証明するように振つてみせた、「——おらなにに

もしてねえだよ」

「なんにもしてねえつて」と看視人が云った、「そんなとけへなにしに來ただ」

「ええびだよ」と男は答えた。

ええびとは「歩み」というほどの意味で、つまりここでは散歩と解釈してもいいだろう。男はそう答えながら、ぶらぶらと、老百姓が田を見廻みまわつてでもいるかのように、暢氣そうに歩きだした。

「ええびだつて」と看視人はそっちへ近よりながら問い返した、

「なんのええびだね」

「なんでもねえさ、ただええびに來ただけだよ」

「こんなとけへかね」

「こんなとけへさ」

「ちよつと」看視人は足を早めた、「おめえどこのしとだえ」

「おらがどこのもんかつて」と男もまた足を早めた、「どうしてだね」

看視人はさらに足を早めた、「どうしてもいい、どこのしとかつて訊いてるだ」

「おらついそこのもんよ」

「ついそこたあどこだ」

「葛西^{かさい}のちつと先よ」

「ちよつと待て」看視人はもつと足を早めた、「葛西のちつと先とはどこだ」

「ちつと先とはちつと先のことよ」男も同じように足を早めた、
「なんでそんなこと訊くだえ」。

「訊く用があるから訊くだ、待て」と看視人は駆けだした、「待て、いしやあどこのなんてえもんだ」

「おらか」と男が答えた、「おらなんちゅうもんでもねえだよ」
「待てこら、待てつちゅうに待たねえか」

看視人の足が水しぶきをあげ、男はひよいと跼かがんで水の中へ手を伸ばした。これはたまらぬ、とてもいったような動作で、すばやくなにかを手繰たぐると、大きな包みを水の中から引揚げ、それを肩に担かついで駆けだした。包みの中は貝であろう、包みの口をしめた紐ひもの先を足首に結びつけて、さりげなく水の中をひきずつてい

たものとみえる。看視人は喚わめきながら追いかけて、男は包みを担いで逃げた。看視人も早いが逃げる男も早く、二人の蹴けた立てる水しぶきは、しだいに遠くなり、やがて根戸川の川口のほうへと、見えなくなつていった。

私は青べかの中へらくに坐り、あんこだまと魚煎餅を喰べ、ぬるい茶を飲んで、また「青巻」を披ひらいた。

「ただのええびか」私は独りで笑つた、「うまく逃げてくれよ」

狐火きつねび

梅雨のあけかかった或る夜、——高品さんの家の炉端に、常連の蒸気乗りや船頭たちが集まつて、茶と菓子をつまみながら話していた。雨はあがったが気温が高く、障子しょうじをあけ放した縁側のほうから、ときどきひんやりした微風が吹きこんで来た。

私は末吉エンジニアと五目並べをしていた。末吉エンジは四十年代がらみで、蒸気乗りだから色は黒いが、細おもてのなかなかかな美男であり、さぞ女にもてるだろうし、道楽もするだろうと思わ

れるが、実際には酒もタバコも口にしないし、子供のない夫婦っきりの生活は、極度に儉約だといわれていた。——一例をあげると、月給はそのまま郵便貯金にしてしまい、生活費は高品さんの奥さんから借りるのである。むろん計画性に立つ儉約生活だから、借りる金額もさして多くはないし、次の月給日にはきちんと返済する。そして残りはまたそっくり郵便局へ持ってゆき、金が必要になると高品さんの奥さんから借りるのであった。

——たいしたお金じゃないから貸し惜しみをするわけじゃないわよ、と高品夫人はいつか私に語った。だけれど郵便局へ預けた分には利子が付くでしょ、自分のお金には利子が付くようにしておいて、生活費のほうは人から借りるなんてこすいじゃないの。

貧しさから生れる知恵はつましく、そしてたいいはかなしいものだ。末吉夫妻の知恵は貧しさから生れたものではない。夫妻の生活は貧しいものだろうが、その知恵は貪欲どんよくに通じるように思える。

——いまに高利貸しでもやるつもりだろうさ。

蒸気乗りたちは蔭かげでそう云いっていた。

私は末吉エンジンと五目並べをしながら、相手の置く石の一つ一つが、みな三四、または四四になるような、極めてゆだんのならない気分を味わっていた。そのうちに高品夫人が、あら狐火だわと云い、縁側の外のほうを指さした。——十坪ばかりの庭のはずれに、垣根かきねのようになった樹立こたちがあり、そこから先はずっと田圃たんぼ

つづきで、あいだにバスの通る道があるほかは、殆んど家もなかつた。そのときは夜であつたし、梅雨空のことでまっ暗だから、田植の済んだ田の面さ^もえ弁別できなかつたが、かなり遠いところに、赤い小さな火が七つか八つ、横に並んでいるのが見えた。

「どじよう捕つてるだよ」と三十六号船の留さんが云つた、「田植のあとでは鉾^{ほこた}田のほうでもよくやるだ、ありやあどじようを寄せるカンテラだよ」

だが留さんは急に黙つた。

その赤い火の群れが、左と右へひろがり、同時に数も三倍くらいになつた。少なくとも二十くらいになり、その位置も一段ほど上へあがつたのである。これは人の話ではなく、私が現実に自分

の眼^めで見たことだ。その赤い火は初め七つか八つであり、それが突然、左右へ数を増してひろがり、一段ほど高くあがったのだ。

「狐火だ」と留さんが云った、「おつかねえ」

「留さん初めてじゃないでしょ」と高品夫人が云った。

「おら見ねえことにしてるだ」と留さんは答えた、「あれを見ると化かされるっていうだからな」

「どう化かされるだ」と漁師の吉さんが訊^きいた、「おめえもう見ちまったじゃねえか」

「おらを見てくれ」と留さんは振り向き、自分が固く眼をつむっていることを示した、「狐火だなと思ったからおらずぐに眼をつむつただ、みんなも見ねえほうがいいだよ」

「どう化かされるだつてば」

「よくは知らねえが」と留さんはあたりを憚はばるように云つた、

「あの火はまやかしだつてえだ、向うに火を見せておいて、狐はすぐ側そばにいるだ、そして人間が火に見とれているうちに、たましいを抜いちまうつて云うだよ」

「たましいを抜いてどうするだ」

「化かすのよ」と留さんが云つた、「人間にたましいがあるうちは化かせやしねえ、だからまず先にたましいを抜くだつてえだ」

「へえ」と吉さんが云つた、「へええ、おら初めて聞いた」

吉さんはなお留さんに構い続けた。

私は狐火のほうを見ていた。その火はまた変化して、元の位置

にさがり、数も七つか八つになった。そうかと思うと等間隔のま
ま左へ大きく移動し、安ガラスをとおして見るように歪^{ゆが}み、こち
らの瞳孔^{どうこう}が震^{しん}顫^{せん}するように、不安定に揺れながら、また左右
へひろがって、二十以上にも数が殖えた。

——氣流のいたずらだな。

私はそう思った。密度の異なる氣流の層が交わると、一種の蜃^し
氣^{んき}楼^{ろう}に似た現象を起こす、といったようなことを讀んだ覚えが
ある。その夜は氣温が高く、梅雨どきらしく蒸^むしていたが、とき
どきひんやりした微風が吹いて来た。おそらくそんな氣象狀況が
そういう現象を見せるのであろう。事實は留さんの云ったとおり、
どじょうを捕るカンテラ火で、数も七つか八つにちがいない。眼

に変化して見えるのは虚像なのだ、私はそう思ったが、だれ誰にも話すつもりはなかった。

「いいかげんにしろよ、吉」と末吉エンジが云った、「留さんをからかったって一文にもなるわけじゃないかなんべえに」

彼は狐火にさえ関心がないらしい。ずっと碁盤の上をみつめていたらしい眼を、ゆつくりとあげて私に云った。

「先生の番だよ」

芦^{あし}の中の一 夜

たぶん九月だったと思う、私は「青べか」を漕^こいで、堀^{ほり}を東の浜へ出た。その浜にはまえに書いた海水浴場があるし、海へ出るまでの浅い水路はごかいを捕る場所になっていた。ごかいほちろん魚を釣^つるのに使う餌^えで、浅瀬の砂の中に棲^すんでい、月に五回、「砂を抜けて海へ出る」という。そのためごかいというそうであるが、学問的に正しいかどうかは知らない。それは夜半に始まるので、漁師や釣舟屋の船頭たちは、口のひろい長さ一メートル半

くらいの木綿の袋を持っていて、穴からぬけて海へ出ようとすると、ごかいをその中へ流れ込むように仕掛けるのであった。

私が初めて東の浜へ出たのは、ごかい捕りとは関係がない。その浜には芦の畑があり、魚がよく釣れると聞いたからである。芦の畑などというと不審に思われるかもしれないが、実際に水際^{みずぎわ}の広い地域に、幹の太さや葉の色などで個性をあらわした芦が、——たぶんそれぞれの用途によって区別されるのである。——

稲や麦を作るように、規則正しく分類して育てられ、晩秋から冬にかけて順に刈り取られるのであった。その芦畑のあたりは、冬になると水鳥類のよい猟場になり、芦の茂っているうちは、縦横に通じている水路が魚の寄り場になる、といわれていた。

私は「青べか」を水路の一つへ漕ぎ入れ、例のとおり漠然と
した勘によつて釣糸をおろした。どれだけ収穫があつたか、それ
とも一尾も釣れなかつたか、私のノートにはなにも書いてない。
それよりも水路を釣り廻^{まわ}っているうちに、私は十七号の廃船と、
幸山船長にめぐり会つたのである。いつそんなところにいったか
わからないが、人の呼びかけ声に振り返つて見ると、十メートル
ほどうしろの芦の中に、白く塗^そつた一艘の蒸気船がもやつてあり、
そのとものところに、一人の瘦^やせた老人の立つているのが見えた。
「そんなとこじゃ釣れねえだよ」と老人は特徴のあるしやがれ声
で云^いつた、「こつちへ来せえま、この船の上から釣ればいいだ」
私はへどもどとなにか答えながら、その老人のようすを観察し

た。

そこは水路のゆき止りで、向うに松並木のある岸が見え、船は
 そちらを舳先^{へさき}にしてもやってあり、底が浅いため、岸に繋^{つな}いだほ
 うが高く、ぜんたいが艫^{とも}のほうへかしいでいた。老人の年はわか
 らない、痩せたひよろ長い軀^{からだ}に、両前ボタンの古ぼけた制服を着
 かぶっている帽子には錆^さびて黒ずんだモールと、徽^き章^{しょう}が付いて
 いた。通船の船長の正装であるが、上着から下は裸で、皺^{しわ}くちや
 になった渋色のパンツが見えていた。顔は汐^{しお}やけがして黒く、頬^ほ
 も眼^めもくぼんでいるが、顎^{あご}は逞^{たくま}しく張っており、眩^{まぶ}しそうに寄せ
 た眉毛^{まゆげ}は灰色であつた。

老人は私と話したいようすを示したが、私はなんとなくおちつ

かず、——というのは、そんな芦畑の中に古い通船があることも、その船にそんな老人がいることも、少なからず非現実なような感じがしたからであるが、——またこの次に来よう、という意味の返事をして、まもなく「青べか」を漕ぎ戻した。

それから二三日経った或る夜、高品さんの家の炉端でその老人の話をした。

「ああ幸山船長ですよ」と高品さんが穏やかに笑いながら云った、
「息子もちゃんとしているし、嫁にいった娘もいるんですがね、
ああやって独りぐらしをしているんです、
人嫌いでね、おかし
なじいさんですよ」

幸山船長は東湾汽船に四十年の余も勤めた。十三か四で見習い

になり、それから水夫、エンジン―、船長になったが、四十余年のあいだ一度も事故を起こさなかったし、その勤めぶりも模範的だったので、会社から幾たびか表彰された。停年になったが、幸山さんは船からおりることを拒絶し、そのまま五年も舵輪^{だりん}を放さなかった。

ここでちよつとブル船長のことを記しておこう。ブルさんと仇^あ名^だされる波木井船長は、東湾汽船の三十六号船の船長だが、停年が過ぎたのに頑^{がん}として船をおりない。彼は脂^{あぶら}肉^{にく}をぞんざいに寄せ集めたように肥えていて、歩くと軀じゅうの肉がだぶだぶ波打って揺れる。それもいちようにではなく、胸のところはこちらへ、腹や腿^{もも}の肉はこちらへというぐあいだ、見ているのが恥ずか

しくなるほど歩きにくそうであり、また必要のない限り殆んど歩
 くことはなかった。顔もたつぷりと肥えてい、^{まぶた}瞼が垂れさがつて
 いるため、眼は糸のように細く、視力も極度に衰えていた。顎の
 ところには厚い肉が^{ひだ}襞をなしてたたまり、首を曲げるとその肉襞
 がぐりぐりと動いた。——ブルさんとはその^{ふうぼう}風貌ぜんたいをさ
 した仇名であるが、あまり似すぎているため、^{かえ}却つて興ざめなく
 らいであつた。そのブル船長の視力は、二十メートル先もよく見
 えないうくらいだから、自分の眼では舵輪を操ることができ
 ない。そこで水夫の留さんが舳先に構えていて、「おも^{かじ}舵」とか
 「ゴーヘー」とか「とり舵」とか「ゴースタン」などと、大きく
 手を振りながら叫び、それによつて船長は舵輪を廻し、エンジン

―への合図の鐘を鳴らすのであった。多少頭が温かいといわれている留さんには、それがなによりも誇りがましい任務だったろう、彼は酒に酔ったりすると、しばしば得意げにこう云ったものである。

――おらあがいねえば三十六号はやみだ。

それでもなお船をおりないブルさんのように、幸山船長も頑強にねばった。そうして、幾たびかめの辞職勧告に、多額の退職金
が示されると、幸山船長は「金は要らないが十七号を呉くれるなら退職する」と答えた。

十七号はすでに廃船となつて、徳とくぎ行ようの岸に繋がれていた。

いくらで払いさげるといふことにさえ、関心を持つ者がなかった

くらいなので、幸山船長の交換条件はころよく受入れられたのであった。——そこで彼は、十七号を東の浜まで曳^ひいていつてもらい、現在の位置に繫^け留^{いりゆう}したうえ、そこで自分ひとりの隠退生活を始めたのである。幸山船長には息子と娘があり、息子はT物産に勤めていい月給を取っているし、娘の嫁入った先もかなり裕福な商家で、どちらも父親を引取りたいと望んだ。幸山船長の妻はずっとまえに病死したから、世間に対しても、父親をそんなふうにはほつたらかして置くわけにはいかなかったのだろう。けれども、幸山船長は十七号船から動かなかった。浦^う粕^{らかす}の人たちに云わせると、——ふじつばが岩にひつ付いたみてえ、だそうで、息子と娘とはやむなく、毎月の仕送りをすることで、各自の良心

を慰めている、という話であつた。

船乗りの船に対する執着と愛情については、外国の小説などによく描かれているが、私はブルさんがいまなお見えない眼を剥いて舵輪を放さないことや、この幸山船長の話に深い感動をおぼえた。

「あの十七号は」と私は訊いた、^き「老人がずっと乗っていた船なんですな」

「いや」と高品さんは柔和に答えた、「まだ水夫だったところに四年乗っただけでしょう、あれはもと外輪船だったのを改装したもので、廃船になるまえは荷物専門に使われていたそうですからね」

私はちよつと失望した。高品さんの云うことが事実とすれば、その話のロマンティックな味わいはずつと減少するからである。

「それにしても」と私はまた訊いた、「どうしてあんな人けのない芦畑の中でなんぞくらしているんですかね」

「さあね」高品さんは炉べりでキセルをはたき（高品さん夫妻はどちらもキセルで刻みタバコを吸われた）新しく詰めたタバコに火をつけてから云った、「いろいろな話があるけれど、本当のところはわかりませんね、なにしろ變つてゐるじいさんだから」

秋の末ごろになつて、私は一夜その十七号で幸山船長と語りあかした。

それまでは四五回ばかり、「青べか」を漕いでそこへゆき、船

長と話したり、一度は船の上へあがつてみたりした。幸山船長の一日の大部分は、十七号の清掃と機関を磨く^{みが}ことに費やされるようであつた。船体の白いペンキはいつも塗つたばかりのようにみえたし、^{だえんけい}橢円形の船尾板にある（東・二号）という文字は、入念に描かれた青いペンキの唐草模様で囲まれていた。――蒸気の機械もつねに磨かれ、油を塗られるため、まるで新造船の機械のように光り輝いていた。甲板にある船長の席はきれいに整頓^{せいとん}され、木工部や舵輪は飴色^{あめいろ}に拭きこまれており、機関部へ命令を伝える鐘や、それに付いている打金紐^{うちがねひも}までが、新品同様に保持されている、というぐあいであつた。――これらの事実は、高品さんの話と矛盾するように思われたので、念のため私はその点を

訊いてみた。幸山船長は徽章とモールの付いた帽子を持った手で
ぼんのくぼを搔かいた。

「そうさな」と幸山船長は考えぶかそうに、特徴のあるしやがれ
声で云った、「そうさ、——おらが乗ったのは十九の年の二月で、
それからまる四年くらいだっけかね、まる四年とちよつとだと思
うが、詳しい月日は覚えてねえだよ」

それでは高品さんの云うとおりなので、十七号船そのものに特
別の執心があるわけではないのだな、と私は思った。

たぶん十月の中旬だったと思う。月のいい晩で、風はないが気
温は低かった。釣舟宿「千本」の倉なあこが、ごかいを捕るところ
を見せるというので、私は「青べか」を漕いでいっしょに東の

浜へいった。——夜の十時ころだろうか、堀が海へ出るところは浅瀬で、左右の岸が、退き始めた汐の中で二条の砂嘴をなしている。いつてみると、そこにはもう集まって来たべか舟の灯が十五六も見え、すでに仕掛を始めている者もあった。——私は倉なあのこのするのを見たが、まえに記した袋の口の四力所を、二本の女串に結び付け、その女串を水の中の砂に立てる。すると袋の口はほぼ四角形にあいて、下辺が砂地にぴったり着き、穴をぬけたごかいが流れて来れば、しぜんとその袋の中へはいる、というわけであった。——倉なあこは仕掛をしながら、例のゆつくりした訥であつた。——

つべん
弁で、以上のことを説明してくれたのだが、その説明が終るのを待っていたように、誰かが私に呼びかけた。

振り返ってみると、反対側の砂嘴に、幸山船長がカンテラを持つて立っていた。

「ごかい捕りかね」と船長が云った。

私が答えると、船長は片手に持っている袋を、胸の高さまであげてみせた。

「今夜はぬけるのが早かっただ」と幸山船長はしやがれ声で云った、「おらもう捕ったからけえるところだよ」

それから人恋しげな口ぶりで、問いかけるように云った、「いっしょに船へ来ねえかね」

私は倉なあこを見たが、彼は黙って次の仕掛をやっていた。ちよつと迷ったが、人恋しげな船長の口ぶりは私をとらえてしまい、

それを振り切ることはできなかった。私は倉なあこに声をかけて
おいて、船長のべか舟のあとから「青べか」を漕いでいった。伸
びるだけ伸び、茂るだけ茂った芦のあいだの水路は、月の光の蔭^{かげ}
になって昏^{くら}く、どこを曲るのか順路がわからなかった。しかし幸
山船長にとつてはそうさもないことだったのだろう、私のまだ知
らないような、幾曲りかの細い水路をぬけて、驚くほど短時間に、
十七号船へゆき着いた。

三十分ほど経ってから、私たちは長四帖^{じょうしゅう}ほどの狭い船室で、窮
屈^{すわ}に坐つて茶を飲んでいた。それはどの船にもある設備で、腰掛
ける客のほか、坐る客のために設けられているのだが、その十七
号はもと外輪船だったからであろう、他の通船のそれより幾らか

広いように感じられた。——左右は硝子ガラスを嵌めた窓、うしろは機
 関部と仕切られた板壁、前方は腰掛のある広い船室であるが、そ
 こには障子しょうじが取り付けられているし、床には畳が四帖敷いてあ
 った。板壁には棚たなが作りつけられ、小さい仏壇と、六七冊の本が
 並んでい、本の片方を硝子張りの人形箱がブックエンドのように
 押えていた。——炊事は腰掛のある船室のほうでするらしいが、
 こちらにも小さな火鉢ひばちがあり、その脇わきに茶筴ちやだんす筥すや、たたんだ卓
 袱台やぶだいや、炭取、柳行李やなぎこうり、駒箱こまばこをのせた将棋盤、そのほかこ
 まごました道具類が、いかにもきれいな好きな老人の独りぐらしら
 しく、きちんと整理されてあつた。

「あの人形が可笑おかしいかね」と船長は私の視線を追って問いかけ

た、「可笑しかんべえさ、こんなとしよりの持つもんじやねえだから、いつだかも^{せがれ}倅が孫をつれて来たとき、——孫は女の子で五つだっけだが、その孫が欲しがって泣き喚^{わめ}いただ、倅も呉^それろってせがんだだよ、だがおらあ断わっただ、なげえあいだ^{そば}側に置きつけたでね、いまでも手放す氣にやあならねえだよ」

私は船を大切にする船長の、船乗り^{かたぎ}氣質についてなにか云つたように覚えてゐる。

「さつき倉なあこが先生って呼んでたっけだな」と幸山船長は笑つた、「なんの先生かおら知らねえし、そう思つてくれるのは有^あ難^{りがて}えだがね、これはそんなむずかしい理屈でやっているわけじやねえだよ、ただ悪いがきどもが来ちや船をよごすだ、黒いペン

キをなすくつたり泥どろを塗りつけたりよ、ちかごろのがきどもときたら手に負えねえ、わけもなんもねえに、きれいな物さえ見るとめのかたきにして、ぶつこわ毀したりよごしたりしてよろこんでるだ、——しようがねえ、叱しかりようもねえだからね、そのたんびにおら塗り直しているだよ、おらのほかにこいつをきれいにしといてやる者はねえだからね」

それから暫しばらくのあいだ、いまは記憶していない話が続ぎ、どんなふうにしてか、やがて幸山船長はむかしの恋物語をはじめ、私ができるだけ無関心をよそおって聞いた。——そういう話をうまく聞くには、相手によつて二種類の聞きかたがあるようだ。或る者はこつちが乗り気になつて、強い関心を示さなければならぬ

し、他の者は反対に、聞くような聞かないような、平静な態度を保つほうがよい。この選択を誤ると、しばしばいい話を聞きそこなうようである。——私は幸山船長が後者に属するように感じたのだが、その直感の外れなかったとみえ、船長はなんの警戒心も起こさず、静かにゆつくりと語り続けた。

話は単純なものであった。

船長は十八歳のとき初恋をした。相手は新堀川の小さな雑貨屋の娘で、名はお秋、年は彼より一つ下であった。その恋はあどけないほど幼く、けれどもあたたかい、きれいなものであったが、きれいなままで、三年あまり続いて終りになった。二人の気持が変ったのではなく、娘の親がかれらの仲を裂いたのである。——

その父親というのはなかなか切れる男で、芦畑を作することを思いつき、県からその許可を取ると、根戸川の下流から浦粕の東の浜へかけて、広大な地域の権利を手に入れた。葛飾かつしかから浦粕一帯は海苔のりの産地として知られている、したがって、海苔を漉すくのに使う海苔簾すだれ（約二十センチ四方ほどの大きさで、細い芦の軸で編んだ物）だけでも、その需要は信じがたいほど多量であり、その他の分も加えると、どんなに広大な芦畑を作っても、作り過ぎることはなかった。——こうして新堀川の小さな雑貨屋は、見ているうちに産をなした。新たに家を建てたり、刈った芦の倉や、海苔簾を編む工場を作ったりし、「大叶屋おおかのうや」という看板を掲げて、ひとかど旦那だんなと呼ばれるようになった。

「大叶屋、——」と云つて、幸山船長は喉^{のど}で笑つた、「子供たちはおつかねーや、つてはやしたてたもんだ、おつかねーや」

娘は二十一歳で嫁にいった。

根戸川に沿つた永島というところの、かなりの資産家だつたそうで、その結婚が迫つた或る日、娘は幸山船長としめし合せ、東の浜の松並木でひそかに逢^あつた。娘は持つて来た人形箱を渡し、軀は嫁にゆくが自分の心はこの人形にこめてある、どうかこれを私だと思つて持つていてくれ。そう云つて泣いた。——こういう話は文字に書くと、あまりにありふれていておかしくもないが、幸山船長からじかに聞いていた私は、その「ありふれ」ている單純さのため、却つて深く感動したことを覚えている。——娘はな

お、どうせ嫁にいくのだから、このからだをあなたの好きなようにしてくれと云つて、やけのような態度で幾たびも迫つた。船長もいつそのことそうしようかと思つたが、まだ女に触れたことがないため、どういう手順が必要なのかはつきりわからず、娘が積極的になればなるほどおじけづいて、ついなにごともなく別れてしまつた。

娘の婚家は根戸川に近いので、幸山船長の乗つた船が通ると、彼女は土堤^{どて}まで出て来て姿を見せた。通船の排気音やエンジンの音は、それぞれに特徴があつて、馴^なれた耳で聞くと何号船かということが判別できるという。娘は十七号船の音が遠くからわかるのだろう。ときにはあねさまかぶりに襷^{たすき}をかけ、裾^{すそ}を端折^{はしよ}つたま

まで、——たぶん洗濯^{せんたく}かなんかしていたのだろうが、——あたふたと土堤へ駆けだして来たりする。出て来ても手を振るとか声をかけるなどということはない、船のほうを見るようすもなく、ただ船の通り過ぎるあいだ、自分がそこにいることを彼に見せ、また、さあらぬ態^{てい}で彼のほうをひそかに見るのであった。船がそこを通過するのに約五百メートル、二人がお互いの姿を見ることが出来る区間は約三百メートル。川を遡航^{そこう}する時間は長くて五分钟左右だし、くだりのときは三分たらずであるが、その水上と土堤との短くはかない、けれども誰にも気づかれることのない愛の交換は、若い彼にとってこの世のものとは思えないほどのよろこびであつた。

やがて十七号船は荷物専用になり、彼は十九号船に移った。そのあいだに一度、五十日あまり彼女が姿を見せなかったことがあった。もうこれで終りだろうか、娘の気持はさめてしまったのだろうか。彼は二人の仲を裂かれたときよりも激しい不安と、絶望感におそわれた。だがそれは思ひすごしで、彼女はそのあいだ産さんじよく褥じよくについていたのだ、ということがわかった。再び土堤へ姿を見せたとき、彼女はおくるみで包んだ赤子を抱いていた。

「おかしなことだが」と幸山船長は云った、「まったく根もねえ話だが、そのときおらあ、あのこが抱いているのはおらの子だつていう気がしたつけだ、あの子がおらの子を生んだ、いま抱いているのはおらたち二人の子だつてよ、先生なんぞにやあばかけて

聞えるかもしれねえだがね」

彼女の生んだのは女の子であつた。

あとでわかつたのだが、彼女の産は重く、そのため軀が弱つたということ、土堤へ姿を見せないことが多くなつた。しかし、こんどは彼は疑いも不安も感じなかつた。相当な資産家の主婦であり、また子も生んだとなれば、ときには都合の悪いこともある。番たび土堤に出て来られないのは当然だ、というふうに考えるようになった。

彼は二十七歳でエンジニアになり、結婚した。相手は郷里の水戸在に育つた娘で、気が強く、言葉も動作も荒つぽく、彼は始めから好きになれなかつた。妻は息子と娘を生み、三十二歳で死ん

だが、死なれるまで彼は愛情というものを感じたことがなかった。妻のほうも同様であつたか、硝子箱の京人形を見てもべつに気にしなかつたし、彼に愛情があるかないかを知ろうともしなかつた。

「^{あし}芦が風を呼んでるだな」幸山船長はふと頭を傾けて云つた、

「——ちよつと外へ出て風に吹かれようかね」

私たちは甲板へ出た。

火鉢のある狭い船室から出ると、晩秋の冷たい夜気がこころよく肌^{はだ}にしみとおつた。だらけたような肌の細胞の一つ一つが、新しい酸素を吸つていきいきとよみがえるのを感じた。

「そうさ、芦は風を呼ぶだよ」私の問いに答えて船長は云つた、
「見せえま、東のほうで呼んでるだ、東のほうから風が吹きだす

だよ」

慥^{たし}かに、船長の指さしたほうから、静かに微風が吹きわたつて来るようであつた。私はタバコとマツチを出して吸いつけ、船長にもすすめたが、船長は欲しくないと云つて手を出さなかつた。

——月はかなり西に移つてい、空には雲の動きも見えた。岸の草むらでは虫の鳴く音がしきりに聞え、微風が芦をそよがせると、葉末から露がこぼれ、空氣がさわやかな匂^{にお}いに満たされた。雲が月のおもてにかかると、そのときだけはあたりがほの暗くなるが、雲が去ると、これらの風景ぜんたいが、明るくて青い、水底の中にあるように眺^{なが}められた。

幸山船長は船長の席にあがつて腰を掛け、両手で舵輪を握つて、

ちよつと左右へ廻してみた。それから、すぐ右にある打金の紐を引いて、ちん、と鳴らし、ちんちん、と鳴らし、一つ鳴らして次にすぐ二つ鳴らしてみた。

「ゴースタン、これが合図だっただよ」と船長は云つた、「永島へ船が近くなると、こう鳴らしてゴースタンとどなる、それからスローアヘーとどなつてこう鳴らすだ、——おらが二十九号の船長になつてからだがね」

彼は三十五で船長になつた。水上と土堤との三百メートルの逢^あ曳^{いび}きは続いていたのだ。むろんずっとではない、どちらかの都合で相当な期間、お互いに姿を見ないこともあつた。そのあいだに彼女は三児の母となり、彼のほうでは妻に死なれた。けれども、

実生活の煩瑣はんさな用事に邪魔をされながら、そうすることができないのは姿を見せあつた。——二人はそれ以上に出ようとはしなかつた。彼は永島へは近よつたこともない、彼女が長く姿を見せないとき、病氣ではないかと心を痛める。本当に病氣だつたこともあり、誰からともなく噂うわさが耳にはいると、ようすをみにゆきたい、という抑おさえがたい衝動に駆られたものだ。しかし彼は、自分の中にある自分以上に強いなにかの力によつて、そういう激しい衝動をきりぬけることができた。

「それでもたつた一度だけ、側へよつて口をきいたことがあるだよ」幸山船長は舵輪もたに凭もたれかかり、そつと頬笑ほほえんでいるような調子で続けた、「あれはそうさな、うちのおつかあが死ぬちよつと

めえだっけかな、あのこが子供を伴^つれて、徳行からおらの船へ乗っただ、伴^つれているのは四つくれえの女の子で、おらあその子を抱いて渡り板を船まで渡してやっただ、あのこはあとから渡つて、子供を抱き取りながら、すみませんねえって云った、おらも云っただ、いまでも覚えてるだが、今日はいいお日なみですねってよ」

幸山船長は口をつぐみ、岸の松林のほうをじつと見まもつていた。

「すみませんねえ」と船長はつぶやき声で繰返した、「——今日はいいお日なみですな」

彼が四十二の年に、彼女は死んだ。

それを知ったのは、六十日の余もあとのことであつた。そのく

らい姿を見せないことは幾たびもあつたので、彼はかくべつ心配もしなかった。そして、彼女が六十日以上もまえに病死したと聞いたとき、ちよつと云いような感動に包まれた。悲しいことは紛れもなく悲しかった。この世では二度と逢えないと思うと、舵輪を握る氣力もなくなり、五日だか七日だか休んで家にこもっていた。けれども、悲しさや絶望感の中に、一種ほつとしたような、うれしいような氣分がうまれていた。

「どう云つたらいいか」と幸山船長は凭れている舵輪を指で撫で、暫く口ごもつていてから云つた、「——そうさな、あのこは死んでおらのとけへ戻つて来た、つていうふうな氣持だな、長えことに人に貸しといたものが返つて来た、そんな氣持だっけだ、おらそ

れから、人形箱の埃ほこりを払っただよ」

彼女は嫁にゆくが、心はその人形にこめてあると云った。彼はいまこそそれが現実になった、というように感じられたのだ。

彼は妻に死なれてから、ずっと独身でおしたが、もはや独りではなく、彼女が彼といっしょであった。子供たちの眼があるの
で、口や動作には決してあらわさないが、心の中ではいつも互いに話しあっていた。

——今日はたてかわ豎川でてんま伝馬が詰ちまってな、たかばし高橋まで五時間
もかかつちまつただよ。

——そりやあたいへんでしたね、疲れ休めに酒でもつけましょ
うか。

——いやよしにすべえ、おらあ酒を飲むと却^{かえ}つてあとが疲れる
だから。

——それだけがあんたの損な性分ねえ。

こういうふうな会話が、現実そのもののようにとり交わされる
のである。自問自答とか、空想めいた感じは少しもない。彼がこ
んなふうに云つてもらいたい、と期待するときに、彼女はしばし
ば彼の意志にさからつたり、子供のように拗^{すね}たりすることさえあ
つた。

「あのこはときどきうちへ帰りたがっただ」と船長は云つた、

「子供のようすをみて来てえだからつてね、むりはねえさ、おら
船が永島へはいると、ゴースタンをかけ、スローアヘーにするだ、

そうするとあのこはうちへ帰るだよ」

これは誰も知らなかったし、誰に気づかれることもなかった。ただ、永島へかかるときに限って、船を「後退」にし、「微速前進」にするのがわからず、頭がどうかしたんだろう、と云われたことがあった。

「いまでもみんなは、おらの頭がどうかしてると思ってるだよ」そう云って、船長は可笑しそうに喉で笑った、「——ぶつくれの十七号船を貰^{もら}って、こんなところで独りぐらしをしているのも頭がおかしいせえだつてよ」

「独りぐらしだつて」と船長はまた狡^{ずる}そうに笑った、「みんななんにも知っちゃいねえだ、おらもこんな話は誰にもしやしねえだ

がねえよ」

幸山船長は黙った。

私は彼のうつとりとした眼が、岸の上の黒い影絵のような松並木のあたりを見まもっているのに気づいた。やがて幸山船長は欠^あ伸^{くび}をし、まわりの芦畑を眺めまわした。

「もうじき芦刈りが始まるだ」と船長は云った、「するとやがて鉄砲撃ちがやって来るだ、あれだきやあうるさくつてかなあねえだよ」

私は空が白みだしてから、私の「青べか」を漕^こいで帰った。そして、二度と幸山船長を訪ねてはゆかなかった。

浦^{うらかす}粕の宗五郎

根戸川の下流、沖の百万坪の地はずれに、某企業家が汚物処理の大規模な工場を建てようとし、県へ許可を申請したとか、すでに許可を取ったとかいう噂^{うわさ}が広がった。

汚物といっても例の清掃関係のもので、その処理したあとの廃棄物は根戸川から海へ放流するといわれ、それは小魚や貝類を死滅させるから、周辺の漁民ゼンたいの死活問題であると、かなり大きな騒ぎになった。——その声はしだいに広がり、強く激しい

輿論よろんをもちあげ、人の集まるところでは、必ずこの大問題が論じられた。釣舟宿つりぶねやど「千本」の下座敷で、或ある夜この件について、大勢の者がやりあつた。船宿では釣客のために、ごろ寝の準備もあるし、簡単な飲み食いもできる。専属の船頭の中には住込みの者もいるので、二階も下も広く部屋がとつてあり、下座敷では船頭や漁師や、ときには蒸気乗りなどが集まつて、よく賑にぎやかに飲んだり騒いだりした。——その夜も同じような顔ぶれだったろう、「千本」には長男の鉄なあと、嫁にいったおかず、十七歳で美貌ぼうの二女おすみ、小学六年の二男の久、小学三年の長太郎。三女のしづ、あるじは和助といつて、船宿経営の手腕は浦粕随一といわれたし、客筋のいいこと、常に繁はんじょう昌しょうしていることも事実で

あつた。

「こりやあなんだ、その、あれだ」と漁師の一人が云つた、「まるで業^{ごうびよう}病^{びよう}かかさ持ちの女を嫁に取るみてえなもんだ、こつちはちつともいいおもいをしねえで、血の腐つた子や孫ができる、そんなものはおめえまっぴらだ」

「かさ持ちつてなんだ」と脇^{わき}で聞いていた長^{ちやう}が云つた。

「寝ちまいな」と和助が投網^{とあみ}を繕^{つくろ}いながら云つた、「鉄もおしづも寝ちまつたぞ」

「とけえ（都会？）のやつらがてめえでひり出した物あてめえで始末をするがいいだ」と中年の船頭が云つた、「やつらのひり出した物をおんだらが押つつけられる義理はねえ、おらたちだつて

自分の始末は自分でつけてるだ、なせ」

「そのけえしや（会社？）のやつらあせんであぎ（せんたいはぎ千代萩？）

のさけえごぜんみてえなもんだ」五十年配の船頭が、「なあ」と倉なあこに云った、「県の許可あ取ったなんてえらそうな威しをおどかけて、おらたちにどくまんじゅう毒饅頭を食わせようってえだ、おんだらをせんまつ千松にしようとしてけつかるだよ」

「ちゃん」と長がまた訊きいた、「せんまつってなんだ」

「寝ちまえてえにな」と和助が云った、「そんなこたあ子供の聞くもんじゃあねえだ」

「そりやあげでえ（外題？）ちげえだ」とやはり五十がらみの漁師が云った、「毒饅頭をくわされたなあかとうきよまさ加藤清正だべえ、あり

やあおめえ徳川方の計略だあ」

「じゃあ」と先の船頭が訊き返した、「せんであぎで千松のくわされたなあなんだ」

「ありやあ執権の計略だべえ、執権ともなればなんか上等な干菓
子なんかだべえさ」

いやそうでない、このまえ歌左衛門の芝居で見たときには三^{さん}
方^うの上へ饅頭が盛つてあつた。そりやあ田舎芝居だからだ。田

舎芝居とはいつても市村歌左衛門は「田舎団十郎」といわれるく
らいの名優だ、いつかみちとせをやったときにはちゃんと屋台で
蕎麦^{そば}を食つてみせたではないか、饅頭でないのに饅頭でまにあわ
せるような客をなめた芝居をするわけではない。そうだな、とべつ

の誰^{だれ}かが云った。このまえ国定忠治をやったときにも、——こうして、問題は「田舎団十郎」の良心的な名演技のほうへそれてゆき、みんながその話に熱中した。これは一例にすぎないが、^{かんづ}缶詰工場でも、役場の待合所でも、根戸川亭^{てい}でも、堀南の洋食屋「四丁目」でも、漁師や船頭だけではなく、住民がちよつと四五人も集まれば集まったところで、すぐに浦粕の死活問題が論議された。

こうした気運がしだいにふくれあがって、やがて、町民大会を開催せよ、という声になり、第一回が「梅の湯」でひらかれた。午後六時からというので、私は五時半ころにでかけていった。浴場の広い流し場へうすべりを敷いたのが聴衆席であり、^{よくそう}浴槽に

蓋^{ふた}をし、その上へさらに板を並べ、古テーブルを置いたのが演壇であつた。下足番などはない、各自が自分の履物を持ってあがるのであり、用意のいい人は座蒲団^{ざぶとん}も持って来ていた。――演壇のうしろの羽目板には、「汚物処理場設置反対大演説大会」というビラに続いて、演説者の名を書いたビラがずらつと並んでいた。その中には応援弁士として、県や市の議員の名もみえたように思うが、慥^{たし}かではないし、またここではその必要もない。というのが、演説は実際には誰一人としてやれなかったからだ。

定刻まえに、会場は殆^{ほと}んど満員になつた。ぎつしり詰つた聴衆のあいだを、いつも寄席^{よせ}の「浦粕亭」に出ている中売りの女が、巧みに「えーおせんにラムネ、南京豆^{ナンキンまめ}にキャラメル」と売り歩

き、それが大いに繁昌していた。子供たちは人の肩を踏んづけてとびまわり、殴られて泣きだし、人びとは煎餅せんべいを喰たべ、ラムネ玉の音をさせながら饒舌しゃべりあい、はなれて坐すわった者同士が、なきり声で呼びあったりしていた。気がついてみると、演壇の脇、つまり湯屋の番頭の出入りするところに、巡査が三人来て立っていた。三人とも帽子の顎紐あごひもをかけ、手には白い手袋をはめていた。それは東京などで政府反対の演説会があるとき、臨検の警官がみせる身拵みごしらえで、私はなにかあるなど直感した。けれども町の人たちはそのもののしさに気づかないようすで、ラムネ玉の音をさせ、煎餅をかじる音をさせ、高ごえで饒舌りあっていた。

六時二十分になって、司会者が演壇へあがった。足場が不安定

なので、テーブルの前まで、いかにも危なそうなさぐり足で歩いた。

「へっぴり腰だぞ……」と誰かが呼びかけた、「おつかあを……んじやあるめえし、しっかり腰を伸ばしてええべや」

高くて広い浴場の空間が、ばかげた哄笑でわれ返るような反響を起こした。

その司会者が誰であつたか記憶がない、彼は馴れない役目のためにあがつてしまい、顔は蒼く、テーブルにつかまってふるえているのが、私のところからもよく認められた。それで聴衆はすっかりうれしくなり、次から次と嘲笑やおひやかしの声がかかった。子供たちまでが面白がつて、「……ちゃんこよ、そん

なにおっかながるなえ」とか、「おっかあはいねえからしんぺえすんな」などと喚わめきだした。

全聴衆がそんなふうだったわけではない。もちろんこれが町の死活問題に関する大演説大会だということを、しんけんに考えている者も少なくなかったので、制止の声や、司会者を励ます声も聞えだした。すると突然、聴衆の中から一人の若者が出て、すばやく演壇へとびあがった。年は二十六七だったろう、古びた印しるし半纏ばんてんの下にパンツをはいているだけで、壇上へあがるなり颯さっと両手を高くあげた。

会場は静かになり、聴衆の眼めはその若者に集まった。

「演説会もくそもねえ」と若者は怒った酔漢のような口ぶりで喚

いた、「饒舌るだけで止められるもんじゃねえだ、会社のやつら
をぶつ殺せ、おらが佐倉宗五郎になるだ」

とたんに巡査がサーベルを鳴らした。

「弁士中止」と巡査は白い手袋をはめた片手をあげて叫んだ、

「演説会は解散」

それがどういうことであるかを、聴衆が理解するにはちよつと
暇がかかった。

私はすぐに会場を出たが、そのあと、高品さんの家を訪ねると、
やがて集まって来た常連が、大演説大会の話を始め、演壇へとび
あがった若者の、勇氣と決意を褒めあつた。

「おらが佐倉宗五郎になるだって」と秋葉エンジが感動をこめて

云った、「あんな大勢のめえでなかなかああは云えねえもんだ、
いってえどこのもんだ」

「知んねえな」と三十六号船の留さんが首を振った、「誰も知ん
ねえ顔だつてよ、それにしちやあえれえもんだ」

「おらが佐倉宗五郎になるか」と漁師の源さんが云った、「命を
張るつてえだからな、ああいう人間がもう五六人もいれば、会社
なんぞひねり潰^{つぶ}しちまうだがな」

「まったくのところ」と源さんは続けて云った、「こんどの問題
じゃ、あの男が頼みの綱だぞ」

第二回は浦粕座で、もつと盛大に開催された。聴衆は第一回の
ときの倍ちかく集まったし、第一回のときよりまじめで、緊張し

ていた。しかし、いよいよ開会が宣せられると、また例の若者が壇上にとびあがった。聴衆は凱旋がいせんした英雄を迎えるように、歓声と拍手を送り畳を叩たたいた。若者は第一回るときと同じく、会社の連中をぶち殺せと叫び、おらが佐倉宗五郎になると叫び、すると臨検の巡查が、——そのときは巡查部長が来ていて、——弁士の中止と、演説会の解散を命じ、若者を連行して去った。

大演説大会は五回まで開催されたが、議題について演説した者は一人もなかった。それは番たび例の若者がとびだして来て、ぶっそうなアジテーションをとばし、そのまま解散になるからであった。私は第二回のあとは聞きにゆかなかった。というのはその台本の筋はほぼ推察できたし、何度やっても結果は同じだと思っ

たからである。——その若者は巡査に連れ去られるが、次の大会にはまたあらわれた。そうして、第五回の大会のあとで、主催者側は駐在所から非公式に「こういう過激な演説は時節がら好ましくない」という意味の通告を受け、それを機会にその催しをやめることになった。

若者もそれつきり姿を見せなくなつたし、どこの誰ともついに判明しなかった。「おらが佐倉宗五郎だつてよ」と住民たちは思ひだすたびに感嘆しあつていた、「ああいう命知らずの骨つぽい人間が、もう五六人いてくれたらなあよ、ふんとに、あんなええやつはそうざらにはいねえもんだぞ」

汚物処理場がどうなつたか、私は覚えていない。

おらあ抵抗しなかった

秋の夜の九時ころ、船宿「千本」の店先に縁台が三つ出してあり、船頭や漁師たちが、涼みながら話したり、酒を飲んだり、将棋をさしたりしていた。――月のいい晩で、空にはほんの僅わずかな千切れ雲しかなく、根戸川の水面も明るかったし、対岸のいかずちの家並みも、一軒ずつはつきり見わけられるほど明るかった。現に二人の若い船頭が将棋をさしているが、そこは店の外で、電で燈んとうの光などは届かないのに、駒こまを動かすのに少しも不自由はな

かった。——三つの縁台に十二三人いたであろうか、一時間ほどまえまでは子供たちも混つていたし、人数も多かったが、しだいに人が減つてゆき、道の往来も殆んどなくなつていた。

河岸には通船が三艘と、釣舟やべか舟が並べてもやつてあり、

それらには人けがなく、月光を浴びたまま、ひっそりと身を寄せあつてゐるようにみえた。そのうちに、葛西汽船の三十二号から、

一人の少年があらわれ、渡り板を踏んで岸へあがると、そこで草

履をはいて「千本」の店のほうへ来た。少年は痩せたすばしっこ

そうな軀つきだし、色こそ汐やけで黒いが、おもながの顔は眼鼻

だちが際立つていて、美少年といつてもいいだろう。ことにはつ

きりとした眉毛と、澄んでいるが少しばかり狡そうな眼つきが、

その相貌そうぼうをひきたてていた。

「酒をもう一升」と少年は「千本」の店へはいつてどなった、

「野口エンジンに付けといてな」

店の奥から二女のおすみが出て来た。

「あら銀ちゃん」とおすみいが云った、「おめえまだ船にいたのか」

「野口エンジンに一升」と少年は云った、「佃煮つくだにかなんかくんなつてよ」

店先の縁台から、いろいろ男、と少年に呼びかける者があつた。

「銀公か」と将棋を見ていた船頭の一人が云った、「三角のお吉はどうした、もうものにしちやつたか」

「昨日だっけ」と端の縁台で酒を飲んでいた中年の蒸気乗りが云

った、「安田屋のおつゆがまた草履を呉れたってえじやねえか、年もいかねえくせにてえした腕だな」

少年は振り向きもせず、口もきかなかった。その顔には誇らしい自尊心と、おとなたちに対する軽侮と優越感が、少年らしいなまなましきであらわれていた。——店は電燈を一つ残して、あとは消してあつたから、広い鉤^{かぎ}なりの土間は、月光の遍満している戸外の明るさで、実際よりもうす暗くみえた。——おすみは酒の壇^{びん}と、蓋物^{ふたもの}を持って土間の奥から出て来た。草履をつっかけているので、足音は聞えなかった。彼女は手招きをし、少年が近くよってゆくと、持っている酒の壇と蓋物を脇^{わき}へ置き、すばやく少年を抱いて接吻^{せつぶん}をした。少年はじつとしていた。軀も頭もまっ

すぐにしたままで、両手は軀に添って垂れていた。おすみはものたりなげに、けれどもすぐに少年からはなれた。

「はいお酒」とおすみは云った、「この中にすずめ焼としぐれ煮がはいってるよ」

少年はその二つを受取って店を出た。

「いろいろな男」と初めに呼びかけた男が云った、「今夜は三十二号で逢^{あい}曳^びきか」

だが少年は黙って道を横切ってゆき、草履をぬいで小^こ腋^{わき}にはさみ、渡り板を渡って三十二号船の中へ姿を消した。

彼は三十二号船の見習い水夫であつた。年は十七歳、みんなは彼を「銀公」と呼んでいる。銀次というのか銀太というのか、あ

るいは銀造とでもいうのか、みようじ苗字も正しい名もわからない。この土地では一般にそういうことに興味をもつ者はいないようだ。もちろん、所属の船会社の名簿には記載してあるだろうし、ことによれば町役場の戸籍簿にも記録されているかもしれない、だが、日常生活ではそんなことはどっちでもよかった。——三十二号船の「銀」といえば、とくぎよう徳行でもうらかす浦粕でもだれ誰より娘たちにもてる若者、として知らない者はなかった。徳行や浦粕だけではない、通船の航路にあるすべての発着所と、そのかいわい界限にまで知られていたというべきだろう。——その発着所の多くに、三十二号船を待ちかねている娘たちがいて、それぞれなにかしら彼に贈り物をした。ここでは一例だけあげるが、水夫は甲板勤務のときに麻裏

草履をはくので、贈り物ではそれがもつとも多く、彼の^{とても}手許にはいつも、新しいのが十五六足もあつた。中には手作りで、ひどくしやれたのや、凝った品があり、そうでなくとも、鼻緒の色だけは贈りぬしによつて違つていた。念を押すまでもなく、それは娘たちの自己主張であり、他の娘たちへの対抗意識のあらわれであろうが、銀公はその鼻緒の色によつて、贈りぬしを判然と区別することができた。

たとえばこうだ。——三十二号船がAの発着所へ近づくとき、彼はそこに待っている娘の贈った草履をはいていて、極めてさりげなく、その草履をはいていることを相手に認めさせる。そして船がBの発着所へ着くときには、ちゃんとBで待っている娘に贈

られた草履をはいて、その事実を相手の印象にしつかりと焼き付ける。これがCからD、DからE、Eから——と順を追って、正確に、決してAとCやEとFとを誤ることなしに繰返されるのであった。——これは一種の天才だと云つてもいいだろう、十五六足もある草履の、鼻緒の色によつて贈りぬしを弁別するばかりでなく、いそがしい見習い水夫の甲板勤務に追われながら、間違はなく草履の「はき替え」をやつてのける、などということは、天才なしにはとうていできがたいことなのだ。なぜなら、こういう類たぐひいの問題について後年、筆者みずから銀公の才能がいかに非凡であつたか、ということを身にしみて感じた経験があるからである。

浦粕でも、彼に熱をあげている女性が幾人かいた。高品さんの女中のとみちゃんもその一人であつた。繰返すようだが、高品家は東灣汽船の大株主であり、高品さんの蒸気河岸の住居では、発着所を経営していた。これは夫妻のあいだに子供がなく、高品さんは東京の新聞社へ通勤しているため、きん夫人はとかく暇をもてあますので、その暇つぶしにやっていたものだと思うが、——切符売場は住居とべつで、発着所のさんばし棧橋と道を隔てたところに建つてい、ほんの二坪足らずの小屋であるが、奥に畳が二帖敷じょういてあつた。——とみちゃんは二十二か三だつたと思う、骨太で、がっちり肥えていて、おとな温和しいがしつかりした、よく働く娘であつた。女中だから住居のほうの雑用をおもにするが、夫婦つきり

の生活ではさして用も多くはない。一日の半分以上は発着所にいて、きん夫人の手伝いをするのであつたが、そのうちに夫人のほうに飽きてしまい、発着所のほうはとみちゃんに任せることが多くなつた。

そのうちにとみちゃんは、住居の用事が終つてから、切符売場へ泊るようになった。朝の一番は五時に出るので、売場に泊つていれば客をのがさずに済む。一番船は葛西汽船からも出るし、切符売場が時間どおりにあかなければ、客は葛西汽船のほうへいつてしまうからであつた。——いいだろう、とみちゃんの主張は、彼女の主家おもいを証明するものと受取られた。彼女は小屋へ夜具を運び込み、たいてい夜の十時には、住居のほうの用を片づけ

て、そちらへでかけていった。こうして日が経ち、やがて、高品夫人はおどろくべき場面を目撃するはめにたち到った。というのは、或る夜半、なにかのことで、どうしてもちやんに訊かなければわからないことができた。夜半といっても十二時ころで、高品さんの家はいつも夜更しよふかをするから、さしておそすぎるとも思わず、夫人は気軽に小屋へ訪ねていった。——すると、小屋の戸口へいったとき、その中から異様な呻きうめ声が聞えて来るので、われ知らずぞつとして立竦たちすくんだ。きん夫人は浅草のすし屋の一人娘で、下町そだちらしくさっぱりとした気性であり、もう三十三二にもなるというのに、子供を生まないせいでもあるか、まだ娘っぽい、世間ずれのしていないところがあつた。それで、その

呻き声の異様さとぶきみさに、初めはとみちゃんが誰かに刺されでもして、死にかかっているのではないかと思ひ、立竦んだ足がすぐには動かなかつた。――だが呻き声はますます切迫し、いまにも息が絶えるかと思うように、激しい呼吸と喘鳴ぜんめいをともないだした。夫人は恐怖のために戸口へ進み、半ば夢中で引戸をあけた。すると、畳の敷いてある二帖の、小さな棚たなに蠟燭ろうそくが燃えていて、その光の下で、とみちゃんが身もだえをしていた。俯向きうつむに四つん這ばいになって、身もだえをしながら呻いているのである。とみちゃん、と夫人はふるえながら呼んだ、とみちゃんどうしたの。だがとみちゃんには聞えないらしい、夫人はそっちへあがつてゆこうとした。そのとき、両手を突いているとみちゃんの肩の

ところに、銀公の顔が見えた。銀公は仰向きになって、しらじらとした顔で、——高品夫人の言葉によると「かみどこ屋で頭でも刈らせているような」顔だったそうであるが、そういう表情のまま、高品さんのおかみさんだぞ、ととみちゃんに呼びかけた。とみちゃんの呻き声は止ったが、律動的な身もだえは止らなかつた。それはちように悪夢にうなされていて、これは夢だと気づきながら、なお悪夢からぬけだせないといったような、つまり神経活動の切替えがうまくいかない、というふうな状態であつた。銀公はそこで、やはりしらじらと平気な顔のまま、下からとみちゃんの肩を小突き、おい、高品さんのおかみさんだつてばな、と云つた。

——そうしたら、おどろくじゃないの。

この話をしていた夫人は、しんじつ驚いたというように、眼をみはつてみせたものだ。銀公に二度めに注意されると、とみちやんの軀の律動はようやくにしてしずまった。そうして、とみちやんはその^{かつこう}恰好のまま、首だけ夫人のほうへゆつくりと振り向き、^{いぶか}訝しげに訊いたそうである。

——なんですか、おかみさん。

明くる日、高品夫人はとみちやんを呼んで話を聞いた。とみちやんは銀公と夫婦約束をしたと答え、だからなにをしようと誰に文句を云われる筋もない、とい直るような態度をみせた。夫人は銀公とどう約束ができたにしろ、相手が十七の少年であり、ほかにも娘たちが付けまわしていること。また、結婚するにしても、

いま妊娠したりしては困るだろうことなど、いろいろと忠告したが、とみちゃんははつきり、自分のことは自分でよく考えているからと答えたそうであつた。——ここで読者のために記しておくが、のちにとみちゃんはやはり妊娠してしまい、銀公もよりつかなくなつたので、早いところ実家へ帰つてしまった。実家がどこであつたか私のノートには書いてない、たぶん茨城県のどこかだつたと思うが。帰るとすぐに、同じ土地で嫁にいつた、というハガキが、高品夫人に届いた。

——あたしなんかがよけえなこと云う必要はなかつたのね、と高品夫人はそのハガキを私に見せながら云つた。あのこはちゃんと自分のことは自分で考えていたんだわ。

さて、——船宿「千本」の店先では、三つの縁台の人たちが、飲んだり饒舌しゃべったり、将棋をさしたりしていた。銀公が酒と佃煮を取りに来たことも、彼がそれらを持って三十二号船へ戻もどつていったことも、もう誰の頭にも残ってはいなかった。しかしそのとき、こちらの人たちの氣づかないところで、一つの事件が進行していたのである。縁台の人たちはぜんぜんにも氣づかなかった、将棋に負けた若い船頭の一人が、駒を投げだして大きな欠伸あくびをし、「おらも一杯やんべえかな」と云った。そのすぐあとに、つまり若い船頭が一杯やるかなと云つて立ちあがつたとき、突然その騒ぎが起こつたのである。

「逃げるな」という叫びで、その騒ぎは始まつた、「逃げてもだ

めだぞ、顔はわかつてるぞ」

縁台の人たちは総立ちになった。

その叫び声は三十二号船から聞えて来た。いってみると、船のへさき舳先やとも艫や、船室の周囲のあゆみで、人が右に左に走りまわっている、船板を踏み鳴らす音に続いて、高い水音が聞えた。

「手入れだ」と漁師の一人が云った、「博奕ばくちを嗅かぎつけられただな」

月光の下で、黒い人影はすばやく走りまわっていた。さっきの水音は誰かが川へとびこんだのであろう、一人はもやってあるべか舟へとび移り、櫂かいを取って漕こぎだそうとした。両手で持った櫂に全身の力をこめて突っ張るのだが、べか舟は横揺れをするばか

りであつた。

「こら戻れ」と三十二号船の舳先のところで、一人の男（それは私服の警官だつた）が叫んでいた、「逃げてもだめだ、戻つて来い」

べか舟の男は振り返つて相手を見、べか舟が少しも動いていないこと、そして、それがまだもやつたままであることに気づくと、おそまきながら、櫂を持ったまま川の中へとびこんでしまった。

船室のまわりのあゆみでは、三四人の人影が入り乱れてい、一人が船室の屋根の上へとびあがり、そのあとから私服の一人がとびあがつた。あゆみを逃げまわっていた二人の内の一人は、艫のほうから川へとびこみ、一人は並べてもやつてあるべか舟へとび

移り、それから次つぎと、舟から舟へとび移つて、見えなくなつた。これらのことは、時間にしてほぼ六七分、多くても十分はかからなかつたであらう。捕えようとする者も、逃げようとする者も、極度に緊張しているため動作がぎごちなく、見ているほうで菌の根がうずくほどまがぬけて、鈍重にみえた。たとえば追つてゐる私服が、相手のシャツの背中を掴つかもうとする、指先は殆んどシャツに触れていて、掴んだかなと見るとき、追われている男がひよいと背中を反らす。それでもう私服の手は届かなくなつてしまふ。また、船室の屋根へ逃げたのは、あとで聞くと野口エンジンナーであつたが、彼がとびあがつたとたんに、追つて来た私服が彼の片方の足首を掴んだ。しかしその私服は、相手の足首を掴ま

えたことに自分で吃驚びっくりしたか、あるいは足首を掴まえたことが信じかねたように、戸惑いをし、野口エンジニアはすばやく足首を引き抜いて逃げた、といったようなありさまであった。

「しだらもねえ」と岸で見ていた人たちの中から誰かが云った、
「みんな逃がしちまつたじゃねえかえつ、まぬけな手入れがあつたもんだ」

そのとき船室の中で「きー」というするどい悲鳴が起こり、続いて、あらゆる物音が墜落的にしずまった。やかましく鳴っていたラジオのスイッチを急に切りでもしたように、物音や人声がびたつと止り、船の上も岸の人たちもしんとなった。

「痛えよう」という泣き声が船室の中から聞えた、「おつかあ、

痛えよう」

「銀公だ」と岸にいる人たちの中で船頭の一人が囁いた、ささや「いまのは銀公の声だぞ」

みんな息をこらし、期待の眼をそばめて船のほうを注視した。まもなく、三人の私服が銀公の腕を取って船室からあらわれた。

銀公は両手で頭を押え、前後を私服に挟はさまれて、渡り板を渡り

ながら、痛えよう、死にまうよう、とかなきり声で叫び続けた。私服は三人いたのだ。その内の一人が先に岸へあがって、そこに集まっている人たちをどなりつけた。邪魔だ、どけどけ、見世物じゃあないぞ。そう云って、右手に持った一尺ばかりの棒のような物を、左右へ振った。

「十手だ」と誰かが囁いた、「見せえま、芝居で使う十手だぞ」
「おつかあー」と銀公は叫んでいた、「おら死んじまうよう、痛えよう」

二人の私服に挟まれて、彼が渡り板を渡るとき、川の上へ水でもこぼすような音がぼしよぼしよと聞えた。それがなんの音だからに、岸にいる者にはわからなかったが、岸へあがつて来た銀公を見るなり、一人が度胆どぎもを抜かれたような声で「血だえっ」と叫んだ。なるほど、少年のシャツはどす黒く濡ぬれているし、頭を押えている手の下から流れおちる血が、少年の顔半分を染めていた。

「こりやあひでえ」と他の一人が云った、「ひでえことをするなあ、見せえま、あの血」

集まっていた人たちのあいだに、憤激の火が燃えあがった。それはそこにいる者ぜんぶの感情を一つに固め、一団の火となつて「官権」に挑みかかった。^{いど}

「銀、おめえなにをしただ」と船頭の一人が呼びかけた、「いつてえなにをしてこんなひでえめにあつただ、えっ」

「おらなんにもしねえ」と銀公はかなきり声で叫んだ、「おらただ番をしてただけだ、おらなんにもしねえ、おら抵抗もしなかっただ」

「そうだ」と誰かが喚^{わめ}いた、「おんだらもここで見ていた、銀公は抵抗しなかった、ここにいるみんなが証人だぞ」

「おら抵抗しなかっただ」と少年は自分に対する声援に力を得て、

声と身ぶりにたつぷりと効果を加えながら叫んだ、「——おらな
んにも抵抗しなかった、おら死んじまうよう、おつかあ、痛えよ
痛えよう」

「歩け」と私服の一人が少年を小突いた、「おとなしくしろ」

「おら死んじまうよーっ」

「旦^{だんながた}那方」と千本のあるじの和助が前へ出て来た、「おめえさ

ん方あその子供をそのまま連行するつもりかえ」

私服たちは振り返った。

「その血をみせえま」と和助は続けた、「そのまま連行すれば、
出血多量で途中で死んじまあだぜ」

「そうだ、死んじまあだ」とみんなが口ぐちに喚いた、「一町と

いかねえうちにおつ死ちんじまうだ、銀がそれほどの罪を犯したかえ、死しげえにするほど悪いことをしたかえ」

私服たちは立たちどま停とった。三人ともすつかりあがつていて、むしろ怯おびえていたというべきだろう、硬こわばった顔で、眼めのやりばもなく、三人ともふるえていた。

「おらの店へ伴つれて来せえま」と和助が云った、「ちよつと手当をして、血だけでも止めてつからいぐがいいだ、さあ銀、来な」

和助は銀公の腕を取って、店のほうへ伴つれていった。そこにいる人たちもいっしょについてゆき、三人の私服はなにか囁ささきあつていたが、一人を残して、他の二人は誰にも気づかれないように、小さくなつて、堀ほりのほうへ去つていった。

銀公は縁台に腰を掛け、傷の手当をしてもらいながら、なお派手な声で叫び、泣き、訴え続けていた。

「しっかりしろ銀」と若い船頭の一人が、銀公の演技に調子を合わせて云った、「しょうばい^{とば}にんが賭場を開帳したわけじゃねえ、友達同士が慰みにやった一文ばなだ、本署へ持ってゆかれたって始末書を取られるか、悪くいっただって罰金くれえで済むだろう」

「おら博奕なんかしやしなかった」

「そうだ、いしや博奕はしなかった」

「おら抵抗もしなかった」

「そうだ、みんなが証人だ」とその船頭は続けた、「いしや博奕もしねえし抵抗もしなかった、だからいばって出るとけへ出ろ、

こんな小さな子供にこんなけがをさせて、どっちに罪があるかはつきり裁判をしてもらえ」

「みんなに逃げられたいしばらしだろ」と誰かが云った、「こんなひでえ話はおら聞いたこともねえ」

私服は蒼あおくなつてふるえていた。彼は法律を行使したのであるが、いまやその法律が彼を指弾し譴責けんせきするように思えたらしい。職権濫用らんようとか、過剰処置とか、罷免ひめんとか、その他さまざまな法律用語が頭にうかんでくる、といったような、絶望的な顔つきになつていた。

「さあよし」と和助が云った、「あとは医者にやつてもらうんだ、しつかりしろよ銀」

「おらもうだめだ」と銀公は呻き、且つ泣いた、「死ぬめえにおつかあに会いてえよう」

「よしおつかあに知らしてやるぞ」と漁師の一人が云った、「おらがすぐに突つ走って、おつかあを駐在所へ伴れてくからな、おつかあの顔を見るまでは死ぬんじやねえぞ」

そしてその漁師は「突つ走って」いった。

銀公の演技を中心としたこの一幕の芝居は、少なからずあくどいものであった。それは若いその私服警官にもわかったに違いない。けれども自分のゆきすぎた行動のために、芝居とわかつていながら、彼もまたそれに同調することを拒むわけにはいかないようであった。

「いいか」と私服は銀公の顔を覗きこんで訊いた、^{のぞ}「歩けるか」
眼がちらくらして立てねえ、と銀公が答え、すると若い船頭の
一人が、おらがおぶつてやらあ、と背中を向けて^{かが}踊んだ。ふだん
評判のかんばしくない銀公が、いまは英雄のように、あるいは庶
民を代表する犠牲者のように、人々の愛と同情を集め、尊敬心さ
えもかき立てていた。若い船頭の背に負われた銀公は、私服警官
に付き添われて「千本」の店先から出ていった。そのあとから十
五六人の人たちが、この場面の幕がどんなふうにおろされるかと
いう好奇心のため、多少はお祭り気分のように浮き浮きと、勝手
なことを高ごえに話しあいながらついてゆき、やがて堀のほうへ
と曲つて、見えなくなつた。——蒸気河岸^{がし}はまた静かになり、月

の光が明るく、根戸川の水面や、対岸の家並みや、もやってある舟などの上にふりそそいでいた。

「あのおまわりは成績をあげたかっただよ」と和助が薬箱や包帯やガーゼなどを片づけながら云った、「根戸川亭てい（洋食屋ではなく堀東にある寄席よせ）のおはまあねに惚ほれて、うまくすれば婿むこにおさまるつもりさね」

「その縁談はきまつたんじやねえか」と倉なあこが暢のんびりと云った、「おらもうきまつたように聞いただがね」

「そうかもしれねえが、今度のしくじりで危なくなつただな」と和助が云った、「——あんまり稼かせごうと思つてあせつただ、成績をあげようと思つてよ、可哀かわいそうに、ああいうのを昔のことわざ

でぼうせき（望^{ぼうしよく}蜀？）の欲っていうだ」

「銀の野郎もまた」と云つて倉なあはくすつと笑つた、「いい気になりやがつてさ」

倉なあこは縁台から立ちあがつて、大きな欠伸をし、和助といつしよに店の中へはいつていった。

ちよう
長と猛獣映画

或る日、——私は船宿「千本」の長を伴って、浅草へ映画を見にいった。たぶん大勝館だったろう、やっていたのは猛獣狩り映画で、たしか「ザンバ」という題だったと思う。思い違いかもしれないのではつきりは云いきれないが、アメリカだかイギリスだかの夫婦の探検家が、アフリカの奥地で猛獣狩りをする、という筋だったことは覚えている。

この小学三年生の、こまっちゃくれの長は、映画が始まると同

時に120%まで昂奮こうふんしてしまった。彼はシートから身を乗り出し、両手を拳こぶしにして、頭を押え、口を押え、膝ひざを叩たたき、また胸へぎゅっと押しつけたりした。小さな顔は赤くなって、眼めは殆ほとんど殺気を帯び、呼吸はときに深く、また喘あえぐように激しく、もっともエキサイトすると拳を口に当てて息を止めた。

あらゆる画面で、彼は猛獣どもに呼びかけ、探検家夫妻に注意を与えた。

「ライオンだライオンだ」と長は喚わめく、「見せえま、先生、生きてるライオンだぞ」

周囲の観客はびっくりして彼を見る。ライオンは仕掛けた罠わなのほうへ歩いてゆく。

「やい危ねえぞ」と長はライオンに呼びかける、「そつちいいくと捉つかまっちゃうぞ、いっちゃだめだ、ええ、だめだつてえにな、捉まっちゃうたらな、ええライオンのばかやつら、こつちい来いってば」

ライオンは檻の罫にはいり、仕掛けの戸がばたつと落ちる。彼は拳を口へ入れ、ふるえながら眼を裂けるほど大きくみひらく。そして拳を口から出して、「ばかやつら」と、泣きそうな声で呟つぶやく、「ライオンのばかやつら」

画面の前景ににしき蛇へびが写る。ジャングルのなにかの樹きに絡みついていて、おとなの腕ほどもある鎌かま首くびをあげ、葉の茂み越しに、向うから近づいて来る探検家夫妻を狙ねらっている。長は息を詰

め、身を乗り出して、前のシーツの背を両手でつかむ。

「こつちへ来るな、危ねえぞ」と長は探検家夫妻に向つて警告の叫びをあげる、「ここにでえじや（大蛇）がいるぞ、あつちいいけ」

だが探検家夫妻はおろかにも、長の警告には耳も貸さず、のそのそこつちへやつて来る。

「ええばかやつら」長は両の拳で力いっぱい自分の頭を挟み、^{はさ}がたがたふるえながら絶叫する、「でえじやがいるのも知らねえだ、ええばかやつら、^の呑まれちゃうだ、二人とも呑まれちゃうだ、ええばかやつら、いいきびだ、二人とも呑まれちゃうだ」

にしき蛇はさつとアタックをかけ、先頭にいた探検家の良人の^{おと}

腕に噛みついた。長は片方の拳を口へ突込み、肺いっぱい吸いこんだ息を止めた。私はそのとき、彼の小さな心臓がドラム缶のようにふくれあがり、大太鼓の乱打のような搏動はくどうをするのが感じられた。——周囲の観客はこの小さな正義の騎士にすっかり興を唆そそられ、彼が画面に向つてなにか叫ぶたびに、指さしたり笑つたり、互いに小突きあつたりしたが、長はぜんぜん気づかず、肉にく体的くたいにも精神的にも、余すところなく映画の中へ溶け込んでいた。

「みんなばかやつらだ」長は猛烈に憤慨して云つた、「虎とらも犀さいもばかやつらだし、あの毛唐けどうもばかやつらだ、こんなに肝煎きもいつたことありやしねえ、ええつまんねえ、出べえや、なあ、出ちまうべ

えよ先生」

映画館を出てから、私は彼を洋食屋へ伴れていった。彼の憤慨は少しもしずまらず、そのトンカツにもカレーライスにもけちをつけ、「浦^{うらかす}粕の四丁目（洋食屋）のほうがずつとうめえや」と云った。私は一本のビールを啜^{すす}りながら、「ザンバ」がいかに演出されたものであるか、ということを概説した。

「あのにしき蛇のところを考えてみるよ」と私は云った、「あの蛇が樹の枝にからまっていたろう、いいか、その向うから探検家が来るだろう、このフォークが探検家とする、な、蛇がこのナイフだ、とするとカメラはこつちにあるこのマツチさ」

「カメラってなんだ」

「活動写真を撮影する機械さ、うう」と私は考えて云った、ここのでムービー・カメラの説明をすると話がこんがらかるからである。「機械があつて、そのまわりには撮影技師だの助手だの、たぶん猛獣使いだのもいるんだ、あ、あ」と私は長の質問を止めた、「だから、蛇が樹にからまつてるところは、こっちの連中、つまりカメラのまわりにいる連中にはちゃんとわかつているんだ」「どうしてわかつてるだ」

「だってこのフォークとナイフのこっちにマッチがあるだろ、そしてマッチのところから撮影した画面に、手前のナイフ、いや、にしき蛇とその向うのフォーク、つまり探検家が写つてた、そうだろう、とすればマッチのところから蛇は眼の前になることにな

るじゃないか、つまり撮影技師や助手やたぶん猛獣使いなんかには、ちゃんとそこに蛇のいることがわかつているんだ」

「うん」長は少し考えてから訊き返した、「じゃあ、どうしてそいつらはあの毛唐に教えてやらねえんかい」

「教える必要はないさ、探検家のほうでもそこに蛇のいることは知ってるんだ」

「知っててどうして除けねえだ、毛唐はでえじやに食いつかれちまったべがえ」

「それはだな」と私はうまく説明しようと思った、「つまり、面おしろもしろ白く見せるために、初めからそうするようにちゃんと相談ができているんだ」

「誰^{だれ}が面白がるんだえ」

「見物さ」と私は云つた、「長だつて面白かつたろう」

「誰が、おんだらがかい、ちえつ」と長は鼻柱へ皺^{しわ}をよせ、軽侮に耐えないというふうに口をへし曲げた、「おもしれえもんか、

あんな肝煎つたこたありやしねえ、それによ」と彼は唇^{くちびる}を舐めた、

「あのきけえの側^{そば}に誰かいて、でえじやのこと知つてるのに知ら

ねえふりしてるなんて気が知れねえや、ライオンも虎もばかやつらだし、毛唐もきけえの側にいたやつもみんなばかやつらだ、あんなよ、ばかやつらばかり出て来るかつどうがどこがおもしれえのかい、へっ、つまんねえ」

私は浦粕へ帰るあいだ、なんの理由もないのだが、小説の表現

技術について、あれこれと考えめぐらしたことを覚えている。――町へ帰ってから、長はみんなに「ザンバ」の話をして聞かせたが、それはその映画の製作者や提供会社の人たちが、厭世観えんせいかんにとらわれるだろうと思われるほど、辛辣しんらつであり無遠慮なものであった。――私は二度と長を映画見物には伴っていないかった。

SASE BAKA

おすずは船宿「野口」の娘で、年は十七歳だった。両親と姉が二人、弟三人の家族であるが、きょうだいそれぞれ父か母か、または祖父か祖母に似ているのに、おすずだけは誰だれにも似ていなかった。ここに桃を八つ並べたとすると、その中の一つが林檎りんごであるように、軀からだつきも顔だちも、気性までがみんなと違っていた。——彼女のぜんたいから受ける印象は、清純、可憐かれん、初心うぶ、という平俗な成語に、ほのかないろけを加味した感じであつた。背丈

は五尺一寸くらい、^や瘦せがたできりつとしていて、肩がいたいたしいほど小さく、手も足も小さかったが、指はすんなりと先が細くなつてい、^{つめ}爪はいつも桃色に染まつていた。——顔はうりざねがたであつた。その土地には珍しく、北国そだちのように色が白く、きめがこまかで、^{ほお}両の頬には活き活きとした血の色を浮かせ、冬のさなかでも、汗をかいているようにしつとりと湿りけを帯びていた。^{まゆげ}眉毛は細いけれども濃く、描き眉のようにはつきりといかたちをしていた。少し^{しり}尻さがりの眼も細かったが、絶えず^{はにか}羞んでいような^{うるお}潤いがあり、人に目礼をしたり話しかけたりするときには、まるで恋でも語りかけるとかと思うほど、その眼の潤いが情熱的にみえた。——私もときどき道で^{あいさつ}挨拶をされたので

あるが、初めのうちは自分が恋されているのではないかと思ひ、
 われ知らず胸がときめいたものであつた。くちびる唇は、——小さくて厚
 ぼつただけであつた。むしろそれだけ見ればみにくいといつて
 もいいだろう、もつとも特徴があり忘れがたいのはその声で、ち
 よつと鼻にかかる、あまつたれたような話しぶりとその澄んだき
 れいな声とは、どんなに悪意をいだいた人間の心をもとろかすだ
 ろう、というほかに云いあらわす言葉がない。——こういう娘に
 は、よほど運がよくつても一年に一度くらいしかゆきあわないも
 のだ。びぼう美貌というだけではなく、彼女のぜんたいから受ける清純、
 初心、可憐、という印象に似たものは、私自身もそれ以来まだみ
 かけたことがないのである。

「ふん、野口のすずあまが」

貝を掘るための竹籠たけかごを作る「籠屋」のおたまが、或あるとき私に向つて云つた。おたまも小学三年生であり、「千本」の長ちようとは違つた立場で、私にいろいろな情報を提供してくれていた。

——綿屋のおつゆちゃんは十二でちよぼちよぼと生えた。

——仁作んとこのおつかあは二十三号船の平井エンジンとできちやつて、毎晩どつかへ二人でつるみにゆくだ。

——だいき（人名）のじいさまは毎晩ばあさまに手を合わせてあやまるだつてよ、とても続かねえからつてよ、ふん。

主としてそんな類たぐいの情報であつた。

「ふん、野口のすずあまが」とおたまは軽蔑けいべつしたように云つた、

「あんなのぺつとした顔をしてえてすけべえなことつたら、夜になつてな、十二時過ぎてつから裏の戸を叩く^{たた}とよ、すぐに出て来て誰にだつてさせるだ、誰にだつてよ、相手に選り^え好みはねえだつてよ」

「嘘^{うそ}じゃねえつてば先生」とおたまは念を押すように云つた、
「だからみんなはすあまのこと****（注・小題参照）つて云つてるだよ」

家鴨（あひる）

私が増さんと初めて会ったのは、堀南にあるてんぷら屋「天鉄」の店であつた。私は僅わずかな稿料がはいると、よく天鉄へいつてめしを喰たべた。てんぷら一人前で酒を一本ゆつくりと飲み、そのあと、その日の特にいいたねを二つか三つくらい揚げてもらつてめしを喰べる。そのころ私はまだ酒に弱かつたので、よほどのことがなければ二合飲むようなことはなかつたし、一合を飲むのにも一時間くらいかかったろう。必ず本を持って行って、冬ならば小

さな瀬戸火鉢せとひばちを抱え、夏なら団扇うちわを使いながら、本を読み読みてんぷらを喰べ、思いだしては酒を啜する、というぐあいであつた。いま考えるとずいぶんとしより臭いまねをしたものだと思うが、天鉄の人たちとはすっかり親しくなり、ときによるとお花という娘が、「今日はいいたねがはいったから」と、てんぷらを揚げて届けに來たりした。

店は昔ふうで、土間に卓子テーブルが二脚ほどあり、鉤かぎの手に畳を敷いた座敷があつた。もちろん土間に面したほうは障子しょうじもなにもなく、客があれば薄い座蒲団ざぶとんを敷くだけ。膳ぜんは四角で、足のない平膳ひらぜんであつた。

増さんは年のころ五十くらいで、背丈が低く、ひどいかに股またで、

頬ほや顎あごのまわりに、いつも太い銀色の無精髭ぶしようひげを、ブラツシのよ
 うに伸ばしていた。てつぺんの禿はげた頭のまわりも、短くて太い、
 ブラツシのような疎毛そもうで蔽おおわれていて、太陽の下ではその一本ず
 つがきらきらと光った。——増さんは酒持参で天鉄へ来た。じつ
 は酒ではなく焼しょうちゆう酎ちゆうなので、一合のそれを天鉄で二合に割った
 うえ爛かんをしてもらうのだが、誂あつらえるてんぷらも変っていた。くる
 ま蝦えびにしてもあなごにしても、鰯はぜ、きす、めごちにしても、自分
 は頭とか中骨とか尻尾しっぽなどを、べつに揚げさせて、それを肴さかなに焼
 酎を啜る。身のところを揚げたのは包んでもらって、家へ持って
 帰る、というのがいつもの例であつた。

ここでちよつと記しておくが、数年まえ、或ある出版記念会のあ

とで、林房雄ふさおがこの「くるま蝦の頭だけ」のてんぷらを食わせてくれたことがあった。彼が自分で思いつき、銀座裏の某てんぷら屋に命じて作らせたのだそうで、それは豊富なカルシウムを含む極めて美味な食品であると、自分の着眼の独創的な点を大いに誇っていた。

——これを世間では捨てているんだ、と林房雄は繰返し強調した。こういうすばらしい物をさ、と林房雄は自分では箸はしを出さずに云い張った。みんな捨てているんだ、世間ではみんな捨てちゃうんだぞ、さあ喰べてくれ。

私は一つだけやってみたが、どれほどそれがカルシウムに富んでいるにせよ、とうていのみこめる代物しろものではないと知り、すば

やくナフキンに吐き出して卓子の下へ捨て、「世間の人たちがみんな捨ててしまう」のは当然の理であり、林房雄は逆説を弄ろうしているのに相違ないと思った。

右のように、林房雄は自分の独創性を誇っていたが、それより二十数年以前、すでに増さんという先覚者のあつたことを私は知っているのである。私は吐き出したが、増さんはうまそうに、頭だの骨だの尻尾だの、一つ一つ丹念に噛かみ味わいながら、私以上にゆっくりと時間をかけて、爛らんをした水割り焼酎を啜すするのであった。

その次には路上で会った。堀東のところで私がスケッチをしていると、一人の男が背中に初老の女をおぶって歩いて来、背中の

女と、なにやらなごやかに話しながら、中堀橋を渡つて去つていった。この土地でそんなところをみつけると、人は決して黙っていない。おとなはまあともかくとして、悪童どものからかいの好餌になることは疑う余地がなかった。だが、そこには往^いき来^きする人がいたし、悪童どもも遊んでい、かれらはみなその二人を認めたのであるが、爪^{つめ}の先ほどの関心を示す者もなく、むしろそのことのほうに私はおどろいた。その次に、同じような二人と路上で出会つたとき、女を背負っている彼のうしろ姿を見て、彼の足が流^{とく}神的^{しん}にまでがに股であることと、「天鉄」で魚の頭や尻尾のてんぷらを注文する男であることに気がついた。こうして幾たびめかに、私は堀南にある「梅の湯」という銭湯をスケッチしてい

たとき、その女を背負った彼が、「梅の湯」の暖簾のれんをあげ、女湯のほうへはいってゆくのを見て、ちよつと眼めをみはった。

「ああ、そりや増さんてえだ」

蒸気河岸がしの「根戸川亭てい」で、平二郎という老人の漁師が私に云

った。平二郎は息子の嫁と寝るといわれ、そのはらいせに息子と

平二郎の妻（後添いで息子には義母に当ると聞いた）が寝るとい

う噂うわさのある老人で、べらぼうに酒が強く、口もまた達者であつた。

「背負つてるのはおつかあでね」と平二郎は云つた、「ああやつ

て背負つていって、着物をぬがして、軀からだをすっかり洗つてやつて、

きれいに拭ふいて、それから着物を着せて、うちまで背負つてけえ

るだよ」

私が質問すると、平二郎は大きな眼をそろそろとすぼめ、ふしぎなことを訊^きく人間がいるものだ、とでも云いたげな顔つきで私を見た。

「なんでだね」と平二郎は訊き返した、「——若えもんならともかく、あんなとしよりが女湯へへえつたつて別条なかんべえがえ、おらだつて用があればいつだつてへえるだ、女どもだつてそんなこと屁^へとも思やしねえだよ」

そして、増さんはおつかあのことを決して他人に任せない。おつかあのだんな親しい者がいて、たまにはあたしが洗つてやろうと云つても、増さんはきつぱりと断わり、おつかあの軀すみの隅すみまで入念に自分の手で洗つてやるのだ、と平二郎は云つた。

私は高品さんの炉端でも、増さんの話をもちだしてみた。高品さんのところではあまり収穫はなく、「昔は村一番の鼻つまみだった」とか、「あだな綽名を家鴨つて云うだ」とか、いま漁業組合で働いているが、それは大だい蝶ちょうの旦那だんなが口をきいたからで、その大蝶の旦那でさえ増さんの顔は「見たくもねえ」と云っている、なぞという程度のことしか聞くことはできなかった。綽名の「家鴨」というのは、彼がひどいかに股で、軀を左右にゆさぶりながら歩くかつこう恰好が証明していた。そういうわけで、増さんのことは平二郎の問わず語りでしか聞けなかったのであるが、それはおよそ次のようなものであった。

増さんはごく若いときから乱暴者で、信じられないほど力が強

かった。十七歳のとき米俵を左右の手に一俵ずつ持ったままで、中堀から蒸気河岸まで、息もつかずに走りとおしたそうである。性分は短気で飽きっぽく、酒を飲むと喧嘩けんかせずにはいられないし、喧嘩をすればきまって幾人かにけがをさせた。小学校も三年きりしかいかなかったが、それは勉強ができなかっただけではなく、先生になにか云われるとすぐ逆上したようになって、先生を殴りつけたり、教室にある物を打ち壊したりするからで、先生たちは協議を重ねた結果、葛飾かつしかのほうの小学校へ転校させた。往復の船賃は学校で負担する、という条件さえ付いたそうであるが、これは「義務教育」という国家制度の形式をととのえたまでのことで、葛飾の小学校へ責任を転嫁てんかしたわけである。増さんが葛飾ま

で通学する筈はずはないし、そのまま学校へゆかないことが視学関係に嗅かぎ出された場合でも、浦うらかす粕校の責任は問われないだろう、という深い思慮によるものであった。——増さんはそれつきり学校をやめたが、通学の船賃だけは貰もらった。その関係はよくわからないが、とにかく六年の卒業期まで、船賃だけはきちんと取り立てたものだ、と平二郎は自分のことのように証言した。

短気で飽きっぽい彼は、次つぎと仕事を変えながら、どんな仕事も一年とは続かず、一年か二年おきくらいに、家をとびだすようになった。どこでなにをしていたのかわからないが、徴兵検査のときも所在不明で、憲兵隊とのあいだにいろいろ面倒なことがあった。一年おくれて検査を受けたとき、背丈が規定の寸法に足

りないため兵役をまぬかれたが、徴兵官はくち惜しさのあまり膏^あ
^{ぶらあせ}汗をながし、「こういう人間をとらないでどんな人間をとる
んだ」と云ったそうである。

増さんは二十三の年に結婚した。相手は貝の缶詰^{かんづめ}工場で働いていた娘で、名はきみの、年は十八歳であつた。東北の生れであるが、両親に死なれたので、浦粕にいる遠い親類が引取つたのだという。その親類は漁師をしていて、子供が八人もいたため、きみのも十二の年から働かなければならなかつたし、また家族の人たちにもあまり好遇されず、増さんとの結婚も本人は知らなかつた。増さんが一円紙幣を五枚見せたら、これからすぐにも伴^つれていってくれ、と云ったそうである。

「あのおつかあはそれを聞くと肝うつぶしてとびだしちまっただ」と平二郎は云った、「なにしろおめえさん、村一番の乱暴者で鼻つつまみだったからねえ、——みんなはきつと死ぬ気だべえつて、えれえ騒ぎをしたもんだよ」

きみのはどこかの警察に捉^{つか}まつて保護され、増さんがいつて引取つて来た。

二人の結婚生活はごく平凡に過ぎていった。結婚してからもきみのは大蝶の工場へかよっていたし、増さんもなんとなく大蝶へ出入りをして、雑役のようなことをしたり、旦那が猟にいくときは供もした。平凡な結婚生活は三年ほど続いた。むろんそのあいだにも、増さんの行状は変らなかつた。酒を飲むと暴れるし、誰^{だれ}

かと口論をしたり、殴りあいをしたりしない日はなかった。或るとき大蝶の工場のほうの支配人が、おまえのようなやつはもうくびだ、と怒った。増さんは鼻の先で笑った。

「冗談を云いなさんなつて、増さんはえへら笑いをしたつてえだ」と平二郎は云った、「おらあ好きで大蝶の仕事に來ているんで、雇われてるわけじゃあねえ、雇われてもいねえ者をくびにできるかつてよ」

そこで支配人は旦那にそのことを告げた、すると旦那は、あいつはおれの命の恩人だから好きなようにさせておけ、と云った。命の恩人とはどういうわけなのか、旦那はその理由を云わなかったが、支配人はひきさがるよりしかたがなかった。そんなことの

あつた前後から、増さんの女房にようぼういじめが始まつた。結婚の話が出たとき、どうして逃げたのか、というのが手をあげるきつかけであつた。ほかに男がいたのだろう、正直に云つてしまえ。そう喚わめきながら殴つたり蹴けつたりする。きみのはただあやまるだけであつた。逃げたのはわけもなく怖かつたからで、もちろん男などはいなかつた。それは誰でも知っているし、おまえさんもよく承知している筈だ。逃げたのは悪かつたからあやまる、「どうか勘弁しておくれ」とあやまるだけであつた。どんなにひどいめにあわされても、決して大きな声をだしたり、身を護まもるとか、逃げるなどということはしない。両手で頭を抱え、足をちぢめて、増さんのするままになつていた。

「おら隣りにいただよ」と平二郎は云つた、「いまでも隣りだが、そのじぶんも隣りにいたからよく知つてゐるだ、幾たびか止めにつたこともあつた、なにしろ殴つたり蹴つたりする音が筒抜けに聞えるだからね」

だが平二郎は止めにゆくことをよしした。止めにゆくと却つて増さんは逆上し、おれに赤恥をかかせたと云つて、もつとひどくきみのに暴力をふるうからである。——きみのは軀あざにいつも痣あざの絶えまがないため、錢湯にゆくことができず、冬でも狭い勝手で行水を使つていた、ということであつた。

そのころからまた、増さんの出奔癖もぶり返した。なにも云わずにひよいといなくなつたまま、ときには半年、ときには二年く

らいも帰っても来ず、手紙もよこさないのである。帰って来るのもまったく突然であつた。まるで朝でかけた者が夕方に帰つて来た、といったようすで、家へはいるなり、（きみのがいれば）

「めし」とか、「酒」とか云う。きみのが工場に出ているときだと、山崎屋という酒屋で立ち飲みをしていて、きみのに、「錢を持て来い」と使いを出すというぐあいであつた。

夫婦には子供がなかつた。増さんが道楽のあげく悪い病気にかかつて、そのため子が生れないのだといわれたが、きみの自身はそれだけがせめてもの儲けもうものだと、平二郎のかみさんに云つていたそうである。

こういう生活が二十年以上も続いた。そうして増さんが四十五

歳の年、——というのは平二郎と同年だからはつきり覚えているのだそうだが、——一年ばかり出奔していた増さんが、帰って来るといきなり、きみのを殴ったり蹴ったりした。帰って来て、家へはいるといきなり始めたのであった。——留守のあいだに男を作った、ちゃんと聞いて来たと云うのが理由で、いちど途中で焼酎を買いにやり、それを飲んでからまた始めた。

「あんまりひでえんでよ、おら聞いていられなかった」と平二郎は云った、「もう夜の十時くれえだったが、おつかあやがきを伴れて外へ出ちまつただ、うちのおつかあは駐在へ届けべえつて云つただよ、そんなことをしてみろ、あとが恐ろしいだぞつて云つて、おらたちは蒸気河岸までいって一時間くれえもぶらぶらして

えただ」

かれらが家へ帰つてみると、隣りの騒ぎはもうしずまっていた。平二郎は、増さんがきみのを殺してしまったのかもしれない、と思つてがたがたと軀がふるえた。ところが、ふしぎなことにその夜かぎり、増さんが別人のように温和おとなしくなつた。——きみのは殺されはしなかつた。明くる朝そつと、平二郎の家の勝手口へ来て、済まないがお米を少し貸してくれ、と云つた。眼のまわりに青痣ができてい、顔ぜんたいが腫れあがり、片方の足を痛そうにひきずっていた。あとでわかつたのだが、きみのはそのとき左の足の骨を折っていたので、隣りとはいえよく歩いて来られたものだ、と、医者が云つたそうである。——足の骨折で、きみのは工場

へ勤めにゆけなくなつた。医者と呼ばれて来たときは、折れた骨のあいだに肉がくい込んでいて、手術をしてもどうにもならないと診断された。医学的にどういう症状なのか、詳しいことはわからないが、それ以来きみのは家でやれる内職を始めた。土地が土地だから内職といつてもそう多くはない、漁師の仕事着であるぼつたとか、赤ん坊の着物など、簡単な縫い物を安く引受けるぐらいがせいぜいであつた。ぼつたとは端切はぎれを縫い合せるもので、ぼろ布と端切さえあれば誰にでも出来る物であり、しかしこの家でも主婦はそれぞれ稼かせぎ口があるので、縫い賃が安ければ他人に頼むほうが、経済的には有利だったのである。

増さんはまた大蝶へかよい出した。もう若旦那の代になつてい

て、若旦那といつても年は四十がらみだったが、亡^なくなった大旦那から聞いていたのだろう、若旦那も鉄砲射^うちが好きで、その季節になつて猟にでかけるとき、増さんにお供を命じたが、増さんはそのたびに断わり、どうしてもいっしょにはゆかなかつた。それについて増さんは一度だけ「大旦那のときに大きなしくじりをやらしたから」ともらしたそうである。かつて大旦那は増さんのことを「命の恩人」と云つた。増さんが「大きなしくじり」と云つたのはそのときのことをさすらしい。二つの言葉はまるで反対だし、実際になにがあつたかはわからずじまいだったが、若旦那もしいて供をさせようとはしなかつた。

相変らず酒は飲むけれども、増さんは決して酒乱にはならな

ったし、喧嘩などもしなかった。大蝶の工場で雑役のようなことをやっているうちに、大蝶の若旦那の口ききで、漁業組合へ勤めるようになった。——もちろん妻に乱暴するなどということはない。きみのは完全な跛びっこになったため、水汲みずくみや薪作り、買物などは増さんが引受けた。そればかりか、まえに記したように、銭湯へ背負ひつてゆくようにさえなった。

「人間があんなに変わるものかどうか、おらもう自分がばかにでもなったようにたまげけえったもんだ」と平二郎は云った、「——それでな、或るときおら増さんに訊いてみただよ、おめえもずいぶん変ったもんだ、まるで増さんじゃねえみてえだぜつてよ」「すると増さんはえへら笑いをして、こう云つただよ」平二郎は

続けた、「——東の養魚場の旦那^{めんどり}とこで鶏を五十羽も飼ったことがあった、そのとき旦那^{めんどり}が牝^{あひる}鶏に家鴨の卵を抱かしてみた、その卵がけえつて、ほかのひよこといっしょに育ったが、家鴨の子は家鴨だべえさ、ちよつと育つと養魚場の池の中へへえつて泳ぎだしただ、——牝^{めんどり}鶏だのほかのひよこはびつくらしたんべがね、家鴨の子はいつかきつと家鴨になるだよ、いまのおらが本当のおらだようになあよ」

平二郎老人の話は以上のようなものであった。

私は「天鉄」で増さんを見かけるたびに、だんだんと親しい気分になり、ちよつとふところに余裕があると、ビール一本とか、酒一本ぐらいを奢^{おご}ったりした。増さんはわるく遠慮をせず、すな

おによるこんで受け、自分の皿さらにあるてんぷらを「摘つまんでくれ」と云つてすすめたりした。例の鰯はぜやきすやめごちやくるま蝦えびなどの、頭しっぽと尻尾と骨だけのてんぷらである。そのとき私が喰べていたら、林房雄の逆説などには乗らなかつたろうと思うが、私はどうしても箸はしを出す気にはならなかつた。——こういうふうにして、親しく口をきくようになってから、私は彼に向つて「おかみさんを背負つて銭湯へゆくのはたいへんだろうが、見ている者にとつてはまことに心あたたまるものだ」というような讃辞さんじを述べた。すると増さんはいつとき眼を伏せ、銀色の短くて太い疎毛そもうの生えた頭を、かすかに左右へ振りながら長い太息といきをした。

「つまらねえ、あんなことつくれえなんでもねえだよ」と増さん

は云つた、「このおらがおつかあにしたことに比べれば、あんなことつくれえ蠅はえの頭みてえなもんだ」

「先生は知るめえがね」と増さんは続けて云つた、「おつかあを跛にしたなこのおらだ、おらがこの手でやったこつた、——この手でおつかあの髪の毛をつかんで、うちの中じゅう引摺ひきずりまわし、殴つたり蹴つたりした、まるつきりきちげえになつていただな、足をあげて踏んづけたら、おつかあの脛すねの骨が折れちまつただよ」

私は黙つて聞いていながら、それはたぶん平二郎が妻子を伴れて、蒸氣河岸がしへ逃げだしたというあの晩のことだと思つた。

「おら骨を折つたとは知らなかつただ」と増さんは続けていた、

「ただ、おつかあのやつが妙な声をだしたんで、ひよいと手を引

いた、するとおつかあが倒れたまま、おらのことをじっと見あげながら云っただ、——どうか殺さねえでくれ、つてよ」

増さんは恥ずかしそうに眼をしばしばさせ、右手で、銀色の無ぶ精しょう髭ひげの伸びた顎あごを擦さった。

「どうか殺さないでくれつて」と増さんは少しまをおいて云った、「おらを見た眼つきと、そう云うのを聞いたとき、おらそれまでに自分のしてきたことを、洗いざらい一遍に見せられたような気がしただ、なんもかんも一遍によ、——まさか嘘うそかと思うかもしれないねえが、おらそんとき男泣きに泣いちゃっただよ、がきみてえになあよ」

私は嘘だなどとは思わなかった。嘘どころではない、私には増

さんを見あげた妻女の眼つきや、その哀訴の聲が、現実に聞えるように思えたくらいであつた。私のふところにそう余裕はなかつたが、増さんにもう一本酒を奢らずにはいられなかつた。

あいびき

私は青べかを三つ^{いり}へ漕ぎ入れ、川やなぎの茂っている、土堤^{どて}の蔭^{かげ}のところで停^とめて、鮒^{ふな}を釣^つりにかかった。——そこは沖の百万坪の端に近く、土堤の上を通る人も殆^{ほと}んどない。晩秋の午後の陽^ひがあたたかく、そよ風も吹かず、水路の水は眠ったように静かで、澄みあがった空と雲とをはつきり映していた。——例によつて釣りの腕前は知れているから、小さなきんこと称する鮒^{ふな}を三尾に、やなぎつ鮒^{ばや}を五尾ほどあげると、それでくいが止つてしまつ

た。場所を移して釣るほどの気持もなかったし、陽のあたたかさと、周囲の静かさが氣にいったので、私は青べかの中で横になり、^{からだ}軀を樂にして、持って來た本を読み始めた。

本を読み始めはしたが、いくらも読み進まないうちに眠くなり、陽の光を除けるために、ちよつと顔へ本を伏せたと思つたが、そのまま眠つてしまつたらしい。どのくらい経^たつてからだろう、眼^めをさますと、すぐ近くで人の話す声が聞えた。私は起き直つて本を閉じ、釣竿^{つりざお}をあげて歸り支度にかかったが、ふと、その話し声にひきつけられて手を止めた。

「よう、いいじゃねえかよ、なあ」と若わかしい男の聲がなにかをせがんでいた、「なあつてば、なんでもありやしねえだからよ

う」

「よしな、まあ」と女の拒む声がした、「おらそんなこと知らねえもの、ええ、よせつてばあ、悪いことすんならおらけるだ」
 「とくあねが病気になつただつて」と男の声が云つた、「きんのかえつて来たつてほんとかよ」

「おら知んね、ああ知つてる」女の声は少しやわらいだ、「流産してつからあんべえが悪いだつて、暫く家しばらで養生するような話だつけど、いやんなっちゃう」

「なにがよ」

「女がよ、お産だの流産だのつて、苦しいめにあうのはいつも女だ、ひん」慥たしかにそのとき女は「ひん」という声をだした、「あ

ああ、いやだ」と女の声は続けた、「世の中に男つてもものがいつから女が苦しむだ、男なんかみんないなくなればいいだ」

「女だつて苦しむだけじゃねえだよ」と男が云つた、「そうじゃねえだよ」どうやら彼には反論がみつからないとみえ、また話を變えた、「中堀のみよつこが足を挫いた^{くじ}つてことを知つてつか」

「知つてなくつてさ、みよつこは、——よしな、まあ、いけ好かねえ」

「痛えな、そんなことしなくつてもいいじゃねえか」

「よわ虫、なにさこんくれえなこと」

「痛えつてば」

そこでちよつと声がとだえ、口笛のような妙な声が聞えた。な

んの音かはすぐにわかつた。すすぎ芒の葉を横にして唇くちびるに当て、中ぐらの息で吹くのである。草笛とは違うが、単純な田舎めいた顫せんし震んおん音が出るのだ。恋をさそいかけている若者にしては、子供っぽいことをするな、と私は思った。女がそんなことをよろこぶ筈はずはない、まもなく「あああ」と女が退屈の声をあげ、男は芒笛をやめた。

「おめえさつき女ばかり苦しいめにあうつて云つたつけが」と男が云つた、「それがわかつていてどうして嫁にゆく女が絶えねえだえ、嫁にゆくめえにだって、男をこしらえる女は数えきれねえくれえいんじゃねえか」

「そりやあみんな男が悪いからさ、男がうめえこと云つて騙だますか

ら、つい本気になって苦しいめにあっちまうだ、昔っからいつも男が悪いために」

「りようは新しいべか舟を買っただな」と男が云った、「元のべか舟はじいさまの代からのもんで、浦^{うらかす}粕一のぶつくれ舟だっけだが」

男は次に散髪屋で湯沸し器を買ったことや、消防組の組員の変ったことや、どこそこの誰^{だれ}かがどこそこへいったとか、その場の空気とはまったく無縁な話を、続けさまにきりもなく並べた。そうして、女が聞きくたびれたと思われるころ、また急に恋のくどきに^{もと}戻った。

「女が騙されるって云うけれど、そりやあ男が騙すんじゃない、

女が騙されるようにできてんからだべえ」

「女がどうできてるって」

「女の軀にやあ男と違ったきけえがあんだ」と男が云った、「どんなきけえだっていつも使ってるか、油あさして掃除をしなけりやあ錆び^さつちまう、女のきけえだって放^ほつとけば錆びついて使ひものにならなくなるだ、だから」

「だから錆びねえように騙されるっていうのけえ、ひん」と女が云い返した、こんども間違いなく「ひん」と聞え、女はさらに続けた、「錆びねえようにまちように掃除のできるきけえを持ってゐる男がいたらおめにかかりてえよ」

恋の囁^{ささや}きにしてはあまりに率直すぎると読者の中には疑惑をい

だく向きもあろうかと思うが、彼女が率直すぎることによりも、むしろ浦粕ではこんなに根気よく、恋のさそいかけをすることのほう^{まれ}が稀なのである。そのとき私は、男の正攻法に対して敬意を感じた。

「ためしてみつか」と男が云った、「まちように掃除ができねえかできつか、ためしてみねえじやわかりやしねえや」

「よせつてばな、まあ」

「痛え、おお痛え、ひどえことすんな、ま」

「いやなことすつからよ」

「いしや爪が生えてんな」と男が云った、「よしこは小指の爪をいつも伸ばしてんだな、こんなにも長くよ、どういうつもりだか

さ」

それから伝なあこが蛇へびを食つたとか、東の養魚場で池の上いちめんに網を掛け、それは鴉からすや鳶とびをふせぐためだが、養魚池は三千坪もあるから、網だと云つても安い金ではあるまい、などという話をした。

「ああ聞きたくもねえ」と女がやがて欠伸あくびをして遮さへぎつた、「そんな話するために、わざわざこんなとけへおらをおんだだかい」

「そんだつていしがおらの云うこときいてくんねえじゃねえかい」

「それでそうやって饒舌しゃべつてるだか」と女が云つた、「そうやつ

て饒舌しゃべるだけ饒舌しゃべつてれば、いまにおらのほうから手でも出すと思つてゐるだかえ、ひん、つまんねえ」

「おら、この気持を知ってもらいたかっただよ、おらの本当の気持をよ」

「散髪屋の湯沸しだの養魚池の網だのでけえ、あああ」と女が云った、「おらけえるべえ」

男が慌あわてて女を呼び止めたが、女は返辞もしずに土堤へあがつて来、そのままさつさと根戸川のほうへ歩み去った。——私が川やなぎの蔭から見ると、それはまだへこ帯をしめている、十五か十六くらいの少女であつた。男はもそもそと、少女のあとを不決断に追つていったが、その男は二十五か六で、缶詰かんづめ工場の工員のように感じられた。——彼はおそらくよその生れであつて、この土地での恋のやりかたを知らなかつたのであろう。それとも気

が弱いだけだったのか。いずれにせよ、少女が怒って帰ったのは、男があいびきの目的に対して勇敢でなかったからに相違ない。私はそんなことを考えながら、帰り支度にかかった。

毒をのむと苦しい

私が晩めしのあと、独りで酒をすす啜っていると、窓の障子しょうじを外からあけて「喜世川」の栄子が覗のぞいた。

「障子に先生の影が映ってたのよ」と栄子が云いった、「あら景気がいいじゃない、あがらしてもらおうよ」

私は隠しそこねた一升びん壺に向つて顔をしかめてみせた。それは高品さんから貰もらったものであった。まったく酒の飲めない高品さんが、どこかからなにかの祝いで、一升壺を三本おくられ、二本

は炉端の客用にしたが、一本を私に呉くれたのであった。私もそのころはまだ初心級で、一度に二合とは飲めなくせに、飲みたくなつたときには一合買いをする、という経済状態だったから、一升壺が手許てもとにあるということは、その豊かさと幸福感の心理的効果だけでも計り知れないものがあつた。そこへ栄子があらわれたのである。「喜世川」というのは小料理屋で、これは幾たびも記したようにごつたくやと呼ばれ、料理や酒よりも、女中たちによる特殊サービスを本業としている店であり、栄子もその一人であったが、典型的な一人というほうがよりわかりやすいと思う。――彼女は表からあがつて来ると、小さな安物の茶筴ちやだんす筒をあけてり、そのあいだ休みなしに饒舌しゃべり続けながら、たちまちのうちに

膳ぜんごしら 拵えをしてしまった。私は机に向つて、自分で釣つった鰯はぜの

煮浸しの小皿こざらを脇わきに、本を読みながら飲んでいたのであるが、こ

うなつては栄子にさからつてもむだと思い、その折りたたみの古

ぼけた膳の前へ坐すわり直した。栄子は「冷ひやのほうがあとまできいて

いい」と云い、一升壇からじかに湯呑ゆのみへ酒を注いだ。私はそれを

見て、自分の爛かんどくり徳利だけは確保しなければならないと決意し、

それを自分の前へしつかりと据すえた。

栄子は景気の悪い日が半月も続くことを嘆き、これは世間の男

どもに甲斐性かいしやうがないためであると罵ののり、こうみえてもあたしは

江戸っ子であると、山形か福島あたりの訛なまりで云つた。私がここ

で福島か山形あたりの訛りだというのは、「喜世川」にいる他の

二人の女性から聞いたので、私自身にはどこの訛りかまったく不明であつたが、栄子の云うように「東京のまん中の神田つ子」の言葉でないことだけは慥^{たし}かであつた。

「あたし心中したことがあるのよ、先生」と栄子は云つた、「飲ましてね」

もう何杯も飲んでいるのである。私が質問すると、栄子は湯呑のふちを舐^なめた。厚いうえに信じがたいほど長い舌であつた。

「嘘^{うそ}じゃないよ、松の家のかあさんに訊^きいてみなさい、あたしが松の家に行ったときのことだからよく知ってるよ」と栄子は云つた、「その話をすつからさ、根戸川^{てい}亭からなにか取ろうよ、ねえ、景気つけちやおうよ先生」

私が答えると栄子は舌打ちをし、したくちびる下唇を突き出しながら湯呑へ酒を注いだ。

「どっこも不景気なんだね、やんなつちやう、こんなだといつそまた心中しなくなつちやうわ」と栄子は云った、「岸がんと心中したのもちやうどこんなてえな不景気の続いたときだよ、話しちやおうか、え、先生」

こういう場合には私は無関心をよそおうことにしている。この種の女性たちはいちやうにきよげんへき嘘言癖をもっていて、その身の上話の九分九厘ぶりんまでは作りごとであり、読んだ小説か母もの映画のバリエーションときまっていた。ところが、こちらで興味を示さず、聞きたくないふうをよそおっていると、約三〇パーセントぐらい

の割合で、本当の身の上を語りだすことがあった。

私は気乗りのしない口ぶりで質問し、栄子は肩をゆさぶった。

「先生もわかりきったこと訊くわね、このとおりあたいは生きてるよ」と栄子は云った、「飲ましてね」

私は黙って自分の酒を啜った。

「あたいはあつとしたことが好きなのよ」と栄子は云った、「めしだって鬼の牙きばみたいにはりつと炊たいたのをさ、沢庵たくあんかなんかでざくざく茶漬ちやづけにして搔かつこむのが好きさ、やわつこいめしだのおじやなんぞ大っ嫌いきりさ、だからばあつと心中しちやう気になったのよ」

私はまた冷やかに訊いた。

「ああそのことか、ふふう」と栄子は鼻へぬける妙な笑いかたをした、「わかつてるじゃないの、あたいこうしてここに生きてるんだもの、死ぬっくらい心中しちやったら生きてられやしないでしよ、しっかりしてよ先生」

私はしっかりして、口をつぐんだ。

栄子は話しだした。——その出来事は五年まえの十月だったという。相手の男は岸がんと呼ばれ、華やかな病氣専門の売薬で名高い「峰岸屋なにがし」という店の外交員であった。岸がんの「岸」は本舗の峰岸の一字であり、がんちゃんというのが男の名であるが、がんとはどういう字を書くのか、また「がん太郎」であるか「がん造」であるのか、栄子はまったく知らなかった。――

―あとで私がその点を糺ただすと、栄子はうるさそうに云った。

「心中するんだからって、名前を知ってなくっちゃならないってもんじゃないでしょ、寄留届をするんじゃないさ、つまんないとこへ水を差さないでよ」

岸がんとは半年ほどの馴染なじみだったという。年は二十八だと云つ

ているが、栄子の見たところでは三十二歳より下ではなかった。

遅たくましく陽焼ひやけのした、にがみばしかったいい男であり、栄子の馴染

ときまつたときには、浦粕うらかすじゅうのごったくやの女たちみんな

が、嫉妬しつとのあまりやけくそみたようになったそうである。――岸

がんは赤いオートバイでやって来た。店名を派手に白抜きで書いた車で、「ガスをひるときの音がすてきだった」と栄子は云った。

排気音のことをさすらしい、私はあぶなく笑いそうになり、酒に
むせたようなふりをしてごまかした。

岸がんは金使いが上手だった。来るとまずしようばいを片づけ、
堀東のおでん屋で酒を飲み、そこから栄子と呼ぶ。「松の家」は
堀南だが、歩いて五分とはかからない。ごったくやの習慣として、
よその店から女を呼ぶと一時間なにがしかの玉ぎよくだい代を取られる
が、女にとっては一種の誇りになる。つまり、玉代を払っても早
く逢あいたいほど深い仲だ、と思われるのだそうで、岸がんはそう
いう女の気持をよく知っていた、ということであつた。

半年あまり経たつた或ある夜、岸がんはじかに「松の家」へあらわ
れた。あのガスをひるすてきな音も聞えなかつたし、着物姿で、

素足に古びた雪駄せったをはいていた。訊いてみるとオートバイではなくバスで来たのだそうで、五日もはらくだしをしたあとのようにげっそりとしていた。そして二人つきりになり、一本の酒も飲み終らないうちに、「おれといっしょに死んでくれ」と云いだした。「初めに岸がんの顔を見たとき、あたいははあんて思ったわ、そして死んでくれて云われてまたははあんて思ったのよ」と栄子はそろそろ酔いだした口ぶりで云った、「飲ましてね」

岸がんは店の金を五〇〇も使い込んだのであった。彼には妻もあり子供が三人もいたが、栄子のことが頭にきて、つい知らず店の金に手をつけた。はじめは五か一〇くらいで、それは集金の操作でうまくまじくなつたが、一〇が一五となり一八となるうち、

ますます栄子に熱が上がり、ここが男のみせどころだと、すっかり太っ腹になってしまった。——そうしてついに、その金額が五〇〇という高額に達し、支配人に発見されて返済を迫られた。

——金を返さなければ訴える。

支配人は七十幾歳にもなるのに、まだ頭の毛がまっ黒で青年のようにふさふさしていたし、眉毛も黒く、幅が三ミリもあるかと思われるほど太かったが、その太くて濃い眉毛をぴくぴくさせながら、やさしい声でそう云い渡した。岸がんは駆けずり廻ったが、借りられる額はせいぜい二〇〇で、あとの三〇〇はどうにもひねり出しようがない。支配人は全額を要求するし、できなければ手がうしろへまわる。それでは妻子にも世間にも顔むけがならない

うえに、かたときも栄子とはなれては生きられないから、いつそ二人で死ぬ決心をした、と云ったそうである。

「あたいははあんと思つたよ、きたなつて思つちやつたよ、ははあんきたなつてさ、わかるでしよ先生」と栄子が云つた。

私が答えると、栄子は鼻で笑つた。

「わかんないかな、あたいの軀からだだよ」と栄子は動物的に張りきつた胸を叩たたいてみせた、「そんなこと云えばあたいがくしやつとまいつてさ、くらがえしてでも三〇〇ぐらいのお金は拵こしらえるだろう、つて見当つけて来たんさ、子供騙だましだよまったく」

そのときは栄子自身も不景氣で、にっちもさっちもいかない状態だつた。雑貨屋や錢湯にまで借りが溜たまつていたから、そのわ

けを話していつしよに死にましようと答えた。彼女たちのあいだでは「心中」という言葉は愛情の極致を示すものであり、誰^{だれ}でも一生にいちどはやってみたいとあこがれるものだ、と栄子は云った。——岸がんは思い詰めたような顔をしたそうで、それなら催眠薬の強いのを持って来るから、それをのんで死ぬことにしよう、あさつての晩に来るが心変りをしないように、と云った。栄子は催眠薬なら自分がドイツ製のを持っている、あんたはあんたの分だけ持ってくればいい、と答えた。そんな物をどうして持っているんだ。まえに自分の友達が自殺したとき、残りを隠して置いたのだ。ドイツ製のなんという薬だ。忘れたけれども白い粉薬で衣服のむと死ぬるのだ。そんな問答をして、その夜は別れた。

「たぶん来やしまいと思つたわ、でも念のためだと思つて薬だけ拵えておいたのよ」と栄子は云つた、「かあさんが頭痛薬のノーポンをのんでたでしょ、それを一服しつけえしちやつて、それにメリケン粉を少し混ぜたの、ノーポンで薬は白くつて、ガラスを粉にしたみたいにきらきら光るのよ、それがメリケン粉と混ぜたものだから、とつても強い催眠薬みたいに見えたわよ」

私が質問すると、栄子は片方の肩をぴくんと突きあげた。

「そんなことわかりきつてるじゃないの、あたいは借りがほうばうに溜まつてるでしょ、だから心中したつてことになれば、みんな同情して、そんなようなわけなら貸しは待つてやろう、つてことになるわよ」と栄子は云つた、「そうでしょ」

要するに偽装心中をたくらんだのである。栄子は岸がんが来ないかもしれないと思つたが、岸がんは約束どおりやつてきた。彼は晒し木綿の肌襦袢はだじゅばんと白いさるまたを見せ、死に装束だ、という意味のことを云つたそうである。襦袢もさるまたも既製品で、一と五〇くらい出せばどこでも売っている品物だそうであつた。「来たのは九時ごろかしら、ずっと不景気が続いたときで、うちには一合の酒もないのよ」と栄子は云つた、「岸がんにそ云つたら、今夜は心中する晩だから少し都合して来たつて、一円さつを三枚も出したじやないの、あたいやつぱり大川に水絶えずだなつて思つちやつたわ」

彼女は自分が酒と肴さかなを買いにいった。一と二〇で酒を一升買い、

○・三〇で干物ひものとうぐいす豆と佃煮つくだにを買い、残りはかあさんに渡した。するとかあさんは悦えつにいつて、岸がんのことを福の神だねえと云ったそうである。

「それから二人で飲みだしたんだけど、これから心中しようつていうばやいでしょ、いくら飲んだつて酔やしないわ」栄子はおくびをして続けた、「いろいろ思い出ばなしをしたり、親きようだいのことや、お互いに運の悪い生れつきのことなんか話しあつたでしょ、二人ともすつかり身につまされちやつてさ、しまいは抱きあつて泣いちやつたわ」

十一時に店を閉めた。ほかには客が一人もなく、かあさん夫婦も女たちも寝ついた。そこで岸がなが「やろう」と云いだした。

十二時過ぎたところで、栄子はもう少しその氣分に浸っていたかった。これで心中するのかと思うと、酒の酔いとはまったく違った、なんと云つていいかわからない酔いごちと、止めようとしても止らない甘い涙とが、そのまま終るにはいかにも残り惜しかったのである。岸がんはさすが男のことで、こんな話をすればするほどみれんな氣持が起こる、このへんできまりをつけようと主張し、持つて来た催眠薬を出した。そこで栄子も諦め、あきら拵えておいた薬をハンド・バッグの中から取り出した。そのときになつてふと、見せろと云われはしないかと心配した。なにしろ男は薬品の外交をやっていたのだから、見られたらばれるに違いないからである。しかし岸がんはなにも云わず、湯呑に水を注いで自分から先にの

んだ。栄子も「負けてはいられない」と、同じ湯呑に水を注いで薬をのんだ。

「それから寢床へ横になつて抱きあつて、またさんざん泣いたわ」と栄子は云つた、「あとは話さなくつてもわかるでしょ、心中する人間は死ぬまえに一生分もたのしむつて、あれはほんとよ、あたいこむら返りを起こしちやつたわ、先生つたら、飲ましてよ」
いつか眠つてしまつたらしい。変な声で眼めをさますと、岸がんが苦しんでいた。大の字なりにのびたまま、しきりにげっぷうをしていた。栄子のはつきり眼がさめ、すると恐ろしさと苦しさとではね起きた。

「あたし心中したんだと気がついたら、胸の奥のところが焼ける

ように苦しいの、岸がんはのびたままげつぷうをしているでしょ、大変だと思ったらあとは夢中で、はだしのまま駐在所へ駆け込んじやったわ」

私が問いかけると、栄子は憐れむような眼で私を眺めた。

「毒をのめば苦しいにきまつてるじゃないの、わからずやだな先生は」と栄子は云った、「それは本当はノーポンとメリケン粉を混ぜただけだけどさ、人間は気持のもんでしょ、人間ってものは気持のもんなの、わかつて」

私は自分の酒を啜った。

若い巡査は狼狽した。同僚を起こし、分署に電話をかけ、医

者のところへ走った。医者が来たとき、栄子は苦しさのあまり胸

を搔かきむしつたり、叫び声をあげながらのた打ったりしていた。すぐに白い泥水どろみずのようなものを飲まされて、むりやり口へゴム管を入れられ、ポンプみたような機械で、胃の中の物を吸い出された。それを三回ほど繰返されたが、死ぬかと思うほど苦しくって、医者の手首へ噛かみついたそうである。——このあいだに巡査の一人は「松の家」へ臨検にいった。うちではなにも知らず、みんな暢のんき気に寝ていたが、巡査に叩き起こされ、わけを聞いて仰天し、巡査といっしよに岸がんのようすを見にいった。ところが寢床はからっぽで岸がんの姿は見えない、彼の草履もなくなっているのだ、苦しさのあまり外へ出ていったのだろう、ということになった。そこで消防組員が起こされ、提ちようちん灯ちんがつけられ、手分けを

して捜しにかかる、蒸気河岸の棧橋の端のところに、揃えてぬぎ捨てである草履が発見された。――栄子は病院へ移されていて、詳しいことは知らなかったが、岸がんは身投げをしたに相違ないという結論に達し、十幾はいかのべか舟が根戸川へ漕ぎ出された。

岸がんはみつからなかった。死体は海へ流されたのだろう、数日にわたって海も搜索された。このあいだに、警察電話で連絡し、彼の勤めている薬品商店へ事故を知らせたが、店ではもう解雇したというし、住所をしらべると移転したあとで、移転先は不明だということであつた。

栄子は警察で訊問じんもんされたとき、「むり心中をされた」と答え

た。そこが彼女の知恵のあるところだと自慢したが、知らずに毒をのまされたと云いえば、岸がんが死んでも自分は罪にならないのだそうで、二週間ばかり留置場へ入れられただけで釈放された。

田舎のことではあるし、時代も暢びりしていたので、栄子の胃から吸い出した「毒薬」はべつにしらべられもせず、岸がんの死躰は発見されないままに、「松の家の心中」という評判だけが残り、そのためひところの栄子は浦粕じゅうのにんきを一人占めにしたそうであつた。——彼女は紙に岸がん様と書いて、それを位牌いはいとみたて、世間でにんきのわいているあいだは、欠かさず線香をあげていた。だが、にんきなどというものはかないもので、五六十日も経つともう誰もその話をしなくなり、みんな「そんなこと

があつたかしら」といったような顔をするようになった。

「ここまでではいいんだけどさ、——聞いてるの先生」と栄子が云つた。

私は答えて、自分の酒を啜つた。

「そんな氣のない顔をしないでよ、これからくやしい話になるんだから」と栄子は酒を呷あおつて咽むせ、咳せきこみながら二つも三つもくしやみをし、涙と水漬みずばなをたらし、それを浅草紙で乱暴に拭ふいてから、「こんちくしょう」とどなった。二つ以上くしやみをしたときには、そう云わないと風邪をひくのだそうである。栄子はなお咳をして、喉のどの調子をととのえてから云つた、「——くやしいじゃないの、岸がんのやつ生きてたのよ」

話のようすで、私もそんなことではないかと想像していたが、むろん口には出さなかった。

それからまる一年経った或る日、堀東のおでん屋へ一人の男が飲みにはいった。くたびれた背広を着、かばん 鞆を持ち、鳥打帽をかぶっていた。夕方のことで、漁師や船頭が四五人飲んでいたけれども、誰もその男に注意する者はなかった。見慣れないよそ者が来るのは常のことだし、自分たちに利害関係のない限り、そんな者に氣をとられるような習慣はなかったからだ。——男は鳥打帽のひきし 庇をひきさげ、顔を隠すようにして飲んでいたが、やがて隣りにいた船頭の一人に話しかけた。去年この土地で心中事件があつたそうだが、と訊きいたのである。訊かれた船頭は首を振った。知ら

ないのではなく、すっかり忘れてしまつたらしい。すると男は躍起になつた。

「松の家の女ですよ」と男は云つた、「ごつたくやの松の家の女で、名前は慥たしかお栄とか栄子とか聞きましたがね、ええ慥か薬の外交員と心中したとかつて」

その話を漁師の一人が聞き咎とがめた。そしてその男の顔をひそかに覗いて見ると、びつくりして駐在所へ走つていった。去年とは巡査が變つていたけれども、心中事件は知っていたらしく、すぐにとんで来て男を捕えた。

「おまえは岸がんにゃあないか」と巡査が訊いた、「ここに証人がいる、嘘うそを云つてもだめだぞ、どうだ」

「へえ」と岸がんはうなだれた、「私はその岸がんでございます」岸がんは駐在所へ連行され、栄子も呼び出された。そのとき栄子は「喜世川」へ移っていたが、駐在所へいつて、そこに岸がんのいるのを見たときは、肝がつぶれてすぐには口がきけなかった。「あんた生きてたの」と栄子が云った。

「おまえ生きてたのか」と岸がんが云った。

それから取調べが始まり、岸がんはすぐにかぶとをぬいだ。栄子は岸がんの告白を聞くと、かつと頭へ血がのぼって、岸がんにもしやぶりつき、平手打ちをくれたり蹴^けつたり、引つ搔いたり噛みついたりした。止めにはいった巡査にも噛みついたし、駐在所の窓ガラスも一枚砕いたそうであつた。

「その巡査までが同類みたいに思えたのよ」と栄子が云った、
「先生の前で云っちゃあなんだけどさ、男なんてみんなけだもの
のろくでなしのぺてん師だよ」

私が訊き返すと、栄子は顔をしかめながら首を振り、大きなお
くびを三つもした。

「なにを怒ったかつて、訊くまでもないでしよ、岸がんのやつ強
い催眠薬だなんて云つて、ほんとに重曹じゅうそうをのんだんですつて
よ、あんまり人をばかにしてるじゃない」栄子はそのときの怒り
がまだおさまらないとでもいいいたげに呼吸を荒くした、「こつち
はおかげでいい笑いのものにされちゃったわ、ばかばかしい、
肚はらが立つたらありやあしない」

私は笑いをかみころしてまた訊いた。

「そんなこと云えるもんですかよ」と栄子はふきげんに答えた、
「こつちは本当に毒をのんだことになつてたし、医者の手当まで
受けてるんですもの、嘘だつたなんて云えば詐欺罪にさぎざいされるかも
しれないじゃないの、現に岸がんのやつは駐在所から分署へ、そ
して本署までまわされて、何十日かぶたばこへ入れられたうえ、
幾らとか罰金を払わされたつていう話よ、人を騙したばちね、い
いきみだわ」

酒がすっかりなくなると、栄子はさばさばしたようすで、
鼻はなうをうたいながら帰つていった。

残酷な挿話^{そうわ}

堀^{ほり}の南の洋食屋「四丁目」で、東浦バス会社の会計主任が、三人の運転手にビールを奢^{おご}りながら話していた。彼は三十二歳くらいで、名は杉田^{すぎた}春といい、周囲の人たちに「春さん」と呼ばれ、誠実さと頭のよさとでたいそう敬愛^{まゆげ}されていた。細おもてで色が（土地の者にしては）白く、濃い眉毛^{まゆげ}にもいやみはないし、まっ白で丈夫そうな歯を見せて、笑いながら話す口ぶりは静かで考え深く、自分で納得のいかないことでもすぐには反対しない。よく

検討し慥^{たし}かめてみたあとで「どうも月にや兎^{うさぎ}は棲^すんでねえようだな」と答えるということであつた。

「おらは看護兵だつただ」と春さんはバスの運転手たちに話していた、「おんだらのめえの兵は看護卒と云^いつてたようだっけだが」「やっぱりな」と運転手の一人が云つた、「頭がよくなくつちや看護兵にやなれねえつてえだが、春さんはそのじぶんから違つてただ、なせ」

「そんなこともねえさ」他の二人が同意を表するまえに春さんが云つた、「看護兵なんてのは、ふつうの兵として役に立たねえ者になると云つてもいいくれえだ」

運転手たちは反対した。病氣の兵が多くて手のまわらないとき

などには、「軍医の代診もする」と云うから、或る程度以上の切れる頭を持っていなければならぬ^{はず}筈である、と運転手たちは云った。春さんが会社の会計主任であり、自分たちがビールを奢ってもらっているから、お世辞を云っているのだ、と疑えるような気配はどこにもなかった。かれらは心から春さんを敬愛し、春さんの頭の明敏なことを、むしろ自分たちの誇りにしているようである。さえたつた。

「こんなことがあつたつけど」春さんはかれらの讃辞^{さんじ}から身を除けるように云った、「二年兵になった秋ぐち、三連隊でひどくたちの悪い風邪が流行^{はや}った、なんとかインフルエンザでいったつて、世間でもずいぶん流行ったが、肺炎を起こして死ぬ者がたく

さん出た、なにしろこれが効くっていう薬がねえだから、病人の軀からだにもちこたえる力があるかどうかで勝負がきまる、っていうあんべえのもんだっただ」

「注射してもだめだかい」

「せえぜえ強心剤を打ってくれえだっけだ」と春さんは答えた、

「それはまあとにかく」と彼は話を脇わきへそらせまいとして続けた、

「おらがいまでも覚えてることを話すべえ、まあ飲みながら聞い
てくれ」

「飲むこたあ忘れねえだよ」と運転手の一人が云った、
「尤もつともお

らあビールよりもちゅうのほうがいいけどな」

「その病気の兵隊の中に」と春さんは構わずに云った、
「島田つ

ていう初年兵がいただ、うちは慥か能登のとのほうだつた、佐渡かもしれねえ、もう忘れちまつただが、相撲のように頑がんじよう丈な軀をした男で」

「その」といちばん若い運転手が訊きいた、「うちが能登か佐渡だとすると、連隊区が違やあしねえかね」

「寄留すればいいだよ、東京で寄留届けをしてあれば寄留地の連隊にへえることもできるだ」と春さんが説明した、「麻布あさぶの三連隊ってえばおめえ、全国から入隊志願がわんさと集まつたもんさ」「そうだ」と他の運転手の一人が云つた、「三連隊ってえば名誉連隊だからな」

「その島田ってえ初年兵は」と春さんはいそいでその話題からぬ

け出した、「衛^{えいじゆ}成病院へへえるとまもなく重態になった、軍医はもうだめだからつて、隊では親元へ電報を打つと、島田のおふくろと妹が駆けつけて来た」

「まにあつただかい」

「軍医はまにあうまいと云つた、おらあ当番だったが、おらもこのようすじゃあまにあうめえと思つただ」と春さんが云つた、

「それがなんのおめえ、おふくろと妹が着くまっでちゃんと持ちこてえたし、それからも持ちこてえ続けただ」

「すると、治つただな」

「重態のまんまきさ」と春さんは云つた、「もうだめか、いま死ぬ^{きとく}か

つていう危篤^{きとく}状態でいて、それがいつかな死なねえだ」

「肝煎^{きもい}つちやうな」

「それどころの沙汰^{さた}じゃねえさ、軍医は投げちまつて寄りつきもしねえ、ほかにも患者は大勢あるつてえのに、おらあ島田初年兵からはなれることができねえ」春さんは白い歯を見せ、肩をすくめて当惑の気持を示した、「——なぜかつてえば、島田はいまにも死にそうな重態が続いているから、ときどき強心剤の注射をしなけりやあなんねえし、息を引取るときに隊の者が付いていなかったとなれば、軍の責任問題になる勘定だべえさ、なせ」

「そうだな」三人の中では年^{とし}嵩^{かさ}らしい、二十八九になる運転手が、考えこんだような口ぶりで云った、「軍縮からこつち、赤の野郎がいばりけえつてのさばつてるし、軍としても、国民感情に

やあ氣を病まねえばなんねえだからな、おらあ軍縮にやあてんから反対なんだ、仮にもおめえ国家てえものがあるのによ」

「それでもおらあまだいいほうだった」と春さんは話を引戻した、もと

「おらにやあ交代つてもものがある、交代になれば休むこともできるが、氣の毒なのはそのおふくろさんと妹だった、小さな瘦やせたおふくろと、はたちくれえの、兄貴によく似た軀つきの固太りに肥えた妹とは、病人の枕まくらもと許に付きつきりで、弁当もそこで喰たべるし、手洗いにゆくときのほかはいつときも側そばをはなれねえし、一睡もしなかつたつけだ」

「情愛だな」

「情愛だ」と春さんが云った、「おらなんぞ軍務の看護兵だが、

とてもあの二人のまねはできなかった、とにかく付きつきりで一睡もしねえし、代る代る病人に話しかけては泣いてるだ、おふくろも妹も眼めをすっかり泣き腫はらして、いよいよ死ぬらしいと聞きたんびに、二人で島田に抱きすがって泣きひいるだ」

「それでも死なねえか」

「それでも死なねえ」と春さんが云った、「よっぽど心臓が丈夫だったんだべえさ、軍医もこんな依怙えこじ地な心臓にやあこれまでもめにかかったことがねえって、心臓がこんなに丈夫でもよし悪あしだって云ってたっけだ」

「専門家にやあ専門家の意見があるだな」

「そんな状態がまる三日続いただ」春さんはまた巧みに話題のそ

れるのを防いだ、「口で云うと三日だが、實際その場で当事者ともなれば、三日は五日にも十日にも半月にもつくだべさ、そのあいだちつとの隙も^{ひま}ねえだ、ひよいとすると死にそうになる、二人が泣いて抱きすぎると、いやまだだ、ほつとして助かるかもしれねえと思つて、それはそれで^{うれ}嬉し泣きをするてえと、すぐにまたそら危ねえとなるつてえあんべえさ」

三人の運転手は黙つてビールを^{すす}啜つた。かれらの顔には、その「依怙地」な心臓に対する反感が、隠しようもなくあらわれていた。

「だが助からねえものは助からねえ、寿命が尽きれば天皇さまのお子さまだつて死ぬだ」と春さんは三人の眼をさまさせるような

ことを云った、「——まあ三日めの夜の十時ごろだっけか、ちょうどおらが交代になつてまもなく、島田初年兵は死んだだ」

三人は春さんを見た。寿命が尽きれば天皇の子さえ死ぬ、というシヨツキングな指摘と、さすがの心臓がついに兜かぶとをぬいだ、という表現とで、眠りかけていた好奇心がにわかに生氣を取り戻したようであつた。

「そうだかい」と運転手の一人がテーブルを撫なでながら、いまにも笑いだしそうな、しかし悲しみの味をきかせた調子で、首を振りながら云った、「——やつぱりな」

「おらあ当直の軍医を呼んだだ」春さんは淡々とした口ぶりで続けた、「やつて来た若い軍医は脈をみ、心臓へ聴診器を当て、瞳ど

うこう

孔を見ただ、それから椅子いすに腰を掛けて、患者がまちげえなく死ぬのを待つてたつけど」

「しよべえしよべえだな」

「これはしよべえじゃねえだよ」春さんはちよつと氣を悪くしたようであつた。しかしそれを表にあらわすようなことはせず、オクターブを半音さげたくらいの聲で続けた、「——そのうちに島田初年兵の心臓が止つただ、軍医は用心ぶけえ人だつたからうっかり信用はしねえ、聴診器を当てたまま辛抱よくようすをみてただよ、だが心臓の止つたにやあ嘘うそも隠しもなかつた、そこで若い軍医は聴診器を耳から外し、ゴム管をぐるぐる巻きながら、おふくろと妹に御臨終ですつて云つただ」

「軍隊でもやつぱりそんなふう云うだかい」

「するとな」春さんは質問を無視して続けた、「その島田初年兵のおふくろが、しよぼしよぼした眼を拭きながら、大きな欠伸あくびをしただよ」

「なにをしただって」

「おふくろの欠伸がうつったものか、妹も同じように大欠伸をしたつけど」春さんはそのときの情景を噛み味かわうかのように、眼を伏せて十秒ばかり黙り、それからゆっくりと頭を左右に振って、云った、「——三日三晩、一睡もせずに付き添ってただし、泣くだきやあ泣いたあとだからふしぎはねえだろうが、息を引取ったと聞いたとたんに、その母親と妹が枕許でおめえ、……」

そこで春さんは口をつぐみ、年嵩の運転手が大きな欠伸をした。

けけち

私は青べかを大三角に繋つないで、釣つりをしていた。秋の中ごろだ
 ったと思う、——大三角とは、根戸川の下流にある三角洲さんかくすで、
 デルタというものがいかにして形成されるかということを、絵解
 きに見せているような存在であつた。概略だけ描いてみると、
 干潮時には洲そのものが三段に重なっているのが見える。一段は
 ほぼ五十センチほどの厚さがあり、段と段のあいだは隙間すきまになつ
 て、枯れた古い芦あしの幹が支柱のように竝立へいりつしている。——つま

り、芦の茂みに砂や土が溜まり、流れて来た小枝や枯葉が溜まり、そこへまた砂塵や土が混つて、洲の一段が出来あがる。これが繰返されると、やがて芦はその段から生えるようになり、その芦の茂みを中心に、また同じことが始まるのである。どのくらいの年月かは不明であるが、上の段がそれ自身の重みで、下のそれへとさがつて重なり、さらに沈下して洲の基礎となる。——私にはそういうふうと考えられたし、現にその洲の周辺が三段になっているのは、デルタ形成の途上であるのだと思えた。

大三角は芦で蔽われてい、やかましくよしきりが鳴き騒いでいた。百舌鳥もそうぞうしくて遠慮知らずな鳥である、百舌とはよく名付けたものだと思うが、よしきりもそうぞうしい点では百舌

鳥におさおさ劣らない、彼には「ぎようぎようし」という又の名もあり、芦の中を飛び廻まわつては、いきなり人を嘲ちやうろ弄するような鳴き声をたてる。——私が釣りのほうを忘れ、デルタ形成という、幾分か学問的な思考をたのしんでいると、すぐ近くの芦の中へ来て、いきなりよしきりが嘲弄の叫びをあげた。

けけち けけち よしごで***突つ突いて おいててて。
うらかす浦粕ではよしきりを「けけち」と云いう。そして、長ちやうの説明に

よると、右にあげたように鳴くのだそうで、おたまに云わせると***は、長が云うのとは反対に男性の部分をさすということだが、そう云われてみると、慥たしかにそう鳴くように聞えた。

「ふざけるな」と私はどなった、「黙れ、やかましいぞ」

私の思考の邪魔をすることに成功したのがうれしいとでもいうように、けけちはひととき声を張りあげて叫んだ。――けけち
 けけち よしごで****突っ突いておいててててて。

留さんと女

三十六号船の水夫である留さんは、年が三十四歳でお人好しで、ひどく色が黒かった。「どんな闇夜でも留さんの顔だけは黒く見える」と云われ、自分でもそれを認めていた。——三十六号の船長のブルさんは、すっかり視力が衰えているため、操舵に当っては留さんの声援に頼らなければならず、そのため留さんは「おらがいいねえば三十六号はやみだ」と誇っていることは、「芦の中の一夜」に記したとおりであるが、——自分のそういう意義深い立

場を誇っている留さんとしては、色が黒いなどということくらい、
 てんで気にしないのであつた。「おらのうちはおやじの代から船
 乗りだつたでよ」と留さんは云つていた、「色の黒いのは血筋の
 正しい証拠だべえさ」

彼は霞ヶ浦かすみうらの北端ほくたにある銚田町で生れ、父も霞ヶ浦の通船に乗
 っていたし、彼もごく小さいときから、父といつしよに通船に乗
 ったということだ。——或あるとき私は彦山光三（現相撲評論家）
 の家を訪ねて、浦うらかす粕町うらかすのことをいろいろ話していると、彦山夫
 人が「その留さんなら知っている」と云いだされた。よく聞くと
 確かに同一の人物らしい、夫人も銚田町の生れで、留さんが少し
 頭のあつたかいことや、色の黒いのと、ばか踊りの上手なことな

ど、詳しく知っておられた。これには私は相当おどろいたし、夫人も「世間は狭いものねえ」とおどろいておられた。——そのあと、私は浦粕へ帰ってから、世間は狭いものだという通念について、少しばかり検討をこころみたのち、こういうめぐりあいはいはむしろ「世間が広いからだ」という定義を組み立てることができた。要約すれば平行線の定理なのである。私は私の人生の座標をもち、彦山夫人には夫人の座標がある。留さんも同じことであって、おのおのはその人生の座標に即^ついて生きている。平行線は相交わらない、というのはユークリッドの定理だったろうか。これに対して「しかし無限大の空間においては相交わる」という非ユークリッド定理がある。つまり、世間が広大であるからこそ、それぞれ

の座標をもった三人がめぐりあう機会も生れる、というわけである。こんどこの話を書くに当って、平行線の定理を数社の若い記者諸君に訊きいてみた。私はもともと数学には興味もなし才能もゼロなので、その定理がユークリッドのものであるかどうかさえ記憶が薄れていたからであるが、若い記者諸君の意見がみなまちまちであり、中には「ユークリッド自身が、非ユークリッド定理をきめた」と主張する新人記者もいて、やはりものは訊いてみるものだ、という感を新たにしたいであつた。

留さんは篠咲しのさきの船着き場の近くに、漁師の物置を改造したものであるが、一戸建の家を借りていた。私はその家を知らない。篠咲は浦粕の上流にあり、歩いて一時間以上はかかるらしい。根

戸川堤に面した小さな部落であるが、土堤に桜並木があり、そのためかなり人に知られているということであつた。——留さんの家は、何人めかの女にせがまれて借りたのだというが、私が浦粕へいったころは、殆んど高品さんの炉端にいて、頭のあつたかいところを披露しながら、炉端に集まる人たちに愛されたり笑われたりしていた。——留さんは女に脆かつた。彼は給料を取ると高品夫人に預ける、高品夫人は必要経費を差引いて、残りを郵便貯金にし、その貯金帳を預かっている。ふだんの留さんはあまり金を使わない、酒席（というほどのものではないが）ではもっぱら人に酌をしたり、求められれば得意のばか踊りや、銚田地方の唄をうたつたりするので、飲み食いに金を出すことはなかつた。

「だからお金は溜^たまるのよ」と高品夫人が私に云った、「お金は溜まるんだけれど、それが一〇〇くらいになると女ができて、それですっからかんになっちまうの、もうこんどこそ懲^こりたつて云うでしよ、こんどこそ眼^めがさめたつて、——それからタバコも人の吸いがらを拾うようにして溜めるんだけれど、ちようど一〇〇くらいになるかなと思うとまた女にひつかかるの、留さんのほうでそうなるのか、女のほうで嗅^かぎつけるのかわからないわ、あたしはもちろん、貯金の帳^{ちようじり}尻^{しり}のことなんか云やあしないのに、ちようどそのくらいになるときまつて女ができるんだからふしぎよ」

女といつてもみなしようばいにんあがりであつた。ごつたくや

から足を抜いたとか、むかし亀戸^{かめいど}で売れっ子だったとか、飲み屋から追い出された、などというような経歴のもちぬしたちで、しかもおちついて世帯を持つということはなく、留さんの貯金を使いはたすと、自分からさっさと出ていってしまう、ということであつた。

幾たびそんなことがあつたか私は知らない。私が浦粕へ移つたときは、しきりに貯金に精をだしている期間らしく、酒は高品さんの炉端か、なかまの奢り^{おご}、タバコは人の吸いがらという、儉約なところをみせていた。それが一年ほど経^たつてからだと思うが、高品夫人がまたそろそろ始まるじぶんよと云い出した。

「いいえ、まだそんなようすはないのよ」と夫人は私の問いに答

えた、「でも貯金が一〇〇を越したの、珍しいことに今日しらべたら一二〇近くになつてたのよ、そんなに溜まつたのはこれが始めてよ」

そんな話をしてから幾十日か経つて、高品夫人の予言が事實になつた。或る日、高品家の炉端で、夫人がそのことを私に告げた。高品さん夫妻と私の三人だけで、芝栗しばぐりを剥むき、茶を啜すすりながら話していたとき、夫人がふと思ひだしたような顔つきで云つた。

「とうとうできちやつたわよ、もう一と月以上にもなるんですつて」夫人は、訝いぶかしげな眼をする私のことを打つような手まねをした、「わかるじゃないの、留さんに女ができたのよ、それがまた大變なの」

「八兵衛っていうお女郎あがりだそうですね」と高品さんがやわらかな調子で云った、「いや、八兵衛っていうのは女の名じゃあないんです、たしか潮来いたこあたりの遊廓ゆうかくの妓おんなたちの代名詞でしてね、鹿島香取かしまかとりなんかへ参詣さんけいするときに、ゆきにしべえか帰りにしべえかつていうので、合わせて八兵衛ということになったんだそうですよ」

女は元は洲崎すさきかどこかに出ていて、留さんとはそこで馴染なじんだ。そのあと潮来かどこかへ変つてからも、幾たびか留さんが逢あいにいったらしい。今年「ねんがあけ」たので、夫婦約束をしたからと、留さんのところへ押しかけて来た。小さな風呂敷包ふろしきみを一つ持っただけで、もう芝栗が出さかる季節だというのに洗い晒さらした

浴衣ゆかた一枚であられ、そのまま篠咲の家にいすわってしまった。

年は留さんより三つも上だし、八兵衛などをして「ねんがあけた」女ではあるが、留さんはてんで恐悦してしまい、煮焚にたきはもちろん、女の下の方まで洗濯せんたくしてやっているそうであつた。

「こうなつたらだめなのよ」高品夫人は私の問いに答えて云つた、「夫婦約束をした女だし、こんどこそ世帯を持つておちつくんだからつて云われてみれば、貯金帳を渡さないわけにはいかないじやないの、そうでしょ」

「それに相手がそんな女だからね」と高品さんも云つた、「どうせゆき場がなくなつて来たんだらうから、こんどは、本当におちつくかもしれませんよ」

そして十日ほどのちに、私は浦泊亭^{てい}でビールを飲みながら、留さんの女について、秋葉エンジンから第一報を聞いた。

「たいへんな女だよ、先生」秋葉エンジは朴^{ぼく}訥^{とつ}な顔にうすら笑いをうかべながら云った、「なげえことしようばいをした軀^{からだ}だから、留さん一人じゃあ保^もたねえって、通船の者をだれかれなしに引張り込むだよ、代り番こだ、船が篠咲に着くたんびに、誰^{だれ}か一人がおりにゆく、そして船が徳^{とく}行^{ぎよう}から戻^{もど}つて来ると、そいつが船へ乗って、代りの者がおりにゆくだ」

私がためらいながら訊くと、秋葉エンジは素朴な、そしていくらか虚無的な笑いをうかべた。

「気づかねえだか、気づいてるだかわからねえだ、おらあ勘づい

てると思うだがねえよ」と秋葉エンジは云った、「——現に三十
六号船の者が代り番こにおりるだし、銀公（「おらあ抵抗しな
った」の章を参照）が聞いたところでは、それが氣に障るならお
めえ一人でまかなつてみる、つて女がとなりけえしたつていうだ
よ」

私が嘆くと秋葉エンジも嘆いた。

「悪い野郎どもだ、まったく悪い野郎どもだ」と彼はコップの中
でビールの泡の消えてゆくのを見まもりながら云った、「いくら
向うでさそつたからつて、他人の女を只で^{ただ}なに^{さわ}して、留さんの前
で笑い話にするつて法はねえだ、始末におえねえ野郎どもだよ」
その話はすぐに、高品家の炉端でも出るようになった。しかし、

これまで幾たびも記したように、そのことについて非難するような声は、——秋葉エンジを除いて、——ただの一度も聞かれなかった。尋常な家庭に起こるこの種の出来事でさえ、浦粕ではさして問題にしないのが一般的風習であり、留さんの場合は特に、その女が八兵衛あがりだったから、笑い話としてもさしたる価値はないようであつた。——そうしてやがて、私は第二報を聞いた。女にはほかにしんじつ夫婦約束をした男がいる、というのである。新川堀の畳屋の職人で、あと半年ほど経つと自分で店を持つことになっており、女の荷物やなにかはその男のところへ持ち込んであるが、店を持つときが来るまで、留さんのところで食いつないでいるのだ、ということであつた。

この第二報は通船の若い水夫たちがもたらしたものだ。水夫たちが彼女を訪問したのは、そう長い期間ではなかった。なぜかという、女が不^ぶ纏^{きり}緻^{よう}で荒つぽいばかりでなく、まるで「吸出し^{こうやく}膏^{こう}藥^{やく}」のようだから、というのである。

「三十二号船の仁公は十六貫もあつたによ」と水夫の一人は云つた、「五たびか六たびかよつたらおめえ三貫目も瘦^やせたつていうだ」

あれではあとで滋養を摂^とらなければならぬから、却^{かえ}つて高いものにつくのだ、というのがかれらの説であつた。こうして一人また一人と落^{らく}伍^ごしてゆき、ついには誰も寄りつかなくなつたのであるが、或るとき一人の若い水夫が、勤務ちゆうにとつぜん血が

騒ぎだし、船が篠咲に着くなりとびおりて、抑制することのできない衝動を抱えながら留さんの家へ駆けつけた。ところがそこに先客があり、まっぴるまだというのに戸閉りをした家の中で、壮烈な太神楽だいかぐらを演じていた。若い水夫は怒った、——まるつきりてめえの嬢かかあをぬすまれてるようなころもち、だったそうである。彼は雨戸の隙間すきまへ耳を当てて、太神楽のもようをつぶさに聞いた。船が徳行から戻って来るまでは一時間かかるし、それまでは時間のつぶしうもなかったからだ。

その先客が新川堀の畳屋の職人であり、女とどんな深い関係であるか、という仔細しさいのことがそのとき初めてわかったのである。若い水夫の報告によって、そのことはすぐ蒸気乗りなかまにひろ

まり、事実であることが確認され、にわかに留さんに同情が集まった。それまで誰よりも多く篠咲で下船した二十九号の平助などは、「世の中にはふてえ野郎がいるもんだ」と憤激したそうである。——もちろん、これらの情報は留さんの耳にも伝わったであろう。伝わらないという理屈は絶対に成立しないと思うが、当人はぜんぜん知らない顔をしていた。いちど高品家の炉端で、誰かがそのことを当人に向ってあてこすった。高品夫人はその男を睨みつけ「およしなさい」ときびしくたしなめたが、留さんは少しも気にするようすはなかった。

「人は好きなこと云うだよ」留さんはまっ黒な顔をくしやくしやにし、てれくさそうに笑いながら、まるでお世辞でも云われたよ

うに羞^{はにか}んだ、「——あいつも口の軽いのが悪い癖だから、ばかなことばかり云つて人に誤解されるだ、なにしろ世間知らずだでねえよ」

軽いのは口だけか、と誰かが云い、また高品夫人に叱^{しか}られた。

私はそのときそこにいたのだが、留さんの「世間知らずだから」という言葉に少し感動した。留さんとしては自分の女を庇^{かば}つたつもりだろうが、慥^{たし}かに、そういうすさんだ生活をして来た者の中には案外「世間知らず」な人間がいるものである。食う心配ばかりして育つて来たのに、少しも貧乏というものを知らない人間——というのは、貧しい人たちに対して同情のない、独善家という意味である——が、かなり多いのと同じように、おそらく留さん

の云うことは正しいだろう、少しあつたかいといわれる留さんの勘は、なまじつかな観察眼を持った者よりしんじつを見ぬく能力があるのかもしれない、と私は思ったものだ。

春になつてから、私は根戸川亭で留さんを見かけた。私はビールを一本と、カツライスを取り、本を読みながら、それらをゆつくり片づけていた。留さんは隅すみのほうのテーブルで、二人の蒸気乗りなかと、酒を飲みながら話していた。空いた爛かんどくり徳利が三本、肴さかなの鉢はちや洋食の皿さらもかなり並んでいたし、留さんは上機嫌げんで、陽気に笑ったり話したりしながら、「まあ飲みなせえな」とか、「もつと食いせえ、ま」などとせつついていた。

かなり長いあいだ、留さんのことはみんなの関心の外におかれ、

私も話らしい話は聞かなかったの、その晩の陽気な姿を見ても格別なものは感じなかった。しかし、その後また根戸川亭で、やはり蒸気乗りなかまに気前よく奢っているのを見かけ、どうしたことかと訝しく思った。そのうちに高品夫人が、どんなきつかけからだったか、留さんの「例の女」が、根戸川亭の女給になつていると云つて、私をおどろかせた。

「あら、知らなかったの」と高品夫人は云つた、「もう一と月くらいになるかしら、遊んでいても勿^{もつたい}体ないからつて、自分で押しかけていつて住み込んだんですつてよ」

私はちよつと考えてから質問した。

「あら、それも知らないの」と夫人は眼^めをみはるようになして答え

た、「畳屋の職人にはべつに女があつたんですつて、お秀さん、——留さんの女の名前よ、お秀さんと夫婦約束はしたけれど、ねんがあけたからつて、押しかけて来られたときには肝を潰^{つぶ}したそうよ、それでもいやだとは云えなかつたので、店を出すまで待つてくれつてごまかしてたんでしよう、二月だかにお秀さんの預けた荷物やなんか、みんな持ったままどこかへいつちまつた、つていう話だわ」

私は留さんのために祝意を述べた。

「さあどうかしら」と高品夫人はあいまいに微笑した、「畳屋の職人はいなくなつたけれど、根戸川亭へ住み込んでからずいぶん発展するつていうし、もう留さんの貯金も無くなるじぶんなのよ」

ほどなく私は、そのお秀という女を自分の眼で見た。

彼女はあぶらけのない渋色の膚はだで、額が抜けあがり、ぐるぐる巻にしている髪の毛はごく薄かった。痩せていて軀は小さいのに、骨組はずばぬけて逞たくましく、そのため、うつかり見ると肥えているように感じられるが、実際には肉も脂肪もそげおちて、逞しい骨に貼はり付いたような皮膚は、到いたるところで皺しわたるみ、そしてかさかさに乾いていた。大きな眼には意地の悪そうな、棘とげとげしい色があり、サンド・ペーパーでも擦こするようなしやがれ声で、なにを云うにも喧嘩腰けんかごしであった。——いったいこの女のどこに、若者たちを惹ひきつけるものがあるのだろうか、私にはそれがまったく理解できなかった。なお彼女は四十歳より下にはみえないし、四

十六七といつても決してふしぎではなく、根戸川亭の主人や、古くからいた女給——といつていいと思うが——たちからも嫌きらわれていることがあきらかにうかがわれたが、彼女のほうはてんで気にもかけず、なにをこのぬけ作どもが、とでも云いいたげに、鼻の先であしらつていた。

幾たびか根戸川亭へゆくあいだに、私は悲しい現実を見なければならなかった。幾たびかといったが、私の経済でそうしばしばゆくことはできない。月に二度か三度くらいだったか、あるいは一度か二度くらいだったかもしれないと思うが、——留さんともう気前よくなかまを奢るようなことはなく、お秀が客の相手をするあいだ付いていて、ビールや酒を取りにいったり、注文される

肴や、洋食の皿を運んだりするのであつた。

「留公、ビールだよ」とお秀はしやがれ声でどなる、「さつさとしねえのかい、のろのろもたついてるんじやねえよ、わかつたかい」

「メンチボールつつたろう、留」とお秀は眼を三角にしてねめつける、「なんだいこりやあ、コロツケじやねえか、まぬけだねえ取っ替えといで」

客がそれでいいと云う。お秀は耳も貸さずにどなりつける、

「コロツケはメンチボールじやねえんだよ、いいえうつちやつといて下さいよ、性^{しょう}をつけないと懲りないんだから、早く立たねえのかい」

「そんなにがみがみ云ったって、おめえ」と留さんは中腰のまま悲しげに女を見る、「こうやつて出来ちまつたものを、おめえ、いまさら取っ替えられやしねえと思うがなあ」

「そんならその分はおめえが払いな」とお秀は云う、「てめえでまちげえたんだからね、早くいつてメンチボールをそいつて来な、お、そのコロッケは置いてつていいよ、片づけるだけはおらが片づけてやつから、払いはおめえだよ、いいかえ」

留さんは「ああ」と云つて立つてゆく。

「ほんとにまぬけでのろまで」とお秀は舌打ちをする、いかにも癪に障るといったような舌打ちである、「あれでよく通船が飼つとくもんだ、呆れ返つて屁も出あしねえよ」

私はその女を憎んだ。

——どういうわけだ、留さん。

そんな女にどうしてこき使われているんだ。横つ面をはりとばすか、蹴倒してやるか、唾でも吐きかけてやればいいじゃないか、男じやないか留さん、と私は心の中で叫んだ。そのとき私は、怒りのために軀がふるえたのをいまでも覚えている。だが、と私は自分を抑えるために反省した。

——あの女は世間からいたためつけられて来たのだ。

どんな事情かはわからないが、若いころから身売り、色街を転々として、「八兵衛」にまで落ち、ねんがあけるまで身受けをする客もなかった。しかも、ねんがあけて約束した男を頼つて来

れば、その男にはほかに女があり、彼女の預けた荷物もろとも逃げてしまった。これだけ酷い^{ひど}めにあわされれば、人は温和な気分を保つことはできないであろう。自分が払わされただけのものを人にも払わせてやろう、というような気持になるのが当然かもしれない。あの女だけを責めるのは不当だ、と私は自分をなだめた。しかしすぐに、それは論拠が誤っている、という声が私の心の中で起こった。

——はらいせをするなら、する相手がある筈^{はず}である。

もしも彼女が世間からいたためつけられたとするなら、留さんも同様に世間からいたためつけられている。いつも少年の水夫たちにさえ軽蔑^{けいべつ}され、殆^{ほと}んど面と向って、「留さんは頭があつたけえ

「からな」などと云われるうえに、貯金が一〇〇くらいになると、女にひつかかって元も子も無くしてしまう。つまり二人は同じ戦傷者なので、お互いに^{いたわ}励りあい慰めあうのが本当ではないか。――そんなふうには私が自問自答しているあいだも、留さんはお秀の命ずるままに、ビールや酒を運んだり、どなられて頭を^か掻いたりしていた。

「この留公はね」とお秀が客に云った、「こんなまぬけのくせえしてばか踊りがうめえんだよ、ばか踊りとはにん相応だけどさ」
「ねえ、留公に一杯飲ましてやってごらんよ」とまたお秀が云った、「ビールなんてもってえねえ、その爛^{らん}ざましでたくさんだから、いいから飲ましてごらんよ、ばか踊りをやらしてみせるから

さ」

客がなにか云った。その客が誰であつたか、一人だつたか伴れがいたか、私にはまったく記憶がない。私のところから見えなかつたことは慥かであるが、どうも土地の者ではなく、よそから魚釣りに来た客だつたように思う。

「さあ飲みな、留公」とお秀が云った、「がつがつするんじやねえよ、みつともねえ、一杯だけだよ」

留さんがなにか云つて、さかずき盃の酒を大事そうに啜すするのが見えた。

「さあ、ばか踊りをやんな」とお秀は留さんの手から盃をひったくつて云つた、「うまく踊んなよ、そしたらまた飲ましてやつから、さあ踊るんだよ」

留さんは立ちあがり、手拭てぬぐいで頬ほかぶりをし、いかにもてれくさそうに笑いながら、やおら尻端しりつぽしよ折りをした。

——なんという女だ。

私は齒をくいしぼりながらそう思った。留さんは踊りだした。てけて、どんどん、と自分で囃子はやしを入れながら、——彦山夫人の言葉にもかかわらず、それは決して上手なものではなかった。尤も、私は里神楽で見たのと、新橋の幫間ほうかんだった柳家連中の獅子舞まいで見たくらいの知識しかなかったが、——私は踊っている留さんから眼をそらし、いそいで勘定をして、逃げるように根戸川亭をとびだした。

「巡礼だ、巡礼だ」暗い土堤を家のほうへ歩きながら、私は昂こうぶ

奮をしずめるために、声にだして呟いた、「苦しみつつはた
け」それはそのころ私の絶望や失意を救ってくれた唯ゆい一いつの本、
ストリンドベリーの「青巻」に書かれている章句の一であつた、
「苦しみつつ、なおはたらけ、安住を求めるな、この世は巡礼で
ある」

おわりに

私は浦^う粕^{らかす}から逃げだした。その土地の生活にも飽きたが、それ以上に、こんな田舎^{すみ}にいてはだめだ、ということを悟ったからであつた。私は町の隅^{すみ}ずみを歩いた。沖の百万坪、白い煙霧に包まれている石灰工場、芳^{よし}爺^{じい}さんの住居に近い三本松、消防小屋、堀南から中堀橋を渡り、堀^{ほり}に沿った堤の左側に、養魚場の広い池を眺^{なが}めながら、東の海水浴場へもいつてみた。こうして、土地や風景には別れを告げたけれども、東京へ去ることは誰^{だれ}にも云^いわな

かった。高品さん夫妻にさえ話さず、売り残つて半ば不用の本の詰つた四つの本箱や、机や、やぶれ蒲団ぶとんや穴だらけの蚊屋かや。よごれたまま押入へ突込んである下衣したぎや足袋類。その他がらくた一切をそのままにして、——というのは、物を片づけるということが私はなにより嫌いきらいで、それも自分でやるのが嫌いなだけではなく、人が片づけ物をしているのさえ見ていられないたちだったからだ
が、——書きあげた幾篇いくへんかの原稿と、材料ノートと、スケッチ・ブック五冊とペンを持っただけで、蒸気にも乗らず、歩いて町から脱出した。いちどもうしろを見なかった。私にとって、浦粕町はもう過去のものであつた。私の眼めも心も、前方だけに向つていた。

「東京へ出たら」と私は力んだ気持で**呟**いた、つぶや「おれはやるぞ」
「東京へ出て」と私は不安を抑えきれずに呟いた、「はたしてや
つてゆけるだろうか、生きてゆく、ということだけでもいいのだ
が」

次には「なにをくそ」と呟いていた。氣負い立ったり、自分の
才能のなさや、小説を書いてゆくことの困難さを思つて、息苦し
いような感じにおそわれたりしながら、私は埃ほこり立だった陰気な道
を歩き続けた。

それから八年ほどのちに、私は浦粕町へいつてみた。いま小西
六にいる秋山青磁と、戦後に死んだ森谷文吉を同伴して。だが、
懐旧の情に**唆**そそられて、などという風流な気持ではなく、秋山と森

谷が写真をやつていたので、撮影案内をするのが目的であつた。

——私たちは高^{たか}橋^{はし}から東湾汽船に乗つたのであるが、乗ろうとしたとたんに「先生よう」と声をかけられ、見ると、そこに留さんがいるのできつとした。

私はそのとき殴られるかと思つた。——というのは、それより半年ほどまえに、私は「留さんとその女」という題で、二十枚ほどの短篇を発表していた。載せたのはアサヒグラフであつて、そのじぶん編集を担当していた宮田新八郎の好意によるものだが、浦粕のノートから幾つか短篇小説にした中でも、留さんの話がつとも事実に近かつたからである。——私は自分をなだめた。留さんが小説などを読む可能性はない、少なくともアサヒグラフを

読むような機会はないだろう、おちつけ、と自分をなだめた。にもかかわらず、留さんは「あれを読んだだ」と云った。

「おらんこと小説に書いたって」どんな闇夜やみよでも黒く見えるという、石炭のような黒い顔に、てれくさそうな羞はにかみ笑いをうかべながら留さんは云った、「——高品さんのおかみさんがおらに呉くれたで、読んだだよ」

「あれは」と私はいそいで云った、「あれは、つまり小説なんですね」

「おら大事に取ってあんよ」と留さんは私に構わず続けた、「一生大事にしておくだ」そしてさらに云った、「おら家宝にすんだよ」

そしてさも恥ずかしそうに、小さくなつて事務所のほうへ去つた。

留さんは少しも變つていなかった。秋山と森谷にあらましの事情を語り、乗つた通船がたてかわ豎川をはしりだしてから、私は沿岸の風景を眺めながら思つた。留さんは年も取つていないようだし、人の好よさもあのころのままらしい。おそらくはいまでも「頭があつたけえ」などと云われ、女たちのいいかもになっているのである。そういう人間のことを小説に書いて、生活の資にするとは恥ずべき行為だ。留さんは恥ずかしそうな顔をしたが、自分こそ恥じなければならぬはず筈だ、などと思ひ、浦粕へゆくのがにわかに重荷のように感じられた。

——誰と出会うかわからないぞ。

船宿「千本」の長少年、倉なあこ、芳爺さんはどうだろう。

「SASE BAKA」とはつきり書いてしまったおすずは。ブルさんは。ごったくやの令嬢たち、幸山船長は。その他の多くの人たちと出会った場合、いったいどんなことになるだろうか。

できるだけ会わないようにしよう。

私はそう思った。これらの人たちをみんな小説に書いたわけではないが、留さんを書いたことは（留さんの口ぶりから察すると）相当ひろく伝わっていると考えなければならぬし、ひがみつぽい性質の者は、どれを読んでも自分のことだと妄信（もうしん）するかもしれない。

「できるだけ人に会わないことだ」と私は船窓から外を眺めながら呟いた、「なるべく危険なところには近よらないようにしよう」船が浦泊へ着くと、私はいそいで蒸気河岸がしを通りぬけた。

船宿「千本」の店先では、見知らぬ若者が縄なわぶね船の餌付けえづをしていた、長だろうか、年ごろは似ていたが、私は眼の隅で見たまま、声をかけようとはしなかった。町のようにすは以前のままであった。ごったくやの「澄川」も「栄家」も同じ看板を掲げていたし、三本松も元のように枝を張っていた。しきりにカメラを捻ひねくっている二人をせきたてながら、私は堀の兩岸を歩き、沖の百万坪をまわり、東の海水浴場へゆき、それから堀南の「天鉄」へ寄っててんぷらでめしを喰たべた。このあいだに知っている者とは誰

も会わなかった。いいだねがはいったからと、てんぷらを無料で届けに来てくれた娘のお花さんもいなかった。昔は平屋だったのに、そのときは二階建てになっていたし、ごつたくやの女のような女中が、なにを訊^きいても「知んね」とか「あたし知りませんのよ」とか云うばかりで、そんな古いことより人間はいまをたのしむことが肝^{かん}心^{じん}だ、誰かお酌^{しやく}を呼ぼうか、それともあたしのお相手でいいか、などとひっきりなしに饒舌^{しゃべ}りながら、すすめもしないビールを勝手にがぶがぶ飲んだ。

「変ったね」と秋山が云った、「まるでごつたくやじゃないか」私が蒸気河岸にいたじぶん、秋山は二度ばかり来たことがあり、「天鉄」でめしも喰べたので、変化の差がはつきりわかったので

あろう。私も興ざめた気持になり、手早くめしを片づけて外へ出た。そして蒸気河岸へ戻る途中、おたまの親たちに会ったのだ。

道からちよつとはいった、十坪ばかりの空地で、老夫妻が籠かごを作っていた。それは貝を掘るためのもので、籠は約一メートル四方、一方に砂へ打ち込むための鉄の歯があり、四メートルほどの杉すぎの若木の棹さおがついていた。夫妻はどちらも白髪しろがみになつていて、着ぶくれた軀からだの背をまるくし、陽溜りひだまでせつせと割り竹を捌さばいていた。

——おたまの母親だ。

父親のほうははつきりした印象はないが、母親のほうはすぐにそれとわかった。その人とは親しかったし、いろいろな世話にも

なった。男の独りぐらしは不衛生なことが多いと云つて、三日に一度は掃除に来てくれたし、野菜を喰べなければ軀に悪いからと、漬物つけものをかかさず届けてくれたりした。それにおたま、——船宿「千本」の長とともに、そのこまっちやくれのおたまも、土地のニユースをいろいろと報告しに来たものである。

——綿屋のおつゆちゃんは十二でちよぼちよぼと生えた。

——どこそこのおつかあは誰それとくつついた。

女の子だけに情緒的なことがらのほうが多かったが、私の材料ノートはそのため得るところが少なくなかったのである。私は静かに老夫妻のほうへ歩み寄り、帽子をぬいで会釈えしやくをした。

「暫くしばらでした」と私は云つた、「お達者のようになによりです」

二人はそろそろ顔をあげて私を見た。なんの反応もない顔つきであつた。

「蒸気河岸の先生ですよ」私は笑つてみせながら云つた、「おたまちやんはどうしていますか」

娘の名を聞いた瞬間、二人は軀をびくつとさせ、にわかに表情を硬こわばらせた。それは警戒のようでもあり、恐れのようにもあつた。どちらにしろ、おたまに「なにかあつた」ということ、それが老夫妻に強い打撃を与えた、ということは慥たしかであるように思えた。

「旦那だんなは」と父親のほうに、棘とげのあるかすれた声で訊き返した、
「どこのどなただかい」

私は母親を見た。

「おばさん、忘れましたか」と私は云った、「そら、蒸気河岸の先生ですよ、ぼくの家へよく掃除に来てくれたでしょう」

蒸気河岸のこれこれと、本名まで名のつたが、おたまの母親に
はまったくわからなかった。彼女は私をじつと見あげ、つくづく
と見てから、ゆつくりと白髪の頭を左右に振った。まえにも肥え
ていた軀つきに变りはないし、肉の厚いまる顔も、皺しわが多くなつ
た程度で、あのころと少しも变つてはいなかった。私にはそれが
はつきりしている、その人は「男の独りぐらしは」と、よく私に
小言を云ったし、掃除をするからと云って、私を外へ追い出した
ものだ。その人がそこにい、私にはその人がわかるのに、その人

には私がわからない。私を見あげた眼つき、すっかり白髪になつた頭を、力なく、ゆつくりと左右に振つた動作、それは紛れもなく「記憶がない」という意味を表明するものであつた。

「かなしいな」私は道のほうへ歩きだしながら呟いた、「人間な
んてかなしいもんだな」

私は自分の胸が空^{くう}洞^{どう}になり、そこをこがらしが吹きぬけるよ
うな、云いようのないかなしさに浸された。云いようのないかな
しき。いまでもそう云うほかに表現する言葉がみつからないので
ある。私は二人の同伴者と通船に乗ったとき、もう二度とこの町
へ来ることはないだろう、と心の中で呟いた。

三十年後

十月下旬の或る日、私は二人の同伴者とともに浦^{うら}粕^{かす}町へいつてみた。

江東区の高^{たか}橋^{はし}から出ていた通船、葛^か西^{さい}、東湾の両汽船とも、ずっと以前に運行をやめ、もっぱらバスの乗り継ぎに切り替えられた、と聞いていたから、タクシーに掛け合つてみると「ゆきましよう」と云^いうので、安心してでかけた。同伴者の一人は私の若い友人で、某社の編集部員であり、この夏ごろ探訪記事の取材に

浦粕へいったことがある。社の車でいったのだそうで、タクシーの運転手がまごついても、彼が道順は知っているだろうと安心していった。

じつを云うと私は少なからずためらったのである。浦粕のノートを連載し始めてから一年、登場する人たちの中にはまだ健在な者も多いだろう。「おわりに」の章でも留さんと出会ってへどもどしたことを記したが、ことによると「青べか物語」を読んで、他人のことなのに自分のことを書かれたと誤解し、手ぐすね引いて待ち構えている、といったような人物もいるかもしれない。そんなごたごたはごめんこうむ蒙りたいし、また、浦粕という土地そのものが、私の記憶にあるなつかしいイメージをめちやめちやにして

しまうかもしれない、という心配もあった。しかし、ノートを纏まとめて発表したのを機会に、ぜひもういちど青べかの世界を見にゆきたい、という誘惑のほうが強く、ふと思い立った勢いに乗じてでかけたのであった。

車が走っている時間を利用して、少しばかり「青べか物語」について注を加えたいと思う。第一回の末尾に記したが、この一連の物語の中には、すでに幾いくへん篇か小説化して発表したものがあるし、これから小説化する予定のものもあり、その旨を編集部むね、ならびに読者へ断わっておいたのであるが、——というのは、それらを除いてはこの一篇が不完全なものとなるし、小説として発表したものと、ここに集めたものとは根本的に違っているからであ

る。もう一つ、この物語は戦前にいちど三田文学に載せる筈^{はず}であった。和木清三郎氏（現「新文明」編集長）が編集していたところで、そのとき私はノートを整理し、「青べか物語」という題名をきめて連載の用意をした。結局は或る人事関係のため、私のほうから辞退したが、そういうことがなかったら、このノートはおそらく散逸してしまつたであらうと思うと、おくればせながらここで和木清三郎氏に礼を申上げたいのである。

タクシーは東京を走りぬけ、^{ほんじよ}本所へはいり、^{きんしちよう}錦糸町へと向つていた。こつちへ来たのは戦後はじめてのことで、荒地や沼や田ばかりだったのが、ぜんぜん工場や家でふさがっているのに驚かされた。道も舗装されたのが縦横に通じてい、運転手君とわが

友人で休みなしに論争が取り交わされた。

「そっちへゆくと千葉へいつちまうよ」とわが友人が注意する、
「こっちの道だよ、こっちの道だと思ふな、慥たしかにこっちだった
と思ふがな」それから自信をなくしたように云う、「ちよつと訊き
いてみて下さい」

わが若き友人はつねづね土地勘がいいと自任しているが、あま
りに土地勘がいたためだろう、いつしよに車でどこかへゆくとき、
しばしばとんでもない方向へと走らせ、間違つたことがわかつて
も「なに平気です、あれをぐるつと廻まわればちやんとゆけますよ」
などとすましている。それはそうでしょう、道のあるところなら
廻り廻つてゆけばたいに目的地へ着くことができる。私はそん

なとき心ひそかに、日本の国土の狭いことを感謝するのだが、——その日の運転手君もやがて、論争する煩はんに耐えないことを知り、わが友人の指導するままに左へ曲り、右に曲り、車からおりて人に訊いたうえ、あと戻りもどをし、というぐあいに温和おとなしく云うことを聞いた。

こうして、タクシーはともかくも浦粕町に着いた。根戸川に架かった大きな鉄橋を渡るとき、私は車を停とめてもらって、川の上流と下流を眺めながめやった。どっちを見てもすっかりようすが変わっていた。川沿いにあつた草原や荒地には、すっかり家が建ち並び、川の中央にある小さな妙見島にも工場の建物が犇ひしめいている。——蒸気河岸がしにはコンクリートの高い堤防がめぐらされ、地盛りをし

たために、船宿や人家は道から一メートル以上も低くなつてしまつた。

「ああ、千本の店がある」と私は云つた、「あれが長のいた船宿の千本だよ」

同伴した二人は「青べか物語」を読んでいたので、船宿「千本」と、こまっちやくれた少年の長を知つてい、私の感動をすなおに受けいれてくれるようであつた。まず「千本」を訪ねてみよう、私は車を蒸気河岸へ廻らせながら、どうか長がいてくれるようにと、それがそらだのみだということを覚悟しながら、心の中で熱心に祈つた。

「待てよ」と私は思い直して云つた、「先にぼくのいた家を見て

おこう、車をそっちへやってくれないか」

車を蒸気河岸とは反対のほうへ、ゆつくりと走らせた。ごったくやの「喜世川」、次に「澄川」などの家がみつかったが、小料理の看板は出ていなかった。貧しげな小さい家がごたごたと並び、子供たちの遊んでいる土堤^{どて}にはあまり草もなかった。そして、私があしかけ三年余り住んでいた、荒地の中の一軒家がみつかった。「これかな」と私は車を停めさせて、左右を見比べた、「いや、いやこれだな、こっちが空地で向うが田圃^{たんぼ}だったが、——そうだ、この家だ」

家はもよう変えがしてあつた。西側にあつた入口が南側になり、私が机^すを据えていた窓は塞^{ふさ}がれ、ぜんたいに黒くタールが塗つて

ある。「土堤の秋」の章で、若者が泣いていた斜面は低くなり、生い茂っていた草もない。左右にも家がぎっしり建って、一軒家だった頃の感じはどこにも残っていないかった。

「戻ろう」と私は云った、「車を廻して下さい」

私たちは蒸気河岸へいった。車を「千本」の前で停めると、店の前にいた船頭らしい若者たちが、ぼらぼら元気よくやって来て、いらっしやい、いらっしやいまし、と景気よく呼びかけた。いかにもしょうばい上手な「千本」の者らしいが、釣りをするためにタクシーを乗りつけるような客は「かも」であって、私は車から出るとすぐ、かれらに片手を振った。

「客じゃない」と私は云った、「客じゃないんだ、ちよつと訊き

たいことがあるんだが、このうちにずっとむかし長つていう子がいたんだがね」

いまどうしているか、と云おうとしたとき、店の中で網を片づけていた男が、ひよいと私のほうを見上げて答えた。

「長はわたしですよ」

「え、——」と私は息を吸った。

「わたしが長ですよ」とその男はいった。

細おもてに無^{ぶしようひげ}精髭が少し伸びて、汐^{しお}やけのした顔に賢^めそうな眼が光っていた。古タオルで鉢^{はちまき}巻をし、仕事着に半^{はんちようか}長靴をは

いていた。これが長太郎か、私は自分の印象にある少年のおもかげを、いま眼の前にいる中年の男の像に重ね合せようとしながら、

「蒸気河岸の先生」だが覚えてるかと思いた。

「高品の先生かね」と長が訊き返した。

「いや、高品さんの世話で来たんだ」と私は云った、「あつちの一軒家を借りるまえには、この千本の二階に下宿していたこともあるんだ、君が小学校の二年から三年生ぐらいのときなんだがね」

「さあね」長はあいまいに笑った、「そんなに古いことだとするとな」

「倉なあこはどうしている」

「倉なあこはいるだよ、うん」と云つて長は頷いた、うなず「まあおはいんなさい、いまおつ母を呼んでみるだから」

「へえ、まだおばさんがいるのか」

「おやじは死んだけれどおつ母はいんだよ」

長は店の奥へいつて、大声に母親を呼んだ。すると、穏やかな返辞をしながら、その人が出て来た。年はもう七十に近い筈だが、ずっと若くみえるし、柔和な顔だちには明らかに見覚えがあつた。長が説明をし、私もまた話した。彼女はあいそよく挨拶あいさつはしたが、私のことを思ひだしたようすはなかつた。

「あがつて茶でも飲んでくんなよ」と長が云つた。

「いや、それよりも沖の百万坪へいつてみたいんだ」と私は云つた、「ずいぶん變つたようだが、まだ沼や荒地はあるだろうか」
「家がどつさり建つちやつたよ」と長が云つた、「見にゆくんならおらが案内すべえか」

「しょうばいのほうはいいのかい」

「店のほうは番頭がいるからいいだよ」そして長は母親に振り向いて云った、「ちよつと百万坪までいってくんからな」

私もまた「あとで寄ります」と断わって、千本の店を出た。

東へ通ずる堀ほりの、以前よりも根戸川へ寄ったところに、高い橋が架かっていた。その堀の両岸にも、やはり防波堤があり、橋は高いので両端は石段で登るようになっていた。キティ台風のときひどくやられてから、そういうふうなみよに波除なみよけを作ったのだという。——その橋を渡り、根戸川の河岸に出て、川かわ下しものほうへくだると、すぐ左側に石灰工場があつた。「白い人たち」の章に出てくる工場で、建物は昔のままらしく、羽目板もずれてい、柱も曲り、

ぜんたいがうしろへのめりそうに歪ゆがんで、そうしてすべてが灰白色の粉塵ふんじんにまみれていた。

「工場主の代が替っただよ」私の問いに対して長が答えた、「いまじやみんな帽子をかぶってマスクを掛けて働いてるだ、頭の毛やなんでも生やかしたままだし、もう女で裸になる者なんぞいやしねえだよ」

「堀からこつちには」私は二人の同伴者に云った、「この工場と、事務所と、工員たちの長屋だけしかなかった、あとはずっと百万坪に続いていたんだがね」

「そうだ、あれがいかずちの船大工の工場だっただ」と長が私の問いに答えて、根戸川の対岸を指さした、「あれが工場の跡だよ、

もうつぶれちまっただがねえっ」

語尾の「ねえっ」という尻あがりしりのアクセントに、私の記憶が呼びさまされた。それは紛れもなく、少年「長」のアクセントであつた。少ししやがれた、まっすぐな言葉つき。すぐむきになり、むきになったことをそのままあらわす独特なアクセントであつた。――私はその感動を抑えながら、いかずちの船大工の跡を眺めやながつた。「青べか」を修繕してくれた工場であり、修繕した青べかを早く引取ってくれと催促した工場なのだ。私はその人たちとは知りあう機会がなかった。職人の一人すら顔を知らずじまいだった。が、青べかが浦泊における私の生活の中心であつたというだけ、で、なにか云いあらわしがたい親近感を持つていたのである。

——石灰工場主の代が替り、いかずちの船大工はつぶれたか。

私は心の中でそう呟いた。つぶやしかし、そのまえに、そうだ、私は少しいそぎすぎたようだ、「千本」の店を出るとすぐ、私は洋食屋の「根戸川亭」ていを見たのだ。根戸川亭もつぶれて、住む者もない建物は表を閉めたまま、泥のはねだらけになってい、看板もなにもなく、よごれた窓硝子と、羽目板の色あせ剥げはちよろけた青ペンキだけが、僅かに昔のなごりをとどめているようであった。

——ああ、根戸川亭もつぶれちゃっただよ。

長はむどうさにそう云った。そして籠屋のおたまが、「おつゆちゃんは十二で——」うんぬんと報告した娘の家の綿屋も、やはり失敗してどこかへ行ってしまい、その家もまた空家になってい

たのだ。

「沖の弁天はまだあるか」

「あんよ、弁天へいつてんべえ」

私たちは土堤をさらに川下のほうへくだった。長は先に立つて、話しながらさっさと歩いてゆく。痩^やせてはいるが引^{ひき}緊^{しま}った小柄^{こがら}な軀^{からだ}の、小さな尻が、歩きたびにくりつくりつと動く。その歩きぶりが驚くほどまざまざと、少年時代の長を思いださせた。あのころの彼も、そういうぐあいには、小さな尻をくりつくりつと動かしながら、いかにもすばしこそうに歩いたものだ。語尾の「ねえっ」というアクセントとともに、私の前に少しずつ、長少年がその姿をあらわしてきたのである。

「あにきの鉄ちゃんはどうした」と私が訊いた、「鉄ちゃんと倉なあこは、釣りの穴場を知っている点で浦粕一番だったじゃないか」

「うん、二人とも腕っこきだったねえつ」と長が云った、「倉なあこつて船頭は三人いんだよ、ぐず倉にがちや倉、それにぼぼ倉つてつてねえつ」

「僕ぼくの知おとなっているのは温和おとなしくつて、口が重くつて、頬ほっぺたがいつもほんのり赤い倉なあこだがね」

「ぐず倉つてえだ」長はくすつと笑った、「温和おとなしくつておつとりしてえんだろうが、することがのろくせえからぐずつてえだ、がちや倉はいつもがちやがちやそうぞうしいからだし、夜になる

とすぐおつかあに寝べえ寝べえって云うのが、ぼぼ倉つてえだよ」
「鉄ちゃんはおうちを出ただよ」と長は私たちが笑うのに構わず続けた、「堀南でてんぷら屋をやつててねえつ、とても繁昌はんじょうしてえるだよ」

やがて土堤を左へおりた。その辺もすっかり家が建ち、それも文化住宅ふうのしやれたアパートなどさえ見えた。きたなく濁つた下水に沿つてゆくと、小さな掘割があり、「これが一ついりだよ」と長が云つた。

「え、これが一つ　だつて、これが」

「こんなきたねえ堀になつちまつただ」と長が云つた、「田圃ができて農薬を使うからねえつ、いまじゃ鮒ふな一尾いやあしねえだよ」

これが広い荒地の中に、澄んだ水を湛^たえていたあの一つ だろ

うか。藻草^{もぐさ}が静かに揺れている水の中を覗くと、ひらたという軀

の透明な小さい川^{かわ}蝦^{えび}がい、やなぎ鮠^{ばや}だの、金鮠などがついつい

と泳ぎまわっていた。私が青べかを繋^{つな}いで鮠を釣った川やなぎの

茂みはどの辺に当るだろうか、——いまでは底が浅くなり、灰色

に濁って異臭を放ちそうな水が、流れるでもなくどろつと淀^{よど}んで

いる。日本人は自分の手で国土をぶち壊し、汚濁させ廃滅させて

いるのだ、と私は思った。修善寺へいったら、あの清流に農薬が

流れ込むため、蛸^{ほたる}もいなくなつたし川魚も減つたという。そんな

に農薬を使って米ばかり作つてどうしようというのか、史上最高

の収穫と、米をたらふく食っている一方、水が汚され、自然の景

物がうち毀こわされていることを知らない。また、いま私の住んでいる市では、到いたるところで木を伐きり、丘を崩し、「風致地区」に指定してある海岸を、工場用地として埋め立てている。どこへいっても丘はむざんに切り崩され、皮を剥がれた人間の肌はだのように、赭あかつち土や岩が裸になっている。東京の三十間堀けんぼりは私にとって第二の故郷のようなものであったが、役人諸君はなんのみれんもなく、僅かな税金を取る目的で埋めてしまった。一人の若い汚職役人が摘つまみ食いをするだけで消えてしまうくらいの税金のために、——ろくさま下水の設備もなく、汚物の溢あふれている都市。川は悪臭を放つままに任せ堀は片っ端から埋め、丘を削り、木という木は伐り倒し、狭いでこぼこ道に大型バスやトラックが暴走し犇はしき、

空地にはむやみ無計画にアパートを建て並べ、公明選挙といわれるのに何十億とかの金が撒きちらされるという、——よそう、私は本当はそんなことに怒りは感じてはいない、日本人とは昔からこういう民族だったのだ。軍事に関してはべつだったが、その他のすべてが常に殆んど無計画であり、そのときばったりで、木を伐り、山を崩し、堀を埋め、土地を荒廃させながら今日までやって来たのである。このまえ、全学連の学生が訪ねて来て、——革命論のような話になったとき、「革命が仮に成功しても、君たちの手に渡るプロパティはありやしない、日本にも僅かに資本家といえる連中はいるようだが、それらの持っているのは才取り経済による紙幣や証券でしかない、君たちが現実に奪えるのは、与

える職にも窮する超過剰人口、処理するのに困難な汚物の山、傷だらけになった国土。その他もろもろの重荷だけだぜ」と私は云った。よしまいよう、私は本当のところそんなことを気に病んでいるのではない、ただ、——一つ　のみじめなすがたを見たとき、むやみに悲しくなつて、以上のようなつまらない感慨におそわれただけであり、こんなにしてしまった国土を、あとから来る若い年代の人たちに譲ることの恥ずかしさに、深く頭を垂れるおもいだつたのである。

一つ　を過ぎてまもなく、べんてんやしろ沖の弁天社が見えた。「ひねたような松が五六本ひよろひよると生えた」と本文には書いたが、いまでは数も多く、松そのものもすくすく伸びて、立派な林にな

っていた。長は近道をするために、蓮田はすだの中の細い畦道あぜみちへはい
つていった。さすがに、そのあたりからは家もなく、荒地や刈田
がひろびろと展開し、あちらこちらに海苔のり漉すき小屋が建っている
だけ、という風景になった。わが若き友人は、まさに百万坪とい
うけしきですな、と嘆声をあげ、これは百万坪どころではない、
「一千万坪よりももつとあるだろう」と目測の才のあるところを
誇示した。

「あれは海苔漉き場だな」と私は笑いながら長に訊いた、「あの
ころはよく逢曳あいびきに使われたようだが、いまはそんなことはない
か」

「あるだよ」と長も笑った、「いまでもやってるだ、場所がこん

なところで、人に邪魔されるしんぺえがねえだからね」

前の日にひどく雨が降ったそうで、刈田も蓮田も水がいっぱいだし、畦道は土がゆるんで、足許がひどく不安定だった。そのうちに長がずんずん先へいったと思うと、引返して来て、畦道にちよつと水をかぶったところがあるからおぶつて渡ろう、と云った。そこへいつてみると、なるほど二メートル五〇ほど畦道が水をかぶっていた。

「おぶうつて」私はしりごみをした、「それはだめだよ、おれは重いもの、だめだよ」

長は痩せていて十三貫ぐらいしかないようだし、私は春から少し痩せたものの、まだ十六貫ぐらいはあると思う。そのうえ、人

に背負われるなどという経験はまったく記憶にないから、おぶさつてもいいという気分はまったく起こらなかった。

「でえじようぶだつてば」と長は構わずにこつちへ背中を向けた、
「こつちは馴なれてるだからしんぺえはねえよ、さあ」

私は二人の同伴者を見、来た畦道を見やった。戻るのも遠すぎるし、土のゆるんだ畦道の危かなさを考えると、これまたうんざりである。長は背中を向けて跼かみ、「さあ、さあ、おぶさんなよ」としきりにせきたてた。

——そうだ、人を背負うのは馴なれているんだ。

釣客を船から陸へ背負つてあげるのは、船頭には珍しくない仕事の一つである。私はそれを思いだしたので、おそるおそるで

はあるが長の背中へおぶさった。おぶさったとたん、長の軀の重心に加わる私自身の重量感が、極めて過重であることを私は知った。長は第一歩を踏みだし、その軀は左へ大きく傾いた。半長靴の泥に踏み込むぶきみな音が聞えた。次の一步は右へ、大きくぐらつと傾き、私の足が水につきそうになった。

——だめだ、こいつは転ぶぞ。

私は長の肩にしがみついたままそう思い、同時に、長といっしょに水の中へ転倒するならそれもまたよし、と思った。あとで聞いたところによると、うしろで見ていた二人の同伴者も、「てつきり転ぶ」と思ったそうであるが、私はそのとき、あのこまただちやくれの長であり、浦粕における悪童のうち、唯一人だけ私の擁

護者であつた長に、三十年を経たいままた、こうして背負われるということのふしぎなめぐりあわせに、心の奥深くからの感動とよろこびを味わっていたのであつた。

観念していたにもかかわらず、長は無事に私を渡し、二人の同伴者をも渡した。同伴者の一人は女性で、私の原稿整理をしに來てくれる木村ふみ子君であるが、もう結婚して一年半くらいになるし、夫君のほかの男性におぶさる気持はどうであらうか、などとよけいなことが氣にかかったので、私は振り向きもせずに、先へ歩いていった。——私たちは弁天社の境内へはいつていった。長は賽銭さいせんをあげ、鈴を鳴らして柏手かしわでを打った。浅草の映画館で猛獣映画に昂奮こうふんし、「ライオンも象も毛唐もみんなばかやつ

らだ」と憤慨し、ついで喰^たべたトンカツとカレー・ライスまでけなしつけた長である。――私は彼の心情を傷つけないと思つたので、同じように社殿へ近よつてゆき、賽銭を投じ、鈴の紐^{ひも}をちよつと引くと、おがむことは省いてそこを去つた。二人の同伴者がどうしたかは見^みなかつた。

道へ出ると、もう黄^{たそがれ}昏の色が濃くなつていた。その道は「芳^{よし}爺^{じい}さん」と二度めに会つたところであり、初めて青べかの売込みをされた記念すべき場所であつた。

「おばさんは」歩きだしながら、私は長に訊いた、「あのおふくろさんは、長とお静たちの本当のおつ母さんだつたな」

長の上に、鉄なあこ、久なあこの男二人と、姉が二人いた。長

の下に一つ違いぐらいいお静という妹と、五歳ぐらいの、いつも泣いてばかりいる弟がいて、その三人がのちぞいの妻の子である、と聞いていたのである。ところが、私の問いに対して長はあつさりと首を振った。

「おつ母あはみんなの継母まははだよ」と彼は云いった、「おらたちみんなが生れてつから来ただよ、そんだからうちはずっとうまくいつてるだよ」

私はそこで黙った。

長男の鉄なあこは、専属の船頭である倉なあこ（ぐず倉）とともに、浦粕きつての腕っこきといわれた。それがどうして「千本」を出ててんぷら屋などになったのか。また次兄の久なあこは当時

は小学六年生ぐらいだったが、やはり家を出て、いまでは「千本」の隣りに小さな「久千本」という釣舟宿を経営している。つづめていえば、長男も次男も家を出、本家の「千本」を長が継いでいるのであって、私の推測によれば、それこそ現在のおつ母あが長太郎とその下の二人の実母である、ということを証明していると思うのであるが、「おつ母あはみんなの継母」であり、「そのためにうちがうまくいつている」という、混りつけなしに割切った長の認識に、私はひそかに感嘆の念を禁ずることができなかつた。それから私たちは堀南へ戻り、鉄なあこの「てんぷら屋」へいった。てんぷら屋といっても仕出し専門であり、店では客は取らないという。鉄なあこも私を覚えていないし、私にも彼は初めて

会ったようにしか思えなかった。——私は長に、タクシーをこつちへ廻すように云つてくれ、と頼み、せいぜい四帖半じようはんくらいの狭い、ごたごたした部屋へ同伴者といつしよにあがった。

私は鉄なあこにビールを頼み、てんぷらを揚げてくれと云った。そのとき仕出し専門でやっていることがわかったのだ。鉄なあこ——いや、もうそう呼んではいけないだろう、一日に六千個のてんぷらとフライを揚げて捌さばく、という店の主人なのだから、——一日に油を二た缶ふかんも使ってしまう、と鉄さんは語った。むろん大口ばかりで、会社の食堂とか宴会などの注文が多く、数の少ない注文はみな断わっているそうであつた。私は蒸気河岸がしにいた当時のことや、長をはじめ知っていた人たちの話をした。

「大^{だい}蝶^{ちよう}はつぶれただよ」と鉄さんはビールを啜^すりながら云つ

た、「四丁目（洋食屋）は旅館に転業してえらく儲^{もう}けただ、うん、

留さんも死んじまったし秋屋船長も死んだだ」

「大蝶がねえ」私はなにかしら遠いこだまを聞くように思った、

「あんなに盛大にやっていて、浦粕一の缶詰工場だったのにな」

実際は「大蝶」などどつちでもよかった。その工場にかかわり

のある幾つかの出来事や、そこで働いていた人たちのことが思い

だされるくらいで、それよりも留さんの死のほうが強^かく私の心を

打った。高品家の炉端で、みんなにからかわれながら、怒りもせ

ずに笑っていた彼、三十六号船の舳^へ先^{さき}に立つて、「おも舵^{かじ}いっぱ

い」とか「スロー、スロー」などと、ブル船長に叫んでいた彼、

また根戸川亭で自分の女に毒づかれ、こき使われ、客たちの前でばか踊りまで踊らされた彼。——あの性質ではおそらく、幸福な生活には恵まれなかったであろう。死ぬときにも妻子がいたかどうか、仮にいたとしてもたぶん彼にとって慰めや安息とはならず、それまでの女たちがそうであったように、彼を罵^のりこき使い、倒れるまでがつちりと彼を緊めあげたことだろう。むしろ、妻子などはなかったと考えるほうが、彼のためには仕合せだったと、私は心の中で呟いた。

「旦那^{だんな}の話の話を聞いていると昔を思いだすだよ」と鉄さんは云った、「いまじゃあそんな言葉は使う者もいねえし、いろんなうちがつぶれたりな、おらのちゃんも死んだし、大勢死んだ者があるしよ、

浦粕もすっかり変つちまつただよ」

「長か、長は四十二になるだ」と鉄さんは私の問いに答えた、

「まる年で四十一か、七年も兵隊に取られたでねえ」

私がおおかんけ（大勸化）のことを云うと、鉄さんは思いだし
笑いをした。

「そうだ」と鉄さんは云つた、「おおかんけ おーかんけ おい
なりさんの おーかんけ おぞーにと おあげ おあげの段から
おつこつて あーかい***すりむいた」うんぬんと云つたあ
と、寄進をした家には、「しよーばい はんじよ」と囃^{はや}し、寄進
しない家があると「くれねーと おいなりさんがなくよ ひつく
りけつちやめつかつこ もつくりけつちやべつかつこ……つて云

「ただよ」

私は領^{うなず}いたが、それは鉄なあの時代で、長の時代には「くれ

ねーと、——」以下の囃はしなかった、ということをお願い出した。

——このあいだに、店の女の子が^{おおざら}大皿へフライを盛りあげたの

を持って来た。たぶん^{あじ}鰯だろうとにらんだが、鰯ならもうしゅん

を過ぎているし、フライにしてからだいぶ時間^たも経つらしい。私

が箸^{はし}を取らないのを見て、二人の同伴者も箸を取らなかつたし、

鉄さんもとりたててすすめるようすはなかつた。また、二人の同

伴者は、喰べたり、飲んだりするよりも、自分たちの読んだ「青

べか」の世界が、そんなになまなましく、眼の前に展開すること

のほうに、ずっと興味を^{そそ}唆られているようであつた。

やがて長が来た。鉢巻のタオルが新しいのに替り、ズボンも新しいのに替えてあつた。彼は「車をそこへ来さしてあんよ」と云つて坐り、私の注いだビールをぎこちない手つきで啜つた。酒のほうがいいかと訊くと、ビールで結構だと答えた。自分でもちよつと納得がいかないのだが、鉄なあこは「鉄さん」と呼びかけられるのに、長にはどうにも敬称が付けられない、つい「長」と呼びかけてしまうし、長のほうでも極めて自然にそれを受け止めてくれる、というあんばいであつた。

「かんぷりっていう子はどうしているかね」

「かんぷり」長は首を捻つた。

「ほら」と私は云つた、「痩せっぽちで頭の鉢がひらいていて、

泣き虫の子がいたじやないか、慥^{たし}か長と同級生だったと思うがね」

「かんぷり」と長は兄のほうを見、ちよつと考えてみてから、あいまいな笑いをうかべた、「ああ、吉井エンジの子だな」

「うん、そんな子がいたつけ」と鉄さんは云つた、「なにしろ^あ綽^だ名を付けるのが好きな土地でね、あたまつてうちとしっぽつてうちと、どっこいどっこいっていう」

「あとののは損得とも云うだ」と長が口を添えた、「何年かめえに百万坪で^{たぬき}狸を捕つたやつがいただよ、そいつはそれからたぬきつて綽名で呼ばれてるだ」

私たち三人は笑つた。

「その、あたまとしっぽとどっこいどっこいのことだが」と鉄さ

んは云った、「むかしこの土地に大金持がいて、三人の倅せがれに財産を分けただ、そのとき長男はあたまだからいちばん多く貰もらい、三男はしつぽで少なかった、二男はまん中で損得なしのどっこいどっこいだって云っただよ、それで」

「いや、それは違うね」と私がつい知らず云った、「ぼくが聞いた話によると、財産ではなく鯨くじらだったね、いつのことかわからないがこの浜へ一頭の鯨があがった、それを三人の漁師がみつけて三等分したんだな、そのとき頭のほうを取ったのがあたま、尻尾しっぽを取ったのがしつぽ、胴中を取ったのが、これはまん中で損得なし、どっこいどっこいだと云った、それが綽名になっ*て*いまでもそう呼ばれている、というふうなことだったよ」

「鯨はときどきあがつたらしいよ」と鉄さんは穏やかに云った、

「旦那の話のほうが本当かもしれないねえ」

これが船宿「千本」の流儀なのだ。和助の時代から、客に対してえらぶった口は決してきかない。他の船宿だと、客に対して釣りの講釈をしたり、いいの悪いのと文句を云う。「千本」では腕っこきの船頭を揃^{そろ}えていながら、求められない限り、決して客に教えたり、客の意志に反対するようなことはない。——客は遊びに来るのだ、好きなように遊んでもらうことが第一だ、というのが亡^なくなった和助の流儀であつた。あたま、しつぽの伝説は、あるいは彼のほうが真実だかもしれない。私はよそ者であるし、鉄さんはこの土地の人間なのだから。しかも彼は一言もそんなこと

は口にしなかつたのである。

話はあちらへとびこちらへとびした。きょうだいの死んだ父は和助といい、浦粕の船宿では誰^{だれ}よりもしようばいがうまく、上客はみな「千本」に集まつたし、船頭も腕のいいのが揃^{そろ}っていたこと、朝日紙へ週一回ずつ釣通信を書いていたこと、鯉^{こい}釣りの名人で、いつも蒸気河岸の上で鯉を釣り、不漁で帰る客があると、その鯉を持たせてやったこと。長の姉の一人は浦粕小町といわれる美人だったが、若くて死んだし、長の妹も死んだこと。いつもぐずぐず泣いてばかりいた末弟は、京都大学を出て農事試験所の技官になっていること。東の養魚所ではいま専門に金魚を扱^{つか}つてい、また、二つの通船に乗っていた人たちはみなよそへいつてしまい、

ほんの二三の人しか残っていないこと。ごつたくやは売禁法でみんなつぶれ、女たちも散り散りになつてしまったこと。そうして、こういうとびとびの話のあいだで、「SASE BAKA」も娘のままで死んだということを私は知った。——そしておたまのことも——
——籠屋^{かごや}のおたまは若くて遊廓^{ゆうかく}へ身を売り、その後もみもちが悪く、親類じゆうに迷惑をかけたが、いまは行方知れずだということであつた。私はいつか秋山青磁たちと浦粕へ来たとき、彼女の両親がおたまのことを訊かれて、びくつとしたことを思いだし、それではあるときすでになにかあつたのだなと、心の中でそつと嘆息した。

鉄さんにも長にも仕事がある。そうなが話もできまいと思い、

やがて私たちは立ちあがった。鉄さんに別れを告げて出ると、長が車のところまでいっしょに来た。

「こんど釣りに来てくんなよ」と長が云った、「おれもいい穴場を知ってるからねえっ」

「ああ、ぜひ近いうちに来るよ」私は長の手を握った、「——どう、まだぼくのことを思いだせないか」

「さあねえ」長はたよりなげな微笑をうかべた、「わかんねえなあ」

「釣りに来るよ」と私は云った。

鉄さんの店の若者が二人と長とが、車の脇わきに立って見送っていた。私たちは車に乗り、車は走りだした。

「よかつたわ、ほんとに」と木村ふみ子君が感動のこもった口ぶりで云つた、「沖の百万坪も石灰工場も、——あの人たちまでみんな、いま青べか物語から出て来たっていう感じだったわ、ほんとうによかつた」

私は初めから終りまで、長の名を呼びすてにしていたし、長もしごくあたりまえのようにそれを受けいていた。数えてみると、私が浦泊を去つてからまる三十年になる。長も四十一歳、子供も五人いるということだ。その彼を「長」と呼び、彼が「おう」と答えるとき、私の心には三十年という時間の距離はなかった。にもかかわらず、彼には私の記憶がないのだ。青べかのことを訊いてみたが、それもごくかすかに覚えている程度とみえ、「なにし

ろ古いことだからねえっ」と云つて話をそらしてしまった。したがって、題名の青べかがどうなったかは、ついに不明のまま、この物語を終らなければならない。——私は近いうちに、もういちどぜひ浦粕へ、こんどは釣客としていつてみるつもりである。

青空文庫情報

底本：「青べか物語」新潮文庫、新潮社

1964（昭和39）年8月10日発行

2002（平成14）年12月20日64刷改版

2006（平成18）年3月20日69刷

初出：「文藝春秋」

1960（昭和35）年1月号～1961（昭和36）年1月号

※「三十年後」の初出時の表題は「三十年後の青べか」です。

※「秋葉」と「秋屋」の混在は、底本通りです。

入力：富田晶子

校正：栗原もなこ、Juki

2018年7月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

青べか物語

山本周五郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>